

碑銘、本傳を載す。
〔評論〕 眞卿の大節炳として史冊に著る、其文章は典博莊重、亦其人と爲りに稱ふ、集中廟享、議等の篇、禮を説く尤も精密なり。

◎孟東野集十卷

〔作者〕 唐の孟郊撰す、郊字は東野、武康の人、貞元中進士に擧げられ、官溧陽尉に至る、最も韓愈の爲に稱引せられ、忘年の交を爲しといふ、元和九年(一四七四)卒す、年六十有四。
〔傳來、體裁〕 是集前に宋敏求の序ありて稱す、汴吳鏤本は五卷一百二十四篇なり、周安惠本は十卷三百三十一篇なり、蜀人蹇澹の纂する所は二卷一百八十三篇なりと、敏求乃ち遺逸を總括して重複を削除し、十四類に分ち、詩五百十一篇、雜文二篇共十卷と爲す、今本は宋本と卷數を同じくし、首に東野の墓誌銘、景定三年舒岳祥、宋敏求の二序、凌濛初の跋有り、目錄は每卷の首に載す、其十四類の目左の如し。
樂府、感興(上、下)詠懷(上、下)遊適(上、下)居處、行役、紀贈、懷寄、酬答、送別(上、下)詠物雜題、哀

傷、聯句、讀書。
〔評論〕 其詩、託興深微、結體古奧、唐人韓愈より以下之ヲ推さざる無し、宋の蘇軾始めて空齋小魚の謂有りてより、後異詞有り、金の元好問の論詩絕句に「東野窮愁死不休、高天厚地一詩囚」の句有り、蓋し蘇軾は俊邁を尙び、元好問は高華を尙びて門徑同からず、故に丹を是とし素を非とす、未だ據りて定論と爲す可からざるなり。

◎權文公集五十卷

〔作者〕 唐の權德輿撰す、德輿字は載之、天水の人、初、河南の幕府に辟され、後進みて中書門下平章事と爲る、元和十三年(一四七八)卒す、年六十、
〔傳來、體裁〕 德輿嘗て自ら制集五丁卷を纂し、其友人楊憑をして之が序文を作らしむ、德輿の孫、憲又其詩文を編みて五十卷と爲し、楊嗣復をして其序文を作らしめたり、今制集已に佚し、文集も亦久しく傳本無し、(明)の嘉靖二十年、劉大謨の刻本あるも、止だ十卷のみ、(清)の王士禛は全本五十卷を見、其著

居易録に記して詩賦十卷、文四十卷あることをいへり、今此に載する所の本は嘉慶十一年朱珪の序して行へるものたり、珪の序に據れば、朱竹君之を五柳居陶書賈より購ひ得、後に彭元瑞が校勘したるものなり、其目左の如し。

賦、詩十卷、(賦は三篇)碑銘八卷、行狀二卷、墓誌銘七卷、(就中二十六、二十七、兩は單に墓誌)銘贊、證議、論議各一卷、記、集序各二卷、序五卷、策問一卷、書、表、表狀各二卷、疏一卷、祭文三卷。
卷首に朱珪の序、次に楊嗣復の原序、次に鳩工姓氏、次に目錄を載せ、卷末に陸贄翰花集序、左武衛曹許君集序、韋賓客宅宴集詩序三篇を補刻として載せたり。

〔評論〕 其詩精練足らず、而して雍容の氣象有り、其文は純雅贍縟なり。

◎柳河東集四十五卷外集二卷

〔作者、題名〕 唐の柳宗元撰す、宗元字は子厚、河東の人なり、進士に第し、博學宏詞の科に中り、貞元十九年監察御史を拜す、王叔文素より其才を奇と

す、政を得るに及び禮部員外郎に擢で、將に大に用ひんとせしに、叔文俄に敗るゝに會ひ、貶せられて永州司馬と爲る、元和十年柳州刺史に徙り、同十四年(一四七九)其地に卒す、年四十七、宗元文を以て、當時韓愈と名を齊くす、世並び稱して韓柳といふ、
〔傳來、體裁〕 是集は劉禹錫の編みしものにして、唐志に三十卷に作る、(宋)に至りて四本あり、一は則ち三十三卷にして、元符間京師開行本なり、一は則ち曾丞相本、一は則ち晏元獻家本、一は則ち見今行はる四十五卷本にして、穆修の家より出でたる禹錫の原本なりといふ、書錄解題に禹錫の序を引きて三十二通と爲すと稱すれども、今本載する所の禹錫の序、皆四十五通に作る、恐らくは後人見行の卷數に符せしめんが爲め、禹錫の序を追改せしものならん、政和中胥山の沈晦、各本を參校するに四十五卷本を以て正と爲し、其諸本の餘す所を以て、別に外集二卷を作り、之を後に附せり、後、章宗說、張敦頤、潘緯、

(明)の莫容、蔣之翹の徒、校訂注解する所有り、(我國)に渡來せるは韓文と同時ならん、嘉慶元年其四

十五卷本を刊行せり、後、鶴飼信之の點せし韓柳全集七十六本有り、今記する所は明の莫如士の重校にして、首に劉禹錫の序目録有り、其目左の如し。

卷一は雅詩歌曲、卷二は賦、卷三は論、卷四は議辯、卷五、六は碑、卷七は碑銘、卷八は行狀、卷九は墓銘、碣、誄、卷十は誌、卷十一は誌、碣、誄、卷十二、十三は墓誌表、卷十四は對、卷十五は問答、卷十六は說、卷十七は傳、卷十八は駢、卷十九は弔、贊、箴、戒、卷二十は銘、雜題、卷二十一は題、序、卷二十二より二十五は序、卷二十六より二十九は記、卷三十より三十四は書、卷三十五、三十六は啓、卷三十七より三十九は表狀、卷四十、四十一は祭文、卷四十二、四十三は古今詩、卷四十四、四十五は非國語。

外集上下は賦傳、墓、誌、表等、附録一卷は諸儒が柳州を祭る文を記す。

〔評論〕 有唐三百年を通觀するに詩を善くする者あり、文を善くする者有り、李白、杜甫の詩才を以てするも亦猶文を兼ねる能はず、作らざるに非ずと雖、斤量相伴ふ能はざるなり、獨柳宗元は、韓愈と俱に詩文を兼ねて名あり、以て其才の大なるを窺ふ可

し、今二家を比較するに柳は韓の類博奇古に及ばずして、精深峭峻は往々之に軼きたり、其文は以て歷代古文名家の魁たる可し、其詩は以て韋應物と雁行して、王維、孟浩然の席に陪するに足れり。

〔注解、參考〕

○話訓柳先生文集四十三卷外集二卷新編外集一卷
宋韓醇○柳先生集增廣註釋音辨四十三卷外集二卷外音釋
二卷附録一卷帝宗說註釋、張致頤音辨、潘緯音義、編者名氏未詳
○五百家註音辨
柳先生集二十一卷外集二卷新編外集一卷龍城錄二卷附録八卷魏仲、樂編
○柳河東集四十五卷目一卷明蘇之、魏註

●韓文四十卷外集十卷

〔作者、題名〕 唐の韓愈撰す、愈字は退之、鄧州南陽の人、貞元八年進士の第、登り九年より十一年に至る、三たび博學宏辭を以て吏部に試みられたれども皆中書に黜けらる、後、節度推官と爲り、十八年四門博士に調せられ、明年監察御史に遷る、國子博士太子右庶子を歴、元和十四年佛を論じ潮州刺史に貶せられ、尋で袁州に徙り、復召されて國子祭酒を拜し、吏部侍郎に歷轉し、長慶四年(一四八四)卒す、年

五十七、愈文を爲る粹然一に正に出で六經を輔翊す、學者之を仰ぎて泰山北斗の如し、其著す所、論語筆解、順宗實錄等世に行はる、(唐書本傳、年譜參考)此集一に昌黎集といふは其封地に據りしなり。

〔傳來、體裁〕 此集は其門人李漢の編みしものにして、唐志に昌黎集四十卷を載す、陳氏の書錄解題に昌黎集四十卷外集十卷を載せ、李漢の序を引きて稱す、其著順宗實錄五卷、史官に列して集中に在らず、今實錄外集に在りと曰へば則ち世の所謂外集は實錄より外皆僞妄なりと、故に方松卿は、舉正を作り其疑誤同異を校し、文集外集附録年譜と並刻す朱子亦考異を作る、是より原本遂に微なり、(元)(明)間に及び、幾ど泯滅せんとす、此に於て蔣之翘、歸有光、游居敬等、各々校定評註する所あり、嘉靖中途に是集を刊行せり、(我國)に渡來したるは其時代を詳にせず、南北朝の頃より、五山僧徒に喜ばれ、嘉慶元年柳文と共に翻刻せられたり、蓋し五百家注音辨本なり、萬治三年鶴飼信之、蔣之翘の評註本を刊行し次て文政、天保、嘉永に嘉靖本、游本、韓詩集註の翻刻あり、今記する所は韓柳全集本にして首に崇禎六年陳繼儒、蔣之翘の二序、論例、叙説共一卷、目錄

一卷有り、卷一の首に李漢の序有り、其目左の如し。
卷一は賦、古詩、卷二より七は古詩、(近體を)卷八は聯句、卷九、十は律詩、卷十一より十四は雜著、卷十五より十九は啓、書、序、卷二十、二十一は序、卷二十二は哀辭、祭文、卷二十三は祭文、卷二十四より三十五は碑誌、卷三十六は雜文、卷三十七は狀、卷三十八より四十は表狀。

外集は賦詩議書序解對記制祭文銘贊牒及び順宗實錄を收む、末に本傳及び唐宋人の序傳等を附録せり。

〔評論〕 唐の文章三たび變ず、太宗高宗の時、江右の餘風を沿ひ、章を飾り句を繪きて、揣合低昂す、故に王、楊之が伯と爲れり、玄宗に至り、經術を好み、群臣稍、彫琢を厭ひて理致を索む、則ち燕許其宗を擅にす、大曆貞元の間、美才輩出して道眞を嚆噐し聖澤を涵泳す、是に於て韓愈之を倡ひ、柳、皇、李之に和し、百家を排逐し、法度森嚴なり、晋魏を抵牾して上漢周を軋す、韓愈の文は長江大河の渾渾として流轉し、魚鼈蛟龍萬怪惶惑するが如く、而して抑遏蔽掩して自ら露さしめざれども、人其淵然たる光、蒼然たる色を望み見て、亦自ら畏避して敢て迫り視ざるなり、實に歷代古文の一大宗たり、唐宋以還作

者ありと雖、一人の能く之と與に京する無し、其詩に至りても亦縦横排纂、魄力極めて大、杜甫の後に在りて蔚然として一大家を成せり。

〔註解、參考〕 ○韓集舉正十卷外集舉正十卷宋方崧 ○原本韓文考異十卷朱熹 ○別本韓文考異四十卷外集十卷補遺一卷王伯 ○五百家注音辨昌黎先生文集四十卷魏仲 ○東雅堂韓昌黎集註四十卷外集十卷廖登 ○韓昌黎全集四十卷明顧錫 ○韓昌黎集四十卷蔣之 ○韓文公集八卷光 ○韓文起十二卷清林 ○韓集點勘四卷陳景 ○韓詩集註十一卷順嗣 ○韓文正宗二卷朝鮮由公

◎元氏長慶集六十卷補遺六卷

〔作者、題名〕 唐の元稹撰す、稹字は微之、河南の人、元和の初、對策して制科第一に擧げられ、左拾遺を拜す、憲宗の時出で、河南尉と爲り、監察御史を拜し、後尚書右丞に至る、太和五年(一四九一)卒す、年五十三、詩に長じて白居易と名を齊くし、時人稱して元白といひ、其詩を元和體と號す、宮中呼びて元才子と云ふ、(新唐書本傳參考) 長慶は唐の年號に取れり。〔體裁、傳來〕 唐の白居易は稹の墓誌を作りて稱す、

文を著す一百卷、題して元氏長慶集と曰ふと、唐志又小集十卷を載せり(宋)の宣和六年、建安の劉麟刊する所の本あり、(明)の馬元調は據て以て翻雕し、詩二十六卷、賦一卷、雜文三十三卷と爲す、原本に較ぶる已に十分の四を佚す、其門目亦稹の自述と同じからず、蓋し唐時の原本は宋代已に闕佚せるなり、吾見る所は馬元調の校本にして、明萬曆三十二年の重刻本なり、首に婁堅の重刻の序、劉麟の原序、新唐書本傳、誌銘、目錄あり、其目左の如し。
古詩八卷、傷悼詩一卷、律詩十三卷、古樂府一卷、樂府三卷、賦一卷、策一卷、書三卷、表奏一卷、表二卷、狀五卷、制誥十一卷、序、記共一卷、碑銘六卷、墓誌一卷、告贈文一卷、祭文一卷。
(我國) 佐世の書目之を録す以て其渡來の古を知る。〔評論〕 稹は詩名を白居易と齊しくし古より元白と並稱せらる、蓋し其名の齊しきのみならず其詩材も亦極めて近きものあり、其詩は居易の浩博に及ばずと雖能く其言はんと欲する所を言ひて毫も窘束せず、而して居易の俚俗無し、稱して元輕といふと雖必しも然らざるものあり、集中に在りては連昌宮の一篇尤も大作たる可し、稹又制誥に長せり。

◎歐陽先生文集八卷附錄一卷

〔作者〕 唐の歐陽詹撰す、詹字は行周、泉州の人、韓愈、李觀と共に陸贄の門に出で且つ同年進士に登り並びに名聲有り、官四門助教に至る。(唐書文藝傳參考) 〔題裁〕 此集首に萬曆三十四年曹學佺の序あり、次に唐の李貽孫の原序あり、次に目錄あり。
賦一卷、四五七古共一卷、五律、五排、七律、五七絶共一卷、記、傳共一卷、銘、頌、箴、論共一卷、述文一卷、序一卷、書、啓共一卷。
附録は唐書文藝傳の歐陽詹傳、韓愈の歐陽先生哀辭、題哀辭後、何蕃傳、唐の黃璞が閩川名士傳、及び文獻通考、韻語陽秋の拔萃、宋の眞德秀が跋、歐陽門集、陳宓、蔡襄、明の黃仲昭が八閩通志中の歐陽詹に關する十二則、宋の何晦の唐撫言一則、計敏夫の唐詩紀事一則を收む。
〔評論〕 詹の文古格あり、故に韓愈哀詞を作りて之を推す甚だ至れり、其自誠明論の類の駁雜太甚なるは、早卒して其學未だ深く造らざるを以てのみ。

◎劉賓客文集三十卷外集十卷

〔作者、題名〕 唐の劉禹錫撰す、禹錫字は夢得、中山の人、進士に擧げられ、博學宏詞の科に登る、累官して集賢直學士に至り、蘇州刺史と爲り、金紫服を賜ふ、太子賓客に進み、晩年文章を以て自適す、白居易推して詩豪と爲す、會昌二年(一五〇二)卒す、年七十一、(唐書本傳參考) 賓客は其官名にして又中山集と名づけしは、中山の人たるを以てなり。
〔傳來、體裁〕 書錄解題にいふ原本四十卷に作る、宋初其十卷を佚し、宋敏求其遺詩四百七首遺文二十二首を蒐めて外集十卷と爲すと、現本卷數相同し、我内閣其寫本を藏す、今其目を記せず、全唐文には、賦、制、文、表、奏事、狀、書、牋、啓、序、引、記、論、說、志、述、雜篇、讚、銘、碑類、自傳、祭文。
百九十五篇を載す、詩は雍正中、趙鴻烈編して九卷と爲し別に目一卷有り、序に體を分つといふも實は然らず。
〔評論〕 其古文縦横博辯、韓柳の外に於て自ら軌轍を爲す、其詩精銳餘有り、含蓄足らず、大抵皆杜牧と

相伯仲せり。

◎白氏文集七十一卷

〔作者、題名〕 唐の白居易撰す、居易字は樂天、香山居士と號す、太原の人、元和の進士、左拾遺に遷り、江州司馬に貶せらる、後、知制誥に遷り、刑部尚書を以て致仕し、大中元年(一五〇七)卒す、年七十五、右僕射を贈られ、謚して文と曰ふ、元稹と多く酬詠し、胡果、吉皎等と九老の宴を張り、晚年意を詩酒に放つ、世號して元白といふ、(唐書本傳)是集或は長慶集といひ、或は白氏文集といふは、惟、其標目行款を改削する所あるのみ、長慶は唐の年號なり。

〔傳采、體裁〕 長慶四年、元稹會稽に刺たりしとき、樂天の文を徵し排續して五十卷(二千一百九十一首唐書に二千二百五十首に作る)と爲し之に序す、後集二十卷は居易自ら序を爲りて長慶集の後に附す、又續後集五卷は自ら記を爲りて其後に附す、前後七十五卷(三千八百四十首)是を全集と爲す、又別に元白唱和、因繼集共に十七卷、劉白唱和集五卷、洛下遊賞宴集十卷有り、其文盡く全集の中に在り、(宋)の歐陽修が唐書を撰するるとき未だ佚亡せ

ず、故に其藝文志に白氏長慶集七十五卷を著録せり、下りて晁公武が讀書志を著すとき、已に續後集の三卷を佚し、陳振孫の書錄解題には七十一卷を録して曰く、今本七十一卷蘇本蜀本編次同かつ、蜀本又外集一卷あれども往々皆樂天日記の舊に非ずと、現時の傳本此外集有るもの無し、蓋し宋代の人樂天に託して編次せしものならん、後、(明、清)に至りて相繼きて之を重刻せり又(清)の汪立名は其詩のみを編訂して白香山詩集四十四卷を成す、(我國)にては高野山西南院の舊藏本は唐の會昌四年の寫本にして即ち仁明帝の承和十一年に當れば以て其渡來の久しきを知る、佐世の目錄には白氏文集七十卷及び白氏長慶集二十九卷を著録せり、下りて徳川時代に至り、元和四年那波道圓は活字を以て刊行し、明曆三年又重ねて之を刊す、次で萬治元年立野春節、校刊し、文政間又鈔梓す、而して明曆萬治版と文政版と其編次を異にせり、經籍訪古志に云ふ、那波道圓の活字版は、讀書敏求記に所謂廬山本ならんと、又明刊仿宋本を載せ、其云ふ所文政版の編次と同じ、故に文政版は宋本に仿ひしものならん、而るに宋代已に蘇本蜀本の異本有りしかば、其孰に仿ひしか知る可か、す

と雖、蜀本は別に外集一卷有り蘇本には之無きを觀れば、恐らくは蘇本を以て仿刻せしならん、今即ち其最近の文政版の目次を左に示す、此書首に長慶四年元稹の序、目錄一卷有り。

卷一より四は諷諭、卷五より八は閑適、卷九より十二は感傷、卷十三より二十は律詩、卷二十一は詩賦、卷二十二は銘、贊、箴、論、偈、卷二十三是哀、祭文、卷二十四は碑碣、卷二十五は墓誌銘、卷二十六は記、序、卷二十七は書、卷二十八は書、序、卷二十九は書、頌、議論、狀、卷三十は試策問、制誥、卷三十一より三十六は中書制誥、卷三十七より四十は翰林制誥、卷四十一より四十四は奏狀、卷四十五より四十八は策林、卷四十九五十は甲乙判、後集卷五十一、五十二は雜體、格詩、詞行、卷五十三より五十八は律詩、卷五十九は碑誌、序、記、表、卷六十は碑記、序、解、祭文、卷六十一は銘誌、序、贊、祭、卷六十二は律詩、卷六十三は格詩、雜體、卷六十四より六十八は律詩、卷六十九は半格詩、附律詩、卷七十は碑記銘、吟偈。(卷數は前後集を通じて算す)

以上目錄共に七十一卷、總て三千五百九十四首、

明萬曆版を之に比するに、後集第五十一卷より五十八、第六十二卷より六十九に至る十六卷を、第二十一より三十八に收め、碑誌序記等に編次の異同あり、而して共に凡て七十一卷なり、又萬治版は明曆版と其編次同じけれども、惟、一卷多きのみ。

〔評論〕 居易の詩は大致溫厚和平にして毫も人を尤め天を對む意無し、是其元稹と極めて相背て而も同じからざる所以なり、其源流を論ずれば杜甫より來るに近し、而して杜甫の雄渾沈鬱に易ふるに流暢安詳を以てせり、其弊や往往にして俚率に陥るを免れず而も亦絶えて斧鑿補綴に入らず、古來白俗の誦有るも平正に論ずれば竟に中唐以來の一家たる可し、其文も亦頗る駢儷に長ず、然も亦儻句を作るに意無きものゝ如し、故に自然に風致有り。

◎李文饒文集三十四卷

〔作者〕 唐の李德裕撰す、德裕字は文饒、贊皇の人、穆宗の初、翰林學士と爲り、號令大典皆其手に出づ、武宗の朝、宰相を拜し、衛、公に封せられ、宣宗の時潮州別駕に貶せられ、大中四年(一五一〇)卒す、

年六十三、著す所姑藏集、獻替錄、辨謗略等ありしが世多くは傳はらず。(唐書本傳參考)

〔體裁〕 此集は會昌一品制集、別集、外集より成る、會昌一品制集は皆武宗の時の制誥、別集十卷は皆詩、賦、雜文、外集四卷は皆選讀以後間居のとき史を論じたる文、即ち窮愁志なり、今記する所は、明の鄭倅典の校正本にして、一品制集は、首に鄭亞の序ありて、毎集の頭に其目次を列す、其目左の如し。

卷一は徽冊讚、卷二は紀功、卷三四は制、卷五より七は詔勅、卷八は制詞、奉宣代諸道節度使書(上)、卷九は奉宣代諸道節度使書(下)、宰相等并誅罪人勅、卷十は論朝廷大政等狀、卷十六は釐革故事、卷十二は雜狀、卷十三より十六は論用兵、卷十七は密狀、卷十八は進獻、卷十九は謝恩、卷二十は析告。

外集は首に自序あり、其目左の如し。

評史一卷、論四卷。

別集の目左の如し。

賦二卷、詩二卷、疏狀一卷、書、碑共一卷、記、祭文共一卷、箴、銘、贊共一卷、終二卷は記、賦、詩、相混す、皆平泉山居の時の作なり。

卷末に開成二年河南尹裴潯の題詞あり。

〔評論〕 其文精深峻潔、邁往の氣有り、集中に文章論ありて曰く、「氣不可不貫、勢不可不息、文旨既妙、豈以音韻爲病哉」と今此集を通觀するに頗る其所論と稱ふ、扶風馬公神碑銘の如き洋洋乎として窮まらざる觀あり、懷松樓記の如きは則ち短にして盡せり。

◎李義山詩集三卷 文集八卷

〔作者〕 唐の李商隱撰す、商隱字は義山、懷州河南の人、開成二年の進士、王茂元の女を娶りて侍御史を得、諸官に歴仕し、後、滎陽に客と爲り、大中十二年(一五一八)卒す、年四十六、著す所文集、雜纂等有り。(唐書本傳參考)

〔傳來、體裁〕 唐志藝文志には李商隱樊南甲集二十卷、乙集二十卷、玉溪生詩三卷、賦一卷、文一卷を載せ、宋史藝文志には李商隱文集八卷、四六甲乙集四十卷、別集二十卷、詩集三卷を載す、然れども(清)初に至り已に其文集を佚し、惟詩三卷のみ傳はる、吳江の朱鶴齡始めて諸書より哀輯し、編みて

五卷と爲す、而して其狀の一跡を闕けり、康熙二十九年、徐炯其本を林佶に得、文苑英華載する所の諸狀を採撫して之を補ひ、又重陽亭銘一篇を補入し、以て之か注を作り、徐樹穀箋して李義山文集箋注十卷を爲る、後馮浩、姚培謙等之が注釋を爲る、今記す所は馮浩の編訂重刻本にして、首に四庫提要の文を冠らし、次に總目、錢陳群、王鳴盛、馮浩の三序、凡例十二則、新舊唐書文苑文藝兩傳、宋史藝文志、通志藝文略の抄、及び年譜、增詩、詩話、類補、目錄有り、其總目左の如し。

○玉溪生詩三卷、卷一、二は編年詩、卷三は不編年詩。○樊南文集八卷、表一卷、狀一卷、啓二卷、祝文一卷、祭文一卷、序一卷、書、箴、傳、碑、銘、賦、雜記、逸句共一卷。

(我國)には通憲入道書目に、李義山詩集三卷を收むれば、其渡來の古きを知る可し。

〔評論〕 其四六文は婉約雅飭、整屈偏枯の弊無し、才有りて之を斂め、體有りて之に超たり、唐人に於て別格を爲せり、其失や纖薄に陥り易しと雖、要するに一大宗たり、其詩は縹麗の中寄託する所多し、宋初の楊億、錢惟演等が西崑牀の一派は實に此に本づ

く、王安石謂く、能く老杜を學びて其藩籬を得たりと、不易の論たり、蓋し亦晚唐に在りては、杜牧と分鑑並驅して一名家を爲せり。

〔註解、參考〕

○李義山詩註三卷補註一卷清朱鶴齡註 ○李義山詩刪註二卷劉綱奇註 ○李義山文集箋註十卷徐樹穀箋 ○李義山詳註詩三卷文八卷卷首一卷馮浩編 ○李義山詩文集箋註二十六卷姚培謙等撰

◎皮子文藪十卷

〔作者、題名〕 唐の皮日休撰す、日休字は襲美、襄陽の人、鹿門山に居りて、自ら醉吟先生と號す、咸通八年進士に登り、官太常博士に至る、(唐書本傳參考) 唐書に黃巢に降り、後害せらるといひ、老學菴筆記には、吳越に終るといへり、未だ孰か是なるを知らず、其文藪と名づけたるは、自序に咸通丙戌上第せず、退きて州野に歸り、其文を編次せんとして篋を發きしに、叢萃繁として藪澤の如し、因て文藪と名づくといへるにて知る可し。

〔體裁〕 予が見たる所のものは、我享和二年の刊本に

以て此集の舊帙に非ざるを知る可し、首に康熙九年、戴京會、吳穎の二序、袁英の跋語、目錄、尾に張讚、吳鼎の二跋有り、其目左の如し。

賦、五言古、七言古、長短句共一卷、五言律、五言排律共一卷、七言律一卷、五言絕句、七言絕句共一卷、疏、序、記、書、論、碑銘、紀事共一卷、啓一卷、雜著一卷、兩同書一卷。

〔評論〕 其詩諷刺鏗刻、時に或は餘地を留めず、而して大旨忠孝に乖かず、雜文も亦五代蠶齷の態無し。

◎ 黃御史集八卷 附錄一卷

〔作者〕 唐の黃滔撰す、滔字は文江、莆田の人、乾甯二年の進士、光和中四門博士に除せられ、尋で監察御史、襄行充威武軍節度推官に遷る(唐考本)此集一に黃先生文集ともいふ、御史は官名に因る。

〔傳來、體裁〕 是集久しく佚して傳はらず、其孫永豐縣公言へる有り、父考功公始めて是集を得、僅に數卷のみと、其後永豐君、詩文五卷を呂夏卿の家に得、又逸詩を翁承贊の家に得、又銘碣を浮屠老子の宮に得、力めて是正を加へて、二百年の後(淳熙中)之

を世に傳へたり、其後、明の正徳中に再刻し、萬曆中に三刻成り、崇禎中に四刻成る、而して崇禎本は十卷にして二卷多し、即ち四庫全書著錄本是なり、今記する所は三刻本にして、首に萬曆三十四年曹學佺、慶元二年洪邁、淳熙三年楊萬里、同四年謝諤の四序、目錄有り、其目左の如し。
賦一卷、五言古詩一卷、七言律詩一卷、五言排律一卷、碑記銘一卷、墓誌銘、祭文共一卷、書、啓共一卷、序、贊、雜文共一卷。
附錄一卷は昭宗實錄、莆陽志、五代史補、丹鉛總錄の一節を記す。
〔評論〕 其文頗る瞻蔚、詩も亦貞元長慶の遺風有り、羅隱、司空圖に及ばずと雖、徐寅、杜荀鶴諸人の及ぶ所に非ず。

◎ 騎省集三十卷

〔作者、題名〕 宋の徐鉉撰す、鉉字は鼎臣、揚州廣陵の人、十歲能く文を屬し、南唐に仕へて吏部尚書に累官し、後宋に歸して左散騎常侍と爲る、開國侯に封せられ、邑一千戸を食む、淳化三年(一六五二)

卒す、年七十六、鉉小學に精し、小篆隸書に工なり、許氏の説文を校訂し、親ら之を篆書して板に鏤して行へり、著す所、質疑論若干卷あり、釋神録は其客卿亮の手より出づといふ、(宋史文苑傳、行狀、李昉の騎省とは散騎常侍たりしよりいふ、省は役所なり。)

〔傳來、體裁〕 此集は其婿吳淑の編みしもの、前の二十卷は、南唐に仕へし時の作、後の十卷は、宋に入りし後の作なり、天禧元年、胡克順其本を陳彭年より得て刊刻し、表進して始て世に行ふ、然れども傳本極めて少し、光緒中黔縣の李宗熾宋刻の傳鈔本を得て自ら序して之を板行してより乏しからざるに至れり、其目左の如し。

卷一は賦(三)詩、卷二は詩歌、卷三より五は詩、卷六、七は制誥、卷八は制誥、祭告文、卷九は冊、諡議、卷十より十二は碑銘、卷十三は記、卷十四は記、頌、贊、銘、哀冊文、卷十五より十七は墓誌、卷十八は序、卷十九は序、表、書、卷二十は表、書、狀、文、卷二十一は應制詩、寄送詩、卷二十二は雜詩、文賦、卷二十三は序、卷二十四は序、連珠、贊、銘、論、卷二十五より二十七は碑銘、卷二十八は記、卷二十九、三十は墓誌。

卷首には四庫徐集の提要を載せ、次に李宗熾の序、次に宋史本傳、次に胡克順の進徐騎省文集表、次に陳彭年の序、(淳化四年)次に行狀、次に李昉の墓誌銘、次に祭文、李至の輓詩、徐琛の後序、(紹興十一年)次に目錄あり、卷末に光緒辛卯長洲の朱孔彰が訂正せる所の校徐集札記一卷、徐集補遺一卷を附せり、補遺は宋文鑑に據りて君臣論、持權論、師臣論の三篇を附録せるものなり。
〔評論〕 鉉才思敏捷、文章淹雅、筆を下せば即ち成る、故に其詩流易餘有りて深警足らず、其文燕許に沿湖して韓柳の音に嗣く能はず、然れども五季の末、古文未だ興らざる時に當りて、迥然孤秀、一時に冠たり。

◎ 河東集十五卷 附錄一卷 (未見)

〔作者、題名〕 宋の柳開撰す、開字は仲塗、大名の人なり、開寶六年の進士、州郡を歴典し、如京使に終る、開少くして韓愈、柳宗元を慕ひて名字を改むるに至る、自ら東郊野と號し、又補亡先生といふ、范昇と名を齊くし、世柳范と稱す。(宋史文苑傳)河東は宗元

の郷里なり、故に思慕の餘、其集に名づく。

〔傳來、體裁〕 此集其門人張景編集し、附録一卷は景の作りし開の行狀なりといふ、予未だ之を見ざれば、其體を記する能はず。

〔評論〕 宋朝の文、偶儷を變して古體を振興せしは、實に開より始む、惟、其文の艱澁なるは是其短なる所たり。

●小畜集三十卷外集七卷(未見)

〔作者、題名〕 宋の王禹偁撰す、禹偁字は元之、鉅野の人、太平興國八年の進士、官翰林學士知制誥に至り、屢、事を以て守郡に謫せられ、知鄆州に終る、時に咸平四年(一六六一)年四十八、(宋史本傳參考)禹偁是集を次し、自ら筆して乾の小畜に之くを得たり、因て以て集に名づく。

〔傳來、體裁〕 此集、晁氏讀書志、陳氏書錄解題皆三十卷を載せて、今本と同じ、惟、宋志に二十卷に作る、然れども宋志荒謬最も甚しく據るに足らず、凡て、賦二卷、詩十一卷、文十七卷。

●武夷新集二十卷

〔作者、題名〕 宋の楊億撰す、億字は大年、浦城の人、年十一童科に中り、後、進士を賜はり、兩たび翰林學士と爲る、性耿介、名節を尙び、學者の尊崇する所と爲れり、天禧四年(一六八〇)卒す、年四十七、(宋史本傳參考)武夷は之を地名にとる。

〔傳來、體裁〕 宋史本傳には、著す所、括蒼、武夷、天聖二年の進士、弟祁と俱に翰林に入り、皇祐中書門下平章を拜し、鄭國公に封せられ、英宗の時致仕して卒す、年七十一、大尉を贈り元獻と諡す、其著す所、今に存するもの此集の外、國語補音あり、他の紀年通譜掖垣叢書尊號錄は皆亡佚せり。(宋史本傳參考)

〔傳來、體裁〕 宋史本傳に別集四十卷とあり、直齋書錄解題、文獻通考竝に宋元憲集四十四卷に作る、然れども久しく佚して傳はらざりしが、(清)初に至り永樂大典より録出して四十卷と成し、武夷殿聚珍版書中に編收せり即ち今本なり、首に乾隆御製武夷殿聚珍版十韻一首、御製題宋元憲景文集、並各書其卷首詩一首、嘉定二年陳之強の原序、目錄、四庫提要節文あり、收むる所左の如し。

穎陰、韓城、退居、汝陽、蓬山、冠菴諸集及び内外制刀筆ありとあり、宋史藝文志には、惟、蓬山集五十四卷、武夷新編集二十卷、穎陰集二十卷、刀筆集二十卷、別集十二卷、汝陽雜編二十卷、鑿坡遺札二十卷を著録し、本傳と相符せず、陳振孫の書錄解題には、億の著す所、共に一百九十四卷と謂ひ、館閣書目猶百四十六卷あるも、今は皆俱に亡佚し、たゞ武夷新集のみ存せり、新集は景德三年翰林に入り、明年其十年以來の詩文を輯めて自ら之を序せしものにして、其目左の如し。
詩五卷、頌、記共一卷、序一卷、碑、表、碣共一卷、墓誌、述、行狀共三卷、表狀書七卷、啓、祭文、齋醮文共二卷。

〔評論〕 其詩大致李商隱を宗とす、而して時昇平に際す、春容典雅にして唐末五代衰頹の氣無し、劉筠、錢惟演の輩、皆從ひて之に學ぶ、時に楊劉と號す、三人詩を以て更に相屬和し、一時の麗を極めたり。

●宋元憲集四十卷

〔作者、題名〕 宋の宋庠撰す、庠字は公序、安陸の人、

なり、外集七卷は其會孫汾の編みし所なるが、久しく佚して傳はらず、今存する者は殘闕本にして、第七卷より第十三卷まで、合して七卷のみなり、凡て詩四十四篇、雜文八篇、論議五篇、傳三篇、箴、贊、頌九篇、代擬二十篇、序十二篇。(四庫提要參考)
〔評論〕 宋は五代の後を承け、詩文共に纖儷なり、禹偁始めて古雅簡淡の作を爲りて其弊を矯む、就中奏疏尤も凱切を極む、宋史採りて本傳に入る者、議論皆英偉觀る可し、應制駢偶の文、亦宏麗典贍多く、一時の作手たるに愧ぢずと稱す、然れども其文壇に於ける功は寧ろ詩に在りと謂ふ可し。

記、碑銘、連珠、論、說。

〔評論〕 庠弟の祁と落花の詩を以て名を得たり、然るに其詩は乃ち晩唐の纖體、集中名章雋句實に斯に止まらず、其文多くは節閣の作、沈博絶麗にして、尹洙、歐陽修と體製を殊にす、而して亦一代の作者たり。

● 徂徠集二十卷附錄一卷

〔作者〕 宋の石介撰す、介字は守道、徂徠と號す、兗州奉符の人、天聖八年の進士、初め嘉州判官を授けられ、慶曆中太子中允と爲り、慶曆五年(一七〇五)卒す、年四十一、著す所唐書糾謬あり。(宋史本傳參考)

〔傳來、體裁〕 歐陽修、介の墓誌を作りて爲る所の文章、某集は若干卷、又某集は若干卷と重言せしを觀れば、原集當に分れて二部と爲りしものなるべし、南宋會て彫本ありしと雖全帙に非ず、(明)に至りて影鈔本あり、尙完書に屬す、(清)の光緒間、張次陶之に據りて開彫し、卷内行款は一に明鈔の舊に仍り、惟、末に附錄一卷を増せり、(王之翰序參考)即ち此本なり、首に光緒十年王之翰の序、像、贊、目錄あり、其目

左の如し。

宋頌一卷、古詩二卷、律詩一卷、說、辯、論等共七卷、書六卷、序一卷、記一卷、啓、表等共一卷。附錄一卷は宋史本傳、歐陽修の選びし墓誌銘等載す。

〔評論〕 介深く五季以後の文格卑靡なるを惡む、故に集中極めて柳開の功を推す、而して復怪説を作りて楊億を排せり、其主持ただ過ぎ、抑揚皆其平を得ずと雖、要するに亦憂然として自ら一家を爲す者なり、王士禎の池北偶談に稱す、其倔強勁質、唐人の風有り、柳開穆脩二家に勝るも、終に未だ草昧の氣を脱せずと、亦篤論なり。

● 河南集二十七卷(未見)

〔作者〕 宋の尹洙撰す、洙字は師魯、河南の人なり、進士に擧げられ、起居舍人に累遷し、慶曆七年(一七〇七)卒す、年六十有七、著す所五代春秋あり。(宋史本傳參考)題名は郷里にとる。

〔傳來、體裁〕 宋史藝文志二十七卷に作りて、四庫著錄本と同じ、郡齋讀書志に二十卷とあるは傳寫の誤

ならん、予未だ之を見ざれば、其體裁を記すこと能はず。

〔評論〕 唐末以來文章寢敝る、洙、穆修と古文を爲り以て時の向ふ所を矯む、其文章、古峭勁潔、毫も浮靡の習無し、邵伯溫の開見録に稱す、歐陽修早に偶儷の文に工なり、河南に官たるに及び始めて洙を見、乃ち韓退之の文を出して之を學ぶと、然れば則ち歐陽修古文を以て一代に唱道せしと雖、其法は之を洙に得しもの多からん。

● 蘇子美集十卷

〔作者〕 宋の蘇舜欽撰す、舜欽字は子美、開封の人、景祐中に進士に登り、集賢校理監に累遷し、事に坐して名を除かれ、後、復た湖州長史と爲り、慶曆八年(一七〇八)卒す、年四十一。(宋史本傳參考)

〔傳來、體裁〕 舜欽歿後四年、歐陽修其詩文を蒐輯して十五卷と爲す、晁公武、陳振孫二家の書目竝に同じ、四庫本は十六卷なり、紀昀謂らく後人の續入する所ならんと、予が見たる者は同治六年刊本にして十卷本なり、首に歐陽修の原序あり、次は宋史本傳

及び目錄あり、其目左の如し。

卷一は雜文、記、序、書、卷二は書、啓、卷三は上書、疏狀、卷四は誌銘、卷五は誌銘、行狀、卷六は雜文、祭文、表、卷七より九は古詩、卷十は律詩。

〔評論〕 劉克莊の後村詩話に稱す、其歌行多く雄放、其人と爲りの如し、近體は乃ち平夷妥貼を極むと、歐陽修の原序にも亦極めて其古文を推せり。

● 范文正公集二十四卷附錄一卷

〔作者、題名〕 宋の范仲淹撰す、仲淹字は希文、吳縣の人、嘗て曰く、士は當に天下の愛に先だちて愛へ、天下の樂に後れて樂むべしと、其天下に銳意なる想ふ可きなり、其官右司諫より數州の刺史を歴て、至る所惡政あり、召されて樞密副使を拜し、參知政事に進む、皇祐五年(一七二二)卒す、年六十四、文正と諡し、楚國公を追封す、著す所、政府奏議二卷あり、是集と俱に世に行はる、(宋史本傳參考)是編本丹陽集といひしが、今は文正集又は范文正公集と云ふ。

〔傳來、體裁〕 此書は二十卷、別集四卷、宋志以下諸

家著錄皆同じ、本集は詩賦五卷二百六十八首、雜文十五卷一百六十五首を載す、別集は淳熙十三年恭煥の輯めしもの、詩文三十七篇を附す、是四庫に收むる者にして、又四庫は此外に補編五卷あり、清の康熙中、仲淹の裔孫能濬の輯集せしものなり、共に未だ見ず、予が見たる者は明の楊士遇の校本にして、首に元祐四年蘇軾の序、毛九苞の凡例、目錄、年譜あり、凡て二十四卷なり、其目左の如し。

賦二卷、詩三卷、義、說、論、讚、頌、述共一卷、序、記共一卷、奏議四卷、劄子狀一卷、表二卷、書、啓三卷、尺牘二卷、祭文一卷、碑一卷、墓誌銘三卷。

〔評論〕 仲淹は一代の名儒、經術に通貫し、政體に明達す、其論著する所一皆根本あり、固より詞藻を虚飾する者の能くする所に非ず、亦心性を高談する者の及ぶ所に非ず。

華陽集四十卷

〔作者、題名〕 宋の王珪撰す、珪字は禹玉、成都華陽の人、慶曆二年の進士、大理評事を授けられ、翰林

學士に累官し、開封府に知と爲り、侍讀學士を兼ね、神宗の時、尙書左僕射門下侍郎を拜し、哲宗即位して岐國公に封せられて卒す、太師を贈り、文恭と諡す(宋史本傳)題名は其生地に因る。

〔傳來、體裁〕 是集本百卷、諸家の著錄皆同じ、(明)より以來久しく佚して傳はらず、惟、宋文鑑、文翰類選等に僅に數篇を載するのみ、(清)初亦永樂大典より録出し、六十卷と爲し、軼事雜說及び後人評論の語を蒐めて附録十卷となし、四庫に著録し、後武英殿に刻す、然るに殿本は四十卷にして附録なし、或は合卷せる者か、首に御製の十韻、及び目錄、紀昀等の表文あり、其目左の如し。

古詩、律、絕句共六卷、奏狀一卷、劄子一卷、表四卷、内制十四卷、外制五卷、冊文、祝文、祭文、賀詞共一卷、問、議共一卷、序、啓共一卷、神道碑二卷、誌銘四卷。

〔評論〕 珪國門を出でず、坐ながら卿相と爲りて大政に預る、詞人の榮遇蓋し罕なり、故に壯游勝覽の心胸を拓く無く、亦羈恨哀吟の筆墨に形る無し、其文は臺閣の體多く、其詩は富麗を以て主と爲す、風骨は宋庠宋祁に及ばず、而して緜麗は時に之に過ぐ、

唯、動もすれば辭を以て意を害すを免れず。

吁江集三十七卷年譜一卷外集三卷

〔作者、題名〕 宋の李觀撰す、觀字は泰伯、建昌南城の人、皇祐の初、范仲淹薦めて太學助教と爲してより、諸官を歴て大學說書に終る、嘉祐四年(一七一九)年五十一にして卒す、(宋史儒林傳)吁江は吁城の地名にして、觀の書院も亦之を以て名づく、此集又泰伯公文集ともいふ。

〔傳來、體裁〕 觀の年譜に據るに、慶曆三年に退居類葉十二卷を、皇祐四年に皇祐續葉八卷を集むとあり、文獻通考は此外に常語三卷、周禮致太平論十卷、後集六卷あり、宋志に三十三卷後集六卷に作るは、凡て相合したるものならん、此集は其後裔(清)の化鯨編輯し、來泰鑒定したるものにして、前に康熙四年來泰、化鯨の二序あり、次に碑記、後序、奏詞、墓記、詞堂記、序、年譜、總目あり。

論四卷、内治二卷、國用三卷、軍衛一卷、刑禁一卷、官人二卷、教道二卷、圖序一卷、富國策一卷、強兵策一卷、安民策三卷、慶曆民言二卷、記二卷、

序一卷、表啓一卷、書二卷、雜文一卷、墓碑二卷、常語一卷、賦一卷、古牋一卷、五言近牋一卷、七言近牋二卷。

外集三卷は告詞、劄子、薦章等を載す、余允文の尊孟辨中に觀の常語十七條を載せたれども、此には僅に三條のみ、蓋し之を輯めるもの諱みて之を刪りしものか、(我國)文苑閣の翻彫せし宋李吁江先生文抄三卷は、此集の富國強兵安民の三策を録出せしものなり。

〔評論〕 觀の文格は歐陽修、曾鞏に次ぐ、平正にして奇を弄せず、蓋し力を經に得るものなり、詩は長ずる所に非ず。

宛陵集六十卷

〔作者、題名〕 宋の梅堯臣撰す、堯臣字は聖俞、宣城の人、初め河南主簿と爲り、鎮安判官を歴て進士出身を賜はり、國子監直學士と爲り、官員外郎に遷る、嘉祐五年(一七二〇)卒す、年五十九、堯臣詩に工にして歐陽修の詩友たり、家貧にして好みて酒を飲み物と忤ふ無し、賢士大夫多く之に従ふ、(宋史本傳)

宛陵は地名に取れり。

〔傳來、體裁〕 其詩始め謝景初の輯めし所は、僅に十卷なりしが、歐陽修其遺稿を得、之を増益し、十五卷を得たり、其六十卷と成したるは、何人たるを知らず、文獻通考は正集六十卷外集十卷を載せられたれども、外集は今佚して傳はらず、此書は康熙壬午宋學の校刻本にして、首に學及び歐陽集の序あり、次に目錄あり、其目左の如し。

卷一より三は西京詩、卷四、五は池州後詩、卷六は池州後詩、汝州後詩、卷七は汝州後詩、卷八は汝州後詩、湖州後詩、卷九より十一は湖州後詩、卷十二より五十八は詩、卷六十は記、序、賦。終に拾遺あり、詩二首、文一篇を載す。

〔評論〕 宋初の詩、尙唐末五代の習を沿ふ、王禹偁は之を變せんと欲し、力未だ及ばず、歐陽脩崛起して極力古格に復す、時に、蘇軾、陳師道、黃庭堅等、尙未だ顯れず、其脩を佐けて詩體を變せし者は則ち堯臣なり、其詩外稿内映、善く之を學ばざれば則ち枯淡にして味無し、故に蘇黃崛起の後其派を傳ふる者差、稀なり。

◎ 蔡忠惠集三十六卷別記十卷

〔作者〕 宋の蔡襄撰す、襄字は君謨、天聖中に進士と爲り、知諫院に累官す、諸州に知と爲り、至る所名聲あり、官端明殿學士に至る、治平四年(一七二七)卒す、年五十有六、襄文章精粹、尤小楷草書に工にして、當時第一と稱せらる、(宋史本傳)忠惠は諡なり。

〔傳來、體裁〕 宋志に襄集六十卷奏議十卷を載せ、文獻通考に十七卷を作る、多寡懸殊應に是の如くなるべからず、疑らくは通考奏議十卷を以て、集六十卷に合し、總じて七十卷と爲し、而して傳刻譌舛、其文を倒にして十七卷とせしならん、(四庫提要)然れども其初本世甚だ傳はらず、乾道四年、王十朋重編して三十六卷と爲して、復世に行はるゝに至る、書錄解題に惟三十六卷本のみ載せたるは、舊本已に佚したればなり、(元)に至り復散佚せり、(明)の萬曆中、盧廷選鈔本を得、是に於て陳一元は南昌に刻し、析て四十卷と爲す、興化府知府蔡善繼、復た郡署に刻して三十六卷と爲し、附するに徐燏の輯めし別記十卷を以てす、後、其里人宋珪詩集を刻して世に行ふ、(清)の雍正十二年襄の裔孫延魁、又哀次重刻して、凡て

◎ 宋景文集六十二卷補遺二卷附錄一卷

〔作者、題名〕 宋の宋祁撰す、祁の傳は新唐書の條に出づ。景文は其諡なり。

〔傳來、體裁〕 本傳には百卷に作り、宋志、通考は俱に百五十卷を作る、書錄解題、焦竑の經籍志俱に止だ百卷と稱し、本傳と合ふ、然れども皆佚して傳はらず、獨(我國)林衡の佚存叢書に宋槧百五十卷本の零冊三十二卷を收むるのみ、(清)初永樂大典より錄出し、六十二卷と爲し、又旁ら諸書を探り、補遺二卷を成し、又別に軼事餘聞を一卷と爲して之に附し、武英殿聚珍版書中に收めたり、詩文共に皆體を分ちて之を編し、詩を首とし文を次にせり、吾見る所の書は首五卷、末六卷及び補遺附錄を缺けり。

〔評論〕 祁は其兄庠と名を齊しくし當時號して大小宋と爲せり、其文は謹嚴にして典麗、往往にして奇字を用ふ、格は唐人に近し、詩は文に及ばずと雖亦觀る可きものあり。

古律詩三百七十首、奏議六十四首、雜文五百八十四首を載す、四庫に著録する者は是なり、然れども未だ見ず、今記する所は即ち蔡善繼の校刊本にして、首に王十朋、萬曆四十四年蔡善繼、史繼偕、黃國鼎、何喬遠の五序、及び目錄有り、其目左の如し。

古詩三卷、律詩五卷、箴一卷、制誥四卷、奏議六卷、國論要目一卷、書疏一卷、表一卷、狀一卷、劄子一卷、書一卷、記一卷、序一卷、牋啓一卷、齋文、傳、賦共一卷、雜著二卷、哀詞、祭文共一卷、碑誌表一卷、墓誌銘三卷。

凡て詩三百七十首、奏議雜文六百四十八首なり、別紀十卷は

本傳、德行、政事、書學、藝談、賞鑒、茶癖、恩寵、崇報、紀異。

の十篇なり、四庫本は蓋し此に本づける者ならん。〔評論〕 襄は忠臣、但に書法を以て一世に名有るのみならず、其詩文も亦光明磊落、其人と爲りの如し、其作る所未だ歐陽脩、梅堯臣を排突し、蘇東坡、黃山谷を馳驟せしむること能はずと雖、北宋諸作之間に在りては、亦第二流たるを失はず。

◎ 祠部集三十五卷

〔作者、題名〕 宋の強至撰す、至字は幾聖、錢唐の人、韓琦累りに薦めて館閣に充つ、果さず、祠部郎に終る、卒して金紫光祿大夫を贈らる。(宋史強至傳參考)

〔傳來、體裁〕 宋史藝文志には四十卷を載せ、文淵閣書目にも亦尚著録せり、其後遂に湮没して傳はらず、(清)初、厲鶚の宋詩紀事を撰ぶ、僅に高似孫の蟹略、方回の瀛奎律髓より一詩を採録せるのみ、其他均しく佚して見る可からず、乾隆間、永樂大典各編中より録出して、詩文數百篇を得、釐めて三十五卷と爲し、武英殿に刻す、四庫著録本は三十六卷に作れども、恐らくは誤ならん、首に乾隆御製開武英殿聚珍版十韻詩一首、四庫提要の節文、元豐三年會鞏の原序、目錄有り、其收むる所左の如し。
五古二卷、七古一卷、五律二卷、七律五卷、五排七排共一卷、五絶、六絶、七絶共一卷、劄子一卷、表二卷、表、看詳一卷、狀五卷、啓三卷、書八卷、策問、頌、銘、序、跋、記、舉詞、考詞、牒詞共一卷、祝文、祭文、行狀共一卷、墓誌銘、遺書記共一卷。

〔評論〕 其文曲折疏暢、事情に切中し、多く世用に裨有り、其詩沈鬱頓挫、氣格頗る高く、北宋諸家の中自ら一幟を樹つ可し。

◎ 文恭集四十卷

〔作者〕 宋の胡宿撰す、宿字は武平、常州晉陵の人、天聖二年の進士、兩浙轉運使を歴て翰林學士より樞密副使を拜し、太子少保を以て致仕し、治平四年(一七二七)卒す、年七十三、文恭と諡す。(宋史本傳參考)

〔傳來、體裁〕 書錄解題に七十卷を載す、然れども久しく傳はらず、(清)初永樂大典より録出し、武英殿に刻す、即ち今本なり、首に乾隆帝の題辭、目錄有り、其目左の如し。
卷一は賦、五七古、卷二、三は五七律、卷四は七律、卷五は七律、五排、卷六は五排、五七絶、卷八は奏議、狀、議、卷九より十一は表、劄記、卷十二より二十一は外制、卷二十二より二十七は内制、卷二十八は帖子詞、上梁文、卷二十九は策問、頌銘、論辯、序贊、卷三十より三十四は書、卷三十五は記、卷三十六より三十八は誌銘、卷三十九

は碑表、塔銘、卷四十は行狀。
〔評論〕 宿、朝に立ち廉直を以て著る、而して學問亦極めて該博なり、當時文格未だ變せず、尙四六駢偶の習に沿ふ、宿是體に於て尤も工なり、其五七言律は波瀾壯闊、聲律鏗甸、亦盛唐の遺響に彷彿たり。

◎ 鐔津文集二十卷

〔作者、題名〕 宋の釋契嵩撰す、契嵩性は李氏、字は仲靈、藤州鐔津の人、慶曆間、抗州の靈隱寺に居り、皇祐間、京師に入りて、二たび書を上る、仁宗號を明教大師と賜ふ、尋で山に還りて卒す。(卷首卷末の序參考)

〔傳來、體裁〕 宋の嘉祐間、其文を闕庭に獻す、仁宗皇帝之を覽て嘉歎し、禁中に留むること久し、旨宣有りて大藏に入れ並び行はる、建炎の間、兵火の爲に散失す、紹興三十年の秋に逮び、福州太平寺の正言長老、重ねて新に校勘せり、然れとも其流傳未だ廣からず、(元)の至大二年に至り、好事者二十餘人、財を捨て縁を助け、以て此集を重刊せり、下りて(明)の宏治十二年、嘉興の僧如香は文十九卷詩二卷及び他人の作れる序贊詩題疏一卷を刊行せり、(我國)に

は北條氏の末葉に渡來し、足利時代、大に世に行はれ、僧春屋之を翻刻せり、今記す所は、元の至大二年版なり、首に李之全、釋德洪の二家序、目錄有り、末に拾遺、沙門明本の選びし重刊鐔津集疏并序、比丘永中の識語、釋法珊、林之奇、比丘希陵、三家の跋有り、而して毎卷の末に施財の寺名人名及び金數を記せり、其目左の如し。
行業記、原教、勸書共一卷、廣原教一卷、孝論、壇經贊、眞諦無聖論共一卷、皇極論、中庸解共一卷、論原三卷、雜著一卷、書一卷、書、啓、狀共一卷、叙二卷、志、記、銘共一卷、述、題、書贊、傳、評共一卷、非韓三卷、碑記銘、表辭共一卷、古律、詩一卷、詩、叙、贊、跋共一卷。

〔評論〕 其詩秀句多く、其文は則ち好みて闕佛者と抗辨し、曉々然として、動もすれば數十篇に至り、務めて儒を援て墨に入れんと欲す、儒理を以て之を論すれば固より偏駁たり、即ち彼法を以て之を論すれば、亦喧癡の念太た重し、所謂解脫纏縛、空種種人我相なる者に非ず、然れども第、其文に就きて論すれば、則ち筆力雄偉、論端鋒起、實に能く自ら其説を暢ぶ、亦縉徒の文に健なる者あり。

◎歐陽修居士集五十卷 外集二十五卷
外制集三卷 內制集八卷 表奏書啓
四六集七卷 奏議集十八卷

〔作者、傳來〕 宋の歐陽修撰す、修の傳及び此書の傳來は文忠公全集の條に出づ。

〔體裁〕 此書は文忠公全集本にして、居士集は首に蘇軾の序あり、其目左の如し。

古詩九卷、律詩五卷、賦、雜文共一卷、論二卷、經旨一卷、詔冊一卷、碑銘四卷、墓表二卷、墓誌銘十二卷、行狀一卷、記二卷、傳(一)序共四卷、書三卷、策問一卷、祭文二卷。

次に外集の目は、

卷一は樂府(七)古詩、卷二より四は古詩、卷五より七は律詩、卷八は古賦、辭、頌、贊、章、卷九は論、辯、卷十は經旨、卷十一は神道碑、墓誌銘、卷十二は墓誌銘、石柳銘、墓表、卷十三は記、卷十四は序、卷十五は序、傳、卷十六より十九は書、卷二十は策問、諡議、齋文、祭文、卷二十一は歐

陽氏譜圖、卷二十二は硯譜、牡丹記、卷二十三は雜賦、卷二十四は近躰文、官題詩、卷二十五は論、策。

外制集の目は、

卷一は勅、制、卷二、三は制。

內制は各卷共に詔、國書、勅書、批答等相雜れり。

表奏書啓四六集の目は

表奏五卷、書啓二卷。

なり、奏議集は劄子、疏狀等每卷相混じ、別に躰を別たす。

〔評論〕 宋興りて七十有餘年、詩文並に唐末五代の餘習を受け其纖弱駢儷の體を脱する能はず、王禹偁出て、詩躰を變せんとし、柳開、穆修出て、文躰を變せんとし、力之に伴ふ能はず、歐陽修起るに及び杜甫韓愈を祖禰し、文章道德を以て宗師と爲し、清蒼老健、迂徐和雅、是に於て文格詩格遂に一變せり實に有宋一代の大宗たり、故に蘇洵其文章を論して以て其味の醇然として長く其光の油然として幽なるは李翱に似、切近的當なるは陸贄に似たり、而して其の才は則ち二人の及ぶ所に非ずと爲せり、必しも過譽に非ず。

◎公是集五十四卷

〔作者〕 宋の劉敞撰す、敞の傳及び題名は、公是先生弟子記の條に出づ。

〔傳來、體裁〕 是集其弟攸の序に據るに、元來總集七十五卷ありて、叙して五種と爲し、古詩二十卷、律詩十五卷、內集二十卷、外集十五卷、小集五卷に分てり、文獻通考に收むる所亦同じ、然れども今傳はらず、(清)初永樂大典より録出し、釐めて五十四卷を成し、武英殿聚珍版書中に收む、首に乾隆御製題武英殿聚珍版十韻一首、敞の弟劉攸の原序、目錄、四庫提要節文あり、收むる所左の如し。

卷一より二は賦、卷三は騷、四言、卷の十五は五古、卷十六より十八は七古、卷十九より二十二は五律、卷二十三より二十六は七律、卷二十七は五絶、卷二十八、二十九は七絶、卷三十は制誥、卷三十一より三十三は奏疏、(昔見る所三十三卷の英名州郡縣選)卷三十四は表序、卷三十五は序、卷三十六は記(貞觀刀記)、卷三十七は義、辨、三十八より四十は論、卷四十一は議、卷四十二は說、卷四十三より四十五は書

啓、卷四十六より四十八は雜著、卷四十九は碑辭、字辭、箴、銘、頌、贊、策問、卷五十は文、卷五十一は家傳、行狀、卷五十二、五十三は墓誌銘、卷五十四は石記。

◎彭城集四十卷

〔作者、題名〕 宋の劉敞撰す、敞字は貢父、公非と號す、臨江新喻の人、兄敞と偕に慶曆六年の進士の第に登る、累官して國史編修を授かり、司馬光と俱に資治通鑑を修め、中書舍人と爲る、元祐三年(一七四八)卒す、年六十七、著す所東漢刊誤、詩話等あり、(宋史劉敞傳)彭城は之を地名に取れり。

〔傳來、體裁〕 此集宋史藝文志、文獻通考、俱に六十卷に作り、(明)の文淵閣書目には十五冊と記して卷數を刊せず、今傳はれる所の三劉文集、僅に公非集一卷、凡詩四首文二十三篇のみ有り、蓋し散佚の餘なら

ん、(清)初、永樂大典より録出し、撮拾排比して四十卷と爲し、武英殿に刻す、即ち今本なり、首に乾隆御製題武英殿聚珍版十韻詩一首、目錄、四庫節文あり、收むる所左の如し。

卷一、二は賦、卷三より六は五古、卷七、八は七古、卷九より十二は五律、卷十三より十五は七律、卷十六は五言長律、卷十七は七言長律、五絶、卷十八は七絶、卷十九より二十三は制誥、卷二十四は奏疏、卷二十五、二十六は表、卷二十七は書、卷二十八より三十一は啓、卷三十二は記、卷三十三は論說、卷三十四は序、行狀、卷三十五は行狀、卷三十六は神道碑、墓表、卷三十七より三十九は墓誌銘、卷四十は雜著。

〔評論〕 放、兄敬と名を齊くせり、敬の性醇靜、放は則ち才鋒敏捷、詞辨雋利、著作亦其人と爲りに肖たり。

●蘇老泉先生全集二十卷附錄二卷

〔作者〕 宋の蘇洵撰す、洵字は明允、老泉と號す、蜀の眉山の人、年二十五始めて憤を發し學を修め、遂に六經百家の説に通ず、秘書省校書郎と爲り、建隆以來の

禮書を纂す、又姚闡等と俱に太常因革禮一百卷を爲り、書成りて卒す、實に治平二年(一七二二)年五十八光祿寺丞を贈り、練銀二百を其家に賜ふ。(宋史本傳參考)

〔傳來、體裁〕 曾鞏、洵の墓誌を作り、集あり二十卷と稱す、晁公武の讀書志、陳振孫の書錄解題には俱に十五卷に作る、蓋し當時已に二本あしならん、爾來校刊する者多く(清)に至り傳はる者四本あり、一は徐乾學の傳是樓に藏する者にして、嘉祐集と名つけ十六卷なり、一は康熙間、蘇州の邵仁泓の刊する所にして、老泉先生全集と名つけ二十卷なり、一は清の明の凌濛初の刊する所にして十三卷なり、一は清の蔡士英の刊する所にして十五卷なり、然れども徐本邵本の外は、舛誤脱漏多く、取るに足らず、四庫に著録する者は徐本を主として、此を邵本と比較して此に逸して彼に載する者は補入せり、然れども未だ見ず、姑く邵本の目を左に掲ぐ。

幾策一卷、權書二卷、衡論二卷、經論一卷、太玄論一卷、洪範一卷、雜論一卷、書四卷、譜一卷、雜文一卷、雜詩一卷、諡法四卷。

卷首に邵仁泓の序、本傳凡例等あり、附錄は老泉を祭る文、墓誌銘等を集めたる者なり、(吾園)にては

徳川氏の末、木活版を以て之を刊行せり、但し其諡法四卷を缺く。

〔評論〕 洵は戰國諸子の文に精熟す、故に其の作る所も亦自ら縦横の氣に富み、離奇天矯、設險に長す、而して其句を鍊る、勁拔古雅、蔚絶千仞の勢有り、是餘人の及ぶ能はざる所なり、歐陽修と時を同じくし文も亦之と相雁行して有宋一代名家の魁たり、其詩は之を其文に視れば遠く及はず、篇什も亦多からず。

●韓魏公集三十八卷

〔作者、題名〕 宋の韓琦撰す、琦字は稚圭、相州の人、年二十のとき進士第一に登り、累官して宰相に進み、三朝に歴仕し、治蹟大に顯はる、歐陽修嘗て曰く、韓公大事に臨みて大議を決し、天下を泰山の安に措く、實に社稷の臣と謂ふ可しと、又曰く百の歐陽修を累ぬるも何ぞ敢て韓公を望まんやと、以て其人と爲りを想見す可し、熙寧八年(一七三五)卒す、年六十八、忠獻と諡す、(宋史本傳參考) 魏公とは魏國公(爵)の略にして、此集又一に安陽集ともいふ。

〔傳來、體裁〕 晁公武の郡齋讀書志、陳振孫の書錄解

●丹淵集四十卷拾遺二卷附錄一卷

〔作者、題名〕 宋の文同撰す、同字は與可、廬江の人、

〔評論〕 琦は社稷の臣、生平文章を以て名を世に求めず、而して詞氣典重、敷陳剴切、垂紳正笏の風有り、嘗て自ら謂へり、琦政府に在り、歐陽永叔、翰林に在り、天下の文章是より大なるは莫しと、是集載する所の詩文は風華麗藻に乏しと雖、其唐風を一掃して以て宋調を開くは當時の諸人を籠罩するに足れり。

皇祐元年の進士、功州軍事判官より、累遷して尙書司封員外郎充秘閣校理に至る、元豐二年(一七三九)疾を以て卒す、年六十二。(宋史文苑傳、文、誠之の年譜參考)

〔傳來、體裁〕 此集四十卷は其會孫孫編集し、慶元中に至り曲沃の文誠之重ねて釐正を加へ、拾遺二卷附録を増せり、即ち今本なり、予が見たる本は明版にして、首に萬曆三十八年錢允治、九年毛晋の二序、墓誌、年譜、目錄、目錄題後、尾に文誠之の跋有り。

卷一は詞、賦、卷二は樂府、雜詠、卷三より五は詩舊集、卷六、七は詩舊集、卷八は詩舊集、卷九は詩舊集、卷十より十二は詩舊集、卷十三、十四は詩舊集、卷十五より十七は詩舊集、卷十八は詩舊集、卷十九は畫厨、雜詠、卷二十は挽詩、卷二十一は雜著、卷二十二より二十四は記、卷二十五、二十六は序、卷二十七、二十八は表、卷二十九より三十二は啓、卷三十三は先狀、卷三十四は奏狀、卷三十五は文、卷三十六より四十は墓誌。

拾遺上は詩、下は雜著、附録一卷は諸人の書翰詩文なり。
〔評論〕 同は尤も畫竹に妙を得、文章爲に掩はる、然れども其美人却扇坐、羞落庭下花、諸篇の如きは、

盛に蘇軾の推す所と爲る、其全集に於ては黃庭堅、陳與義等の間に相頡頏せり。

●傳家集八十卷

〔作者、題名〕 宋の司馬光撰す、光の傳は資治通鑑の條に出づ、傳家は家に傳へることといふ義ならん。

〔體裁〕 今記する所は明萬曆十五年版にして、首に劉隨、萬曆十五年潘晟、陳燭の三序、及び目錄、終に濮應瑞の跋有り、其目左の如し。

古賦一卷、古詩四卷、律詩十卷、制誥一卷、表一卷、章奏四十卷、書、啓共六卷、論二卷、議、辯、銘、箴、頌、贊共一卷、評、原、說、述、贈、論、訓共一卷、序三卷、記一卷、傳一卷、題跋、疑孟、史刻共一卷、迂書一卷、格、策問、樂詞共一卷、誌三卷、碑、行狀、墓表、哀、辭共一卷、祭文一卷。

又崇禎元年劉餘祐の刻本は、司馬溫公全集と題し、八十二卷あり、體裁稍異なり、即ち左の如し。
制誥一卷、表一卷、章奏四十卷、賦一卷、古詩四卷、五言律詩四卷、七言律詩三卷、五言絕句一卷、七言絕句一卷、春帖子詞、樂詞共一卷、挽詩一卷、銘、箴、

頌、贊共一卷、論二卷、議辯一卷、評、原、說、述、贈、論、訓共一卷、策問、疑孟、史刻共一卷、迂書、格共一卷、序三卷、記一卷、傳一卷、題跋一卷、書、啓共六卷、銘三卷、碑、行狀、墓表、哀辭共一卷、祭文一卷。首に潘成等の序を冠するより見れば、萬曆版によりて稍々編體をかへしものなるべし。

〔評論〕 司馬光は大儒名臣、固より詞章を以て重きを爲さず、然れども文を以て論ずれば、其氣象亦諸家を包括し一代を凌跨す、故に王安石は其文を推して西漢の語に類すと爲せり、殆ど誣ざるなり。

●元豐類稿五十卷附錄一卷

〔作者、題名〕 宋の曾鞏撰す、鞏字は子固、建昌南豐の人、嘉祐二年の進士、元豐五年李清臣、王存等と史を修む、上中書に詔して曰く、五朝の史事は宜しく會鞏に付すべしと、遂に史館修撰と爲り、史成りて龍衣金帶を賜はり、中書舍人に至る、後、母の憂に居りて、元豐六年(一七四三)卒す、年六十有五、著す所金石錄、兩漢議論あり、(宋史本傳參考)此書は元豐年間に輯めたり、故に名づく。

〔傳來、體裁〕 郡齋讀書志に、五十卷に作りて、宋史本傳と相符す、又韓維の撰びし鞏の神道碑には、續藁四十卷外集十卷とあり、共に五十卷なり、續藁外集は、南渡以後傳はらず、正集は三本あり、一は明の成化中、楊參の刻する所、一は清の康熙中、顧崧齡の刻する所、共に未だ見ず、一は今記する所の明の嘉靖中の重刻本にして首に宋の元豐八年、三槐の王震、湖西の羅倫、成化六年豫章の王一夔の三序、及び年譜序、年譜後序、序說、像、贊、目錄有り、其目左の如し。

古詩五卷、律詩三卷、論一卷、傳一卷、序四卷、書二卷、記三卷、制誥、詔策共七卷、表二卷、疏劄子共四卷、奏狀三卷、啓狀二卷、祭文四卷、誌銘五卷、碑一卷、傳一卷、本朝政要策一卷、金石錄跋尾一卷、附録は行狀、碑誌、哀挽。

〔評論〕 其文は經術に淵源し深湛醇厚、極めて漢の劉向の遺風有り、故に朱熹は之を推尊し又自ら之を學べり、其後明の王慎中、清の方苞等文を以て一代に名有るもの共に此に本づかざる無し、蓋し有宋儒家の文に於ては蔚然として一宗を爲せり、吾國賴襄之を喜ばず、頗る詆訶の語有り、要するに一家言たる

に過ぎず、而して其詩は文に及はず、然れども遠く蘇洵より勝れり。

◎淮海集四十卷後集六卷長短句三卷

〔作者、題名〕 宋の秦觀撰す、觀字は少游、大慶と號す、高郵の人、元祐の初、東坡賢良方正を以て朝に薦め、太學博士に除す、官國子編修に至り、元符三年(一七六〇)卒す、年五十二、(宋史文苑)觀、淮の地に生れ南海に往來す、故に淮海を以て集に名づく。

〔傳來、體裁〕 是集は觀の自定せし所にして、宋史に四十卷に作り、文獻通考には、別集類に淮海集三十卷を載せ、歌詞類に淮海集一卷を載す、同本なるや否やを詳にする能はず、今本は四十卷、宋史と合す、惟々後集長短句は、明の嘉靖中に高郵の張縵が黃瓚本及び監本を以て重ねて編次せし者なり此本は明の徐渭評し其裔孫元愷等の校刊せるものを清の同治十二年秦氏家塾にて重刊せる者なり、首に嘉靖十八年張縵、同二十四年盛儀、萬曆四十六年姚鏞の三序、郡志本傳、遺像、像贊、年譜、附錄、目錄あり。賦二卷、五言古三卷、七言古二卷、五言律一卷、

七言律二卷、五六言絕句一卷、七言絕句一卷、進策七卷、進論四卷、論一卷、傳一卷、傳說一卷、表、二卷、啓二卷、簡一卷、文一卷、文疏一卷、誌銘一卷、贊跋一卷、跋一卷、狀一卷、書一卷、記一卷、序一卷、哀挽一卷。

〔評論〕 宋史文苑傳に其文麗にして思深しといひ、茗溪漁隱叢話には清新婉麗、鮑謝に似たる有りの語を載せ、敖陶孫の詩評には其詩時女春に歩むが如く終に婉弱に傷むといひ、元好問論詩絕句にも女郎詩の譏有り、呂本中の童蒙訓には則ち謂へり、過嶺以後の詩高古嚴重自ら一家を成すと、蓋し早く新穎を標し晩に浮華を洗ふは古來往々是の如し、其策論の神鋒雋利なるは少年の作たればなり。

◎廣陵集二十一卷拾遺一卷附錄一卷

〔作者〕 宋の王令撰す、令は元城の人、幼時其叔祖乙に隨ひ、廣陵に居り遂に廣陵の人と爲る、初字は欲美、後、王萃之を字して逢原といふ、少くして不檢、既にして節を折り力學す、王安石其妻の妹を以て之

に妻せり、嘉祐四年(一七一九)卒す、年二十八。(四庫全書)墓誌等) 此集は其外孫吳說の編次せしものにして、今記する所は寫本なり。

賦、歌詞共一卷、詩十卷、說一卷、書後二卷、序論一卷、上書二卷、書二卷、銘、行狀共一卷、策問一卷。

拾遺は詩十四首文二篇あり、附錄は尾に王安石の選びし王逢原の墓誌銘、劉發の作りし傳を附し、又荆公贈遺書詩等を録し、最尾に吳夫人傳及び吳氏墓碣銘を記す。

〔評論〕 其詩才氣奔軼、大抵韓愈李賀の間に出入し、其文性說諸篇の如きは、亦自ら一家の言を成す。

◎臨川集一百卷

〔作者〕 宋の王安石撰す、安石字は介甫、半山と號す、臨川の人、禮部侍郎より起りて、吏部尚書と爲り、舒國公に封せられ、後荆に改封せらる、哲宗の朝、司空を加へらる、其相と爲るや、新法を立て、將に大に爲す有らんとせしが、其徒に誤られて遂に果さ

ず、經義亦新説を立て遂に以て世を動す、後世毀る者ありと雖、要するに一代の偉器たるを失はず、元祐元年(一七四六)卒す、年六十八、太傅を贈り、諡して文といふ、著はす所周禮新義、毛詩義、尙書等最も名有り。(宋史本傳) 傳來、體裁) 宋史藝文志に王安石集一百卷を載せ、陳振孫の書錄解題亦同じ、晁公武の讀書志は則ち一百三十卷に作り、焦竑の國史經籍志は一百卷に作りて、別の後集八十卷を出し、並びに史志と參錯同しからず、今世行はるゝ者は實にたゞ百卷本のみにして、紹興十年郡守桐廬詹大和校定重刻し、豫章の黃次山序する所の者なり、次山の序に、集もと閩浙二本あり、殆ど刊版一ならずとあり、是著録する者各々見る所による、故に卷數互に異なるか、(四庫全書)今記する所は明の嘉靖版にして、首に嘉靖丙午陳九川等諸家の後序、及び黃次山の序、目錄あり、其目左の如し。

古詩十三卷、律詩二十一卷、挽辭一卷、集句、歌曲共二卷、四言詩、古賦、樂章、上梁文、銘、讚共一卷、書疏一卷、表狀一卷、劄子四卷、內制四卷、外制七卷、表六卷、論議九卷、雜著一卷、書七卷、

啓三卷、記二卷、序一卷、祭文二卷、(哀辭二首添ふ)神道碑三卷、行狀、墓表共一卷、墓誌十卷。

〔評論〕 其文深く荀子に得る所有り、故に能く簡練雅潔、而して最も頓折に長ず、其上仁宗皇帝言事書の如き約八千六百言の長きも收斂亂れず、以て其筆力を窺ふに足る、其文品は蘇洵、曾鞏の間に在り、亦有宋の一名家なり、詩に至りては則ち精嚴深刻の中間深婉不迫の味有り、蓋し晩年に至りて得る所有るものゝ如し、歐陽修と並馳し直に駕して上らむと欲す、實に宋代の大家たり。

〔注解〕 ○王荊公詩註五十卷 宋李壁撰

●東坡全集一百十五卷 目錄七卷

〔作者、題名〕 宋の蘇軾撰す、軾字は子瞻、東坡居士と號す、眉州眉山の人、洵の長子なり、嘉祐二年弟轍と同じく禮部に試みられ、第二に登る、又殿試乙科に中り、大理評事簽書鳳翔府判官に除せられ、後、翰林學士兵部尚書に累官し、建中靖國元年(一七六一)卒す、年六十六、文忠と諡す、資政殿學士を贈らる著す所易傳、論語說、書傳等あり。(宋史本傳年譜等參考)

を禁せず云々とあれば、軾の集海内に風行し、傳刻日に多くして、紊亂愈甚だしきに至れるを知る可し、此の如く傳本夥しと雖、其體例は大要二あり、一は分集編訂する者なり、即ち軾の原本原目に因りて後人稍之を増益せる者にして、抗本及び明の江刻本の如き是なり、一は分類合編せる者にして、大全集本あり、東坡先生全集と號す、文を載せて詩を載せず、漏略尤も甚だし、一百十四卷本あり、蘇文忠全集と號す、編輯法無し、今記する所の本は明末の刻本にして明の江西本、京本を以て分類編訂せるものなれば最も信據すべき者とす、左に其目を示す。

- 詩三十二卷、賦一卷、叙一卷、記四卷、傳一卷、論五卷、策制一卷、策略一卷、策別一卷、策斷一卷、策問一卷、南省說書一卷、奏議十六卷、表狀三卷、啓二卷、書五卷、尺牘九卷、碑二卷、墓誌銘二卷、行狀一卷、祭文、哀詞共一卷、解、說、評史、評文選共一卷、書後、書事共一卷、贊二卷、銘二卷、頌、箴、疏、青詞、疏文共一卷、祝文、偈共一卷、雜文一卷、志林五卷、外制、制勅共三卷、內制、敕文、內制、詔勅共一卷、內制、詔勅、

〔傳來、體裁〕 蘇轍が作りし軾の墓誌に據れば、東坡集四十卷、後集二十卷、奏議十五卷、內制十卷、外制三卷、和陶詩四卷あり、晁公武の讀書志、陳振孫の書錄解題載する所、並びに之と同じくして、別に應詔集十卷を増し、合して一編と爲せり、即ち世に稱する所の東坡七集是なり、宋史藝文志には則ち前後集七十卷を載す、卷數墓誌と合はず、而して又別に奏議補遺三卷、南征集一卷、詞一卷、南省說書一卷、別集四十六卷、黃州集二卷、續集二卷、北歸集六卷、僂耳手澤一卷あり、各目頗る叢碎となす、是蓋し軾の集は宋の世に在りて已に一本に非ず、陳振孫の稱する所已に抗本、蜀本あり、又軾の曾孫嶠が刊する所の建安本あり、又麻沙書坊の大全集本あり、又張某が刊する所の吉州本あり、蜀本、建安本には應詔集無く、麻沙本、吉州本には、志林雜記の類を兼載して考訂を加へず、又蘇州本あり、居世英の刊する所なり、舛誤尤も少く、當時善本と稱せられたるも、今は存せず、又葉盛の水東日記によれば、細字小本東坡大全文集あり、大本東坡集あり、小字大本東坡集あり、又捫蝨新話によれば當時書肆往々増添改換して以て速に售れんことを求む、而して官之

- 內制勅書共一卷、內制口宣二卷、內制批答一卷、內制表本、內制國書、內制青辭、內制朱表、內制疏文、內制齋文、內制祝文、內制導引歌辭共一卷、樂語一卷。

卷首には宋孝宗御製の序、宋史本傳、王宗稷編する所の年譜、蘇轍の撰せる墓誌銘、凡例あり、軾の集の海内に風行せるは前既に述ふる所の如し、而して其詩を評注する者宋に在りて施元之、王十朋、趙堯卿あり、(明、清)に在りては陳仁錫、馮景績、查慎行、邵長蘅、李必恒等あり、其(我國)に傳はれるは、何帝の朝なるやを詳にせざれども、宇槐記抄に、仁平元年、宋商劉文冲東坡先生指掌圖、五代史記等を献納すること見ゆれば、當時或は渡來せしやも知る可からず、足利氏初世より漸く行はれ、中葉以後に至りて尤も盛なり、釋江西の天馬玉津沫、大岳の翰林遺芳、周鳳の脍說等、其詩を抄釋する者極めて多し、徳川時代に及びても盛に行はる。

〔評論〕 古より詩文に兼長する者唐に於ては韓愈之が最たり、而も文其詩に勝る、宋に在りては則ち蘇軾を推さざるを得ず、是より後作者無きに非ずと雖而も之と與に能く京する莫し、軾の詩文に於ける神明に

して體宏く、才大にして氣豪なり、故に昔人評して以て天潢を屈注し滄海を倒連すと爲せり、洵に詩に於ては李白、杜甫以後、文に於ては韓愈以後の一大宗たり、歐陽修の門より出づと雖其才力は之に軼ぐ、但其品格稍一籌を輸するのみ。

〔注解〕 ○百家注分類東坡詩廿五卷宋某氏撰元又 ○蘇文忠公詩合註五十卷馮應

山谷内集三十卷外集十四卷別集二

十卷詞一卷簡尺二十卷年譜三十卷

〔作者〕 宋の黃庭堅撰す、庭堅字は魯直、分寧の人、山谷と號す、進士に擧げられ、北京國子監に教授す、神宗實錄成りて起居舍人に擢られ、紹聖の初、鄂州に知と爲り、章惇、蔡京等に惡まれ、謫せられて涪州の別駕と爲り、黔州に至り又戎州に移る、尋で宜州に謫せらる、蘇軾嘗て其詩文を見て歎じて曰く、萬物の表に獨立せりと、江西の詩派庭堅を以て祖と爲す、世其詩を以て軾に配し、蘇黃と稱せり、崇寧四年(一

七六五)年六十有一にして卒す。(宋史本傳年譜等參考)

〔傳來〕 葉夢得の避暑錄話に、黃元明の言を載せて曰く、魯直舊詩千餘篇あり、中歲三の二を焚く、存する者は幾くも無し、故に焦尾集と名づく、其後稍自ら喜びて以爲らく傳ふべしと、故に復傲齋集と名づく、晚歲復刊定するも、たゞ三百八篇にして克成せず、今世に傳はるものは尙幾千篇あり、云々、然らば庭堅自定する者は皆已に存せざるなり、其存する者、一を内集といふ、庭堅の甥洪炎が編する所にして、即ち庭堅手定の内篇なり、一を外集といふ、李彤の編する所なり、一を別集といふ、庭堅の孫晔の編する所なり、内集は建炎二年に、別集は淳熙九年に編せらる、外集は其年を詳にせざれども、内集の後、別集の前に編せられたるは明なり、(四庫提要)詞は庭堅の自撰する所、簡尺は後人の輯むる所ならんも、撰者を詳にせず、年譜は晔の編する所なり、之を注する者は宋の任淵等より始まり、其(我國)に傳來せるは時代詳ならざれども、蘇東坡の集と同時頃なる可し、足利氏の中葉より、五山僧徒の間に、東坡集に次ぎて行はれ、之を抄録、評註する者多し、釋萬里の帳中香の如き最も著る。

〔體裁〕 此書子が見たる者は、明の徐岱等の刻する所にして、内集には。

賦楚詞共一卷、古詩七卷、律詩三卷、六言詩一卷、銘一卷、贊一卷、頌一卷、序一卷、記二卷、書一卷、表、奏、狀、雜著共一卷、文一卷、墓誌銘二卷、碑銘、碣共一卷、題跋六卷。

あり、卷首には嘉靖五年徐岱、同六年周季鳳の刻序あり、卷末には洪炎の序あり、外集の目は左の如し。

卷一は賦、古詩、卷二より五は古詩、卷六、七は律詩、卷八は哀詞、墓誌銘、卷九は雜文、卷十は書、雜文、卷十一は楚詞、古詩、卷十二は古詩、卷十三、十四は律詩。

別集の目は左の如し。

古詩、律詩、六言、挽詩共一卷、銘、贊、頌共一卷、序一卷、記律賦、箋注共一卷、書、表、奏、狀、啓、婚書共一卷、雜著一卷、疏、祭文共一卷、行狀一卷、墓誌銘、墓表共一卷、題跋三卷、書簡八卷。

卷末に黃芻の跋あり、詞は首に目錄あり、別に體を分たず、篇名のみを列舉せり、簡尺は首に目無く、尺牘のみを集めたり、年譜の首には黃芻の序あり、末に周季鳳の山谷黃先生別傳と、嘉靖四年查仲道の

跋あり、又終に庭堅の子庶の伐檀集三卷を附刊せり、此外、詩のみを刊する者あり、題跋のみを刊する者あり、内集のみを刊する者あり。

〔評論〕 宋一代の詩文歐陽脩の後蘇軾を推して大宗と爲す、庭堅詩を以て旗鼓相當り、文は題跋に於て之と雁行して愧づる所無し、軾の詩は汪洋滄海無く、庭堅の詩は拗峭豪險奇に過ぐるも、凡に近づかず、是其異なる所なり、其淵源を究むれば唐の杜甫に胚胎し而して能く自運の神を發揮したるもの終に江西派の一體を開き以て軾と名を齊くするに至れり、實に宋代名家の魁たり。

〔註解〕 ○山谷集註二十卷、外集註十七卷、別集註二卷宋任淵

欒城集五十卷欒城後集二十四卷第

三集十卷應詔集十二卷

〔作者、題名〕 宋の蘇轍撰す、轍は洵の次子、字は子由、穎濱と號し、又欒城と號す、人と爲り沉静簡潔、年十九にして兄軾と同じく進士に登り、翰林學士門下

侍郎に累官し崇寧中致仕して室を許州に築き復人と相見す終日默坐し經史子を研鑽す、政和二年(一七七二)卒す、年七十有四、文定と諡し、龍圖閣學士を贈らる。(韻藻遺老傳宋史本傳參考)

〔傳來、體裁〕 宋史藝文志に樂城集八十四卷、應詔集十卷、策論十卷、均陽雜著一卷を載せ、集城の國史經籍志には樂城集の外別に黃門集七十卷を出す、然れども郡齋讀書志、書錄解題に載する所の諸集は、今本と相符す、見存の樂城集及び後集三集を合すれば共に八十四卷を得、宋志は統舉して之を言ひしならん、策論は當に即ち應詔集なるべく、十二卷を誤りて十卷と爲し、又其目を復出せしならん、惟、均陽雜著は傳はらず、竝の記する黃門集は宋以來の書目皆著録せず、疑らくは樂城集の別名ならん、其正集は尙書左丞たりし時輯めし所、皆元祐以前の作、後集は元祐九年より崇寧四年に至る間に作りしもの、三集は崇寧五年より政和元年に至る間に作りし所、應詔集は策論及び應試の諸作を集めしものにして、四集皆輒の手足する所なり、故に東坡集の衆手に出でて叢雜なるが如きに非ず、今に至るまで其原本を改めざるなり、予が見たる者は、明の嘉靖板にして、應

詔集を缺く、首に嘉靖二十年、劉大謨、王珩の序、凡例、蘇文定公諡議、目錄あり、正集の目は左の如し。詩十六卷、賦一卷、辭、詩、銘、頌共一卷、新論一卷、策問一卷、書二卷、記二卷、墓表銘、傳、叙共一卷、祭文、祝文、青辭共一卷、西掖告詞六卷、北門書詔二卷、論時事狀一卷、右司諫論時事四卷、(中書舍人論時事一首、戶部侍郎論時事二卷、御史中丞論時事劄子五卷、中書舍人撰兩府請賀謝表狀、編神宗御集奏請表狀、雜論薦書狀劄子、雜辭免恩命表狀劄子共一卷、雜謝恩命表狀一卷、代人上表、代人啓事共一卷、啓事一卷。)後集の目は左の如し。

詩四卷、雜文一卷、孟子解一卷、歷代論五卷、類濱遺老傳二卷、諡冊、詔、劄子等合四卷、表疏一卷、青詞、祝文共一卷、祭文一卷、雜文一卷、墓誌銘一卷、神道碑一卷、雜文一卷。

三集の目は左の如し。詩五卷(賦一首、銘一首、)策問論一卷、論語拾遺一卷、易說、洪範五事、說、詩病五事共一卷、書傳燈錄後一卷、記一卷。

弱きのみ、宋史に其文を評して汪洋濔泊、而るに秀傑の氣終に掩ふ可からず、其高處は殆と軾と相通るといへるもの當れり、今審に之を觀るに大抵許州前後に於て文品に小變有るもの、如し、實に宋代古文名家の一たり、輒又頗る詩を能くす、兄軾に如かずと雖父洵に過ぐる遠し。

●後山集三十卷

〔作者、題名〕 宋の陳師道撰す、師道字は履常、彭城の人、業を會登の門に受け、又詩を黃庭堅に學ぶ、元祐の初、蘇軾の薦に依り棗州教授と爲り、後、召されて祕書省正字に至る、建中靖國元年(一七六一)卒す、年四十九。(宋史文苑傳參考)後山は其號なり。

〔傳來、體裁〕 是集は其門人彭城の魏衍の編みし所なり、前に衍の記ありて稱す、甲乙丙藁を以て合して之を校し、詩は四百六十五篇を得、分ちて六卷と爲し文は一百四十篇を得、分ちて十四卷と爲し、詩話談叢は各、自ら集を爲す云々と、陳振孫の書錄解題、文獻通考に著録する者は即ち此本なり、(明)に至り趙鴻烈の重刊する所は、詩七百六十五篇を八卷に、文

一百七十一篇を九卷に、談叢を四卷に、詩話、理究、長短句を各、一卷に編み合して廿四卷とせり、是四庫に著録する者なり、予未だ見ざれども、衍が舊本に非ざることは、篇數の不合等より見るも明なり、又宋の陳仁子編する所の後山先生集あり凡て三十卷にして弘治十二年版なり、首に弘治十二年王鴻儒の序、政和五年魏衍及び王、任二家の記、目錄有り、其目を擧ぐれば左の如し。詩、十二卷、序一卷、書一卷、記一卷、論一卷、策問一卷、表、啓、祭文共一卷、雜著一卷、墓銘、墓表、行狀、神道碑共一卷、談叢六卷、理究一卷、詩話二卷、長短句一卷。

〔評論〕 其詩名蘇軾、黃庭堅に次ぐ、宋に在りては名家の一席を占む可し、各體に就きて之を論ずれば五言古詩は孟郊、賈島の間に出入し、七言古詩は韓愈を學び、五言律は杜甫に通りて間、僻澁有り、七言律詩は風骨磊落にして間、之を太快太盡に失し、五七言絶句は純乎として杜甫遺興の格たり、而して未だ中聲に合はず、長短句亦自ら別調を爲す、其古文は簡嚴密栗、亦李翱、孫樵の下に在らざるなり。

● 潞公集四十卷

〔作者、題名〕 宋の文彦博撰す、彦博字は寬夫、介林の人、四朝に累仕し、出將入相、五十餘年、太師を以て致仕し、潞國公に封せられ、紹聖四年（一七五七）卒す、年九十二、忠烈と諡す、（宋史本）潞公は封名による。

〔傳來、體裁〕 葉夢得の序に據るに、兵興りて以來世家大族多くは奔走遷徙す、是に於て公の集、家に藏めしもの、散亡して餘す無し、其少子維申稍、討求追輯して猶二百八十六篇を得、類を以て編次し、略集二十卷を爲ると、陳振孫の書錄解題に四十卷補遺一卷とあり、葉氏序する所の本と異なり、今本は陳氏の本に較するに又補遺一卷を佚す、蓋し葉本は卷を合し、今本は之を分てるものか、予が見たる本は、首に明嘉靖五年呂柟の序、及び葉氏の序あり、其目左の如し。

古賦一卷、律、賦、頌共一卷、古律詩一卷、律詩四卷、挽詞一卷、論一卷、表、啓一卷、序一卷、碑記、墓誌共一卷、雜文一卷、奏議十七卷、表一卷、陳乞一卷、乞罷重任一卷、乞致仕一卷、辭免三卷、

● 寶晉英光集

〔作者、題名〕 宋の米芾撰す、芾字は元章、吳の人、海嶽外史と號す、禮部員外郎に累官し、淮陽軍に知り、尤も翰墨に妙にして篆隸真行草皆工ならざる無く、又山水人物を畫き自ら一家を成し、鑒裁に精しく古器物書畫に遇へば極力求取す、著す所此集の外畫史有り、大觀元年（一七六七）卒す、年五十七（宋史文苑）寶晉は芾の齋名、英光は芾の堂名なり。

● 石門文字禪三十卷

〔作者、題名〕 宋の米芾撰す、惠洪の傳は冷齋夜話の條に出づ、此書載する所に據れば、禪を學ぶ者精

〔傳來、體裁〕 其集南渡以後已に散佚せり、紹定五年岳珂其遺文を撫り一編と爲し併せて之が序を爲る、序中卷數を言はず、たゞ山林集舊一百卷、今舊粹附益する未だ十の一ならずといへり、陳振孫の書錄解題には寶晉集十四卷と稱し、四庫全書に著録したる浙江鮑士恭家藏本は八卷あり、何れが是なるかを知らず、予が見たる者は二本あり、一は六卷本にして

寶晉英光集と題し、一は八卷本にして寶晉英光集拾遺と題す、共に邦人の寫本なり、六卷本は首に四庫提要の文を冠らし、次は岳珂の序有り、其目左の如し。

賦、五言古詩共一卷、七言古詩一卷、七律一卷、五律、長短句共一卷、序記、贊共一卷、碑、題、跋、雜說、榜文、劄子、附錄共一卷。

八卷本は首に嗣孫米憲の序あり、序によれば憲其遺篇百餘篇を拾ひて之に附すとあり、其目左の如し。賦一卷、古律詩一卷、長短句一卷、楚詞、贊銘、偈、碑表、記、序、跋、帖、雜說共一卷、寶章待訪集一卷、書史一卷、畫史一卷、硯史一卷。

〔評論〕 岳珂の序に思陵翰墨志を引きて曰く、芾の詩文語に蹈襲無く、風煙の上に出づ、其詞翰同く凌雲の氣有るを覺ゆと、蓋し其胸次高尚、吐言天拔なるが故に繩墨を以て規せずと雖、氣韻自ら殊なり。

● 石門文字禪三十卷

〔作者、題名〕 宋の僧惠洪撰す、惠洪の傳は冷齋夜話の條に出づ、此書載する所に據れば、禪を學ぶ者精

義を務めず、文字を學ぶ者了心を務めず、夫れ義精からざるときは心了するも光大ならず、義に精しきも心を了せざるときは文字終に神に入らず、禪は春の如し、文字は則ち花なり、春花に在りて春花是春なり、花春に在りて全春是花なり、而して禪と文字と二有らんや、輓近に及びて更、相咲ひて更、相非ること水火より嚴なり、故に惠洪之を愛ひ、此書に名づくるに文字禪を以てせり。

〔傳來、體裁〕 是集は其門人覺慈の編みし所にして大藏經中に收めらる、予が見たる者は我寬文四年版にして、首に萬曆二十五年釋達觀の序、及び目錄有り、其目左の如し。

卷一より八は古詩、卷九は排律、五言律詩、卷の十より十三は七言律詩、卷の十四は五言絶句、六言絶句、七言絶句、卷十五、十六は七言絶句、卷十七は偈、卷十八、十九は贊、卷二十は銘、詞、賦、卷二十一より二十四は記、序、記、卷二十五、二十六は題、卷二十七は跋、卷二十八は疏、卷二十九は書、塔銘、卷三十は行狀、傳、祭文。

〔評論〕 其文俊偉にして浮屠氏の語に類せず、其詩邊幅狭しと雖清新にして致有り、蓋し亦蘇軾に淵源せ

るものなり。

陶山集十六卷

〔作者、題名〕 宋の陸佃撰す、佃字は農師、越州山陰の人、嘗て經を王安石に受けたれども、而も新法を以て是と爲さず、鄆州教授に官し、數州に歴仕す、徽宗の時、尙書左丞と爲り、崇寧元年(一七六二)卒す、年六十一、著す所、埤雅、春秋後傳、禮象等有り(宋史本傳參考) 陶山は其號ならむ。

〔傳來、體裁〕 宋の陳振孫の書錄解題に二十卷を載す、然れども歳久くして散佚せり、(清)初、永樂大典より録出し僅に十分の七を得、武英殿に刻す、四庫著録本は十四卷に作れども、吾見る所の殿本は十六卷有り、四庫著録恐くは誤あらん、首に乾隆御製武英殿聚珍版十韻詩一首、目錄、四庫提要節文有り、收むる所左の如し。

卷一は五古、七古、五律、五排、七律、卷二は七律、卷三は七律、五絶、卷四は劄子、狀、卷五、六は議、卷七、八は表、卷九は經解、策、策問、卷十は制、卷十一は叙論、序、書後、記、卷十二は書、卷

十三は啓、祝文、祭文、卷十四、十五は誌銘、卷十六は誌銘、墓表、行狀。

〔評論〕 佃本王安石の客たり、而して新法を論じて安石と差ふ、故に政事に與らず、惟、經術を以て之に任す、今集中の郊廟諸議是なり、其鄭を黜け王を尊ぶや、盡く允ならずと雖、要するに經學に根柢せり、故に駁論有りて游詞無し、其詩唐音を具へ尤も七言近體に工なり。

雞肋集七十卷

〔作者、題名〕 宋の晁補之撰す、補之字は無咎、鉅野の人、元豐間進士に擧げられ元祐中校書郎と爲り、紹聖の末信州の酒稅を監し、大觀中起、泗州に知たり、大觀四年(一七七〇)卒す、年五十有八、(宋史文苑傳參考) 雞肋とは、雞の脊骨にして、魏の曹操が劉備を伐つとき、去らんと欲し令して雞肋といひしに始まる、言は、之を捨つるは惜む可く、之を食はんと欲せば勞して得る所なきを云ふ、是集に名づけたるも亦此意なり。

〔傳來、體裁〕 是集前に補之の自序あり、後に其弟謙

を知らずといへり、今此集を閲するに洵に其言の如し、而して詩に在りては古體は今體に勝り、文に在りては七述の如き、觀る可きものたり、蓋し宋文名家の斑に列するを得可し。

西臺集二十卷

〔作者、題名〕 宋の畢仲游撰す、仲游字は公叔、鄆州の人、進士に擧げられ、州縣に歴任し、元祐の初、集賢校理に除せられ、後、元祐の黨籍に入り、西京留同御史臺提舉鴻慶宮に終る、(宋史畢仲游傳參考) 西臺は其職官に本づく。

〔傳來、體裁〕 此集宋史藝文志には五十卷に作れども、晁公武の讀書志には二十卷に作れり、宋志五の字恐らくは傳寫の誤ならん、而して二十卷本亦世に傳はらざること久し、(清)初、永樂大典各韻中より録出し、復二十卷と爲し、武英殿に刻す即ち今本なり、首に乾隆御製武英殿聚珍版十韻詩一首、目錄、四庫提要節文有り、收むる所左の如し。

卷一は奏狀、劄子、卷二、三は表、卷四、五は議、卷六は試策、策問、論、序、記、傳、卷七は書、卷

之の跋あり、其跋に稱す、從兄无咎平日著述甚富む、元祐の末館閣に在るの時曾て自ら其序を製す、宜和以前世敢て傳ふる莫し、今得る所のもの古賦騷詞四十有三、古律詩六百三十有三、表啓雜文六百九十有三、館舍を捐て、より今に迄ぶまで二十八年、始めて編次することを得て七十卷と爲す云々と、蓋し是集元祐中補之自葺し、集名ありと雖尙完本に非ず、後、謙之真集編次して此帙を續成したるものなり、故に中に元祐以後作る所は、補之の原序と年月相應せざるもの多し、左に其目を掲ぐ。

古賦二卷、詞一卷、古詩十一卷、律詩四卷、絶句四卷、挽詞一卷、上書一卷、罪言一卷、河議一卷、雜著二卷、記三卷、銘贊一卷、題跋一卷、序二卷、雜論序一卷、策問三卷、春秋雜論二卷、西溪雜論三卷、唐舊書雜論五卷、五代雜論一卷、書二卷、奏狀一卷、表二卷、啓四卷、祭文二卷、傳、行狀共一卷、墓表一卷、墓誌銘五卷、釋氏贊詩二卷。

〔評論〕 宋の胡仔補之の古文を評して波瀾壯闊、蘇氏父子と相馳驟す、其諸體の詩は俱に風骨高竒、一往俊邁、張耒、秦觀の間に並駕して亦未だ孰か先後たる

八は書、啓、卷九は啓、狀、卷十一は尺牘、卷十二は祝文、誌銘、卷十三、十四は誌銘、卷十五、十六は行狀、卷十七は祭文、卷十八は五古、七古、卷十九は五律、五言長律、卷二十は七律、五絶、七絶。

〔評論〕 仲游古文を善くす、同時の蘇軾之を稱して以て其學經史を貫き、才世務に通じ、文章精麗、議論餘有りと爲せり、必しも溢美に非ざるなり。

◎唐眉山集二十四卷

〔作者、題名〕 宋の唐庚撰す、庚字は子西、丹陵の人、進士に擧げられて、累官して承議郎に至り卒す、年五十一、著す所三國雜事あり、(宋史本傳參考)眉山は其號なり、又一に字にとり唐子西集といふ。

〔傳來、體裁〕 晁氏の郡齋讀書志、陳氏の書錄解題、宋史本傳、竝に唐子西集二十卷に作り、文獻通考は十卷、尙友錄には三十卷に作る、何れか是なるを知らず、現本は(明)の崇禎十三年福州の徐燾が何楷の家より得、(清)の雍正三年歸安の汪亮采の校刊する所にして詩十卷、文十四卷、凡て二十四卷なり、卷首に汪亮采、鄭總、呂榮義、及び庚の弟庚子文若の

序、鄭康佐、徐燾の題、宋史本傳、諸家評論、目錄あり、詩集は、

賦、五古、七古、五律、七律、五排、七排、五絶、六絶、七絶各一卷。

に分ち、文集は、

論一卷、記二卷、傳贊、銘共一卷、誌銘、行狀、贊、銘共一卷、表一卷、啓一卷、書一卷、雜文三卷、策題一卷。

に分つ、以上凡て十二卷、而して十三、十四兩卷は三國遺事なり。

〔評論〕 唐庚、蘇軾と里を同くす、而して頗る蘇軾に満たざる所あり、故に其詩文實に毅然として自ら一家を成す、敢て軾の門戸に倚傍せず。

◎龜山集四十二卷

〔作者〕 宋の楊時撰す、時字は中立、南劍將樂の人、性寬大至孝なり、熙寧九年進士の第に中り、官に調するも赴かず、師體を以て程頤に穎昌に見え、相得て甚だ懽ぶ、其歸るに及び、頤之を目送して曰く、吾道南すと、頤卒して又程伊川に洛に従ふ、時に年

卷。

目錄には卷末副刻と記し、現行本實に卷末無し、蓋し未だ刻せざるなり、目錄の前には程敏政、李熙、耿定力、揭翰績、蕭正模、丘晟、廖長齡、趙炳等の序あり、次に龜山の像、楊四知の像贊、陳廷統、廖騰燧、朱任弘、程大任、章培基、張伯行、余灑の序あり。

〔評論〕 楊時文章を以て重せられず、然れども其言時勢の安危に於て鑿鑿たるものあり、亦尙性命を空談し世變に達せざるの論に非ず、時は學を程子に受け之を維從彦に傳へ、再傳して李侗と爲り、三傳して朱熹に及び、閩中道學の派を開き、遂に南宋儒風の宗と爲れり。

◎石林居士建康集八卷

〔作者、題名〕 宋の葉夢得撰す、夢得の傳は石林燕語の條に出づ、石林は夢得の號、建康は地名なり、紹興八年、夢得再び建康を鎮めしときの作なるを以て集に名づく。

〔傳來、體裁〕 書錄解題に夢得の總集一百卷、審是集

四十、後、瀏陽、餘杭、蕭山三縣に歴知し、皆惠政あり、四方の士、千里を遠しとせずして之に従ひ、號して龜山先生と曰ふ、諫議大夫侍講を歴、高宗の時工部侍郎を以て致仕し、紹興五年(一七九五)卒す、年八十三、文靖と諡す、著す所二程粹言あり。

(宋史道學傳、胡安國の龜山先生傳、朱熹の年譜等參考)

〔傳來、體裁〕 舊本久しく佚す、(明)の世、館閣に所藏の者三十五卷本あり、程敏政之を抄録して十六卷と爲す、宏治十五年、李熙之を刊行せり、後、常州の東林書院、分ちて三十六卷を刊し、宣興刊本、又三十五卷に併す、萬曆壬子林熙春といふ者沈暉の抄本を得て之を程本に増補し、分彙して四十二卷と爲して世に行ふ、此に於て始めて全本有り、已にして其書復乏しくなるを以て、康熙四十六年龜山の裔孫楊綱祖之を梓行したり、此書卷首一卷ありて宋史本傳、墓誌銘、行狀略、年譜を載す、其目は左の如し。

上書一卷、奏狀一卷、表一卷、劄子一卷、經筵講義一卷、辯二卷、經解一卷、史論一卷、語錄四卷、答問一卷、策問一卷、書七卷、啓一卷、記一卷、序一卷、題跋一卷、雜著一卷、哀辭、祭文共一卷、狀述二卷、誌銘七卷、銘、表、碣共一卷、詩五

八卷、建康集十卷を載す、今存するもの惟建康集のみ、而して卷數相符せず、然れども、其孫輅の題跋に八卷とあるより見れば十卷は、恐らくは傳寫の誤ならん、此本は清の道光二十四年の重梓本にして、首に道光二十三年張履の序、建康集昔賢題跋五則、宋史本傳、目錄あり、其目左の如し。

卷一は詩、卷二は詩、銘贊、卷三は書後、論、序、卷四に記、祝文、祭文、卷五は表、卷六は劄子、奏狀、卷七は奏狀、啓、書、卷八は書、碑、傳、誌銘。

〔評論〕 文章高雅、猶北宋以後の遺風を存す、南渡以後の詩人は陳興義を以て冠と爲し夢得之に亞ぐ。

簡齋集十五卷外集一卷

〔作者、題名〕 宋の陳興義撰す、興義字は去非、簡齋と號す、洛陽の人なり、政和三年の上舍甲科に登り、大學博士に累官し、紹興中翰林學士を拜し、參知政事に遷る。(宋史本傳參考)

〔體裁〕 此書予が見たる者は、元の劉辰翁の評點本なり、首に辰翁序あり、其目左の如し。

集一卷、龍溪文集六十卷を増し、共に一百二十一卷あり、宋志藝文志には並びに著録せり、(明)に至り遂に佚して存せず、後胡堯臣といふ者あり、別に浮溪文粹十五卷を得て刊行す、予が見たる者は正徳版なり、周瑯等の後序あり、其目を擧ぐれば左の如し。

詔勅一卷、制一卷、表一卷、奏議二卷、記三卷、序跋一卷、碑祭文、傳、書、銘共一卷、神道碑二卷、墓誌銘二卷、行狀一卷、詩詞一卷。

別に附録一卷あり、汪公墓誌銘、宋史文苑傳藻の傳、羅鄂州の遺文を附す、(清)に至り永樂大典中に載する所を輯の彙して三十六卷と爲し、四庫に著録す、然れども未だ見ず、故に姑く之を措く。

〔評論〕 駢體文は唐の李商隱の後、宋初の楊劉諸人皆其派に沿ふ、歐蘇之を變するに及び王安石出でて尤も爾雅深厚と稱す、藻又其後に出で、殆ど之を集大成す、其隆祐太后手書建炎德音、諸篇の如きは、皆明白洞達、曲さに情事に當る、詔令の被る所、悽憤激せざる無く、天下傳稱して以て陸贄に比せりといふ、其他の四六も亦多く深醇雅健、商隱以後の一家たり、然れども隔句對を用ひ、又長句十數字に至るものあ

賦一卷、詩十二卷、銘贊一卷、無住詞一卷。外集は詩文合せて十數首を收む、又四庫著録本は、十六卷にして其目左の如し。

〔評論〕 宋詩蘇黃二家の後、詩人迭に起る、而して其蘇を尸祝する者は波瀾に富みて句律疎なり、其黃を祖禰するものは鍛鍊精しくして性情晦し、興義出づるに及びて簡嚴宏壯を以て其弊を一洗せんと欲せり、蓋し亦矯矯として群ならざる者なり、南宋の一名家たるを失はず。

〔註解〕 ○簡齋詩集評註十五卷元劉辰翁撰

浮溪集十五卷附録一卷

〔作者、題名〕 宋の汪藻撰す、藻字は彥章、饒州德興の人、崇寧二年の進士、官顯謨閣大學士左太中大夫を歴て新安郡侯に封せられ、紹興二十四年(一一八四)卒す、年七十六。(宋史文苑傳參考) 浮溪は地名を號とす。

〔傳來、體裁〕 藻の集、晁公武の讀書志に見ゆる者は僅に十卷、陳振孫の書錄解題には、始めて載せて浮溪集六十卷あり、趙希弁の讀書後志には、又撰稿外

り、是其商隱に及ばざる所以なり、其詩は則ち徐俯に得、俯は之を黃庭堅に得、具に淵源あり、孫觀藻の墓誌を作りて、大手筆を以て之を推す、殆んど溢美に非ず。

鴻慶居士集四十二卷(未見)

〔作者、題名〕 宋の孫觀撰す、觀字は仲益、晉陵の人なり、徽宗の末侍御史と爲り、靖康中屢上言す、朝廷其言不實なりとして斥けて和州を守らしむ、後復召されて御史と爲り、翰林學士に至る、建炎の初、峽州に貶せられ、後復召されて誥命を掌りしが、又賊罪を以て斥られ、鴻慶宮に提舉たり、故に集に名づく、乾道五年(一一二九)年八十九にして卒す。(宋史本傳參考)

〔體裁〕 未だ此集を見ず、然れども岳珂が孫仲益の鴻慶集は大半誌銘なりと謂へりしを以て觀れば、其文の大概を窺ふ可し。

〔評論〕 人品出處は道ふに足らずと雖、詩文は頗る工にして、尤も四六に長じ、汪藻、洪邁、周必大と聲價を相埒くせりと謂ふ。

●梅溪全集五十四卷

〔作者、題名〕 宋の王十朋撰す、十朋字は龜齡、樂清の人、梅溪は其號なり、紹興中廷對して忠鯁なりしを以て高宗親しく擢でて第一と爲す、太子詹事に累官し、龍圖閣學士を以て致仕し、乾道七年(一一八二)卒す、年六十、忠文と諡す。(宋史本傳參考)

〔體裁、傳來〕 此集は十朋の子聞詩、問禮の共に編する所なり、今記する所は明の正統五年温州の教授何濶の校し、知府劉謙の刻する所なり、首に黃淮の序有り、後に刑部右侍郎聞禮の跋有り、其總目を左に示す。

廷試策並奏議共五卷、詩文前集二十卷、詩文後集二十九卷、附錄宋龍圖閣學士王公墓誌銘。

文獻通考には、梅溪集三十二卷續集五卷に作り、並びに劉璣の序を載す、今本此序無、卷數相同じからず、汪應辰の作れる墓誌には則ち梅溪前後集五十卷と稱し今本と符せず、疑ふらくは璣序する所の者は初稿にして、應辰誌す所の者は晚年續増の稿ならん。(四庫提要參考)

〔評論〕 其文は理致を尙び、浮虛靡麗の詞を爲さず、其詩は質直條暢、其人と爲りの如し。

●拙齋文集二十卷(未見)

〔作者、題名〕 宋の林之奇撰す、之奇字は少穎、拙齋と號す、侯官の人、紹興二十一年の進士、後校書郎に補せられ、王安石の新法を駁す、呂祖謙北面して弟子と稱す、著す所尙書全解あり、世に行はる、淳熙三年(一一八三)卒す、年六十有五。(宋史儒林傳參考)

〔體裁〕 凡て記問二卷、詩一卷、雜文十七卷ありて、末に呂祖謙の祭文及び李綱の爲る所の哀詞、姚同の爲る所の行實を附せりといふ。

●屏山集二十卷

〔作者、題名〕 宋の劉子翬撰す、子翬字は彥沖、崇安の人、嘗て通判興化軍と爲り、疾みて吏事に堪へざるを以て辭し歸り、室を屏山に築き、學を講じて倦まず、學者多く之に従ふ、年四十七にして卒す。(宋史儒林傳參考) 屏山は其講說地名を取りて、集に名づけしなり。

〔傳來、體裁〕 此集は其嗣子坪の緝みし所なり、今記する所は道光十八年の重刊本にして、首に道光十七年李廷鈺、紹興三十年胡憲の二序、同十七年朱熹の跋、墓表、謚議、覆議、目錄有り、尾に宋史儒林傳を附す、其目左の如し。

論四卷、記、序共一卷、雜著一卷、表、劄子共一卷、啓一卷、祭文、墓銘、墓表共一卷、賦、詩共一卷、詩、詞共十卷。

〔評論〕 其文は皆曲折明暢、其詩は風格高秀、陳因を襲はず。

●南軒集四十四卷

〔作者、題名〕 宋の張栻撰す、栻字は敬夫、廣漢の人、孝宗の時左司員外郎を歴て、祕閣修撰に除せられ、荆湖北路安撫使に至り、淳熙七年(一一八四)卒す、年四十八、栻、顯悟夙成、古の聖賢を以て自ら期し、朱熹と友とし善し、其奉仕するや、内密謀を贊し、外庶務に參し、病みて且に死せんとするに當り猶手ら疏して帝に君子を親み小人を遠け信任するに一己の偏を防ぎ好惡するに天下の理を公にせんことを勸む、卒

して宣と諡し、淳和の初、孔子の廟庭に從祀す、學者稱して南軒先生と號す、著す所、南軒易說、癸巳論語解、癸巳孟子說等あり。(宋史道學傳參考)

〔傳來、體裁〕 栻の歿後、其弟杓其故藁を集めて朱子に屬す、朱子又四方の學者の傳ふる所數十篇を訪得し、益すに平日往還の書疏を以てし、編次論定し、未だ事を竟ふに及ばざるに、已に其別本を刻して世に流傳する者あり、朱子刻する所の本、早年未定の論多く、末年經を談じ事を論し道要を發明するの語は反て佚遺する所多きを以て、乃ち前に蒐輯する所を取り參互相校し斷するに栻晩歲の學說を以てし、定めて四十四卷と爲せり、今傳ふる所の淳熙甲辰(十一年)本是なり、今記する所は我寬文九年の和刻本にして、其目左の如し。

詞、賦、古詩共三卷(詞、賦は一巻に滿たす) 律詩四卷、表啓一卷、記五卷、序二卷、史論二卷、說一卷、書十卷、答問四卷、題跋三卷、銘一卷、墓誌銘五卷、祝文一卷、祭文二卷。

〔評論〕 栻は講學を以て名あり、然れども其詩文も亦平實にして浮薄ならず、字句の間精鍊を缺くもの有りと雖、要するに有道の言、之を咀嚼するに聞奇誇華

るに朱玉が朱子文集大全類編、在の編みし所實は八十八卷、續集別集を合すれば、則ち百卷と成ると稱せるを見れば、是正集一百卷は又在の手に成りしものに非ざるなり、續集の編者は詳ならざれども、別集は理宗の朝、余師魯といふ者、朱子の遺文を搜訪して十卷を編次せり、明の中葉に至り、朱子大全集出で、正集百卷續集十一卷別集十卷を收む、即ち嘉靖十一年版にして、凡て二百二十一卷、清の蔡方炳が跋に稱する所と相符す、而るに康熙二十七年、方炳が刊行したるものは、正集百卷續集五卷別集七卷、凡て二百二十二卷にして其跋語と相符せざるは、惟、明刻二百二十一卷本あるを聞きしのみにして、未だ其完書を得ず、缺佚本によりて刊版せしものならん、今記する所は嘉靖版を我正徳元年に翻刻したるものにして、首に嘉靖十一年饒平蘇信の序、及び目錄有り、其正集の目左の如し。

詞、賦、琴操、詩共十卷(詞、賦、琴操は一卷に滿たす) 封事二卷、奏劄二卷、講義、議、狀、劄子共一卷、奏狀四卷、申請二卷、辭免二卷、書四十一卷、雜著十卷、序二卷、記四卷、跋四卷、銘、箴、贊、表、疏、啓、婚書、上梁文共一卷、祝文一卷、祭文一卷、碑二卷、墓表一卷、墓誌

銘四卷、行狀四卷、公移二卷。

續集は首に淳祐五年王途の序、目錄あり、凡て人に答るる書、及び跋五十餘篇を收む、別集は首に目錄及び成淳元年黃鏞の識語あり、其目左の如し。

書六卷(前二卷は時事出處の帖、後三卷は講學及び雜往來の帖)、詩、記、祝文、祭文、題跋共一卷、雜著、陳請、啓共一卷、公移二卷。

此書(我國)に傳はりたるは其時代詳ならざれども、建内記に「嘉吉元年四月十五日辛巳、晦翁集卅冊朱集買本被_レ召置禁裏」云々とあれば、當時已に渡來せしものなるべし、嘉吉元年は後花園帝即位の十二年にして、足利氏の中葉なり、徳川氏に至り、淺見綱齋校點して刊行せり、正徳板是なり。

〔評論〕 朱子の學に於ける精深博大、通せざる所無し、詩文を論するの言も亦皆鑿鑿聽く可きもの有り、其自ら作る所も亦觀る可し、大抵文は六經に本原し、韓愈、歐陽修、曾鞏に沿ひて而も之に拘泥せず、其の理を闡くの精微深至なるに至りては則ち三家に超越す、而して其五言古は管に宋一代に傑出するのみならず、感興の諸作に至りては直に唐の陳子昂に駕して上らむと欲す、但七言は其長する所に非ず、然れ

ども綜べて之を誦すれば濂洛諸家中の冠冕にして又古今の一大家なり。

◎文忠集二百卷

〔作者、題名〕 宋の周必大撰す、必大字は子充、廬陵の人、紹興中博學宏詞の科に中り、秘書省正字に除せられ、國史院編修官を兼ね、高宗即位し起居郎と爲り、力めて權倖を排斥せしかば、旨に忤ひ福建路提刑に改めらる、後、參知政事に除せられ、累進して少保に至り、益國公に封せられ、嘉泰二年(一一八六)卒す、年七十有九、文忠と諡す、(年譜宋史) 題名は其諡號にして、又一に周益公大全集といふは其爵名を用ひしなり。

〔傳來、體裁〕 開禧中、其子繪の手訂せし所にして、其家皆て六一集を刻せしことありしを以て、編次に其凡例に遵へり、

省齋文集四十卷、平園續集四十卷、省齋別集十卷、詞科舊藁三卷、掖垣類藁七卷、玉堂類藁二十卷、政府應制藁二卷、歷官表奏十二卷、奏議十二卷、奉詔錄七卷、承明集十卷、辛巳親征錄一卷、龍飛

錄一卷、歸廬陵日記一卷、問居錄一卷、泛舟游山錄三卷、乾道庚寅奏事錄一卷、壬辰南歸錄一卷、思陵錄一卷、玉堂雜記三卷、二老堂詩話二卷、二老堂雜誌五卷、唐昌玉蕊辨證一卷、近體樂府一卷、書藁三卷、劄子十一卷、小簡一卷。

其年譜一卷、亦繪の編みし所なり、又祭文、行狀、諡語、神道碑等を以て、附錄四卷と爲す、直齋書錄解題に稱す、奉詔錄、親征錄、龍飛錄、思陵錄、凡て十一錄は、其多く時事に及び、託言したるを以て、未だ刊せず、故に人之を見る莫し、鄭子敬、吉に守たる時工人を募り印して之を得たり、余莆田に在り借録して全書と爲すと、爾後雕本久しく佚して止た砂帙を存するのみ、唯、玉堂雜記、二老堂雜誌等の編のみは、世に多く別本單行のものあれども、原書編次の例により、今猶其舊第を存す。

〔評論〕 必大は文學を以て宰輔に上り好學倦まず、晩年に至りて其文筆路愈熟達、意の趨く所能く之を盡さざる無し、歐蘇と雖亦以て尙ふる無きに似たり、其詩は白居易に步趨し、淡雅を以て長を見る、南宋に在りては大家と稱するを得可し。

〔附記〕 此書家叢に入る可きに似たれども、其收む

る所概ね詩文にして其他の者は、寥々たり、故に特に此に收む。

雪山集十六卷

〔作者、題名〕 宋の王質撰す、質字は景文、興國の人、紹興の末進士に擧げられ、孝宗の時樞密院編修官と爲り、虞允文に薦められ、正言と爲る可きに、中貴の沮む所と爲り、遂に祠を奉じて山居し、意を祿仕に絶てり、著す所詩總聞、朴論有り、(宋史本傳參考)雪山は其號なり。

〔傳來、體裁〕 宋史藝文志に、王景文集四十卷、雪山集三卷を載せ、陳振孫の書錄解題亦三卷を記し、焦竑の經籍志朱彝尊の經義考俱に四十卷を録す、王阮の序に稱す、其家遺稿を以て屬せらる、乃ち蒐羅刪次して四十卷と爲し、名づけて雪山と曰ふと、然れば則ち質初め小集三卷有り、自ら雪山の名を題し、阮が刪定して全集を編むに及び、仍其舊名を襲ひしものならん、故に三卷本と四十卷本と諸書互に見はるなり、(四庫提要參考)此集久しく佚して傳はらず、(清)初永樂大典より録出し十六卷と爲し、武英殿聚珍版書中に

收めたり、首に乾隆御製題武英殿聚珍版十韻一首、乾隆四十年上諭、目錄、四庫提要節文、慶元四年王阮の原序あり收むる所左の如し。

奏議三卷、表、論共一卷、序、題跋共一卷、記二卷、書一卷、啓一卷、銘、贊、傳共一卷、雜著一卷、賦、雅、五古、七古共一卷、五律一卷、七律一卷、五排、五絕、七絕共一卷、詩餘一卷。

〔評論〕 王阮、質が文を品して曰く、咳唾風に隨ひて皆珠璣を成す、之を讀む者をして蜜雪を嚼むが如く、頰味あらしむ、其之を場屋に施すは芥を拾ふが如く、竹を破るが如しと、以て其詩文に長するを知る可し、集中の論和戰守疏及び上孝宗書の諸篇は、詞旨剴切頗る事理に當れり、蓋し質經史に博通し地輿に明達なるを以て自ら此の如きを致せるなり。

誠齋集一百三十二卷附錄一卷

〔作者、題名〕 宋の楊萬里撰す、萬里字は廷秀、吉州吉水の人、紹興二十四年の進士、永州零陵丞に調せらる、時に張浚謫せられて永州に居る、勉むるに正心誠意の學を以てす、萬里遂に誠齋を以て其室に名

づく、學者稱して誠齋先生といふ、後、奉新に知たり、孝宗の時國子監博士と爲り、寶文閣待制を以て致仕し、開禧二年(一八六六)寶謨閣學士に升りて卒す、年八十三、光祿大夫を贈られ、文節の諡を賜ふ、著す所易傳あり、世に行はる。(宋史儒林傳參考)

〔傳來、體裁〕 此集は嘉定元年、其子長孺の編みし所なり、誠齋詩を以て名を擅にす故に江湖集七卷、荆溪集五卷、西歸集二卷、南海集四卷、朝天集六卷、西道院集二卷、朝天續集四卷、江東集五卷、退休集七卷あり、今皆集中に收めらる、其目左の如し。

詩四十二卷、賦二卷、辭操一卷、表二卷、牋一卷、啓十三卷、書七卷、奏、狀、劄子共二卷、記六卷、序七卷、心學論三卷、千慮策三卷、程式論一卷、庸言四卷、解一卷、雜著八卷、尺牘八卷、東宮勸諭錄一卷、淳熙薦士錄一卷、詩話一卷、傳三卷、行狀二卷、碑二卷、表一卷、墓誌銘十卷、附録は歷官告詞詔書諭告。

〔評論〕 萬里は駢牘文を善くす、其小篇は皆能く精を極め屬對の巧なる殆ど天成の如し、南宋の名家たるを失はず、其詩は江西詩派の末流に沿ひ、頰唐繼俚の處有るを免れずと雖、而も才思健拔、包孕富有、自ら南宋の一作手たり、後來四靈江湖諸派の得て竝立

す可きに非ず、周必大嘗て其詩に跋して曰く、誠齋は大篇短章七步にして成り一字を改めず、皆千軍を掃ひて三峽を倒し、天心を穿ちて月脅に出づるの語なり、其物の姿態を狀り人の情意を寫すに至りては鋪叙纖悉、其妙を盡くし、筆端口有り、句中眼有り云云と、是亦細大指てす雅俗並陳の一證たり。

止齋文集五十一卷附錄一卷

〔作者、題名〕 宋の陳傅良撰す、傅良字は君舉、瑞安の人、乾道中進士に登り、中書舍人と爲る、後、寶謨閣待制に官し、開禧三年(一八六七)卒す、年六十有七、文節と諡し、學者稱して止齋先生といふ、故に止齋を以て其集に名づく、著す所左氏章句、詩解話、周禮說、兩漢博議等有り。(宋史儒林傳參考)

〔傳來、體裁〕 此集は其門人曹叔遠の編みし所にし、其取る所は乾道三年より嘉泰三年に至る三十七年間の作にして、乾道以前の少作は皆刪去して存せず、其附録一卷は神道碑、墓誌、行狀を載す、而して又其後に雜文八篇を附綴したるは、何人の續入せるを知らず、首に嘉定元年曹叔遠、弘治十八年王瓚の

二序、目錄、尾に正徳元年侯山林長繁の跋有り、其目左の如し。

歌辭、古詩共四卷(歌辭は一卷に滿たす)、律詩四卷、挽詞一卷、内制一卷、外制八卷、奏狀劄子九卷、講議故事廟議一卷、壬辰廷對一卷、表二卷、啓三卷、手書四卷、記一卷、序一卷、題序一卷、題跋一卷、策問一卷、雜著一卷、祭文二卷、誌銘四卷、行狀一卷。

〔評論〕 傅良の學辭季宣に出で、古今を通知し實用を講求するを以て本と爲す、故に集中經世の文多く、心理を空談し以て名高を博せず。

北欄集十卷詩集九卷外集一卷語錄一卷

〔作者、題名〕 宋の釋居簡撰す、簡字は敬叟、潼川の人、嘉熙中敕して淨慈光孝寺に住はしむ、因りて北欄に寓すること日久し、人呼びて號と爲す、故に集に名づく。(張自明序 等參考)

〔傳來、體裁〕 文集の首に嘉定十年張自明の序、終に義門宣子の跋、崔尙書宅刊梓の識語有り、詩集の首

には葉適の小序七絶一首あり文集の目左の如し。

賦一卷、辭、詞、記三卷、傳、序一卷、銘、贊、箴、頌、辯共一卷、跋一卷、疏榜文二卷、銘、祭文一卷。

詩集は躰を分たす、外集は尙頌を録し、語録は首に淳祐十一年普濟の序、尾に應安庚戌の歲遠孫の跋有り、凡て台州般若禪院、台州報恩光孝禪寺、湖州觀音禪寺等に於ける語を録せり、此書北條氏の末より(我國)に傳はり五山僧侶の間に尊ばれ應安中翻刻本有り、釋祖應の跋に據れば、古岩、周楨二人の鋟行に係るものたり。

〔評論〕 其詩文、格意清拔、蔬筍の氣あり、契嵩、惠洪の間に置くも、多く遜色無し。

攻媿集二百十二卷

〔作者、題名〕 宋の樓鑰撰す、鑰字は大防、鄞縣の人、自ら攻媿主人と號す、諸官に歴仕し、資政殿大學士提舉萬壽觀に進み嘉定六年(一八七三)卒す、年七十七、少師を贈り、宣獻と諡す。(宋史本傳參考)

〔傳來、體裁〕 宋志、書錄解題、俱に一百二十卷に作る、而るに諸家の書目或は百卷に作り、或は八十五卷

に作る世傳る所の鈔本、僅に四十二卷のみを存するもの有りといふ、蓋し流傳已に久しく、佚脱せし所多し、(清)の乾隆中、四庫館員に命じ、釐定して百十二卷とし、武英殿に刻す、即ち今本なり、首に眞德秀の原序、御製題武英殿聚珍版十韻、目錄あり、目錄の終に四庫提要の文あり、其目左の如し。

古體詩六卷(琴操二首、楚辭一首附)、今體詩八卷、表箋五卷、奏議十一卷、狀劄三卷、外制八卷、内制七卷、諡議一卷、進故事一卷、序三卷、記七卷(碑二首附)、啓五卷、書三卷(碑十五首附)、題跋十卷、雜著一卷、賦一卷、銘、贊、尙頌共二卷、祝文一卷、祭文二卷、事略一卷、行狀七卷、神道碑六卷、誌銘十一卷、塔銘一卷、北行日録二卷。

〔評論〕 鑰、學問該博、文章淹雅、南宋詞臣の内に在りて實を佩び華を衒むものと謂ふ可し、其題跋諸篇は尤も考證に資有り、詩は瞻にして雅たるを失はず、而も時に禪に入るもの有り。

水心集二十九卷

〔作者、題名〕 宋の葉適撰す、適字は正則、温州永嘉

の人、淳熙五年の進士、司業と爲る、嘗て陳傅良等を薦む、時に人を得ると稱す、韓侂胄に忤ひて貶に坐せられ、門を杜ちて著述し、自ら一家を成す、學者之を仰ぐと泰山の如く、水心先生と稱す、官實文閣學士通議大夫に至り、嘉定十六年(一八八二)卒す、年七十四、光祿大夫を贈り、忠定と諡す、著す所習學記言等あり。(宋史儒林傳參考)

〔傳來、體裁〕 書錄解題に二十八卷に作り、又別に拾遺一卷、別集十六卷有り、已に久しく佚して傳はらず(明)の正統中、處州の推官黎諒、少きより適の策場標準を讀み、其文を慕ひ、訪求久しくして劄狀奏議等八百餘篇を得、裒輯彙次して二十九卷を編成せり、今傳はる所の者是なり、此本は清の乾隆間の版本にして、首に乾隆二十年朱椿、雷鋮、俞文漪の三序、趙汝璫、黎諒等の舊序、宋史本傳目錄有り、其目左の如し。

奏劄一卷、狀表一卷、奏議三卷、七言古詩、五言律共二卷、七言律、七言絶句共一卷、記三卷、序一卷、墓誌銘十三卷、行狀、諡議、銘、青詞、疏文共一卷、書一卷、祭文一卷、雜著一卷。

〔評論〕 永嘉の學派、薛季宣、陳傅良、葉適を得て蔚然として大に振ふ、適、文章雄贍、才氣奔逸、當時に

在りて卓然たる大家たり、其碑版の作、簡質厚重、具に典則あり、詩も亦精嚴高遠、頗る觀る可し。

● 絜齋集 二十四卷

〔作者、題名〕 宋の袁燮撰す、燮字は和叔、鄞縣の人、淳熙中進士に登り、國子祭酒禮部侍郎に累官し、嘉定十七年(一八八四)卒す、年八十一、正獻と諡す、燮同里の沈煥、楊簡、舒璘と同じく陸九淵に師事し、其高弟と稱せらる、(宋史本傳參考)絜齋は其號なり。

〔傳來、體裁〕 書錄解題に絜齋集二十六卷、後集十三卷を載す(明)初尙其傳本ありしが、其後佚して傳はらず(清)初永樂大典より録出し、編次して二十四卷と爲し、文二百四十八首詩一百七十六首を收む(四庫提要)今武英殿聚珍版書中に在るものを見るに、同じく二十四卷なれども、陸錫熊等の校上文に文二百三十九首、詩一百七十七首とありて、提要と其數を異にせり、其目左の如し。

卷一より五までは奏疏、卷六は策問、卷七は論、雜著、卷八は序、題跋、卷九、十は記、卷十一より十六は行狀、卷十七は墓表、誌銘、卷十八より二

十一は誌銘、卷二十二は廟碑、祭文、卷二十三は古體詩、卷二十四は近體詩。

末に燮の子甫の作りし後序一首を附せり。

〔評論〕 燮の學、九淵に原本す、而して楊簡に較ぶるに篤實たり、其文大抵淳樸質直にして雕繪を事とせず、而して眞氣流溢頗る自然に近し、其義理を剖析し政事を敷陳する、皆剴切詳明なり、詩は則ち體を具ふるのみ。

● 西山文集 五十五卷

〔作者、題名〕 宋の眞德秀撰す、德秀字は景元、浦城の人、慶元五年の進士、南劍州判官を授かり、繼て博學宏詞の科に中り、嘉定元年博士に遷り、累官して參知政事に至り、端平二年(一八九五)卒す、年七十八、文忠と諡す、世稱して西山先生といふ、其著す所大學衍義、唐書考疑、讀書記、文章正宗、四書集編等あり。(宋史眞德秀傳參考)

〔傳來、體裁〕 宋史眞德秀傳に、西山甲乙藁、對越甲乙集、經筵講義、端平廟議、翰林詞草、四六獻忠集、江東救荒錄、清源雜志、星沙集志の諸書を載す、(明)

す、南宋の一大家たり、楊萬里等の及ぶ所に非ざるなり、詩は則ち長ずる所に非ず。

● 龍川文集三十卷附錄一卷

〔作者、題名〕 宋の陳亮撰す、亮字は同父、婺州永康の人、人と爲り才氣超邁、善く兵を談じ、議論風生、志經濟に在り、紹興四年の對策に第一に擢でられ、簽書建康府判官を授かり、尋で卒す、文毅と諡す(宋史陳亮傳參考)龍川は其號なり。

〔傳來、體裁〕 葉適の序に謂ふ、亮集凡て四十卷と、今行はるものは皆三十卷なり、蓋し流傳の久しき闕佚を生せし者にして復當時の舊本に非ず、此に記する所は晉江の史朝官編刻し、惠安の徐鑑校正せるものにして、首に嘉泰四年葉適の序、紹興四年の制誥、像、贊、目錄有り。其目左の如し。

書疏一卷、論一卷、問答二卷、論五卷、經書發題、箴、銘、贊共一卷、策一卷、三國紀年一卷、史傳序一卷、序說、引共一卷、序一卷、記、題跋共一卷、詩、歌詞、表、啓共一卷、啓一卷、書三卷、祝文、祭文共四卷、行狀、哀辭共一卷、墓誌銘四卷。

〔評論〕 德秀朱子の知に生まれ、力めて朱子の學を崇む、故に其文大抵儒者の言たるを失はず、駢體は其尤も長ずる所にして華あり質あり詞科の習に染ま

の萬曆中、福建巡撫金學曾の刊本五十五卷は、詩賦の外、惟、對越甲乙藁、經筵講義、翰林詞草の三種のみ、其餘の序記等の作は、但、類を以て次し、名目を分たず、又傳に所謂西山甲乙藁、端平廟議等の諸書俱に編入しあらず、疑らくば、其闕佚せしもの尙多かる可し、然るに文獻通考に載する所は、五十六卷に作りて此本より僅に一巻多きのみ、されば殆ど宋時の刊本と大差なきなり、今記する所は明崇禎中の重刊本にして、首に萬曆二十六年金學曾、崇禎十一年丁辛の二序、刊校姓氏、及び目錄有り、其目左の如し。

本傳、古詩、律詩、賦共一卷、對越甲藁十一卷、對越乙藁五卷、經筵講義一卷、翰林詞草、春端帖子共五卷、記碑三卷、序三卷、問答二卷、講義、策、策問共一卷、說、箴、頌、銘、贊共一卷、題跋三卷、書二卷、啓一卷、文辭一卷、神道碑一卷、墓誌銘五卷、行狀一卷、青詞二卷、疏語二卷、祝文三卷、祭文一卷。

末の附録一卷は、目有りて書無し。
〔評論〕 大抵議論の文多く、才辨縦横、控勒すべからず、亦豪傑の士なり、詩は則ち其長する所に非ず、篇什も亦多からず。

◎鶴山先生大全集一百六卷 目錄二卷

〔作者、題名〕 宋の魏了翁撰す、了翁字は華父、功州蒲江の人、慶元五年の進士、吏部尚書端明殿學士同簽書樞密院事に累官す、是より先、事を論じて史彌遠に忤ひ、靖州に謫せらる、乃ち室を白鶴山下に築き、鶴山書院と號し、門を杜すこと六載、著す所周易要義、尚書要義、儀禮要義、易學隅、周禮井田圖說、古今考、經史雜抄、師友雅言等あり、嘉熙元年(一八九七)卒す、年六十、太師を贈り、文靖と諡し、秦國公を累贈す。(宋史儒林傳參考)

〔傳來、體裁〕 了翁著す所の詩文極めて富み、本各、自ら集を爲す、此本は乃ち後人諸本を哀合し、編次して一編と爲せる者なり、(元、明)の間、版湮廢せしが、嘉靖三十年高柳等重刻し、復世に傳はれり、即ち此に著録する者なり、卷首に獅の刻序あり、其

目左の如し。

古詩七卷、律詩五卷、牋表一卷、内制一卷、奏議六卷、館職策一卷、進故事一卷、狀劄三卷、督府奏議五卷、督府書一卷、書三卷、牋四卷、記十四卷、序四卷、銘一卷、字說一卷、跋七卷、啓三卷、墓誌碑銘十九卷、行狀二卷、祭文二卷、挽詩、贈共一卷、策問一卷、長短句三卷、歌行、致語共一卷、祝文一卷、醮詞、疏文共一卷、勸農文一卷、舉文一卷、策一卷、舉文一卷、周禮折衷三卷。

卷尾に王葵の跋あり、又(明)の毛晋は特に題跋七卷を抜きて之を刊せり、四庫著録本は百九卷にして、清初の校訂本なるも未だ見ず。

〔評論〕 了翁の學、經術を以て根柢と爲す、故に其文醇正にして自然に出づ、江湖遊士の叫囂狂躁の氣無く、亦講學諸儒の空疎迂腐の習無し、實に南宋中葉に在りて流俗に轉移せざる者と謂ふ可し、詩は擊壤派に近し、大抵理致を以て勝る、篇什少からずと雖要するに所長に非ず。

◎疊山集二卷

〔作者、題名〕 宋の謝枋撰す、枋得の傳は文章軌範の條に出づ、疊山は其號なり。

〔傳來、體裁〕 原本久しく佚せり、明の嘉靖中、林光祖が黃溥の校せし所を以て刊行し、上下二卷に分てり、首に嘉靖三十四年王守文の序、目錄有り、其目左の如し。

卷上は五絶、五七律、五七長篇、書、啓、狀、劄、詞、卷下は序、記、墓銘、說、跋、表、疏、文、附書、附跋、附詞。

其後清の康熙中に、譚瑄の重訂する所の五卷本は、舊本に較ぶるに稍、詳なりといふも未だ見ず。
〔評論〕 其忠孝大節は、炳として史冊に著る、文章亦博大昌明、具に法度有り。

◎文山集二十卷

〔作者、題名〕 宋の文天祥撰す、天祥字は履善、文山と號す、廬陵の人なり、進士第一に擧げられ、湖南の提刑に歷仕す、元兵阜亭山に至りしとき、天祥往て之を説き、脅されて眞州に至り、兵を募りて王に勤む、右丞相に拜せられ、二王を挾みて閩廣に入る、

兵敗れて執はれ、獄に繋がること四年、遂に屈せず、南面再拜して死に就く、享年四十七、至元十九年(一九四二)なり、忠烈と諡す、(本傳、宋史) 此書一に文信國公集といふ、信國公は爵名にして文山は其號に因るなり。

〔傳來、體裁〕 天祥、文山隨筆、數十大冊あり、常に以て自ら隨へ、遭難後は盡く之を失ふ、(元)の元貞大徳間、其郷人遺編を搜訪して前集三十二卷、後集七卷と爲す、世稱して道體堂刻本といふ、(明)初に至り其本散佚せり、尹鳳岐、内閣より之を得て、重ねて編次を加へ、詩文十七卷と爲し、寶祐三年より咸淳十年に至るまでの作を載せ、江西副使陳价、廬陵處士張祥、先後之を刻し、附するに指南前録一卷、後録二卷を以てす、即ち徳祐二年より以後の作なり、紀年録一卷は、天祥在獄の時自述する所にして、後人復衆説を集めて以て之を増益せり、今記する所は同治七年刊本にして首に目錄有り、次に四庫提要の文、高宗御集の南宋總論、文天祥論、從祀原案録、遺像、遺墨等有り、其目左の如し。

對策、封事、内制共一卷、表、牋、疏、申省、狀、共一卷、書二卷、啓二卷、公牘文判一卷、記、

序共一卷、跋、贊、銘、說、講義共一卷、祭文、行實、墓誌銘、祝文、上梁文、樂語共一卷、詩二卷、指南錄一卷、指南後錄一卷、吟嘯集一卷、集杜詩一卷、紀年錄一卷、拾遺一卷、附錄二卷、
 【評論】 天祥平生の大節今古に照耀す、著作も亦極めて雄贍、長江大河の如く、浩瀚際なし、農田餘話に獨忠義の一時に冠たるのみならず、亦斯文間氣の發見なり、といへるは決して虚語に非ざるなり。

●魯齋集二十卷(未見)

【作者、題名】 宋の王柏撰す、柏字は會之、魯齋と號す、婺州金華の人、業を何基の門に受け、立志居敬の旨を授かり、専ら經學を究む、咸淳十年(一九三四)卒す、年七十八、文憲と諡す、著す所、讀易記、大象衍義、讀書記、書疑、詩疑、讀春秋記、論語衍義、太極衍義等有り。
 【傳來、體裁】 柏が六世の孫、四川按察司僉事迪の編みし所にして、明の正統八年楊溥の序有りといふ、

●拙軒集六卷

【作者、題名】 金の王寂撰す、寂字は元老、蘇州玉田の人、天德二年進士に登り、大定二年太原祁縣令と爲り、河北西路兵馬副都總管中都副留守等に歴官し、明昌間、轉運使に終る、文肅と諡す、
 【傳來、體裁】 原本久しく佚して傳はらず、(清)初永樂大典より錄出して六卷と爲し武英殿に刻す、即ち今本なり、其目左の如し。
 賦、五七言古詩共一卷、五六七言律詩、五言排律共一卷、七言律詩、七言排律、五六七言絕句、逸句共一卷、詞一卷、表牒記一卷、序、帖、啓、書後、祭文、行狀、墓誌銘、哀詞共一卷。
 【評論】 寂の詩、清刻鏡露、憂々獨造の風有り、古文亦博大疏暢、大定明昌の間に在りて卓然として作者たるに愧ぢず。

●湛然居士集十四卷

【作者、題名】 元の耶律楚材撰す、楚材、字は晋卿、
 て、天興中、尙書省左司員外郎に官す、金亡びて復仕へず、宋の寶祐五年(一九一七)卒す、年六十八。
 【傳來、體裁】 好問の集は(元)の張德輝の類次せしものにして、中統嚴氏の初刻本ありしが、久しく佚して傳はらず、今世に行はるるものは(明)の弘治中、沁州の李翰の刊本、或は之を翻刻したるものなり、予が見たる者は(清)の張穆の校梓に係る重刻本にして、首に道光三十年張穆の序あり、次に李冶、徐世隆、杜仁傑、王鶚、段成己、余謙、儲懽、李瀚、魏學誠の舊序、傳、銘及び目錄あり、凡て詩十四卷、文二十六卷なり其目左の如し。

遼東丹王八世の孫なり、太祖に従ひ四方を平定し、太宗の時、官中書令に至り、太宗十五年(一九〇三)卒す、年五十四、至順元年廣寧王に追封し、文正と諡す、
 【傳來、體裁】 清の錢大昕の補元史藝文志に、湛然集三十五卷を著録せり、未だ見ず、又中書都事宗仲亨の輯めし文集十四卷あり、此に記する者是なり、首に孟攀麟、王鄰、行秀中の三序あり、每卷の首に其目次を示し、前の七卷は詩、後の七卷は詩文相混せり、末に李微芳郭、无名人の二後序あり。
 【評論】 楚材は典籍に博通し學に於て窺はざるなし、故に其詩修詞を好まず、又間、禪悅の語を參ふ、而して大旨必ず風教に歸す。

●元遺山先生全集四十卷附年譜三種

新樂府四卷續夷堅志四卷附錄一卷
 補載一卷

【作者、題名】 金の元好問撰す、好問字は裕之、秀容の人、遺山は其號なり、興定五年の進士、内郷令を歴

古賦、五言古詩共二卷、七言古詩二卷、雜言一卷、樂府一卷、五言律詩一卷、七言律詩三卷、五言絕句一卷、七言絕句三卷、宏詞一卷、碑、銘、表、誌、碣共十四卷、碑銘一卷、墓銘、碑表共一卷、記四卷、序、引共二卷、銘、贊、頌共一卷、書、疏、雜禮共一卷、上梁文、青詞、祭文、題跋共一卷。
 其年譜三種は凌廷堪・翁方綱・施國祁三家の編訂したるもの、就中施氏輯訂に係るものは、表を作り前に世系を載せ、次に紀年時事出處詩文の四段に分ち、互

に相對照せるを以て、尤も點檢し易し、其新樂府四卷は清の華希閔の原校にして、續夷堅志四卷は、好問の自纂なり、即ち洪景廬の夷堅志に繼ぎしものにして、前に余集、王東、孫道明等の原跋あり、其附錄一卷は、則ち儲曜の哀輯せるものにして、又華希閔の増補を附す、而して卷末補載一卷は、施國祁の輯録する所にして、中州集十四則以下諸家の詩集文集詩話に於て遺山に關する詩文を採萃せり。

〔評論〕 好問の才雄に學瞻なる、金元間に於て詩文共に大宗たり、其詩は興象深邃、風格適上にして、宋南渡以後江湖諸人の習無く、亦江西流派、生拗蠶蟻の失無し、古文に至りては繩尺嚴密衆體悉く備はり、其碑版誌銘諸作の如きは、尤も法度あり。

● 陵川集二十九卷 附錄一卷

〔作者、題名〕 元の郝經撰す、經字は伯常、陵川の人、世祖位に即き、經を以て翰林侍讀學士と爲し、宋に使せしむ、時に賈似道に阻まれ、羈囚すること七年、後、宋より歸り、至元十五年(一九三八)卒す、年五十三、文忠と諡す、著す所續後漢書、易春秋外傳、

骨挺拔、其師元好問と雁行するに足れり。

● 魯齋全書七卷

〔作者、題名〕 元の許衡撰す、衡の傳と題名とは魯齋心法の條に出づ。

〔傳來、體裁〕 初、衡七世の孫暉、明の郝亞卿、其遺文を輯め未だ竟はらず、河内の教諭宰廷俊、繼て之を成し、何塘之が序を爲れり是即ち舊本なり、其目左の如し。

魯齋小像、贊、許氏宗派總圖、族譜共一卷、語錄二卷、直說大學要略、讀易私言、小學大義等の遺書共一卷、雜著、書簡共一卷、詩、章、樂府、編年歌括共一卷。

凡て六卷なり、卷七は附録にして、古今題詠を收む、後、應良其編次の失當を病み、重ねて之を編し、又大學中庸直解等を増入し、蕭鳴鳳、名を改めて遺書といひ、(衡の書尚散佚する者多し、故に全書といふ可からず、由て改めて遺書といふなり) 凡て八卷、附録二卷とし、嘉靖四年汗に刻す、是を新本とす、予未だ之を見ざるも、四庫提要によれば、其目左の如し。

大極演原古錄、通鑑書法等あり、(元史本) 陵川は其里名にとる。

〔傳來、體裁〕 延祐五年、經の門人集賢大學士郭貫、官に請ひて、此集と續後漢書とを刊行せり、其後官版散佚せしが、(明)の正德十四年李淑淵鄂州に重刊し、陳鳳梧之に序せり、(清)の康熙四十四年、陶自悅、李本を得之を梓にせんとせしが、未だ果たさず、僅に序を製して其首に辨せり、乾隆三年、正鏐始めて之を校刊し、諸書の經に涉る者を集めて、別に附録と爲せり、即ち今本なり、其誌、傳、行狀、官誥、劉咨及び元明人の原序は皆首に冠せり、其目左の如し。

賦一卷、古詩六卷、歌詩五卷、律詩二卷、絕句一卷、圖說一卷、論三卷、雜著文、哀辭共一卷、祭文、箴、銘共一卷、贊、說共一卷、書二卷、記三卷、序三卷、述擬一卷、奏議一卷、碑文二卷、墓誌銘二卷、使宋文移三卷。

〔評論〕 其生平の大節炳として古今に耀く、而して學問文章俱に根柢有り、大極先天圖の諸説及び周易春秋諸傳の經術に於ける、尤も深奥を極む、故に行文自ら雅俚雄深、宋末庸腐の習無し、詩も亦神思深秀、天

語錄二卷、小學大義、直說大學要略、大學直解共一卷、中庸直解、讀易私言、讀文獻公撰著説、陰陽消長一篇共一卷、奏疏一卷、雜著、書、狀共一卷、詩樂府共二卷。

附録は像、贊、誥、敕の類を收むといふ。

〔評論〕 其文章修詞に意無し、而して自然明白醇正なり、諸體の詩亦具に風格有り、尤も講學家の得難き所なり。

● 靜修集十卷

〔作者、題名〕 元の劉因撰す、因字は夢吉、靜修は其號なり、應州の人、初訓詁疏釋の説を究めしが、後、濂洛關閩の書を讀み、其微を發くに至れり、至元十九年承德郎右贊善大夫と爲り、未だ幾ならず、母疾を以て辭し歸る、二十八年徵して集賢學士嘉議大夫に任せられしが疾を以て固辭し、同三十年(一九五三)卒す、年四十五、延祐中翰林學士資善大夫を贈り、容城郡公に追封し、文靖と諡す、著す所、四書集義精要、丁亥集(詩)、易鑿辭説は、其自撰する所、餘の文集十餘卷、小學四書語録は、皆門生故

友の録する所なり。(元史本 傳參考)

〔傳來、體裁〕 初め靜修自ら丁亥詩集五卷を訂し、盡く他文を取つて之を焚く、卒後門人等其軼藁を哀め、樵菴詩集一卷、遺文六卷、拾遺七卷を得、後、又楊俊民續集二卷を得たり、其後屏山の賈彝復附錄二卷を増入し、合して三十卷と爲し、至正中官刊して世に行はる、未だ見ず、此本は(明)の蔣如萃の梓刊せる者にして、首に方義壯の序、次に牒文、次に像贊、次に總目及び目錄あり、凡て十卷なり、其目左の如し。

理學、說、記、序、書共一卷、文、題跋、疏、贊、雜著、銘、碑銘、哀辭共一卷、賦、五言古詩共一卷、七言古詩一卷、五言律詩一卷、七言律詩一卷、五言絕句、詩一卷、七言絕句詩一卷、和陶詩、辭、雜言、樂府、先世業事記共一卷、附錄追贈靜修文一卷、

〔評論〕 其文適健排暴、適に許衡の上に在り、其詩風格高邁にして比興深微、固然として作者の室に入る、北宋以來、講學諸儒にして文章を兼擅する者、因一人のみ。

● 歸田類藁二十卷

〔作者、題名〕 元の張養浩撰す、養浩の傳は三事忠告の條に出づ、此集は其致仕して田野に退休せしとき手録せしものなればかく名づく、又一に雲莊集、或は雲莊類藁といふ。

〔傳來、體裁〕 自序に稱す、田野に退休し、得る所の詩文集九百餘首を録し、岐ちて四十卷と爲し、名けて歸田類稿といふと、富珠哩獅の序には三十八卷に作り卷數同しからず、文淵閣書目に、養浩の雲莊傳家集一冊、雲莊集三冊を載せ、焦竑の國史經籍志に、張養浩文忠集十八卷を載すれども、書名卷數養浩の序と符せず、千頃堂書目に歸田類藁の名ありて卷數を擧げず、吳師道の序に曰く、公の雲莊集四十卷は已に龍興の學宮に刻す、臨川の危太朴、其治教大體に關する有る者を擧りて此編と爲し、予に屬して序せしむ」云々と、是に由りて之を觀れば、龍興に刻せる者は即ち養浩手編の類稿にして、其名を改めて雲莊集といひしなるべく、文淵閣書目の三冊本も亦此と同本なるべし、而して危太朴の刪定本は經籍志の張文忠集十八卷にして、所謂傳家集は後人の擧拾

● 剡源集三十卷

〔作者、題名〕 元の戴表元撰す、表元字は帥初、慶元奉化の人、宋の咸淳中進士乙科に登り、建康の教授に除せられ、元の大德中信州の教授と爲り、再び調せられ婺州に教授す、後疾を以て辭し歸り、至大三年(一九七〇)卒す、年六十七、(元史儒學 傳參考) 剡源は其郷里の地名、自號して剡源先生といへり。

せる者に係り、外集補遺の類ならん、(四庫提要 傳參考) (明)季二十七卷本あれども、漏略多く編次亦倫類を失せり、(清)乾隆帝の時儒臣に命じ此廿七卷を本とし、別に永樂大典載する所を探り、其重複を刪り、其遺闕を補ひ、雜文八十八首、賦三首、詩四百六十二首を得、釐めて二十四卷となせりといふ、是四庫に著録する者なり、然れども未だ見ず、予が見たる者は、乾隆間周永年、毛瑩二氏の校刊せる者にして、首に張氏の自序、富珠哩獅、吳師道の原序、及び周永年の序あり、蓋し二十七卷本を修訂し定めて二十卷と爲し、者なり、其目左の如し。

經筵御旨、奏疏共一卷、上書、表、與人書共一卷、序一卷、記二卷、碑一卷、神道碑一卷、碑二卷、表誌一卷、傳、哀詞、祭文共一卷、賦、擬雅、詩、操共一卷、五言古詩二卷、七言古詩一卷、五言律詩一卷、七言律詩二卷、五言絕句、七言絕句共一卷。

〔評論〕 其疏議諸篇は風采稜々たり、時事を叙述せる諸詩は忠厚悱惻、藹乎として仁人の言なり、共に卓然として傳ふ可し。

〔傳來、體裁〕 (明)初宋濂曾て之に序して刻す、凡て二十八卷ありしが、久しく佚して傳はらず、嘉靖中四明の周儀其舊目を得て廣く蒐輯し、釐めて三十卷と爲し、表元の後裔洵復之を梓行せり、後、(清)の黃宗義選録して四卷となし之を刻せり、予が見たる周儀本は宜稼堂叢書中に在りて、清の道光二十年の刻梓に係る、首に四庫提要別集剡源集の全文を載せ、次に萬曆九年戴洵の序、同年周汝礪の小引、洪武四年宋濂、萬曆元年周儀の二序、元史本傳、自序目錄あり其目左の如し。

記六卷、序八卷、墓誌二卷、墓表一卷、題二卷、跋、銘、箴、贊、述、碑共一卷、賦一卷、史論一卷、雜著、祭文共一卷、書、啓、疏、傳、劄子、說、論

共一卷、講義二卷、五言古詩、排律一卷、七言古詩一卷、五七言律詩共一卷、七言律詩、五七絶句共一卷、附札記。

宗義本は未だ見ず、故に之を措く。

〔評論〕 表元少くして王應麟、舒岳祥に従ひて學ぶ、故に淵源最も正し、顧嗣立の元詩選に稱す、宋季文章の氣萎蕪し而して詞靡穢せり、帥初慨然斯文を振起するを以て己の任と爲す、其學博にして肆、其文清深雅潔、朽腐を化して神奇と爲す、至元大徳の間、東南の士文章を以て一時に大名有るもの帥初一人のみと、殆ど溢美に非ず。

● 牧菴文集三十六卷(未見)

〔作者、題名〕 元の姚燧撰す、燧字は端甫、河南の人、牧菴は其號なり、初め秦王府文學と爲り、歴官して翰林學士集賢大學士と爲る、延祐元年(一九七四)卒す、年七十六、諡して文と曰ふ。(元史本傳參考)
〔傳來、體裁〕 原集久しく佚して傳はらず、(明)の文淵閣に目に牧菴集二十冊あり、而して諸家の著録皆未だ之に及ばず、劉昌、黃宗義等百方求めても遂に得

ずといへば、蓋し已に久しく佚せしものならん、惟永樂大典收むる所頗る多し、清初排比編次して三十六卷と爲す、之を元文類の選べる所に較ぶれば、則ち十の五六多く、詩詞亦多く諸家選本の外に出つしといふ。

〔評論〕 予曾て元文類中に於て燧が文を讀む、大抵韓愈に胚胎し、雄深雅健、春容盛大、西漢の風有り、宋末の弊習を一洗せり、同時の張養浩、燧の集に序して曰く、才氣驅駕、縱橫開闔、紀律惟意、要を煩に約し、奇を腐に出す、江海駛せて蛟龍掣み、風雲薄りて元氣溢ると溢美の言に非ず、虞集と並びて元代文家の大宗たり。

● 雪樓集三十卷

〔作者、題名〕 元の程文海撰す、文海字は鉅夫、字を以て行はる、建昌の人、少くして吳澄と同じく學ぶ、宋亡びて後、季父飛卿に従ひ元に入り、翰林學士承旨に累官す、延祐五年(一九七八)卒す、年七十、著す所玉堂集類、奏議存藁等有り、(元史本傳參考) 鄂州に白雪樓有り、鉅夫此に寓す、故に集に名づく。

〔傳來、體裁〕 初め其著玉堂集、奏議存稿及び詩文雜著各一部を爲せり、後、其男大本輯録し、門人揭傒斯校正して四十五卷と爲す、至正廿三年、某重編して三十卷とす、即ち現行本なり、首に元の至正六年歐陽玄、同十四年李好文、洪武二十九年熊一劍、彭從吉、四家の序、年譜、元史本傳、行狀、像贊、目錄、後に其曾孫潛の跋有り。

制詔、諭、冊文共一卷、制詞三卷、敕賜、碑共五卷、(以上玉堂類藁)、奏議存藁一卷、記二卷、序、引共二卷、碑銘七卷、銘、箴、贊、說、祭文、祝文、書啓共一卷、題跋、雜著共二卷、詩五卷。

〔評論〕 鉅夫は宏才博學、綆直の名臣なり、其文春容大雅、北宋館閣の餘風有り、其詩亦磊落俊偉、具に氣格有りて元祐の諸人に減せず。

● 清容居士集五十卷

〔作者、題名〕 元の袁桷撰す、桷字は伯長、慶元の人、其官集賢學士翰林直學士知制誥等を歴て、至治元年侍講學士に遷る、泰定四年(一九八七)卒す、年六十一、文清と諡す、其著す所此集の外、易說、春秋

說あり、(元史本傳參考) 清容居士は其號なり。

〔傳來、體裁〕 此本は清の道光二十年刻の宜稼堂叢書本なり、首に四庫提要別集類、清容居士集の全文を載せ、次に上海の郁松年の引ありて稱す、「其書は先生没後に刻し、原本僅に存せり、前明永樂の時、已に間、殘闕せり、往年余之を購ひ得たるもの尙完具せり云云」と以て此書の傳來を知るに足る、左に其目を擧ぐ。

卷一は賦、卷二は騷辭、卷三は四五言古詩、卷四、五は五言古詩、卷六、七は七言古詩、卷八は歌行、卷九は五言律詩、卷十、十一、十二は七言律詩、卷十三は七言絶句、卷十四は五言絶句、雜詩、卷十五、十六は開平集、卷十七は贊、箴、銘、記、卷十八、十九、二十は記、卷二十一より二十四は序、卷二十五は碑、卷二十六、二十七は神道碑銘、卷二十八より三十一は墓誌銘、卷三十二は行狀、卷三十三は表、誌、卷三十四は傳、卷三十五は内制、卷三十六、三十七は外制、卷三十八は表、牋、三十九、四十は啓、疏、卷四十一は議制、卷四十二は策問、問答、卷四十三は祭文、祝文、卷四十四は雜文、卷四十五より五十は題跋、附録は謚議、

墓誌銘、札記。

〔評論〕 楠少くして戴表元、王應麟、舒岳祥等に從ひ、學問本づく所有り、其文章博碩偉麗、盛世の音有り、其冊誥の文、典禮の議、一時の冠冕たり、其詩亦俊邁高華、能く自ら一家を成し、鄧文原等と大德延祐の間に颯起し藝林の領袖と稱せらる。

● 吳文正公集四十九卷 外集三卷

〔作者、題名〕 元の吳澄撰す、澄字は幼清、撫州崇仁の人、至大元年國子監丞と爲り、皇慶元年司業に陞り、尋で集賢直學を拜し、英宗位に即き超えて翰林學士に遷り、後、老を以て致仕す、朝其功德を褒し、資善大夫を加へ、金織文綺を賜ふ、至順二年(一九九一) 疾を得て卒す、年八十五、臨川郡公に封せられ、文正と諡す、其居る所の草屋に程鉅夫題して草廬と曰ひしより、學者澄を稱して草廬先生と曰ふ、其著す所、易纂言、春秋纂言、禮記纂言、書纂言等あり、又皇極經世書、老子、莊子、太玄經、樂律、及び八陣圖、郭璞非書等を校正せり。

〔體裁〕 此書四庫に著録する者は、澄の孫當の編し、永

樂四年五世の孫燿の重刊する所にして、凡て一百卷あり、未だ見ず、予が見たる者は成化二十年板にして、首に成化二十年伍福の序、從祀孔廟議、神道碑、元史列傳、行狀、目錄有り、其目左の如し。

雜著一卷、答問二卷、說四卷、書一卷、啓疏一卷、序十卷、記、碑七卷、銘、後跋共一卷、題跋五卷、墓碑一卷、墓表三卷、墓誌銘、行狀共七卷、祭文、制誥共一卷、五七言絕句一卷、五七言律二卷、五七言古詩一卷、樂府一卷。

外集は、首に學基一篇を載せ、末に叙録綱領、雜識、雜著各、一卷あり、終に元統二年譚觀の跋有り。

〔評論〕 揭傒斯、澄の碑文を撰して稱す、皇元命を受け天眞儒を降し、北に許衡有り、南に吳澄有りと、然るに衡は講學を好み、澄は著書を好み、衡の文は明白質樸、澄は則ち詞華典雅、頗る能く文士と短長を争ふ、篤實衡に及ばずと雖、而も文章は較、之に勝る。

● 陳定宇集十六卷 別集一卷

〔作者、題名〕 元の陳樸撰す、樸字は壽翁、休寧の人、

〔評論〕 樸、篤く朱子の學を信ず、其文大抵皆醇正質實、詭誕に涉らず、詩は其長する所に非ず。

● 松雪齋集十卷 外集一卷 續集一卷

〔作者、題名〕 元の趙孟頫撰す、孟頫字は子昂、宋の太祖の後、湖州の人、年十四、父の蔭を以て入りて仕へ宋亡びて家居す、至元二十三年行臺侍御史程鉅夫詔を奉じ遺逸を江南に訪ひ、孟頫を得て見ゆ、即ち兵部郎中を授かり、集賢直學士に遷る、延祐三年翰林學士承旨榮祿大夫に累官し、惠宗至元二年(一九九六) 卒す、年六十九、魏國公に追封せられ、文敏と諡す、著す所尚書注、琴原、樂原あり、其書篆籀分隸真行草は古今に冠絶し、遂に之を以て天下に名あり、

〔元史本傳〕 松雪齋は其書室の名なり。

〔傳來、體裁〕 楊載孟頫の行狀を作りて稱す、著す所松雪齋詩集あり、卷數を詳にせずと、(明)の萬曆間、江元禧の編する所は寥寥數篇のみにして實に完本に非らず、(清)に至り曹培廉此書を校刊し、其顛末を述べて曰く、「此集十卷公の子仲穆の編次せし所、至元間花溪の沈氏に刊し、外集一卷亦沈氏家塾の刊せ

七歳のとき進士の業に通じ、十五郷人皆之を師とす、延祐の初、詔して科擧を以て士を取る、樸選に中りしも遂に禮部に赴かず、家に教授し門戸を出でざるこゝ數十年、元統二年(一九九四) 卒す、年八十三、其居る所の堂を定宇と曰ひ、學者稱して定宇先生といふ、樸尤も朱子を信じ、乃ち四書發明、書傳纂疏、禮記集義等を著し、凡て諸儒の説にして朱氏に畔くものあれば、刊して之を去り、其未だ備はらざるものは、之を補ひ以て朱説を世に明にせり。(元史儒學傳參考)

〔體裁〕 是集は其族孫嘉基の刊する所にして、首に康熙三十四年翁叔元の序、次に三十五年吳苑の序、次に三十四年戴紱の序、次に三十四年戴有祺の序、次に三十三年嘉基の自序、次に二十六年請修先賢祠宇疏、次に元史本傳、次に年表、次に紀言、次に目錄あり、其目左の如し。

序二卷、跋一卷、孝辨論一卷、說二卷、答問一卷、隨錄一卷、傳、行狀、墓誌、墓表共一卷、書一卷、啓、疏、文共一卷、記、銘、贊、賦共一卷、試文、講義共一卷、考評、祭文、祝文共一卷、陳氏譜略一卷、詩、詩餘一卷。別集は其補遺なり。

し所、家大人舊抄本あり、近ごろ長洲の友人より原刻本を借り、其謬缺を正し、他書及び石刻載する所を哀め、之を家藏の墨跡に合し、續集一卷と爲し、其行狀謚文は仍卷末に列せり云云」と明の焦竑の經籍志、清の四庫に著録する者は共に十卷なれば正に此本と同じかるべし、此本首に戴表元の序、培廉の小引あり、其目左の如し。

賦一卷、五七言古詩二卷、五七言律五六七言絕句二卷、雜著、序共一卷、記、碑銘共一卷、碑銘二卷、制、贊、銘、題跋、樂府共一卷。

外集續集は俱に補遺なり。

〔評論〕 其詩文は虞集、楊載、范梈、揭傒斯の間に揖讓し、甚だ其後に出でず、其才藝を論すれば、風流文采當時に冠絶し、但に翰墨の元代第一たるのみに非ざるなり。

●淵穎集十二卷附錄一卷

〔作者、題名〕 元の吳萊撰す、萊字は立夫、浦陽の人、延祐七年春秋を以て郷試に貢して第せず、後、薦められ、歸州路長蘄書院山長に調せられしが、未だ行か

ずして卒す、時に至元六年(二〇〇〇)年僅に四十有四、其門人金華の宋濂等私に謚して淵穎先生といふ、蓋し萊の經義玄深にして淵の如く、文詞貞敏にして穎の如きを取る、著す所尙書標說、春秋世變圖、春秋傳授譜、古職方錄、孟子弟子列傳、楚漢正聲、樂府類編、唐律刪要等あり。(元史黃潛傳參考)

〔傳來、體裁〕 元史藝文志に、吳萊文集六十卷、淵穎集十二卷宋濂訂とあり、此本は即ち宋濂の編みしものを、(清)初に至り十五世の孫、由憲敬義等が重刻したるものにして、首に康熙四十九年查遷の序、次に胡助、劉基、胡翰、祝鑾、莊起元の五序、及び目錄あり、卷一賦は十三世の孫吳守偉、吳守備、卷二、三、四古詩は十四世の孫德煥、卷五論は運、卷六讀辯は德浩、卷七傳は德暄、卷八頌辭は德祚、卷九銘は德治、卷十序は德暄、卷十一序は德潤、德暄、卷十二は後序後題なり而して其目次は各卷相出入して畫然たる分類に非らず、附錄一卷は其碑文謚議を載す、又別に萊の詩のみを摘録したる淵穎集十二卷は、清の胡鳳丹の校梓に係るものなり。

〔評論〕 萊、黃潛、柳貫と並びに學を宋方鳳に受け、再傳して宋濂と爲り、遂に明代文章の派を開く、元

人中に在りて屹然詞宗の目を負へり、其文斬絶雄深、奏漢間の人に類す、他人は其淺陋を思ふるも、萊は獨其宏博を思ふ、其詩亦刻意鍛鍊、句奇にして語重く、虞集と雁行して愧無し。

●道園全集七十六卷

〔作者、題名〕 元の虞集撰す、集字は伯生、道園は其號なり、臨川崇仁の人、官に仕へて奎章閣學士に累遷し、日に經史中の心徳治道に切なる者を取り經筵に陳進す、凡て顧問を承くれば必ず事に隨て規諫し、一時の大典冊成其手に出づといふ、至元八年(二〇〇八)卒す、年七十有七、仁壽公を贈り、文靖と謚す。(元史本傳參考)

〔傳來、體裁〕 集の著したる道園學古錄五十卷は、在朝、應制、歸田、方外の四集に分ち、至正間、集の門人劉伯温校梓し、歐陽玄之が序を爲れり、後、集の從孫洪嗣、又遺藁十六卷を編輯せり、(清)の乾隆の時に至り、江右の崇仁、又其集を梓行せり、此に著録する者は其後道光十七年孫鎮の刊本にして、首に至正六年歐陽玄の原序、李本の後序、孫鎮の引、元

史本傳、總目あり、其總目左の如し。

學古錄詩集八卷(八百十九篇)、道園詩遺藁八卷(七百〇三篇)、學古錄文集四十四卷(七百四十九篇)、道園文遺藁十六卷。

〔評論〕 有元一代、作者雲興す、大德延祐以還尤も極盛たり、而して詞壇の宿老は必ず虞集を以て大宗と爲す、其群材を陶鑄し菁華を薈萃し、典にして實、衍にして淨なるに至りては之と與に京する無し、集の元に在る實に猶韓愈の唐に在る歐陽修の宋に在るが如し。

●清閼閣全集十二卷

〔作者、題名〕 元の倪瓚撰す、瓚字は元鎮、梁溪の人、雲林と號す、仕を好まず文事を事とす、五湖三泖の間に往來すること二十餘年、洪武七年(二〇三四)疾を以て卒す、年七十四、(卷末墓誌銘參考)清閼閣は其齋名ならん。

〔傳來、體裁〕 此集舊二刻有り、皆歲久しくして漫漶せり、(明)の萬曆中、其後裔特に重刊して、每卷の首に八世孫理瑛、九世孫錦鈺謹輯、十世孫永建、十一

世孫仁勇、亮采參訂の字様有り、詩八卷、卷各、一體、之に樂府、贊、題跋、雜著、尺牘、各一卷、雲林遺事一卷、誌銘、傳、贊、諸家題咏一卷を合し、共に十五卷と爲せり、(清)の康熙中曹培廉其瑣碎を病み、改編して十二卷と爲し、前後の次序悉く原本に従へり、今記する所は即ち是なり、首に天順四年錢溥、萬曆十九年王穉登、同二十八年顧憲成、高攀龍、陳繼儒五家の舊序、曹培廉の小引、凡例、目錄有り、其目左の如し。

四言古二卷、五言律、絶一卷、七言古二卷、七言律二卷、七言絶二卷、樂府、贊、題跋共一卷、雜著、尺牘共一卷、外紀二卷。

外紀は後人の編輯に屬する遺事、傳銘、題咏を載す、又倪雲林詩集六卷集外詩一卷有りて元人十種中に收めらる、末に虞集の題雲林詩集後七絶一首、天師張の題雲林先生小像贊、王賓の故元處士雲林先生旅葬誌銘、周南老の墓誌銘有り、其目左の如し。

四五古一卷、七古一卷、五律一卷、七律一卷、五絶一卷、七絶一卷。

附録は雜著、樂府を録し、集外は四五七古、長短句、五七律、五六七絶を載す、是明の毛晋の輯めしもの

なり。

〔評論〕 其文は約、其辭は微、其志は潔、其行は廉、其文小にして其指極めて大、獨先生以て之に當るに足ると、是れ明の陳繼儒が倪瓚を評する言たり、稍過譽に失すと雖亦未だ曾て盡く當らずと爲さず。

●九靈山房集三十卷補編二卷遺稿

四卷

〔作者、題名〕 元の戴良撰す、良字は叔能、浦江の人、明の太祖金華の定めしとき、用ひて學正と爲す、良官を棄て逃れ去り、洪武六年南に歸り、姓名を變じて四明山中に隱る、十五年徵されて京に入る、朝廷之に官を授けんとせしが、老疾を以て辭す、太祖怒り羈留して釋さず、次年(二〇四三)四月、京師に卒す、年六十七、遂に明祿を食まず、良世、金華九靈山下に居る、故に自號して九靈山人といふ。

〔傳來、體裁〕 元史藝文志に戴良九靈山房集三十卷に作り、四庫提要に集三十卷補篇二卷を著し、同存目に遺稿五卷を載す、此本は清の胡鳳丹の校梓にして、

考) 文獻は其諡なり。

〔傳來、體裁〕 潛の門人宋濂曰く、著はす所日損齋稿二十五卷あり、濂歿後縣尹胡惟信與梓し以て傳ふと、又危素編する所の本あり二十三卷となす、共に未だ見ず、此本は十卷にして宋濂の輯めたるを、張儉編次せる者なり、首に嘉靖十年、張儉の刊序、宋濂の集序、目錄あり收むる所左の如し。

卷一は五古、五律、五絶、卷二は七古、七律、卷三は賦、贊、騷、答問、策問、策題、雜著、勸農文、樂章、祭文、祝文、表、牋、箋、公文、啓、書傳、行述、制、箴、行狀、詞、卷四は題跋、跋、卷五、六は序、卷七は記、筆記、附録、卷八は墓記、銘、墓誌銘、卷九は墓誌銘、卷十は碑文、廟碑、神行碑、墓碑、墓碣、墓表。

〔評論〕 其文は儒家の風格あり、清園切密、事詳にして詞嚴なり、意完くして氣充ちたり、徒らに雕繪を事とするものゝ比擬す可きに非ず、元末の一家名なり、宋濂、王禕、皆其門より出づ、潛又頗る詩を能くす。

●黃文獻文集十卷

〔作者、題名〕 元の黃潛撰す、潛字は晉卿、金華の人、延祐二年同進士出身を賜ふ、翰林侍講學士より知制誥に至る至正十七年(二〇一七)卒す年八十一、

(元史本傳)

首に鳳丹の序ありて稱す、本朝四庫書目に、戴先生の集三十卷補二卷、又遺稿五卷を載す、玆刻の卷數と相符せず、而して遺稿五卷搜訪するも得ず云云と、されど後之を得たるものか、遺稿四卷を校梓し、同治十二年之が序を作り以て完備に幾からしめたり、此集目次雜然として分類を立てず、止だ卷十より十七を鄧游稿と爲し、卷十八、十九を越游稿と爲し、卷二十より二十六は古詩及樂府、卷二十七は律詩、絶句、卷二十八は辭、卷二十九は律詩、卷三十は外集として九靈先生畫像贊を載せたり、遺稿の首には鳳丹の序、至正二十五年揭汝、王禕、桂彦良の三原序、康熙六十一年曾安世の題詞、朱彝尊の明史擬傳、洪武十二年宋濂の題、正統十年從曾孫統の原跋目錄あり。

〔評論〕 其詩、風骨高秀、一時に崛起す、大抵宗國を懷ひて慷慨激烈、磊落抑塞の音多し。

◎誠意伯文集二十卷

〔作者、題名〕 明の劉基撰す、基字は伯温、青田の人なり、太祖金華を下し、括蒼を定むるに及び、時務十八策を上り、禮禮甚だ至る、浙東搖動の時、基衢に至り屬邑を安んじ、復處州を復し、亂を定む、太祖の業、一に基の謀に依る、太史令より誠意伯を授けられ、洪武四年(二〇三二)老を以て郷に歸り卒す。

〔明史本傳參考〕

〔傳來、體裁〕 基の詩文雜著、及び郁離子四卷、覆瓿集十卷、寫情集二卷、春秋明經二卷、犁眉集、本各、自ら書を爲し、成化中、巡按浙江御史戴賢等、始めて一帙に合したり、是四庫に收めたる者なり、予が見たる者は彭直上の鑒定本にして、前の十卷は基の裔孫孤嶼元奇の重梓に係り、後の十卷は裔孫標男宗炳の編し、芝田令の萬里の續梓せしものなり、前に雍正八年萬里の序、乾隆十一年高居寧の序、隆慶六年謝廷傑の序、及び寫情集、郁離子、翊運錄、覆瓿集、犁眉公集等、諸書の序、又此集の重録重編重刻等の序あり、卷首には像、贊、行狀、祠堂記、祠碑記、祭文、敕語、碑銘、哀辭、神道碑等あり其目左の如し。

書、誥、頌、表等共一卷、郁離子二卷、序、記、雜著等共五卷、詩十卷、春秋明經二卷。

〔評論〕 其文闕深肅括、宋濂、王禕に亞ぎ、其詩沈鬱頓挫、高啓と相拮抗す、才華は啓に及ばずと雖蒼蔚は之に過ぐ。而して其學問智略は耶律楚材、劉秉忠に似て、文章は二人の上に在り。蓋し詩文並に明初一作手なり。

◎王忠文公集二十四卷

〔作者、題名〕 明の王禕撰す、禕の傳は元史の條に出づ、忠文は其諡なり。

〔傳來、體裁〕 禕の集、舊、華川前集十卷、後集十卷ありしが、鄱陽の劉傑等、合編して此本となせり、首に胡翰、胡行簡の二序あるは、前集の爲に作り、宋濂、蘇伯衡の二序は、後集の爲に作り、楊士奇の二序は、此本の爲に作りしもの、而して前の十二卷は、劉傑編輯、劉同校正と題すれども、十三卷以下は、則ち其編輯者校正者を互に交換せり、左に目をめぐ。

卷一は賦、四五古詩、卷二は五言今古詩、五言律、排律、七言律、排律、卷三に絶句、歌曲、卷四は

論、辯、原、卷五より七は序、卷八より十一は記、卷十二は詔、誥、表、檄、銘、卷十三十四は擬、操、卷十五は議、贊、頌、箴、卷十六は碑、書、卷十七は題跋、辭、卷十八より二十一は雜著、卷二十二は傳、字說、行狀、卷二十三は哀辭、誄、祭文、墓銘、卷二十四は墓銘、墓表。

〔評論〕 禕は黃潛を師とし、宋濂を友とし、學淵源有り、故に其文醇朴宏肆、北宋の遺風有り、濂の序に稱す、其文凡て三變せり、初年作る所は幅程廣くして運化宏し、壯年出遊の後氣象益、以て沈雄、四十以後に暨びて乃ち渾然天成條理爽はすと、深く禕を知るものと謂ふ可し。

◎翠屏集四卷

〔作者、題名〕 明の張以寧撰す、以寧字は志道、古田の人、元の泰定中の進士、六合尹に進み、順帝の朝國子助教より、翰林侍讀學士知制誥に累遷す、明に至り仕へて侍讀學士となる、以寧古田屏翠山下に家す、故に學者翠屏先生と稱せり。

〔傳來、體裁〕 此集の文は、其子孟晦彙次し、宋景濂

之に序し、詩は其門人石仲謙編次し、劉三吾、陳南淮捐監本と家本とに據り重刊せしものなり、首に洪武二十七年劉三吾、宣德三年陳璉、洪武二十二年陳南賓の三家序、目錄有り。

四五七言古詩一卷、五七言律、五七言長律、五七言絶句共一卷、序一卷、說、贊、銘、跋、記、墓誌銘共一卷。

〔評論〕 陳南賓曰く、其長篇は浩汗雄豪にして李に似、其五七言律は渾厚老成にして杜に似、其五言選は優柔和緩にして韋に似、衆體を兼ねて之を具ふと、劉三吾其文を評して曰く、先生の文古にして精粹、皆能く時文の窠臼を脱去し自ら一家を成せりと。

◎說學齋集四卷

〔作者、題名〕 明の危素撰す、素字は太璞、金谿の人、元の至正元年、大臣の薦を以て經筵檢討を授けられ、官太常博士兵部員外郎より大司農丞禮部尙書に遷る、元亡びて明に仕へ、洪武二年翰林侍講學士を授けらる、御史王著等論じて素は亡國の臣侍從に列す

可らずといひ、遂に詔して和州に謫居す、歲餘にし
て卒す、年七十餘、(明史文苑傳) 說學齋は其書室の名な
らん。

〔傳來、體裁〕 其文集、本五十卷ありしが、明代已に散
佚して存せず、此四卷本は、嘉靖三十八年歸有光が
其手稿を吳氏より得て刊したるものにして、凡て一
百三十三篇なり、而るに有光の跋には一百三十六篇
と稱し、王懋竑の白田雜著に其集の跋ありて、賦三、
贊二、銘二、頌三、記五十有一、序七十有六、共に
一百三十八首といへり、以上の三本皆其篇數相符せ
ざるは、恐らくは傳寫の誤にして、實は則ち一本な
らん。

〔評論〕 素、晩節終えず、世に笑はる、然れども文章
は、屹として元末明初の一家たり。

◎清江詩集十卷 文集三十一卷

〔作者、題名〕 明の貝瓊撰す、瓊字は廷琚、崇徳の人、
年四十八始めて郷薦を領し、明初徴されて元史を修
め、國子監助教中都國子監に進み洪武十一年(二〇
三八) 卒す、(明史宋訥傳) 清江、其號なる可し。

學士知制誥を拜し、四年國子司業に遷り、旨に忤ひ
て安遠知縣に謫せられ、又召されて禮部主事と爲り、
後、侍講學士兼贊善大夫に進み、九年學士承旨とな
り、寵待特に厚し、洪武十三年(二〇四〇) 卒す、
年七十有二、著す所篇海類編あり、正徳中追諡して
文憲といふ、(明史本傳) 此集宋學士といふは、宋濂の官
名を取り、又一に宋文憲全集といふは、其諡號を以
て名づけしなり。

〔傳來、體裁〕 濂、舊、朝京稿、潛齋集、翰苑集、變坡集、
芝園龍門子、浦陽人物記、雞山集ありしが、是皆一時
の故舊、己が見を以て集めしものなり、後、嘉靖中、
知浦江縣韓叔陽が以上の諸集を彙輯して一編と爲
し、共に三十六卷九百六十七篇、題して宋學士全集
といふ、是れ雷禮の序のいふ所、及び四庫全書著錄
本に同じ、而るに新刊宋學士全集凡例には、三十三
卷一千三百五十篇とありて、雷氏の序と同からず、
我國翻刻本、亦三十三卷にして末卷を上下に分ち、
附錄補遺を載記せり、首に雷禮、陳元珂の序及び凡
例目錄あり、其凡例の大意に曰く、體製相同き者は、
類を別ち卷を分け、本朝を先にし勝國を後にし、君
を先にし臣を後にす、本朝應制の作、凡そ意義關係

〔傳來、體裁〕 兩浙名賢錄に瓊の集二十卷を載す、明
の萬曆中刻する所は、止だ三卷のみ、共に未だ見ず、
今記する所は清の桐郷の金檀の刊本にして、首に康
熙五十八年東孫華、金檀二家の序、諸家紀略、目錄
有り、詩集の目は左の如し。

卷一は賦、卷二は四五古詩、卷三は五古、卷四五
は七古、卷六は五律、卷七八は七律、卷九は五七
排律、卷十は五七絕句、詩餘。

文集の目は左の如し。
海昌集一卷、雲間集七卷、兩峰集三卷、金陵集十
卷、中都稿九卷、歸田稿一卷。

〔評論〕 瓊は詩を楊維禎に學び、其長所を取りて其短
所を取らず、故に溫厚の中自然秀拔の所あり、文も
亦沖融和雅、一唱三嘆の音あり。

◎宋學士全集 三十三卷

〔作者、題名〕 明の宋濂撰す、濂字は景濂、其先は金
華の人、濂に至り浦江に遷る、初、吳萊に就きて學
び、又柳貫、黃潛の門に入る、元の至正中、翰林編
修に薦められしが行かず、洪武二年召されて翰林院

の大なる者は、先づ之を刻して餘は皆後に序列す云
云、其目左の如し。

表、賦、頌、詔、誥共一卷、記三卷、序五卷、傳
二卷、題二卷、跋一卷、箴、銘共一卷、碑一卷、
神道碑、墓碑共二卷、墓銘二卷、墓誌銘二卷、墓
碣一卷、墓版文、表、辭、誌共一卷、行狀、諡議、
雜著共一卷、雜著、書三卷、辭一卷、贊一卷、
言古詩、五言古詩共一卷、五言律、五言長律、七
言古詩、七言律、七言長律、七言絕句、四五言長
短句、五七言長短句共一卷、附錄一卷。

〔評論〕 元末の文章、吳萊、柳貫、黃潛を以て一朝の
後勁と爲す、濂初め萊に従ひ後、貫と潛とに學びて
其授受具に源流有り、明史本傳に稱す、其文醇深演
進、古の作者と竝べり、朝に在りて郊社宗廟山川百神
の典、朝會燕饗律曆衣冠の制、四裔貢賦賞勞の儀よ
り、元勳鉅卿碑記刻石の詞に至るまで、咸以て濂に
委す、開國文臣の首と爲る、士大夫門に造り文を乞
ふ者、先後相踵ぐと、以て其一代の文宗たりしを知
る可し。

◎全室外集二卷

〔作者、題名〕 明の釋宗泐撰す、泐は天台の人、廣知禪師の高弟なり、嘗て命を承け西域に至り、佛典を究め五年にして還る、太祖授くるに官を以てせしが、固辭して受けず、太祖爲に免官説を撰せり、胡惟庸逆を謀り詞泐に連なりしが、特に赦し給ふ、泐意度豁如、軀幹魁碩、實に當代法門の偉器たりといふ、(四庫提要) 徐(一) 聖の序(二) 全室は其號なり、釋氏佛經を以て内學となし、詩文を以て外となす、故に外集といふ。

〔傳來、體裁〕 千頃堂書目には十卷に作り、四庫提要には外集九卷、續集一卷に作る、蓋し一は卷を合し、一は卷を分ちたる者ならん、此書未だ見ざれども提要によれば、外集は

應制詩、樂府、供佛讚佛諸典共二卷、古近體詩六卷、疏、題跋共一卷。

にして、續集は詩文合編なりといふ、予が見たる者は我寛文九年版にして、從子永祚の彙粹せるものなり、首に徐一變の序有り、其目左の如し。

欽和御製詩、樂府、五七古共一卷、五七律、七六絕句、疏共一卷。

〔評論〕 其學は辯博、才は環偉、識は超邁、而して皆聲詩に發す、其詩空寂に淪まず、功德を推叙すれば則ち發揚蹈厲以て郊廟に薦めしむ可く、節義を褒贊すれば則ち感慨激昂以て風俗を厲ましむ可し。

◎遜志齋集二十四卷

〔作者、題名〕 明の方孝孺撰す、孝孺字は希古、一に希直といふ、寧海の人、幼にして警敏、雙眸炯々書を讀むに日に盈寸、郷人目して小韓子と爲す、長じて宋濂に學び、恒に王道を明にし太平を致すを以て己の任と爲す、惠帝即位し召されて翰林侍講と爲り、明年侍講學士に遷り、國家の大政に與る、建文三年燕兵境に入り防戰大に苦み、帝自焚し、孝孺執はる、是より先、成祖は孝孺を殺すの意無くして曰く、孝孺を殺さば天下讀書の種絶えんと、是に至り詔を草せしむとす、孝孺悲慟の聲、殿陛に徹し、成祖と論じ筆を地に投じて且つ哭し且つ罵る、成祖怒りて市に磔せしむ、孝孺慨然として死に就く、時に建文四年(二〇六二)年四十六、(明史本) 遜志齋は其書室の名なり。

之を發するに足ると稱せり。

◎解學士全集十二卷

〔作者、題名〕 明の解縉撰す、縉字は大紳、吉水の人、洪武二十一年の進士、永樂の初、翰林學士と爲り、出で、江西參議に官す、後漢王高煦の爲に讒せられ、獄に下りて死す、(明史本) 此集一に文毅集といふ。

〔傳來、體裁〕 縉著す所、白雲彙、東山集、太平奏疏等の書有りしが、歿後多く散佚せり、天順の初金城の黃諫始めて其遺文を集め三十卷と爲す、後、亦漸く減す、嘉靖中、羅洪先、復、縉の從孫と相輯めて十二卷と成す、後(清)の康熙五十七年、其十世孫悅が補輯する所の文毅集は十六卷有りといふ、予未だ其本を見ず、今記する所は即ち洪先寺の輯むる所にして、嘉靖中刻する所なり、首に晏文輝、羅洪先、天順元年黃諫、同八年潮郡朔四家の序、總目、年譜有り。

卷一は古詩、五律、五絶、七律、七絶、文、卷二は四五古、五絶、五律、五排、七古、卷三は七絶、卷四は七律、七排、賦、辭、詩餘、卷五六は序、卷

〔傳來、體裁〕 孝孺節に殉してより、其文禁甚だ嚴なりしが、門人王稔、其遺稿を藏めしを以て、宣德後、始めて稍傳播せり、されど其中闕文脱簡頗る多し、後黃孔昭、謝鏗共に之を編して、三十卷拾遺十卷とす、正徳中、顧璘合して二十四卷となし、台州に重刊す、是四庫に收むる者にして、其目左の如し。

雜著八卷、書三卷、序三卷、記三卷、題跋一卷、贊一卷、祭文、誄、哀辭共一卷、行狀、傳共一卷、碑、表、志共一卷、古體詩一卷、近體詩一卷。

次に崇禎中張道益の増定本は、これと卷數同じくして、目次は書三卷を表、箋、啓、書共三卷に分てるのみして、他は相同じ、たゞ像贊、年譜、拾補、外紀を附するを異なれりとす、拾補は遺篇を輯めたるものにして、凡て一卷、序、記、古詩に分てり、外記亦一卷にして、後人の孝孺に關する、詩文等を網羅せる者なり。

〔評論〕 孝孺の學術醇正、而して文章は乃ち縦横豪放、頗る東坡龍川の間に出入し時に科場の習あり、蓋し其志漢唐を駕軼し三代に復するに在り、毅然自命の氣、發揚蹈厲して時に筆墨の間に露る、故に鄭瑗の井觀瑣言にも、其志高く氣鋭くして詞鋒浩然以て

七は記、卷八は傳、贊、行狀、墓表、卷九は墓誌銘、卷十は祭文、書簡、雜述、題跋、卷十一は七古、長短句、五律、挽歌詞、卷十二は七律、雜述。

〔評論〕 縉才氣放逸、筆を下せば自ら休む能はず、當時才子の目有り、李東陽の懷麓堂詩話に謂へり、其詩全稿無く、眞偽相半す、蓋し後人の竄亂に出づる者多と爲す、然るに其中佳句間、存せり、其奏議の大庖西封事、白李善長宛諸篇の如きは、俱に明白剴切なりと。

● 東里集二十八卷續集六十二卷

〔作者、題名〕 明の楊士奇撰す、士奇の傳は歷代名臣奏議の條に出づ、東里は其號なり。

〔體裁、傳來〕 正集は士奇の自定する所、文集二十五卷、詩集三卷なり、文集は黃淮之に序す。

卷一、二は記、卷三より八は序、卷九より十一は跋、卷十二、十三は神道碑銘、卷十四は墓碑銘、卷十五、十六は墓表、卷十七より二十は墓誌銘、卷二十一は墓誌銘、墓碑銘、墓表、卷二十二は傳、卷二十三は表、詩、贊、文、卷二十四は辭、賦、

銘、箴、卷二十五は序、碑、記、銘。

詩集は楊溥之に序す、

四言、辭、五古、七言長短句、樂府共一卷、五律五排、七律共一卷、五絶、六絶、七絶、集句共一卷。

續集は子導編して七十二卷となし、成化九年韓雍之を刊す、嘉靖庚戌嚴嵩校補して重刊す、後黃如桂士奇五世の孫載鳴より家藏を得、增補校正して定めて六十二卷となして刻す、即ち今本なり、其目左の如し。

卷一より五は記、卷六より十五は序、卷十六より二十三は跋、二十四より二十六は神道碑、卷二十七は神道碑、墓碑銘、卷二十八は墓碑銘、卷二十九より三十三は墓表、卷三十四より四十は墓誌銘、卷四十一、四十二は墓誌銘、卷四十三は傳、說、卷四十四は碑、頌、表、卷四十五は像贊、銘、贊、卷四十六は哀辭、祭文、祝文、卷四十七は書、啓、手簡、卷四十八より五十は錄、卷五十一、五十二は家書、卷五十三は家訓、遺訓、卷五十四は四言詩、辭、五古、卷五十五、五十六は五古、卷五十七は七古、長短句、樂府、卷五十八は五律、五長律、

聯句、卷五十九は七律、七長律、卷六十は五六七絶、卷六十一は七絶、卷六十二は七絶、集句、詩餘。

卷首に嚴嵩、李時勉、黃如桂の序、卷末に韓雍の跋あり、此書四庫に著録する者は、東里全集九十七卷別集四卷と題し、此集は正續二篇に分ち、正集載する所較少くして、續集は殆んど之に倍するに至るといへり、されば予が見たる者と相同じきが如くなるも、卷數合はざれば異本なるやも知らず、別集は未見なれども、提要によれば代言錄、聖諭錄、奏對錄、士奇の傳誌各一卷なりといふ、又李東陽の懷麓堂詩話によれば續集は士奇の棄却せし者なる由を記すれども、李時勉の序に先生病在床以_レ其續文稿_レ授_レ予曰其爲_レ我序_レ之、以_レ付_レ孺子_レ藏_レ於家_レ予文末_レ成而老生歿_レとあれば然らざるが如し、又東里文集といふ者あり、十八卷にして十六卷までは正集と同じくして、十七卷に墓碣銘、十八卷に墓誌銘、辭、祭文を收め、終りに黃淮の序を附せり。

〔評論〕 明の三楊並び稱せらる、而して士奇の文章特に優れり、制誥碑版多く其手に出づ、仁宗歐陽修の文を好む、士奇の文、亦平正紆餘其髣髴を得たり、

故に鄭瑗曰く、其文典則浮泛の病無く、雜錄敘事極めて平穩力を費さず、後來館閣の著作沿ふて流派と爲り、遂に七子の口實と爲れりと、然るに李夢陽の詩に「宣德文體多渾淪、偉哉東里廊廟珍、」といひ、亦盡く其長所を没せず、蓋し其文新裁に乏しと雖而かも古格を失はず、遂に數十年の風氣を主持する偶然に非るなり。

● 薛文清集二十四卷

〔作者、體名〕 明の薛瑄撰す、瑄の傳は讀書錄の條に出づ、文清は其諡號なり。

〔傳來、體裁〕 此集は其門人關西の張鼎の編みし所なり、初、刊本あらず、瑄の孫刑部員外郎祺、其稿を以て常州の同知謝庭桂に付せしが、雕版未だ竟らずして罷む、弘治二年、楊亨其稿を毘陵に得、朱氏鼎又亨より之を得たり、字句舛譌多く、其舊に非らざるを以て、釐正校定して三たび稿を易え、詩文一千七百篇を得たり、釐めて廿四卷となし之を刻す、予が見たる者は萬曆中の重刻本にして、前に弘治二年張鼎の序、次に文清公の像、次に萬曆四十二年八

代の孫薛士跋弘の及び目録あり、其目左の如し。

卷一は賦、古詩、卷二は古詩歌、卷三は歌行、卷四五は絶句、卷六より十は律詩、卷十一は雜著、卷十二は書、卷十三より十七は序、卷十八、十九は記、卷二十は哀辭、卷二十一より二十三は碑誌、卷二十四は箴、銘、贊、章奏。

〔評論〕 明代の醇儒を論ずれば瑄は實に其第一たり、而して文章雅正にして絶えて語録鄙詞を參へず、其詩理路に涉るもの百中一二に過ぎず、餘は皆冲澹高秀、吐言天拔、往々陶韋の風有りて、亦絶えて有韻の講議を作らず。

●康齋文集十二卷

〔作者、題名〕 明の吳與弼撰す、與弼字は子傳、臨川の人、年六十を踰え、躬ら隴畝を耕し、郷人を教育す、天順元年、石亨薦めて左春坊左諭徳を授けしが就かず、成化五年(一一二九)卒す、年七十有九、海内稱して康齋先生と號す、著す所日録あり。(明史傳考)

〔傳來、體裁〕 此集初め撫州に刻して四卷ありしが、

歳久しくして漫漶せり、嘉靖五年の刻本は分ちて十二卷とせり、後、崇禎壬申江南提學副使陳維新又之を刻せり、是明史藝文志、四庫に著録する者なり、其目を左に示す。

詩七卷、奏、疏、書、雜著共一卷、序一卷、記一卷、目錄一卷、跋、贊、銘、啓、墓誌、墓表、祭文共一卷。

〔評論〕 與弼の學、能く朱陸の長を兼採して刻苦自ら立つ、其弟子陳獻章は、其靜觀涵養を得て遂に白沙の宗を開き、胡居仁は其篤志力行を得て餘干の學を啓けり、明一代の兩派遞に傳ふ、皆與弼より之を倡へり、其功未だ出處の異議日録の誣誕を以て盡く没す可からず、其詩文亦皆淳實理に近し。

●定山集十卷

〔作者、題名〕 明の莊家撰す、景字は孔陽、在浦の人、成化二年の進士、官南京吏部郎中に至る、弘治十一年(一一五八)卒す、年六十三、天啓元年文節と追諡す、學者稱して定山先生と爲す。(明史本傳考)

〔傳來、體裁〕 此集は陳常道編輯し、周滿校正し、劉

縉 陳應奎、龍壽山同刊す、首に嘉靖十四年湛若水、正徳元年王華、嘉靖十四年聞人詮三家の序、目錄有り、其目左の如し。

五七言古一卷、五七言絶一卷、五律一卷、七律二卷、序二卷、記一卷、記、墓表、墓銘共一卷、雜著、傳、跋、詞、祭文共一卷。

〔評論〕 湛若水の序に稱す、古詩は宛々乎として漢魏の遺響なり、其近體は迥々乎として唐宋の別調なり、其文は駉々乎として先秦兩漢を追ひ韓柳歐蘇の後に從へりと、然れども其文多くは太極圖の義を闡きて全く講學の僻有り、詩も亦擊壤集の體を作りて格に入らず好みて乾坤太極日月陰陽等の語を用ふ、唯頗る別趣有るのみ。

●白沙集

〔作者、題名〕 明の陳獻章撰す、獻章字は公甫、新會の人、正統十二年の舉人、官翰林院檢討に至り、弘治十三年(一一六〇)卒す、年七十有三、萬曆中文廟に從祀し、文恭と追諡せり、(明史儒林傳考) 白沙は新會の里名なり。

〔傳來、體裁〕 白沙の詩は門人湛若水編次し、山東及び梧州に刻せるも未だ其半に滿たず、文は子弟門人の抄録する所、四方に散在して、未だ會輯して一集となす者あらず、弘治十六年、羅僑深く之を慨し詩文を哀集して全集となし、十八年之を刻す、後嘉靖三十年蕭世延之を重刻す、其後傳本漸く稀に舛誤多し、萬曆十七年高爲表、李君壽等と善本を集めて校合し楊起元之を刻す、天啓元年王安舜之を増補重刻す、凡て十二卷あり。

卷一は奏疏、序、記、論、卷二、三は書簡、卷四は墓誌銘、墓表、祭文、賦、銘、啓、說、傳狀、題跋、卷五は五古七古、五律、卷六は五律、五排、卷七は七律、卷八は七律、七排、卷九は五六七絶、卷十、十一は七絶、卷十二は附録。

附録は行狀、墓表等なり、卷首には王安舜の序、陳寰、湛若水、楊起元の原序次に目錄あり、目錄の末には別卷詩教十五卷とあれど予が見たる者には別卷なし、詩教は湛若水が白沙の詩を意釋したる者なり、又萬曆四十年黃淳校正し何熊祥重刻せし者あり、是四庫に著録せる者にして、凡て九卷なり。

卷一は奏疏、序、記、卷二、三、四は前書と同じ、

卷五は古選、五、六、七絶、卷六は七絶、卷七は七絶、七律、卷八は七律、四言詩、五排、七排、古風歌行、卷九は補遺と附録。

補遺は五七古、五六七絶、五律、五排、古風歌行を、附録は行狀墓誌銘等を收む、卷首には何熊祥、黃淳、林裕陽の序、及び高簡、湛若水、張詡の原序、卷末に羅僑、項喬の原序あり、此本は(清)初何九疇遺篇を哀集して序四首、記二首、題跋一首、書百五十八首、各體詩五十五首を得、之を舊刻に合し、重編して六卷、卷首一卷となし、願嗣協校正して刊行す、其目左の如し。

卷一は奏疏、序、記、論、說、題跋、雜著、贊、銘、墓誌銘、墓表、傳、行狀、祭文、卷二は書、卷三は書、啓、卷四は賦、四言、五古、七古、五律、卷五は七律、五排、七排、五絶、六絶、卷六は七絶、附録。

附録は故舊門人の白沙に贈りし詩文を輯めたる者なり、卷首は何顧二家の序、以上諸家の原序、從祀疏議、行狀、墓誌銘、像贊、目錄なり。

〔評論〕 獻章の學、靜を以て主と爲し、學者に教ふるに但、端坐澄心を以てす、頗る禪に近し、故に其詩文

も亦自然に高僧の偈に似たり、世に莊泉と並稱して陳莊林といふは虛稱に非ざるなり。

懷麓堂集 一百卷

〔作者、題名〕 明の李東陽撰す、東陽字は賓之、茶陵の人、天順八年の進士、庶吉士に選ばれ、侍講學士に累遷し、諸官を歴仕して太子少保、禮部尙書に進み、文淵閣大學士を兼ね、正德十一年(一一七六)卒す、年六十有八、大師を贈り、文正と諡す、(明史本) 懷麓堂とは其齋名なり。

〔傳來、體裁〕 明史藝文志に、懷麓堂前後集九十卷、續彙二十卷に作り、四庫提要に此版は後火災にかかりて殘闕せり、康熙二十一年、茶陵州學正、廖方達校刻して世に弘む、即ち現行本なり、凡て詩彙二十卷、文彙三十卷、詩後彙十卷、文後彙三十卷、雜彙十卷。

なりとあり然れども楊一清の序にいふ所は現行本と同一なれば明志誤なるべし、予が見たる者は四庫著錄本と同じ、嘉慶八年李宗翰の重鐫し、集末に法梧門の東陽の年譜を附刊せる者なり、卷首に正德丙子

楊一清、同戊寅新貴、康熙二十年蔣永修、嘉慶十四年李宗瀚の序、乾隆壬午彭維新の文正公論、明史本傳、目錄あり、詩稿は五部に分つ、其目左の如し。

○日部二卷、古樂府、○月部五卷、長短句、五言古、○光部四卷、七言古、五言律、五言排律、七言律、○天部四卷、七言律、○地部五卷、七言律、七言排律、五言絶句、六言絶句、七言絶句、詞曲。

文稿は五部に分つ、其目左の如し。

○山部六卷、賦序、○河部六卷、序、記、○壯部五卷、記、論、書、手簡、傳、雜著、○帝部六卷、雜著、策問、頌、表、狀疏箴、銘、引、贊、題、跋、誄、祭文、哀詞、行狀、○居部七卷、墓表、碑銘、誌銘。

詩後稿は二部に分つ、其目左の如し。

○大部卷五、古樂府、長短句、五言古、七言古、五言律、五言排律、七言律、○平部五卷、七言律、七言排律、五言絶句、七言絶句。

文後稿は五部に分つ、其目左の如し。

○無部六卷、賦、序、記、○以部六卷、記、表、凡例、書、傳、說、雜著、策問、○報部七卷、贊、題、銘、箴、跋、祭文、墓表、碑銘、○願部五卷、碑銘、誌銘、

○上部六卷、誌銘。

雜稿は予が見たる者及楊一清の序共に雜記とあれは、四庫誤なるべし、三部に分つ、其目左の如し。

○萬部三卷、南行錄、北上錄、○年部五卷、講讀錄、東祀錄、集句錄、哭子錄、○書部二卷、求退錄、詩話。

就中古樂府のみは何孟春の音注あり。

〔評論〕 東陽文柄を主持する三十四年、明代の一大家たり、然るに李夢陽、何景明、弘治正徳の間に崛起し、復古學を唱へてより、天下嚮然として之に従ひ、東陽の光焰幾ど熾きたり、其後七子の餘波流れて剽竊と爲り、論者乃ち稍、復東陽の舊說を理め、互に相攻訐し輾轉休まず、平心にして論すれば、何李は齊桓晋文の功烈天下に震ひ、而して霸氣終に存するが如し、東陽は衰周弱魯の力強横を禦ぐに足らず、而して典章文物尙先王の遺風有るが如し。

篁墩集九十三卷 拾遺一卷 雜著十卷

別集二卷

〔作者、題名〕 明の程敏政撰す、敏政の傳は宋遺民録の條に出つ、新安に黃墩あり、昔晋の新安太守黃積の居りし所、子孫世此に宅す、故に黃墩といふ、羅願の新安志、朱子の文集載する所、皆黃墩と書す、敏政は朱子の郷に生れ、乃ち黃は本筆字なりと稱し、遂に改めて黃墩といひ、之が爲に記を作り、且以て自號と爲す。

〔體裁、傳來〕 是集は敏政の自訂せし所にして首に李東陽の序、目錄、終に正徳二年門人李汛の後序有り、其目左の如し。

卷一より四は青宮直講、卷五は經筵講章、經筵日講、卷六七は經筵日講、卷八は經筵講章、卷九は策制、卷十は奏議、表、策、卷十一は考、論、辯、說、卷十二は辯、卷十三より二十は記、卷二十一より三十五は序、卷三十六より三十九は題跋、卷四十一は行狀、卷四十二より四十八は碑誌、表、碣、卷四十九五十は傳、卷五十一五十二は祭文、卷五十三五十四は書簡、卷五十五は書、卷五十六は箴、銘、贊、卷五十七は疏、致語、啓、劄、障語、卷五十八五十九は雜著、卷六十は賦、詞、諫、卷六十一は、頌歌曲、古歌府、操、詩、卷六十二

より九十三は詩。

拾遺以下皆其詩文雜著を補綴せしものなり、千頃堂書目には此外に外集十卷、行素稿一卷を著録し、四庫には九十三卷のみを收め、疑ひて拾遺以下は仰はらずとせり、蓋し彼已に佚して我に傳はりしものか。

〔評論〕 文格詩格、皆頽唐を免れず、其鄭玄を黜け蘇軾を詆るは、堅く門戸の見を執れるなり、然れども學ぶ所博深、故に往々考證に資す可きもの有り。

楓山文集四卷

〔作者、題名〕 明の章懋撰す、懋字は德懋、蘭谿の人、成化二年の進士、世宗位を嗣ぎ南京禮部尚書に進め其家に即きて存問せしむ、而して懋已に卒せり、年八十六、太子少保を贈り文懿と諡す、學者稱して楓山先生と爲す。(明史本傳參考)

〔體裁〕 此集は明の嘉靖二十三年の重刊本にして、首に余祐、元樸、虞守愚三家の序、目錄有り、其目左の如し。

奏疏一卷、書簡一卷、雜著、說、銘、傳、墓誌銘、墓表、祭文共一卷、序文、碑、記、五七言絶句、

大復集三十八卷

〔作者、題名〕 明の何景明撰す、景明字は仲默、信陽の人、弘治十五年進士に第し、中書舍人を授かり、李夢陽の輩と古詩文を倡へて相頡頏す、所謂七才子の一人なり、陝西提學副使に擢られ、嘉靖元年(二一八二)疾によりて歸り、未だ幾ならずして卒す、年三十有九、其著す所雍大記あり(明史文苑傳參考) 大復山人は其號なり、故に集に名づく。

〔傳來、體裁〕 明史藝文志に六十四卷に作る、四庫全書に著録したるものは三十八卷本にして予が見たるものと其卷數を合す、首に嘉靖十年王廷相、同三年唐龍、同年康海、萬曆五年周子義の四序、目錄有り、其目左の如し。

賦二卷、辭一卷、古詩一卷、樂府二卷、五言古詩三卷、七言歌行五卷、五言律九卷、五言排律一卷、七言排律四卷、五六七言絶句一卷、七言絶句一卷、何子一卷、内篇一卷、疏、書一卷、序二卷、碑文、墓誌共一卷、行狀一卷、誄、祭文、雜著共一卷。尾に附録一卷を附し、景明の傳、行狀、墓誌銘、墓碑、祠記、及び皇明名臣言行錄、陝西通志、南通志

五七言律、五七言長篇、賦、贊共一卷。

〔評論〕 懋は文章を爲るを喜まず、亦著述に於て意を留めず、故に生平作る所此に止まる、然るに存する所皆辭意醇正、和平温厚の風有り、明代諸儒に在りて尤も淳實たり。

顧東橋全集三十九卷

〔作者、題名〕 明の顧璘撰す、璘字は華玉、上元の人、弘治九年の進士、廣平知縣を授けられ、南京刑部尚書に至り、年七十餘にして卒す、璘同里の陳沂、王章と金陵の三俊と號せられ、後、朱應登起りて四大家の名有り、(明史文苑傳參考) 東橋は其號なり。

〔體裁〕 首に蔡羽の序有り。

浮湘稿四卷(詩)、國寶新編傳、緩慟集(詩)共一卷、山中集四卷(詩)、馮几集五卷、馮几續集二卷(文)、息園存稿十四卷(詩)、同上九卷(文)。

〔評論〕 璘才名を負ひ何李と相上下す、其詩唐人に短幾し風調を以て勝る。

中州人物志(以上四書)を録す。

〔評論〕 其詩俊亮逸健にして又能く秀潤清藻なり、李夢陽と名を齊しくし渾雄宏大は夢陽に及ばずと雖も夢陽の粗横無し、文も亦班馬の體貌を具ふ、弘治正徳の間、夢陽と俱に復古の學を唱へ、詩文の體を一變せり、然るに二人の天分相同しからず、故に徑を取る稍異なり、集中夢陽に與へて詩を論ずるの書を觀るに、反復詰難し斷々然として兩ながら相下らず、平心にして之を論すれば夢陽の雄邁と景明の諧雅とは美を駢へて雙璧たるに愧ぢず、以て有明一代の大家と稱するに足る。

● 震澤文集三十六卷

〔作者、題名〕 明の王鏊撰す、鏊字は濟之、吳の人、成化十一年の進士、官、戸部尙書文淵閣大學士に至り、正徳二年少傅を加へられ、嘉靖三年(一一八四)卒す、年七十五、太傅を贈り文格と諡す、(明史本傳參考)震澤は地名なり。

〔體裁〕 此書は明の嘉靖版にして、首に嘉靖十五年霍縉の序、目錄有り、其目左の如し。

として儒者の言、亦與弼の日記に動もすれば夢に孔子を見しと稱する等に似ざるなり。

● 整菴存稿二十卷

〔作者、題名〕 明の羅欽順撰す、欽順の傳は困知記の條に出づ、整菴は其自號なり。

〔傳來、體裁〕 欽順の弟欽誦の儀訓錄に曰く、欽順の舊稿筒に盈つ、手自ら変存し、餘は悉く焚き去り、二子に謂て曰く、此等文字世間少からず、慎みて人に示すなかれ、姑く留めて自ら觀るは可なりと云、以て其志趣を想見すべし、明史藝文志に整菴稿三十三卷に作れるも、未だ見ず、今記する所は明の天啓二年版にして、首に天啓二年黃汝亭、郭甫、嘉靖十三年整菴、同二十三年俞時の四序、劉應秋の引、目錄、尾に天啓二年嗣孫珽任の跋有り、其目左の如し。
記二卷、序七卷、疏一卷、題跋、銘、贊、傳共一卷、墓表、墓碑、墓碣共一卷、墓誌銘一卷、行述、墓銘共一卷、祭文一卷、五七古、五律共一卷、五排、七律共一卷、七律、七排、歌共二卷、七絶、小詞共一卷。

賦、詩共一卷、詩七卷、聯句、近體樂府共一卷、序、引、說共五卷、記三卷、内制一卷、奏疏二卷、碑、傳共四卷、行狀、墓表共一卷、墓表、碣共一卷、誌銘、哀詞、祭文共五卷、頌、贊、箴、銘共一卷、雜著二卷、題跋一卷、書一卷。

〔評論〕 明史に稱す、鏊は博學有識、議論明暢、弘正間の文體爲に一變せりと。

● 胡文敬公集三卷

〔作者、題名〕 明の胡居仁撰す、居仁の傳は、居業録の條に出づ、文敬は其諡なり。

〔體裁〕 此集は門人余祐の編集せしものにして、首に弘治十七年余祐の序及び目錄あり、其目左の如し。
書一卷、序、記、祭文、祝文、墓誌、銘、說、論、辯、雜著共一卷、賦、歌、詩共一卷。

〔評論〕 居仁學を吳興弼に受く、而して醇正篤實なるは其師に過ぐることを遠し、其學治心養性を以て本と爲し、經世宰物を以て用と爲し、忠信を主とするを以て先と爲し、放心を求むるを以て要と爲す、故に史に稱す薛瑄の後惟、居仁一人のみと、其詩文皆粹然

〔評論〕 欽順の學、窮理格物を以て宗と爲す、力めて王守仁の良知説を攻む、其大旨具さに作る所の困知記中に見る、其詩文に至りては固より好む所に非ずと雖、文は典雅醇正、猶未だ成化以來の舊格を失はず、詩は擊壤派に近しと雖、有韻の語録たるに至らず、講學家に在りて文質兼備する者と云ひて可なり。

● 少谷全集二十一卷

〔作者、題名〕 明の鄭善夫撰す、善夫字は繼之、閩縣の人、少谷と號す、弘治十八年の進士、戸部主事より累遷して南京吏部郎に至り、嘉靖元年(一一八二)卒す、年三十九。(明史文苑傳卷末墓誌參考)

〔體裁〕 此書鄭奎光の校訂本にして、崇禎中版刻する者なり、首に崇禎八年孫昌裔の序有り其目左の如し。
卷一は騷、賦、四五言古、卷二は五言古、卷三は七言古、五言律、卷四より六は五言律、五言排、卷七は七言律、卷八は七言律、七言排、五六七言絶、卷九は序、卷十は記、卷十一は傳、卷十二は誌銘、卷十三は祭文、卷十四は疏、卷十五は雜著、卷十

六は跋、卷十七より二十は書、卷二十一は諸家の作りし墓誌銘集序等。

〔評論〕 其詩氣格を以て主と爲す、評者以て杜の骨を得て、李夢陽、何景明と伯仲すといひ、閩中詩人の冠といひ、明史文苑傳には閩中の詩文林鴻、高棟より後百餘年を閔し鄭善夫之に繼げりといへり、今此集を觀るに雄大は夢陽に及ばず、雋逸は景明に及ばず、而も亦其弊無く穩にして健なり、邊貢等と相下上するに足れり。

●空同集六十三卷

〔作者、題名〕 明の李夢陽撰す、夢陽字は獻吉、慶陽の人、弘治七年の進士、戶部主事を授けられ、上書して旨に忤ひ獄に繋かる、武宗立ちて劉瑾の爲に山西布政司經歷に謫せられ、後、江西提學副使に遷さる、肯て往かず、遂に籍を削られ、嘉靖八年(二一八九)卒す、年五十有八、世に夢陽、何景明、徐禎卿、邊貢、朱應登、顧璘、陳沂、鄭善夫、康海、王九思を並稱して十才子と號し、又夢陽、景明、禎卿、貢、海、九思、王廷相を七才子と號す、此諸人は並に詩を善くして

有り、而して氣以て之を斡旋するに足る、五七言律は盛唐の聲調を摹せり、但、絶句に至りては間、佳篇無きに非ずと雖竟に其所長に非ず、而して文は則ち秦漢の風貌に近く亦一體を成し、李攀龍、王世貞等の推尊する所と爲れり。

●邊華泉集八卷

〔作者、題名〕 明の邊貢撰す、貢字は庭實、華泉は其號なり、歷城の人、弘治九年の進士、官南京戶部尚書に至り、弘治七子の一なり、生平著書を好み、積みて、數萬卷に至る、一夕火有りて幾ど盡き、天を仰ぎて大哭して曰く、天我を喪せりと、遂に病を發して卒す。(明史文苑傳參考)

〔傳來、體裁〕 四庫全書著録本は、詩八卷文六卷、凡て十四卷にして、詩集は貢の歿後、嘉靖十七年、其里人劉天民編輯し、文集は大名の魏允孚續刊せる者なり、今記する所は明の嘉靖版にして、詩文を合して八卷と爲せり、首に嘉靖二十三年李寵の序、目錄有り、其目左の如し。

四五七古一卷、騷、樂府、歌行共一卷、五律二卷、

皆一世を卑視す、而して夢陽之が尤たり、其著す所空同子あり、(明史文苑傳參考)空同は蓋し其自號なり。

〔傳來、體裁〕 明史藝文志に空同全集六十六卷とあり、四庫著録本も是に同じ、予が見たる者は、萬曆十五年蘇雨の重刻本にして六十三卷なり、首に蘇雨、王廷相、黃省曾等の序、次に目錄あり、其目左の如し。

賦三卷、古詩一卷、琴操、古調歌、楚調歌共一卷、樂府雜調一卷、樂府雜調曲二卷、五古詩八卷、七言歌行五卷、散篇一卷、五言律詩六卷、附排律二十九首、七言律詩五卷、附排律六首、七言絶句二卷、六言五言絶句、雜言共一卷、族譜一卷、上書一卷、狀疏一卷、碑文三卷、墓誌四卷、記二卷、序八卷、傳一卷、雜文三卷、書二卷、祭文一卷。

〔評論〕 其詩才力富健、氣魄極めて大なり、有明一代を籠罩するに足る、故に之を尊ぶ者は唐の李杜も以て尙ふる無しといひ、之を貶するものは古を食ひて化せず幼兒の學語に類すといふ、要するに皆篤論に非ず、今平心にして之を論ずれば、其七言歌行は實に明一代の大宗たるのみならず、李、杜、韓、蘇の後、歴代殆ど其倫を見ず、五言古體も亦能く漢魏の風格

七律二卷、五七絶、排律、長短句、六言近體共一卷、箴、銘、頌、贊、詩餘共一卷。

〔評論〕 其詩才情甚だ富み、能く沈穩の處に於て流麗を見る、興象飄逸にして語尤も清圓なり、徐昌毅の下辭君采の上に在る可し。

●王文成公全書

〔作者、題名〕 明の王守仁撰す、守仁の傳は傳習錄の條に出づ、文成は其諡號なり、是集一に王陽明全集といふ。

〔傳來、體裁〕 此書體裁一ならず、予が見たる者二本あり、一は三十八卷本にして、四庫に著録する者と同じ、首語錄三卷を傳習錄となす、附するに朱子晚年定論を以てす、乃ち守仁在世の時、其門人徐愛の輯むる所にして、錢德洪の刪訂する者なり、次は文錄五卷にして皆雜文なり、次は別錄十卷にして奏疏公移の類なり、次は外集七卷にして詩及び雜文なり、次は續編六卷にして文錄の補遺なり、皆守仁歿後、德洪の編次する所なり、次は附錄にして、年譜五卷、世德記二卷あり、德洪、王畿等の纂集する所な

り、其初め各本別行せしが、隆慶六年、謝廷傑、始めて合梓して以て世に傳へ、朱子全書の例に仿ひ以て之に名づく、一は二十二卷本にして、清初俞嶠の編する所なり、凡て類を以て輯め、頗る觀覽に便にせり、前に康熙十九年鄔景從、康熙十二年俞嶠、林雲銘、王令の四序あり、次に凡例、遺像、誥命、年譜、總目あり、其目左の如し。

書四卷、序一卷、記一卷、說、雜著共一卷、賦、騷、詩一卷、詩一卷、墓誌銘、墓表、墓碑、傳、碑、贊、箴、祭文共一卷、奏疏七卷、公移三卷、傳習錄一卷、語錄一卷。

其他數種あり、體裁各異なりといふも、未だ見ず、故に之を措く、此書の我國に傳はれるは、徳川氏の初世にして、三十八卷本なり、後二十二卷本傳はり明治十六年に至り活版に附せり。

〔評論〕當時の學術、守仁を以て一大宗と爲す、而して一再して猖狂橫決、流弊勝て言ふ可からず、然るに守仁に在りては則ち確然として自得の處有り、亦確然として自立の處有り、其動業氣節の如きは卓然として之を施行に見る、其文蘇洵に淵源し、而して博大昌達は之に軼きたり。詩亦秀逸致有り他の道學

一卷、雜文一卷、策一卷、題跋五卷、書十卷。

明史藝文志には此外に續集十卷を著録し四庫亦同じ、提要によれば、子楫の編める所にして、唐錦の序、陸師道の跋ありといふ、又錦、師道の言によれば外集四十卷ありといふ、共に未だ見ず。

〔評論〕其文大抵敷にして達、直にして俚ならず、典籍に根本して時事に剴切なり、徒に多を誇り靡を圖はす者と同日に語る可からず。集中載する所の家書に至りては、尤も情致あり、詩は則ち大曆十子に追歩し雅莊なりと雖風趣に乏し、遂に其文に若かず。

●升菴集八十一卷

〔作者、題名〕明の楊慎撰す、慎の傳は丹鉛總錄の條に出づ、升菴は其號なり。

〔傳來、體裁〕此集は慎の從子有仁の編みし所にし、萬曆中張士佩の訂刻本なり、蓋し士佩は丹鉛錄、譚苑醍醐、秋林伐山、卮言等の雜著より重複を削除し、分類彙編して八十一卷とせり、首に士佩の序あり、次に鄭旻、蔡汝賢の二跋及び目錄あり、其目左の如し。

者が禪偈に類する比に非ず、

●儼山集一百卷

〔作者、題名〕明の陸深撰す、深字は子淵、上海の人、弘治十八年の進士、庶吉士より編修を授けられ、國子司業祭酒を歴て、經筵講官と爲り、嘉靖十六年太常卿に官し、侍讀學士を兼ね、後詹事府詹事に進み、致仕して卒す、文裕と諡す。(明史文苑) 儼山は其號なり。

〔傳來、體裁〕此集は門人黃標校編し子楫刻す、首に費采、徐階の序、總目、細目あり。

賦一卷、歌二卷、謠、辭、行、四言古共一卷、五言古二卷、七言古四首附五律二卷、七律七卷、五絶三十首、六絶一首附七絶二卷、五排、七排、聯句、集句共一卷、雜體一卷、樂府三卷、樂章一卷、詩餘一卷、詩話一卷、冊、表共一卷、奏疏二卷、青詞、讀頌、讀儀文偈共一卷、頌贊一卷、詩微二卷、講章、策問共一卷、議、辯、解共一卷、銘一卷、引一卷、序十五卷、記五卷、史記二卷、傳三卷、墓誌銘十五卷、墓表一卷、行狀四卷、碑一卷、誄、辭、哀詞、祭文共

賦、雜文十一卷、詩二十九卷、經子史文詩字學等の論說、瓊語雜類選佛三十三卷、天文地理五卷、花木鳥獸三卷。

〔評論〕慎博洽を以て一時に冠たり、其詩六朝を吞吐し、明代に於て別に門戸を立つ、文は其詩に及ばざれども、猶古法を存し、何、李、諸家の窒塞艱澁にして句讀す可からざる者と撰を異にす、蓋し多く古書を見たるを以て、薰蒸沈浸、自ら鄙語無きなり、其論說致證に至りては、往々強識を恃み、原書を檢核するに及ばず、疎舛の處少からず、又氣を恃みて勝を求め、每說窒礙する處有れば、輒ち古書を造りて之を實にす、故に陳耀文等の詬る所と爲れり。

●楊忠愍公集四卷

〔作者、題名〕明の楊繼盛撰す、繼盛字は仲芳、椒山と號す、容城の人、嘉靖二十六年の進士、諸官に歴仕し數、兵部に調せられ忠諫を以て聞ゆ、嘉靖三十四年(二二一五)卒す、年四十、太常寺少卿を贈り忠愍と諡す。(明史本傳) (行狀參考)

〔體裁〕此書清の毛奇齡監し、朱永輝章鈺參訂し、四

世の孫聰端較正す、卷首に郝景春の序、世祖皇帝御製、表忠録の二序、隆慶元年の制誥、康熙三十七年章鉉の題詞、隆慶元年の祭文、魏裔介の作りし楊椒山先生傳、楊忠愍公像贊、目錄あり、奏疏一卷、序、引、跋、說、記、書、祭文共一卷、詩一卷。

凡て三卷なり、卷四は附録にして王世貞等の撰びし行狀、墓誌銘、碑記あり。

〔評論〕 繼盛は忠烈の士、詩文を以て著れず、其詞未だ工ならざれども、凜然の氣日月と光を争ふに足る、自ら磨滅す可からざるものあり。

● 甫田集三十五卷附録一卷

〔作者、題名〕 明の文徵明撰す、徵明初の名は璧、字を以て行はる、因て又字を徵仲と更む、衡山と號す、長洲の人、正徳の末、翰林院待詔と爲り、後、致仕して詩文書畫を事とす、就中書は李應禎に學びて其名天下に徧し、嘉靖三十八年(二二一九)卒、年九十、(明史文苑傳參考) 甫田は詩の齊風に取れるなり。
〔體裁〕 此本首に文先生傳及び目錄あり、其目左の如

て二十五卷を爲る、皆未だ見ず、予が見たる四十二卷本は、首に康熙五十年李光煥、李光型の重刊遵巖集序、何喬遠の名山藏に載する所の王慎中の傳、同贊、洪朝選の序、同訂同學姓氏、目錄有り、其目左の如し。

古樂府一卷、五古二卷、七古二卷、五律二卷、五排一卷、七律二卷、五絶一卷、七絶二卷、詞一卷、書五卷、家書一卷、序八卷、記三卷、傳一卷、祭文三卷、碑一卷、誌銘三卷、墓表一卷、狀一卷、雜著一卷。

末に後序有り、作者の名を署せざれども其文を讀めば則ち洪芳洲が梓事を董するを助けし人たるを知る、而して此集詩に評無く、文には大抵李、黃二家の評有り。

〔評論〕 其文、初め秦漢を尙び力めて之を追ふ、後、曾鞏の文を喜び盡く舊稿を焚きて一意之を師法とす、春容宏大、經に根せざる無し、同時の唐順之初め之に服せず、後遂に屈從するに至る、歸有光の出づる、亦此に淵源せずはあらず、嘗に明代文派の正宗たるのみならず、又實に清朝桐城派の風氣を開けりと謂ふ可し、其詩は五古に長じ顔謝の遺音あり、工力

し。詩十五卷、叙二卷、記二卷、贊、字、辭、頌共一卷、題跋三卷、祭文一卷、書、行狀二卷、傳二卷、墓誌銘五卷、墓表一卷、墓碑、阡碑、碑共一卷、附録一卷は行略なり。
〔評論〕 徵明は沈周と均しく書畫に工にして、亦竝に詩を能くす、周の詩は揮灑淋漓、但、自ら其天趣を寫し、雲容水態の限るに方圓を以てす可からざるが如し、徵明の詩は則ち雅潤の中法度を失はず、其書畫と略、同じ、自ら謂ふ少年詩を學ぶに陸放翁より入ると、其作る所を核するに殆ど虚しからず。

● 遵巖集四十二卷

〔作者、題名〕 明の王慎中撰す、慎中字は道思、晉江の人、嘉靖五年の進士、官河内布政使參政に至り、嘉靖三十八年(二二一九)卒す、年五十有一、(明史文苑傳參考) 遵巖は其號なり。

〔傳來、體裁〕 此集舊、玩芳堂摘稿、遵巖家居の諸刻本あり、明史文苑傳に遵巖文集四十一卷に作る、又隆慶五年慎中の子同康及び婿の莊國禎共に較定重刻し

其文に遜らす。

● 蘇門集八卷

〔作者、題名〕 明の高叔嗣撰す、叔嗣字は子業、蘇門山人と號す、祥符の人、嘉靖二年の進士、工部主事より累遷して湖廣按察使に至り、官に卒す、年三十七、(明史文苑傳參考)

〔體裁〕 此集は考功稿、讀書園稿、晉陽稿、入楚稿、序、記銘、碑志、雜著。各、一卷より成る、就中考功稿、讀書園稿、晉陽稿の首に各、自序あり。

〔評論〕 其詩清新婉約、李夢陽に知らると雖、其説を宗とせず、應物の冲澹、曲江の沈雄、王孟の清適、高岑の悲壯、是其師法とする所なり、王世貞之を品して以爲らく高山琴を鼓し、沈思忽ち往き、木葉盡く脱し、石氣自ら青きが如しと、古來以て確評と爲す、文は則ち詩に及ばず。

● 荊川集十八卷

〔作者、題名〕 明の唐順之撰す、順之字は應德、武進の人、弱冠にして會試第一、兵部主事を授けられ、尋で翰林編修と爲り、諸官に歴仕し、寇賊を平げ、太僕少卿に陞り、嘉靖三十九年(二二二〇)卒す、年五十四、著す所、諸儒文要、語要、儒編、左編、右編、文編、武編、稗編、批選朱子集、左氏始末、周秦六大家文畧あり、(明史文苑傳參考) 荊川は其號なり。

〔傳來、體裁〕 明史藝文志に荊川集二十六卷とあり、又舊坊刻十七卷外集三卷本ありて闕佚多し(清)の康熙五十一年劉正誼、朱式瑞等編次して、正集十八卷外集四卷と爲す、然れども其外集四卷は未だ刻せず、惟、正集のみ授梓せり、即ち今記する所のもの是なり、前に嘉靖二十八年王慎中、外孫孫慎行の序あり、次に本傳、墓誌銘、祠堂記、識語、目錄を刻す、其目左の如し。

詩賦四卷、書六卷、序二卷、記一卷、說、銘、誄、贊、祭文共一卷、誌銘、行狀共二卷、墓表、傳共一卷、雜著、數論共一卷。

〔評論〕 其文考索既に深く、議論具に根柢有り、蒼古

● 念菴集十三卷

は歸有光に及ばずと雖、蔚大は之に軼きたり、修辭派の字句を割剝し面を描摹し、或は茅坤の間架に比擬し、機鋒を掉弄するが如きに似ず、有明中葉に在りて王慎中と並立し、屹然正宗たるに愧ぢず、其詩は律牀に工なり、

〔作者、題名〕 明の羅洪先撰す、洪先字は達夫、吉水の人、念菴は其號なり、嘉靖八年進士第一に登り、修撰を授けらる、十八年春坊左贊善を拜し、後、退きて王守仁の學を究め、又天文、地志、禮樂、戰陣、攻守、陰陽、算術等の學を修む、隆慶元年(二二二七)卒す、年五十四、光祿少卿を贈り、文莊と諡す、著す所冬遊記あり。(明史儒林傳參考)

〔傳來、體裁〕 明志には二十五卷本を收む、四庫に收むる者は二十二卷本なり、提要に曰く、此集初め撫州に刻し十三卷を得、蓋し其友人王子昭明の鈔録したりしものより採りしなりといふ、後、應天に再刻し、(清)に至り雍正元年其六世の孫繼洪之を重刻せりと、共に未だ見ず、今記する所は首に嘉靖四十二年

友滌陽胡松の序有りて毎卷の前に目錄有り、其目左の如し。

書二卷、雜著一卷、序一卷、記一卷、傳一卷、行狀一卷、墓誌銘一卷、墓表一卷、祭文一卷、雜文一卷、詩二卷。

〔評論〕 人品清高、其學は姚江に出で、禪を雜ふるを免れず、其文は凡て三變せり、初め李夢陽を學び、後唐順之に従ひ、晚に乃ち自ら己が意を行へり。

● 滄溟集

〔作者、題名〕 明の李攀龍撰す、攀龍字は子鱗、歷城の人、嘉靖二十三年の進士、刑部主事を授かり、員外郎郎中を歴て、順德知府に遷る、後、河南按察御史に至り、隆慶四年(二二三〇)卒す、年五十有七、著す所、詩學事類あり、(明史文苑傳參考) 滄溟は其號なり。

〔傳來、體裁〕 明史藝文志には三十二卷に作る、予が見れる者三本あり、一は明の楊日賓の校する所にして、三十一卷、外に附録補遺一卷あり、首に徐中行、張佳胤の序有り其目左の如し。

卷一は古樂府、卷二は古樂府、三言、四言、卷三

四は五古、卷五は七古、卷六は五律、卷七は五律、七律、卷八、九、十は七律、卷十一は七律、五排、卷十二は七排、五絶、七絶、卷十三は七絶、卷十四は七絶、六律、六絶、卷十五は賦、頌、序、卷十六より十八は序、卷十九は記、卷二十は傳、卷二十一、二十二は墓誌、卷二十三は墓誌、墓表、神道碑、行狀、祭文、卷二十四は祭文、卷二十五は雜文、卷二十六より三十は書、卷三十一は補遺と附録。

補遺は書八篇を載す、附録は王世貞等の子鱗の傳、誌、哭詩八首を載す、附録補遺は徐中行等の子鱗を祭る文十數首あり、一は三十一卷、附録一卷本にして、校正者を詳にせず、然れども體裁は前書と相同じ、たゞ目を分ち三十卷を三十一卷としたるのみ、徐、張、二子の序、附録亦相同じ、一は三十卷附録一卷張弘道の校本にして、首に隆慶六年張佳胤の序目錄あり、其目左の如し。

古樂府二卷、五言古二卷、七言古一卷、五言律二卷、七言律、五言排律共四卷、七言排律、五七言絶句共一卷、七言絶句、六言律、六言絶句共二卷、賦、頌、序共一卷、序三卷、記一卷、傳一卷、墓

誌二卷、墓誌、墓表、神道碑、行狀、祭文共一卷、祭文一卷、雜文一卷、書五卷。

附錄一卷は王世貞等、二十餘人の李于鱗を祭りし文、及び哭文墓誌銘を集めたるものなり、(我國)にては徳川氏の時此集中の詩及び滄溟文選を翻刻せり。

〔評論〕 明代の文章、前後の七子より大に變ず、前の七子は李夢陽冠と爲り、何景明之を附翼し、後の七子は攀龍冠と爲り、王世貞之に應和す、所謂修辭派なるもの是なり、其作所、一字一句古人に規仿し、文の斑爛陸離なるは秦漢間人を見るが如く、詩の高華偉麗なるは開元天寶間人を見るが如く、袁宏道、艾南英等之を排する尤も力めたりと雖、攀龍資質本高く記誦亦博く、其才力富健管に一時の大家たるのみならず、竟に廢す可からざるものあり、吾國荻生茂卿の如き、深く之を推尊し、韓愈、柳子厚と並稱し、力めて之を摸倣し、一時靡然として風を爲せり、以て其勢力の大なりしを見る可し。

〔注解、參考〕

○滄溟文鈔注釋八卷明劉夢 ○滄溟文選補注四卷清宋光

◎徐天目集二十卷附錄一卷

〔作者、題名〕 明の徐中行撰す、中行字は子與、龍澗と號す、長興の人、天目山下に讀書す、故に自ら天目山人と稱す、嘉靖二十九年の進士、刑部主事より員外郎郎中を歴て、汀州知府に遷り後に江西左布政使と爲り、萬曆六年(二三三八)官に卒す。(明史文苑傳參考)

〔傳來、體裁〕 明史藝文志に二十一卷に作り今本と同じ、首に萬曆十二年張佳胤、王世貞の序有り、末に門人郭造卿の撰べる江藩哀錄及び復大司馬張公問徐先生後事書、萬曆十二年黎芳の後語有り、集中收むる所左の如し。

五古一卷、七古一卷、五絶、七絶、六言共一卷、五律二卷、五排一卷、七律、七排四卷、序三卷、記一卷、行狀、碑、墓誌、墓表共一卷、墓誌銘一卷、傳一卷、祭文一卷、雜著一卷、書一卷。

附錄は徐の墓誌銘、行狀、哀辭、誄、輓詞を收む。
〔評論〕 中行は後七子の一たり、王世貞の藝苑卮言には之を稱して左準右繩合はざる所なしと爲す、胡應麟の詩薈には其少く深沈の致有るを惜み、陳子龍の明詩選には摹古太似の譏有り、之を要するに或は後

し或は貶する所各、當る所有り、合して之を觀れば則ち中行の定評出でん、雜文亦矯揉に意有りて頗る渾雅を失ふ、蓋し當時七子の風は同一の軌轍、是の如き有るを免れず。

◎宗子相集八卷

〔作者、題名〕 明の宗臣撰す、臣字は子相、揚州興化の人、嘉靖二十九年の進士、始め刑部主事に除せられ、吏部文撰司に移り、稽勳司員外郎に進み、後福建參議より提學副使に遷り、官に卒す、年三十有六。(明史文苑傳參考)

〔體裁〕 此集は臣の未だ歿せざりしとき、其門人方逢年等三十人の訂定せしものにして、首に目錄、傳、像有り、其目左の如し。

卷一は賦、古調歌、古樂府、卷二は五言選詩、七言古詩、卷三は五言律詩、七言律詩、卷四は七言律詩、五言排律、五言絶句、七言絶句、附錄、卷五、六は文、卷七、八は書。

〔評論〕 臣は嘉靖七子の一人、其詩跌宕俊逸、頗る法を青蓮に取りて意境未だ深からず、間、淺俗に傷む、

然れども天才婉秀、七子中に在りては剽剽填砌の習無し、本質猶未だ盡く失はざるなり。

◎甌𩑦洞稿五十四卷

〔作者、題名〕 明の吳國倫撰す、國倫字は明卿、其先は嘉興の人、徙りて湖廣興國に居る、中書舍人より、河南左參政に至る、後七子の一人にして、萬曆の末王世貞歿してより、國倫最も老壽たり、名聲海内に高く、求名の士、東太倉に走らざれば則ち西興國に走れりといふ。(明史文苑傳參考) 甌𩑦の字は列子般湯篇に出づ。

〔體裁〕 此書は國倫の手定する所にして、卷首に萬曆十二年許國、王世貞、同十一年張鳴鳳の序、同元年孫應龍の西征雜述の序及び目錄あり左の如し。

卷一、二は樂府、卷三は樂府、雜擬、雜歌謠、四言古、卷四より七は五古、卷八、九は七古、卷十より十七は五律、卷十八、十九は五排、卷二十より二十八は七律、卷二十九は七律、七排、卷三十は五絶、卷三十一より三十三は七絶、卷三十四は碑文、墓誌銘、卷三十五、三十六は墓誌銘、卷三十七は

嘉表、卷三十八より四十三は序、卷四十四は序、傳、四十五は傳、記、卷四十六は記、行狀、誄、卷四十七は哀詞、祭文、卷四十八は雜文、像贊、告文、題跋、卷四十九より五十三は書、卷五十四は書、四六、奏記。

此外に續稿二十七卷あり、子士良の校刊する所なりといふも未だ見ず。

〔評論〕 其詩雅練流逸にして穩妥の中に高致有り、文は李攀龍、王世貞の流亞なり。

高子遺書十二卷附錄一卷

〔作者〕 明の高攀龍撰す、攀龍字は存之、無錫の人、少くして書を讀み、程朱の學に志有り、萬曆十七年の進士に擧げらる、時に張世則其著す所の大學初義証程朱章句を進め、天下に頌たんとを請ふ、攀龍乃ち抗疏して其謬を駁し、其書遂に行はれず、家居三十年、顧憲成と同じく學を東林書院に講ず、時人高順と稱す、熹宗立て光祿丞と爲り、天啓元年少卿に進み、四年左都御史を拜し、尋で官を削り東林書院を毀たる、年六十五にして卒す。(明史本傳參考)

〔傳來、體裁〕 初め攀龍自ら其語録文章を輯めしものありしが、後、其門人、陳龍正編みて此集と爲す、其目左の如し。

語一卷、劄記一卷、經說、辨、贊共一卷、備儀一卷、語録一卷、詩一卷、疏、揭問共一卷、書一卷、序一卷、碑、傳、記、譜訓共一卷、誌、表、狀、祭文共一卷、題跋、雜書共一卷。

附錄は年譜、誌狀なり。

〔評論〕 其學格物を以て宗と爲し、朱陸を兼取して特に切實たり、詩意冲澹、文格清適、亦明末纖詭の習無く、氣節を以て傳ふるのみに非ざるなり。

蟻蝶集五卷

〔作者、題名〕 明の盧樞撰す、樞字は少樞濬縣の人、家素封なるを以て貨を輸して國學生と爲る、後、縣令に誣られ、獄中に繋がること數年、時に平湖の陸光祖代りて濬令と爲り、其獄を反し樞を出す、後、遇ふ所無く、益落魄して酒を嗜み、病むこと三日にして卒す。(明史文苑傳參考) 蟻蝶とは醴雞なり、其自ら奉ずる潔く自守る介なるは、蚊蚋の穢を侵して強噉する

に如かざるに取り、又事を以て獄に繋かるは蟻蝶の蛛網に羅りて其音を振ひ暗暗たるに類す、故に以て集に名づく。(自序參考)

〔體裁〕 此集は嘉靖二十二年、樞自ら編み、同邑の孟華平校し、長清の張其忠之を梓す、首に萬曆二年張惟胤の序、嘉靖二十二年自序及び穆文熙、萬恭、張其忠の三序あり、其目左の如し。

書一卷、啓、記、序、碑、樹、對、傳、讚、辭、誄、祭文共一卷、賦一卷、四言古詩、五言古詩、七言古詩共一卷、雜體詩、樂府、五言排律、七言排律、五言律詩、七言律詩、五言絕句、七言絕句共一卷。

〔評論〕 其騷賦は最も王世貞の稱する所と爲れり、誌亦豪放にして其人と爲りの如し、樞、嘉靖、隆慶の間、王季の焔方に熾なる時に當り、一意往還、其氣益涌、絶えて鈎棘塗飾の習に染まず、蓋し其人光明磊落一時を藐玩して七子と聲名を争はざるに因る。

少室山房類稿 一百二十卷(未見)

〔作者、題名〕 明の胡應麟撰す、應麟の傳は筆叢の條

に出づ、少室は山名を取りて其書房に名づけたるなり。

〔傳來、體裁〕 此集舊は禹燕、還越、計偕、巖栖、臥游、抱膝、三洞、兩都、蘭陰、崎園の諸集二十餘卷ありといふ、清の朱彝尊の明詩綜に載する所に由れば、別に邯鄲、華陽、養疴、婁江、白榆、湖上、青霞等の集あるものゝ如し、蓋し應麟在世の時、諸集皆隨作隨刻して別本單行せしならん、故に名に異同を來せるなる可し、萬曆四十六年金華の通判江湛然が合刻せるもの即ち明志及び四庫に著録するものなり、現今廣東にて刊行すといふ、予未だ之を見ず。

劉子全書四十卷

〔作者〕 明の劉宗周撰す、宗周の傳は聖學宗要の條に出づ。

〔體裁〕 此集は其弟子董元休の編次する所にして清の道光中刻する所なり、首に校刻姓氏、道光十五年吳傑の序、門人黃宗義の序、像、贊、弟子籍、目錄有り、其目左の如し。

語類十三卷、文編十四卷、經術十一卷、行狀、年

譜各、一卷。

〔評論〕 講學の風、明季に至りて極めて盛なり、而して其弊亦極まれり、宗周は王陽明に源出すと雖、而かも能く慎獨を以て宗と爲し、敦行を以て本と爲し、没するに臨みて猶誠敬を以て弟子に誨ふ、其學問特に篤實にして姚江の猖狂を取らず、又東林一派の以て氣類と爲し其朋黨に涉らず、遂に芳を史冊に流し、明末の完人と爲れり、其文章皆有物の言、亦以て傳ふるに足る。

◎ 羅一峰集十卷

〔作者、題名〕 明の羅倫撰す、倫字は彝正、永豊の人、成化二年の進士、翰林修撰より南京供職に遷り、尋で疾を以て辭し歸り、門を開きて徒に授け、日に註經を以て業と爲すこと殆ど十年、卒する後、朝廷特に奉訓大夫左春坊左諭徳を贈り文毅と諡す學者稱して一峰先生といふ。(明史本傳參考)

〔體裁〕 是集は吉水の鄒元標詮次し、徳清の吳期炤が參訂せる嘉靖二十八年の重刻本にして、首に萬曆十八年、鄒元標、同年吳期炤、嘉靖二十八年孟豹、同

年羅洪先の四序、及び誥命、像傳あり其目左の如し。策疏一卷、序一卷、記二卷、書一卷、雜著一卷、五言古詩、五言四句、五言八句共一卷、七言四句、七言八句共一卷、俱夢稿五言四句、五言八句、七言四句、七言八句共二卷

〔評論〕 其文は經に根本し筆致洒落なり、靈星門の一篇、王守仁稱して識見高明と爲す、其言信に虚ならず、蓋し有明道學家の文章中に在りては稍、觀る可きものたり。

◎ 六如居士全集七卷外集六卷

〔作者、題名〕 明の唐寅撰す、寅字は伯虎、吳縣の人、弘治十三年鄉試第一、程敏政に知らる、時に敏政効せられ寅も亦之に連る、恥ぢて吏に就かず、家に歸りて益、放浪す、年五十四にして卒す。(明史文苑傳參考) 六如は其號にして此集一に伯虎集といふ。

〔傳來、體裁〕 是集始て萬曆四十二年に刻し、後(清)の嘉慶六年に至り其族裔仲冕重刊す、首に嘉靖十三年袁袞、萬曆二十年何大成、萬曆四十二年何大成的父、嘉慶六年唐仲冕の序あり、正集の目次左の如し。

す、年七十二。(明史文苑傳參考)

詩三卷、詞曲一卷、書、序、記共一卷、碑、銘、墓誌、碣、論、贊等共一卷、志傳一卷。外集の目は左の如し。遺事一卷、詩話一卷、題跋一卷、贈答一卷、題詠一卷、鄉試題名錄共一卷。又別に墨亭新賦、六如居士制義共一卷、六如居士畫譜三卷、花陽聯吟四卷、補一卷を附編せり。〔評論〕 其詩、少作は婉麗にして初唐に似たり、長ずるに及びて悽怨、頗る劉禹錫、白居易に近し、晩年は則ち多く頽放なり、文は駢儷の氣味有り

◎ 徐文長集三十卷

〔作者、題名〕 明の徐渭撰す、渭字は文長、山陰の人、總督胡宗憲に招かれ、其幕下に屬す、宗憲獄に下るに及び、禍を懼れて發狂す、嘉靖の時、王李等七子社を結び、謝榛が布衣たるを以て之を擯く、渭其軒冕を以て韋布を壓せしを憤り、誓て二人の黨に入らざりき、然れども天才超軼其作所の詩文、當時の倫輩に絶出せり、渭又書畫を能く曾て自ら言へり、書一、詩二、文三、畫四と、萬曆二十三年(二二五三)卒

〔傳來、體裁〕 明史渭の傳に稱す、公安の袁宏道越中に遊び、渭の殘帙を得、以て祭酒陶望齡に示し、相與に激賞し、其集を刻して世に行ふと、以て渭の歿後間も無く刊行せられしを知る、四庫提要に曰く、鐘瑞渭の著す所の文長集關篇、櫻桃館集三種を合刻して此集を成す、又商濬の刻する所徐文長三種と題するものありと、予が見たる者は、袁宏道等の刻する所にして、宏道の評點し閔德美校訂したる者なり、首に黃汝亭の序、陶望齡の撰びし傳及び目錄あり。賦一卷、樂府一卷、五七言古三卷、五七言律二卷、五七言排律二卷、五七言絕句三卷、詞一卷、表一卷、疏一卷、啓一卷、書一卷、論一卷、策一卷、序一卷、跋一卷、贊一卷、銘一卷、記一卷、碑一卷、傳一卷、墓誌銘、墓表共一卷、行狀一卷、祭文一卷、雜著一卷。

〔評論〕 其詩は李白、李賀の間に出入す、而して才高識僻、流れて魔趣と爲る、其文は則ち蘇軾に源出し、實に其詩より勝れり。

● 小草齋文集二十八卷續集三卷

〔作者、題名〕 明の謝肇淛撰す、肇淛の傳は五雜俎の條に出づ、小草は齋名なり。

〔傳來、體裁〕 文集は東海の徐燭輯め、續集は肇淛の弟肇淵肇澍の校せしものなり、今記する所は我内閣所藏本にして、首の三卷を佚す、正集の目左の如し。

卷四より六は序、記四卷、傳一卷、志三卷、論一卷、碑一卷、行狀一卷、墓誌銘一卷、說一卷、啓一卷、書一卷、疏一卷、贊一卷、跋一卷、銘一卷、祭文一卷、書事一卷、奏疏一卷。

終に肇淛の墓誌銘行狀を附す、續集は詩にして其目左の如し。

過里稿一卷、粵西稿一卷、滇中稿一卷。

〔評論〕 其詩、峭蒨精緻にして能く諸牀に長ず、格甚だ高からずと雖而も頽放に陥らず、頗る中和を得たり、故に李攀龍、王世貞の一派に在りても亦之を薄んせず、文は博瞻を以て長を見はす、而も未だ純正なる能はざるもの、如し。

● 袁中郎全集

〔作者、題名〕 明の袁宏道撰す、宏道字は中郎、公安の人、兄宗道、弟中道と並びに才名あり、時に三袁と稱す、萬曆二十年進士の第に登り、吳縣知縣と爲り、諸官に歴仕し、稽勳郎中に遷り、後、病を謝して歸り、數月にして卒す。(明史文苑傳參考)

〔傳來、體裁〕 明史藝文志に袁宏道詩文集五十卷に作る、予が見たる者は二本あり、一は四十卷にして鍾惺の増定する所に係り、崇禎二年の刻版なり、其目左の如し。

序二卷、引一卷、傳一卷、奏疏、論共一卷、策一卷、疏文一卷、記述四卷、廣莊一卷、塵談一卷、臆政一卷(附酒)、瓶史一卷、雜錄一卷、碑記一卷、誌銘、文、贊共一卷、啓、書、去吳尺牘六卷、擬古樂府一卷(附雜)、五言古詩二卷(附古詩)、七言古詩二卷、五言絕句一卷(附六言)、七言絕句二卷、五言律詩四卷(附六)、七言律詩二卷、五言排律一卷(附六言)。

一は梨雲館の類定にして大業堂周如山の刊本なり、凡て二十四卷首に江進之の錦帆集の序、虞長孺の解脫集の題、江進之の解脫集の二序、陳眉公の瓶史の

● 隱秀軒詩文二十三集

〔作者、題名〕 明の鍾惺撰す、惺字は伯敬、長陵の人、萬曆三十八年の進士、官福建提學僉事に進み、父の憂を以て歸り家に卒す、人と爲り嚴冷、俗客に接するを喜ばず、名山大川に遊び至る所幽邃を極む、詩畫に工にして晩に禪に逃る、(明史文苑傳、宏道傳參考) 隱秀軒は其書室の名ならん。

〔體裁〕 鍾惺自ら此集を定の、虞山の沈春澤之を閱す、首に天啓二年沈春澤の序有り、凡て詩十集文十三集之に名づくるに千字文の天字より冬字に至るを以てす而して每集又之を小卷に分てり、即ち左の如し。

○ 詩。天、四言一、地、五言古三、玄、七言古一、黃、五言律四、宇、七言律二、宙、五言排律一、洪、七言排律一、荒、五言絕句一、日、六言絕句一、月、七言絕句一。

○ 文。盈、賦一、景、序四、辰、記二、宿、傳一、列、論三、張、策一、寒、表一、來、奏疏一、暑、啓一、往、書牘二、秋、疏二、收、碑一、冬、行狀一。
〔評論〕 袁宏道等始めて王李詩派の弊を攻撃し、倡ふ

題、曾退如の瓶花齋集の序、雷何思の瀟碧堂の序、江進之の傲篋集の序、沈仲雨の桃源詠の題、及び目錄あり、其目左の如し。

樂府、雜體共一卷、五言古一卷、七言古一卷、五六七言排律一卷、五六言律二卷、七言律一卷、五言絕一卷、七言絕一卷、序一卷、傳一卷、碑一卷、誌銘一卷、記述一卷、疏一卷、廣莊一卷、瓶史一卷、臆政一卷、德山暑譚一卷、襍錄一卷、尺牘四卷。

〔我國〕 には、徳川氏の初、僧元政之を得、其詩風を模したり、此代二十四卷本の翻刻あり。

〔評論〕 其詩文は所謂公安派なり、蓋し明初三楊、臺閣の體を倡ひ、李夢陽、何景明之を變じ、李攀龍、王世貞繼ぎて之に和し、以て一代の風氣を移し、其末流漸く僞體を成す、是に於て公安の三袁(宏道、宗道、中道をいふ) 又其弊に乗じ之を排誣す、其詩文は板重を輕巧に變し、粉飾を本色に變じたり、此に於て天下靡然として之に従ふ、然るに七子狎學問に根す、三袁は則ち惟聰明を恃む、故に之を學ぶ者は律を破り度を壞るに至れり、名は七子の弊を救ふに在りと雖其弊又更に之より甚し。

るに清巧を以てしてより風氣一變せり、惺は復た尖新幽冷の詞を以て其弊を矯め、同里の譚元春と相唱和して唐詩歸を評選し天下をして相率ゐて織仄に趨がしめ、有明一代の詩遂に其弊を極むるに至れり、論者之を詩妖に比するも敢て過刻に非ざる可し。

◎徐幔亭集二十卷

〔作者、題名〕 明の徐燭撰す、燭字は惟和、閩縣の人、燭の兄、萬曆四十六年の舉人、生平喜びて鄭善夫を稱す、而して卒年僅に三十九、善夫と正に同じ、頗る異む可し、(明史文苑鄭善夫傳四庫提要參考)幔亭は其號なり。

〔傳來、體裁〕 此集は其友人薦夫の編次せしものにして、萬曆中に版刻せし者なり、首に屠本峻等の序あり其目左の如し。

古樂府一卷、五言古一卷、七言古一卷、五言聲詩一卷、五言律二卷、七言律三卷、五言排一卷、五言絕一卷、六言絕一卷、七言絕二卷、詩餘一卷、序二卷、墓誌銘、墓表、行狀、誄共一卷、疏一卷、書牘一卷。

〔評論〕 閩中 詩、明初十才子の後鄭善夫出で、之を

伯仲す可し。

◎陳忠裕公全集三十卷

〔作者、題名〕 明の陳子龍撰す、子龍の傳は明詩選の條に出づ、忠裕公は其諡なり。

〔體裁〕 此書首に嘉慶八年王昶の序、同年莊師洛の跋、同年何其偉の識、凡例十則、總目、像贊、年譜、三世苦節傳、越游記、軼事十一則、末に諸家評論、投贈詩、哀弔詩、嘉慶八年顧元龍の後跋、參校氏名有り、其目左の如し。

卷一は賦、卷二は賦、騷、卷三は風雅體、琴操、四言、古樂府、卷四、五は古樂府、新樂府、補遺、卷六より九は五古、聯句、卷十より十二は七古、卷十三、十四は五律、卷十五より十七は七律、卷十八は五排、卷十九は五絕、七絕、卷二十は詩餘、卷二十一は詔、狀、策、卷二十二は論議、卷二十三は議、卷二十四は對、難、教、表、檄、判、卷二十五は序、二十六は序、跋、卷二十七は記、書、啓、卷二十八は文、說、問、頌、卷二十九は贊、銘、傳、誄、行狀、行述、卷三十は墓表、祭文、

小變す、後謝肇淛出で次て燭と曹學佺とあり、三家の詩風大同小異なり、就中燭が詩は謝肇淛之を品して其才情聲調以て、高啓に伯仲するに足る、然れども微しく古體の及ばざるを憾むと謂へり、朱彝尊の靜志居詩話には、其七言絶は唐の王昌齡に原本すれども、其多情至語は盡く標榜に出づるに非ずと謂へり、今此集を讀むに二家の言頗る當れり。

◎石倉全集二十卷

〔作者、題名〕 明の曹學佺撰す、學佺の傳と石倉の義は石倉歷代詩選の條に出づ。

〔體裁〕 此書は首に葉向高の序有り其目左の如し。

○詩。金陵初稿一卷、金陵集二卷、西峰集三卷。

○文。西峰集三卷、序三卷、記三卷、題、碑銘、贊共一卷、情哀一卷、法喜二卷、論一卷。

又別に石倉文稿單行せり、其目左の如し。

序二卷、記一卷、疏一卷、啓一卷附巴草。

〔評論〕 學佺、歷代の詩を集撰し研討頗る精し、故に其作る所も亦清麗にして觀るに足る者多し、其品格は七子と三袁、鍾譚との間に在り、文品は謝肇淛と

雜著。

〔評論〕 明詩數變す、洪武永樂の諸人は風格宏麗なりと雖未だ全く元末の氣習を脱するに至らず、宣徳の十子一變して晚唐と爲り、成化の諸人は再變して宋風を帶ぶ、弘治正徳に至り三變して李何の諸子出て、雄渾高雅、盛唐の音を唱ふ、嘉靖に及びて四變して初唐と爲り、皇甫諸子五變して中唐と爲り、萬曆に至り六變して修辭派と爲り、三袁出で七變して南宋と爲り風調卑下なり、鍾譚の八變するに至りて、織仄枯稿、明詩大に壞る、子龍是後に出で、大に雅音を唱ふ、其詩清婉雄麗、各弊皆善し、七子に近くして其流弊無し、明詩名家の魁たり、文は則ち未だ七子の藩籬に拘束するを免れざるもの、如し。

◎壯悔堂全集十七卷

〔作者、題名〕 清の侯方域撰す、方域字は朝宗、河南商邱の人、明の四公子の一、才を負て任俠、之を以て當時に雄たり、魏叔子、汪茗文、と清初の三家と稱せらる、順治十一年(二二一四)卒す、年三十有七、(國朝先正事略)壯悔は其堂名なり、方域初め駢儷の

文を學び、壯にして之を悔ふ、故に名づく。

〔體裁〕 此書は文集十卷、遺稿一卷、四憶堂詩集六卷、遺稿一卷より成る。文集は首に徐鄰唐、徐作肅の二序、田蘭芳、賈開宗、胡介祉の撰びし三傳、五世の族孫洵、五世の孫詒の輯めし年譜、及び目錄あり、其目左の如し。

序二卷、書一卷、奏議一卷、傳一卷、記一卷、論一卷、策一卷、表、說、書後共一卷、墓誌銘、祭文、雜著共一卷。

遺稿は首には任元祥、賈開宗の二序及び目錄ありて、僅に書序銘等十篇を載するのみ、四憶堂詩集は首に賈開宗、宋幹、練貞吉、彭賓の四序及び目錄あり、詩は附を分たず、次の遺稿は首に序無く只目錄のみを載す、(我國)にては文久元年文集のみを翻刻せり。

〔評論〕 清初文の三家各長短無き能はず、魏禧は策士の風有り、汪琬は儒生の氣有り、其才華風發し矯變測られざるに至りては則ち方域之が最たり、其文最も傳に長ず、淋漓頓挫、殆ど司馬遷の神を得、唯典雅蒼蔚の致に於て缺くる所無き能はず、方域又詩を能くし、李夢陽の氣味有り。

〔參考〕 ○壯悔堂全集十七卷 清吳開宗撰

は明治年間、錢曾が此書及び有學集の詩注を刊行せり。

〔注解〕

○牧齋初學集詩注二十卷 清錢曾撰

●牧齋有學集 五十一卷

〔作者〕 清の錢謙益撰す、謙益の傳は列朝詩集の條に出づ。

〔體裁〕 此集初學集と同じく亦詩を先にして文を後にす、詩は年を以て序し、文は體を以て分てり、首に康熙三年范陽の鄒嶽、同二十四年梁溪の金陵山房主人の凡例十則及び目錄あり、其目左の如し。

秋槐集一卷、秋懷文集一卷、庚寅夏五集一卷、終雲餘燼集二卷、秋槐別集一卷、高會堂詩集一卷、長干塔光集一卷、紅豆初集一卷、紅豆二集一卷、紅豆三集一卷、東湖詩集二卷、序十二卷、記二卷、墓誌銘六卷、神道碑二卷、塔銘一卷、傳、祭文、哀詞共一卷、書三卷、疏一卷、贊、偈、頌共一卷、雜著三卷、題跋六卷。

〔評論〕 其文冒大にして宏肆、經史より稗官小説に至

●牧齋初學集 一百六卷

〔作者、題名〕 清の錢謙益撰す、謙益の傳は列朝詩集の條に出づ、牧齋は其號なり。

〔體裁、傳來〕 此本は明の崇禎十六年の刊本にして、前に蕭士璋、曹學佺、程嘉燧の三序及び目錄あり、其目左の如し。

還朝詩集二卷、歸田詩集二卷、崇禎詩集六卷、桑林詩集一卷、霖雨詩集一卷、試帖詩集二卷、丙舍詩集二卷、移居詩集一卷、東山詩集三卷、雜文七卷、序十三卷、記六卷、行狀三卷、墓誌銘十二卷、神道碑四卷、墓表二卷、塔銘二卷、傳四卷、譜牒三卷、祭文一卷、哀詞一卷、啓、帳詞、書共二卷、疏一卷、贊、偈共一卷、題跋四卷、奏疏議一卷、制科三卷、外制十卷、太祖實錄、辨證五卷、讀杜小箋一卷。

康熙帝の朝古今圖書集成を編するに當りて其文を撰入せしが乾隆帝に及びて此書及び有學集を刪けて四庫に收録せず、其四十三年遂に天下に論して之を廢するを嚴禁したり、是より傳本終に少し、(我國)にて

る皆其鐘鐺に入る、而して八家に折衷し、縱橫變化して宗法を離れず、是より先、鍾譚の徒出で、より文格日に靡々たり、謙益之を一洗せんと欲す、故に初に宋濂を推し、後危素に歸し、遂に王、唐、歸三家に接武して以て之を振起せり、後、桐城派の起る、亦此に淵源する所無くばあらず、其詩は七言に長じ、渾灑流麗、杜甫、白居易、蘇軾、陸游を追越し自ら家を作す、然れども五言は其長する所に非ず、綜べて之を論すれば、詩文共に純粹なる能はずと雖、清初の一家たる可し。

〔注解〕

○牧齋有學集詩注十四卷 清錢曾撰

●吳梅村全集 四十卷

〔作者、題名〕 清の吳偉業撰す、偉業字は駿公、太倉の人、梅村は其號なり、明の崇禎四年進士に及第し、宮詹學士と爲る、清に仕へて祭酒に至り、詩名最も重し、世其詩を梅村體と稱す、康熙十年(二三三)卒す、年六十有三、著す所綏寇紀略等あり。(獻遺存錄)

〔參考〕

〔體裁〕 此集は詩集二十卷、文集二十卷より成る、詩集は許旭、顧淵編訂し、男嘯、暄二人の校せしものにして首に康熙八年門人盧紘の序及び目録有り、其目左の如し。

五言古詩三卷、七言古詩四卷、五言律三卷、七言律五卷、五言排律一卷、五六七言絕句一卷、七言絕句一卷、詩餘小令、長調共二卷。

文集は周肇、王昊編訂し其姪曉の校せしものにして首に陳瑚の序及び目録有り。

序四卷、壽序三卷、記二卷、神道碑、銘共二卷、墓誌銘五卷、墓表一卷、傳、祭文共一卷、書、銘、贊共一卷、雜文一卷。

〔評論〕 偉業、才華豔發、故に少作に婉麗多し、其喪亂に遭遇するに及び風骨彌適く、暮年蕭瑟、象象深微、論者以て庾信に方ぶ、格律は四傑に本づきて情韻深く、叙述は香山に類して風華勝れり、一時尤も絶調と稱せらる、蓋し清初詩人の冠冕なり、其雜文は散體の中に於て多く儷偶を參ふ、魏晉に沿洄し其膏腴を擲らんと欲す、然るに古ならず今ならず終に正格なる能はず。

〔註解〕

○吳詩集覽二十卷談叢二卷首一卷清新榮 潘撰 ○吳梅村詩集箋注十八卷吳鳳撰

安雅堂集

〔作者、題名〕 清の宋琬撰す、琬字は玉叔、勃萊と號す、山東萊陽の人、順治四年の進士、官四川按察使に至り、詩名は施愚山と齊し、世に南施北宋と稱す、

(國朝詩人小傳、國朝先正本略、國朝著獻類徵參考) 安雅は其堂名なり。

〔體裁〕 此集に七種有り、即ち左の如し。

(1) 安雅堂詩集、(無卷數)、順治十七年蔣超、來集の二序有り。

五古(廿)、七古(廿)、五律(九)、七律(九)、五排律(三)、七排律(一)、七絕(三十)、六絕(二十)。

(2) 安雅堂文集(二卷)、康熙五年金之俊以下趙、黃、杜、の四序有り。

卷一は序、卷二は序、記、傳、銘、題、墓誌銘、行狀、祭文。

(3) 安雅堂文集(二卷)、康熙三十八年周、張、嚴、尤、程、宋の七家序有り。

卷一は賦、表、序、卷二は記、傳、書、啓、墓誌

銘、墓表、題、雜文、祭文。

(4) 祭臯陶、(無卷數)、二鄉亭主人新編、海上隨緣居士評、康熙十二年隨緣居士十一年容水生の二序有り、

(5) 安雅堂書啓、(無卷數)

(6) 安雅堂未刻稿(八卷)、乾隆三十一年彭啓豐の序有り。

五古一卷、七古一卷、五律一卷、七律一卷、五六七絕、五七排律共一卷、序、題共一卷、書、表、策問、啓、頌、贊、銘、疏、傳、紀略、碑記共一卷、墓誌銘、行狀、誄、祭文、入蜀集(上詩下詞)共一卷。

(7) 二鄉亭詞(三卷)、康熙八年董俞の序有り。

小令一卷、中調一卷、長調一卷。

〔評論〕 琬、天才雄雋、中年にして奇禍に罹る、故に其詩自ら豪宕感激の音あり、而も怨悱して怒らず、格も亦雅正なり、唯其七絶は未だ宋調たるを免る能はず、然れども清朝詩家中に存りて氣魄を論ずれば琬は實に上游に居れり。

湖海樓全集 四十九卷

(集) 別集

〔作者、題名〕 清の陳維崧撰す維崧字は其年、迦陵と號す、江蘇宜興の人、康熙十八年鴻詞科に試せられ、諸生より檢討と爲り、明史を纂修し、二十一年(二三四二) 官に卒す年五十九、著す所、湖海樓詩文詞集、兩晉南北史集珍有り、(國朝先正事略、國朝著獻類徵參考) 湖海樓は其居の名ならん。

〔體裁〕 此集は乾隆六十年版にして、首に姜宸英、尤侗、陳履端の詩原序、康熙二十八年徐乾學の全序、本傳外傳目次有り、其目左の如し。

○詩。五言古三卷、七言古四卷、五言律一卷、七言律二卷、五言排律一卷。

○詞。小令三卷、中調三卷、長調十四卷。

○文。議序一卷、序二卷、序、記、跋共一卷、書傳一卷、行略、墓誌、祭文共一卷。

○儷體文。賦一卷、序六卷、啓三卷、頌、贊、碑、記、題跋、墓疏共一卷、銘、誄、哀辭、祭文共一卷。

〔評論〕 其駢儷文は六朝の俳體を用ひ、哀艶辛綿、殆ど徐庾と顔顔せんとす、清朝に在りては一大宗たり、詩も亦頗る觀る可し、然れども其文に及ばず。

●施愚山先生文集二十八卷 詩集五十卷 別集四卷 遺集六卷 外集二卷

〔作者、題名〕 清の施閩章撰す、閩章字は尙白、一の字は肥雲、愚山と號す、宣城の人、明の順治六年の進士、湖西道參議に官す、清の康熙十八年鴻博に擧げられ、翰林院侍講より侍讀に進む、當時宋荊裳と名を齊くし、南施北宋と稱す、生平儒雅を以て自命し、尤も理學に深く、轉じて詩文を爲る、康熙二十二年(二三三)卒す、年六十五、(年譜、國朝詩人小傳、國朝先正事略、國朝文獻類考) 此集一に學餘堂集といふ。

〔體裁〕 此書首に施愚山先生年譜四卷、施氏家風述略正續二卷あり、夫より文集二十八卷、詩集五十卷、別集四卷、遺集六卷、外集二卷あり、皆曾孫企、念二子の校定する所なり、文集の首には魏禧の序あり、其目左の如し。

賦一卷、志、譜共一卷、書、集序共一卷、詩文序四卷、贈送序一卷、壽序二卷、記三卷、遊記二卷、傳、行狀共二卷、碑文一卷、墓誌銘、墓表、墓志、墓碣共四卷、祭文二卷、雜著二卷、書二卷。

翰林より出で、漣關道副使と爲り工部尙書に至り、康熙二十六年(二三四七)卒す、年六十有一、文正と諡し、道光三年孔子廟庭に從祀す、著す所洛學編、睢州志、潛庵語錄等あり。(國朝先正事略、國朝文獻類考) 〔體裁〕 首に宋學、毛奇齡の二家序、目錄、像、贊有り。

語錄(附會)一卷、奏疏一卷、序一卷、記一卷、書一卷、賦、頌、論、辨共一卷、傳、墓誌、行述、狀共一卷、雜文一卷、告諭一卷、詩一卷。終に年譜、出處、附録有り、附録には行略、誌銘、祭文、輓詩、建坊啓を載す。

〔評論〕 斌、清初に在りて陸隴其と俱に醇儒と稱せらる、隴其の學は篤く程朱を守り、斌の學は孫奇逢に出で、其根抵姚江に在り、而して能く新安金谿の平を持す、其大旨實用を講求し、王學の杳冥放蕩の弊無し、故に二人趣を異にして歸を同うす、集中の詩文亦皆彬彬典雅、其奏議の諸篇は規畫周密、尤も治體に通達せり。

●愚菴小集十五卷

詩集の首には汪琬の序あり其目左の如し。四言一卷、樂府一卷、五言古十二卷、七言古九卷、五言律十卷、七言律九卷、五言排律二卷、七言排律一卷、五言絕句一卷、七言絕句四卷。

別集の首には潘思樂の序あり、其目左の如し。雙齋詩話二卷、矩齋雜記二卷(附王阮亭先、生稿知園)。外集には劉琦の跋あり硯林拾遺、試院冰淵各一卷を收む、遺集の首には吳芮の序あり、杭世駿の校刊する所なり、其目左の如し。五古、七古、五律、七律、五排、各一卷、五絕、七絕共一卷。

〔評論〕 閩章嘗て王士禎の門人洪昇に謂て曰く、爾の師の詩は華嚴樓閣指を彈けば即ち見るが如く、吾詩は飯甕木石一一平地より築き起すが如しと、其深穩なるは亦此に在り、實に清初の一家たり、其文は歐曾に仿ひて其矩度を失はず。

●湯子遺書十卷 附録一卷

〔作者〕 清の湯斌撰す、斌字は孔伯、荆峴と號し、又潛庵と號す、河南睢州の人、順治九年進士に第し、

〔作者、題名〕 清の朱鶴齡撰す、鶴齡字は長孺、江蘇吳江の人、愚菴は其號なり、明末の諸生、清に入りて顧炎武、陳啓源と友として善し、其著す所尙書埤傳、禹貢長箋、讀左日鈔、毛詩通義あり、又杜子美李義山の詩を箋注し世に行はる。(國朝先正事略、國朝文獻類考) 〔體裁〕 此書其目左の如し。賦一卷、諸體詩五卷、雜文九卷。末に傳家質言十三則を附す。

〔評論〕 鶴齡始め力を詞賦に專にす、後、顧炎武に窮經を勧められ、遂に注疏を研精し皆能く爬梳抉摘せり、故に作る所の文章典雅醇實にして剽竊摹擬の習を踏まず、嘗て杜甫、李商隱の詩を註せり、故に其詩亦二家に入出入す。

●鈍翁類稿六十二卷

〔作者、題名〕 清の汪琬撰す、琬字は茗文、鈍庵と號す、江蘇長州の人、晩に堯峰に居る、因て堯峰と號す、順治十二年の進士、官戸部主事に至り、編修を授けらる、康熙二十九年(二三三〇)卒す、年六十有七、琬の詩、王士禎と名を齊くし、時に汪王と稱

す、其文は經史に根抵し、清朝三家の一たり、其著す所鈍翁前後類稿有り。(國朝先正事略國朝著錄類考)

〔體裁〕 此集首に鈍翁五十歳の像、計東甫の序、自序、葉舒崇の序、凡例六則、總目有り、其目左の如し。

古今詩九卷、堯峰襍咏三卷(以上詩彙)、賦辭一卷、經解四卷、書五卷、序七卷、壽序二卷、記二卷、傳二卷、書事一卷、論一卷、或問一卷、辯一卷、說一卷、策問題葉一卷、神道碑、墓表共一卷、墓誌銘二卷、箴贊二卷、題詞一卷、跋一卷、祭文一卷、襍著一卷、古今五服考異八卷、東都事略三卷、歸詩考異一卷。

〔評論〕 琬、學術深奧、軌轍復正しく、其文大抵六經に原本し、氣體浩瀚、疏通暢達、頗る南宋の諸家に近し、清朝の一名家なり、詩は當時士禎と名を埒くすと雖、而も士禎に及ばず。

古懽堂集三十六卷

〔作者、題名、體裁〕 清の田雯撰す、雯字は綸霞、又子綸、紫綸ともいひ、山隴子と號し、晩に蒙齋と改む、山東德州の人、康熙三年の進士、官戸部侍郎に

至り、康熙四十三年(二三六四)卒す、年七十、著す所此外山隴詩選あり。(國朝先正事略國朝著錄類考) 古懽堂は其書室の名なり、文集二十二卷にして詩集は十四卷なり。

〔附記〕 予曾て一書肆に於て此書を觀る、後、清客繆荃孫購ひ返れりといふ、今其細目を記せず、其詩は才力富健にして雄偉奇麗なり、蓋し唐宋を打して一丸と爲さんとするに在り、故に時に純粹なる能はずと雖、而も自ら能く一門選を開く、王士禎と雁行するに足れり。

曝書亭集八十卷

〔作者、題名〕 清の朱彝尊撰す、彝尊の傳は經義考の條に出づ、曝書は其亭號なり。

〔傳來、體裁〕 此集は彝尊の詩文を網羅せし者にして、其編者を詳にせず、首に王士禎、魏禧、查慎行の原序、曹爾堪、葉舒崇の詞原序、柯維楨の蕃錦集原序、及び目錄あり、蕃錦集は其詞の小集なり、今全目を擧ぐれば左の如し。

卷一は賦、卷二より二十三は古今詩、卷二十四より三十は詞、卷三十一より三十三は書、卷三十四

〔注解〕 ○曝書亭集詩注二十四卷清楊 ○曝書亭集箋注二十三卷朱

飴山堂詩集二十卷文集十二卷

〔作者、題名〕 清の趙執信撰す、執信字は伸符、秋谷と號す、山東益都の人、康熙十八年の進士、庶吉士より編修に遷り乾隆九年(二四〇四)卒す、年八十有三著す所談龍錄、聲調譜等あり、(國朝先正事略國朝著錄類考) 飴山は其堂名なり。

〔體裁〕 此書詩集は、乾隆十七年版にして、首に盧見曾の飴山堂集序、吳雯の并門集序、陳恭尹の觀海集序、執信の磻庵集自序、總目有り、其目左の如し。并門集一卷、閑齋集一卷、還山集一卷、觀海集一卷、還山集一卷、觀海集一卷、鼓柁集二卷、涓流集一卷、詩溪集一卷、紅葉山樓集二卷、浮家集一卷、金鷄館集一卷、迴颿集一卷、磻庵集二卷、懷舊集一卷、磻庵集一卷、詩餘、小中長調共一卷。就中觀海、紅葉山樓、懷舊、磻庵の四集は古律詩にして、餘は皆古律雜歌なり、文集は其小念が乾隆十八年に編次したるものにして三十九年の版本なり、

より四十一は序、卷四十二より五十五は跋、卷五十六より五十七は考、卷五十八は考、辯、原、卷五十九は論、卷六十は議、釋、說、策、問、卷六十一は頌、贊、箴、銘、辭、零丁、答問、墓疏、卷六十二より六十四は傳、卷六十五より六十七は記、卷六十八は題名、卷六十九より七十一は碑、墓誌銘、卷七十二、七十三は墓表、卷七十四より七十九は行狀、誄、哀辭、祭文、附錄葉兒樂府。

而して其詩文は順治二年より康熙四十八年に至る六十五間の作を編年に次し、其紀年は皆爾雅歲陽歲陰の名を用ひて古例に従へり。

〔評論〕 趙執信の談龍錄に清初の詩を論して彝尊及び王士禎を以て大家と爲す、王の才は高く、學以て之に副ふに足り、朱の學は博く才以て之を運らすに足る、其失を論すれば朱は多きを貪り、王は好みを愛すと、亦公論なり、惟、暮年老筆縱橫、天真爛漫、意の造る所に任じて頗る翦裁に乏し、蓋し詩を以て論すれば王士禎に先づ能はず、文を以てすれば則ち士禎固より後に隘乎たるを免れず、實に清朝古文家の正宗なり。

首に沈起元、王鳴盛、閔鶚元の三家序、總目あり、其目左の如し。

策一卷、序、跋共三卷、碑、記共一卷、傳、哀辭、誄辭共一卷、墓誌銘二卷、墓表、神道碑共一卷、行實、行狀、行略共一卷、祭文一卷、雜文一卷附代、共に九十七首なり、尾に其著禮俗權衡上下二卷を附し首に康熙十二年の自序有り。

〔評論〕 執信の學、根柢深、枝葉峻茂、將に詩を以て優れりと爲す、故に陳恭尹の序に、其氣は則ち包括混茫、心は則ち細なること毫髮の如く、片言隻字苟も筆を下さず、其要は性眞を自寫し力めて浮靡を去るに歸すといへり。

樊榭山房集 十卷 續集 十卷 文集 八卷

卷

〔作者、題名〕 清の厲鶚撰す、鶚字は太鴻、樊榭と號す、錢塘の人、康熙五十九年の舉人、乾隆元年鴻博に薦められ、乾隆十七年(二四一二)卒す、年六十一、著はす所、宋詩紀事、遼史拾遺、院書錄、玉臺書史

等あり。(國朝先正事略、國朝著錄類微參考)

〔體裁〕 三集俱に首に厲鶚の自序あり、前集詩八卷は、甲乙丙丁戊己庚辛に、詞二卷は甲乙に分つ、續集は詩八卷北樂府一卷小令一卷なり、而して前集は康熙五十二年より乾隆四年まで、續集は乾隆四年より十六年に至るまでの作を載す、文集の目は左の如し。

賦、頌共一卷、序三卷、記、志、碑共二卷、論、考、辯、議、贊、銘等共一卷、跋、辭等共一卷。〔評論〕 其詩は吐屬嫺雅にして修潔自喜の致有り、才力富健なれども、尙未だ朱彝尊等と抗行する能はざるなり。

潜研堂文集 五十卷 詩集 十卷 續詩集 十卷

詩集 十卷

〔作者、題名〕 清の錢大昕撰す、大昕字は及之、又字を曉微といひ、辛楣と號し、竹江は其別號なり、江蘇嘉定の人、乾隆十九年の進士、庶吉士より編修に遷り、侍讀學士等を歴て少詹事に至り、嘉慶九年(二四六四)紫陽に卒す、年七十有七、其著す所唐石經

卷首には別に大昭の序あり。

〔評論〕 大昕の學、六經、諸子より音韻、訓詁、天算、地理、金石、氏族、古人の爵里年齒事實に至る迄該通せざる無し、故に其文自ら深厚、風格歸有光に似たり、蓋し儒家の文なり、其詩は清醇にして頗る法有り、同時の洪亮吉稱して漢儒の傳經師法を守ることが如しといへり。但、未だ宋調を脱する能はず。

惜抱軒文集 十六卷 後集 十卷 詩十卷

十卷

〔作者、題名〕 清の姚鼐撰す、鼐字は姬傳、桐城の人、乾隆二十八年の進士、庶吉士より禮部主事に遷り、後、禮部郎中に至る、嘉慶二十年(二四七五)卒す、年八十有五、著す所九經說、三傳補注、老子章義、莊子章義、書錄、法帖題跋、筆記、古文辭類纂、今體詩鈔等あり。(國朝先正事略、國朝著錄類微參考) 惜抱軒は其居の名なり。

〔體裁〕 此集首に序跋なし、其目左の如し。論議一卷、考一卷、序二卷、跋尾、題辭共一卷、書一卷、贈序一卷、壽序一卷、策問一卷、傳一卷、碑文、墓表一卷、墓誌銘二卷、記一卷、賦一卷、祭

考異、經典文字考異、聲類、廿二史考異、通鑑注辨正、三統術衍、補元史氏族表、補元史藝文志、元詩紀事、金石文跋尾、金石文字目錄、十駕齋養新錄、養新餘錄、三史拾遺、諸史拾遺、恒言錄、竹汀日記鈔、吳興舊德錄、先德錄、疑年錄、洪文惠洪文敏陸放翁王伯厚王介州五年譜、地理圖說等あり。(國朝先正事略、國朝著錄類微參考) 潜研堂は其書室の名なり。

〔體裁〕 此本首に嘉慶十一年金壇の段玉裁の序、及び像贊目錄あり。

卷一は賦、頌、奏摺、卷二は論、卷三は說、卷四より十五は答問、卷十六は辯、攷、卷十七は箴、銘、贊、襍著、卷十八、十九は雜著、卷二十、二十一は記、卷二十二は紀事、卷二十三より二十六は序、卷二十七より三十二は題跋、卷三十三より三十六は書、卷三十七より四十は傳、卷四十一は碑、卷四十二より四十九は墓誌銘、卷五十は家傳、行述、祭文。

詩集は大昕の自編にして、卷首に自序あり、初年より乾隆三十五年までの作を録し、別に體を分たず、續詩集は弟大昭、女婿瞿澐の編せる者にして、辛卯(乾隆卅六年)より甲子(嘉慶九年)までの詩を録す、

文一卷。

後集の目は左の如し。

説、序共一卷、跋尾題辭一卷、書一卷、壽序一卷、傳、贊共一卷、碑文、墓表共一卷、墓誌銘三卷、記、祭文共一卷。

詩集の目は左の如し。

古體、近體各、五卷。

〔評論〕 其文簡淨淳古にして迂徐蕩漾、餘韻盡きず、劉大櫟に出づと雖、工力之に軼ぐ、桐城派に在りて傑出せる作家たり、其詩清雋、晩年の作は頗る蘇軾に近し。

● 學經室集六十二卷

〔作者、題名〕 清の阮元撰す、元字は伯元、雲臺と號す、儀徵の人、乾隆五十四年の進士、諸官に歷仕し、道光二十六年太子太傅に至り、二十九年(二五〇九)卒す、年八十有六、文達と諡す、著す所經籍箋註、十三經注疏校勘記、兩浙輶軒錄、疇人傳等あり、(國朝先正事略國朝耆獻類徵考參)元、幼より經學を擧むるを以て務と爲す、因て其室に命するに學經の二字を以てす。(自序參考)

皆校讐鈎稽の作にして質實なり、徒に詞華を玩ぶものに非ず、其詩も亦經術性情中より流出せり。

● 儀衛軒文集十二卷外集一卷附錄一卷詩集五卷

〔作者、題名〕 清の方東樹撰す、東樹の傳は漢學商兌の條に出づ、儀衛は其軒名なり、蓋し衛武公毫にして學を好むの意に本づく。

〔體裁〕 首に門人蘇惇元の作れる方先生傳あり、次に崇祀鄉賢錄、目錄、方宗誠の識語、自序あり。

卷一、二は論、卷三、四は雜著、卷五は序、卷六は書後 題跋、卷七は書、卷八は贈序、壽序、卷九は記、卷十は傳、卷十一は墓誌銘、祭文、卷十二は譜、序、傳、誌、哀辭、終制。

外集は駢體文、附錄は年譜(鄭編照の輯むる所)を録し、末に同治七年許丙椿の跋有り、詩集の外に大意尊聞三卷、方宗誠筆記中の抄略一卷、遺書三卷(未能錄節錄、道心證錄)を附刊す。

〔評論〕 東樹、文を姚鼐に學ぶ、頗る會輩、朱熹の風

〔傳來、體裁〕 元年六十の時其舊帙を取りて兒輩に授け、編して四集と爲せり、首に道光三年の自序有り、

一集は經に近きの作、二集は史に近きの作三集は子に近きの作四集は御試の賦及び駢體有韻の作を録す、續集は初め九卷なりしが、後復二卷を増刊し、更に再續集六卷を増加せり、其目左の如し。

○ 一集十四卷。卷一より十一は經學に關する論說、解釋、序文等、卷十二より十四は浙江圖考。

○ 二集八卷。行狀、傳、墓誌銘、墓表、地理、歷史、集の序文なり。

○ 三集五卷。前四卷は多く金石類に關する序、跋、記、後一卷は多く集序なり。

○ 四集十三卷。文二卷、詩十一卷。

○ 外集。四庫未收書目提要五卷。

○ 續集十一卷。經に關する文一卷、史、地理に關する文一卷、子に關する者一卷、摺子、頌等一卷、詩七卷。

○ 再續集六卷。經に關する文一卷、史に關する文一卷、子に關する文一卷、摺子一卷、詩二卷。

就中詩は體を分ちて録せず編年なり。
〔評論〕 元は經學に精通し考證に長ず、故に其文大抵

あり、大抵博辨を以て長を見る、其辨論の如き二千九百四十七言の多きに至る、三年之喪二十五日而畢辯の如きも亦纏々一長篇たり、詩は其文に及ばざる遠し。

總集

〔詩集〕

● 楚辭

〔題名〕 楚辭は、漢の劉向が、楚の屈平の辭賦と、其門下及び後人の平が作に倣ひて平を追弔思慕し併せて其志を宣べたる辭賦を輯めて命名せる一の總集なり、抑も賦はもと詩の六義の一にして其事を敷陳して直に之を言ふ者なり、古は諸侯卿大夫鄰國に交接して揖讓の時に當り、必ず詩を稱して其志を論せしが、春秋の後より、周室次第に壞れ、聘問歌詠の事列國に行はれず、詩を學ぶ士逸して布衣に在り、而して賢人志を失ふ賦作る、楚辭是なり、故に楚辭は詩の變ともいふ可き者なり、是より先 楚は南蠻として中原より排斥せられたり、故に詩に楚風なし、

然れども江漢の間皆楚地たり、文王の化南國に行はれてより、漢廣、江有汜の諸詩二南に列し、十五國風の先に居れり、是に由て之を觀れば、詩に楚風なしと雖、而も實は風の首なり、風雅既に亡び、乃ち楚狂が風分、孺子が滄浪の歌あり、情に發して禮義に止る、風雅と甚だ遠からず、但其辭稍詩の本體を變じて兮字を以て讀となす、是其即ち楚辭の先驅たる者なり、屈平忠を含み潔を履みて世に容れられず、耿介の志進る所なく、竟に之を辭に發せり、而して其懷傷愛佛の言竟に賦體の門を開けり、平の弟子宋玉亦能く師意を推し賦を作り遺響を嗣ぎしかば、賦體全く成れり、而して平玉共に楚人にして、其方言を用ひたるを以て、之を楚辭と稱す、此書又一に離騷經といふ(傳來部を參考せよ)、蓋し朱子以後のことにして、經といふは推尊の詞なり。

〔作者〕 楚辭の編纂者たる劉向の傳は、新序の條に著録せり、由りて此には其開祖にして中堅たる屈平及び宋玉の傳を述ふべし、屈平字は原、楚の同姓なり、楚の懷王の左徒となる、博聞強志、治亂に明に辭令に細へり、入りては則ち王と國事を圖議して以て號令を出し、出でては則ち賓客に接遇し諸侯に應對す、

王甚だ之に任ず、上官大夫之と列を同くするもの、寵を争ひて心に其能を害とす、懷王平に意令を造爲せしむ、平草稿を屬して未だ定まらず、上官大夫見て之を奪はんと欲す、平與へず、因て之を讒す、是より王、平を疏みしかば、平忠直の臣容れられずして、邪曲の明を害するを悲み、憂愁幽思して離騷を作れり、其後王の張儀に詐られたるを諫めたれども聽かれず、然れども尙王室を懷ひて忘る、能はず、江濱に至り澤畔に行吟す、顔色憔悴し形容枯槁せり、竟に懷沙賦を作り汨羅に投じて死す、(史記列傳參考) 平の門、宋玉、唐勒、景差あり、玉最も著る、玉字は子淵、楚人なり、仕へて大夫と爲れり。

〔傳來〕 劉向此書を編次して後、王逸(後漢)は己れの作九思と、班固の二叙とを加へて、十七卷と爲し、之が章句を作れり、是蓋し此書注解の最も古き者なり(六朝)の間之が注を作る者多し、(宋)に至り洪興祖は逸の章句の補注を作れり、晁補之は平の作を以て楚辭とし、後世の文賦、楚辭と相類する者、宋玉以下宋に至る二十六人六十篇を撰びて續楚辭二十卷と爲し、其餘の文賦大意平を祖述し或は類似せる者、荀卿以下宋代に至る三十八人九十六首を擇び、

編して變騷雅二十卷とす、朱子に至り以爲らく、逸の章句、興祖の補注、訓詁に詳にして未だ意旨を得ずと、乃ち集注八卷辨證二卷後語六卷を作り、平が著す所の二十五篇を以て離騷と爲し、宋玉以下十六篇を續離騷と爲し、文に隨ひて詮釋し、每章各、繋るに與比賦を以てすること、毛の詩傳の如し、辨證は其舊注の誤謬を訂正し、後語は補之の二書を判定し、荀卿より呂大臨に至る凡五十二篇を撰びたり、其離騷といふは、離騷が平の賦中重なるを以て、之を擧げて他を括するなり、是より注家多く離騷を以て、直に斷じて楚辭と爲し、玉以下に及ばず、(明)の汪瑗の楚辭集注、(清)の林雲銘の楚辭燈、屈復の楚辭新注、蔣驥の山帶閣楚辭の如き是なり、是に於て楚辭は殆んど別集の如き者と爲れり、故に現行の楚辭には、(1)王逸本と、(2)離騷本との二種あり、(我國)には平安の朝に渡來し、現在書目には王逸以下五家の注を著録せり、慶安四年、朱子の集注本を翻刻してより、寛延二年に王注本を、其後楚辭燈を翻刻せり、楚辭燈には二種あり、一は原本を其儘翻刻せる者にして、一は秦鼎が屈復の新注を欄外に増入して刻せる者なり。

〔體裁〕 此書は前述の如く二本ある外に、注家各、意を以て其篇章を變置し、又は改作せる者あり、故に體例一ならず、今王逸本の目録を擧げ、之を本として異同を叙述せん。

- 離騷第一、九歌第二、(東皇太一、雲中君、湘君、湘夫人、大司命、少司命、東君、河伯、山鬼、國殤、禮魂 九歌は十一篇ありて九歌といふ、九章の九篇ありて五臣、九は陽數の極、自ら謂ふ否極と、取てて以て歌名と爲す、洪興祖曰く、篇招九成の義にとり、姚寬曰く、七啓七發の類、如し、篇數を論ぜずと、朱熹曰く、義解不可からず、疑を問きて可なりと、林雲銘曰く、山鬼、國殤、禮魂一篇たりと、蔣驥曰く、湘君、湘夫人一篇、大司命、少司命一篇と、是其重なる者なり、今は蔣、氏の說に従ひ、禮魂篇を以て前八篇の亂辭と爲す、尙考を缺つ)
- 天問第三、九章第四、(惜誦、涉江、哀郢、抽思、懷沙、思美人、惜往日、橘頌、悲回風)、遠遊第五、卜居第六、漁父第七、(以上屈)
- 九辯第八、招魂第九、(以上宋)
- 大招第十、(屈原作或、惜誓第十一、(賈誼) 招隱士第十二、(淮南小) 七諫第十三、(東方) 哀時命第十四、(嚴忌) 九懷第十五、(王褒) 九歎第十六、(劉向) 九思第十七、(王逸)

朱子の集注本は、屈原の作のみは題して離騷といふも、順序篇章總て王逸本に同じ、續離騷には左の八種を收めたり。

- 九辯、招魂、(宋玉) 大招、(景差) 惜誓、弔屈原、闕賦、

〔註〕哀時命、(嚴忌)招隱士、(淮南小) 而して七諫以下は皆後語に收めたり、明の黃文煥の楚辭聽直は、全く其順序を改めて、離騷、遠遊、天問、九歌、漁父、卜居、九章とし、大招、招魂の二篇を以て斷して原の作と爲し、篇末に附す、清の林西仲の楚辭燈は篇章は舊に従ふも、大招、招魂は文煥の説に従ひ漁父篇の次に置けり、而して九章篇各章の順序を變へて、惜誦、思美人、抽思、涉江、橘頌、悲回風、惜往日、哀郢、懷沙とせり、蔣驥は原の境遇より揣摩して、根本的に篇章を變置せんとせしも、其著山帶閣注楚辭には、猶疑を存して舊目に據れり、而して大招、招魂を取ること、黃林二氏の如し、然るに戴震、王邦采の如きは王、朱の説に従ひ二篇を取らず、次に屈復の新注本は、天問篇に錯簡ありとして、隨意に其前後を移置せり、故に舊本と全く其文を異にせり。

〔注解、参考〕 ○楚辭章句十七卷 後漢王逸撰 ○楚辭補注十卷 宋洪興祖撰 ○楚辭集注八卷、辨證二卷、後語六卷 朱熹撰 ○離騷集傳一卷 錢果撰 ○離騷草木疏四卷 吳仁傑撰 ○屈宋古音義三卷 明陳之騷撰 ○楚辭聽直八卷、合論一卷 黃文煥撰 ○楚辭述注十卷 林兆瑞撰 ○楚辭集解八卷、索引二卷、考異一卷 汪藻撰 ○楚

辭疏十九卷、附錄一卷 陸時撰 ○天問補注一卷 高毛奇撰 ○楚辭燈四卷 林兆瑞撰 ○楚辭新注八卷 屈復撰 ○雜騷草木疏辨證四卷 戴震撰 ○山帶閣楚辭注六卷、餘論二卷、楚辭說韻一卷 蔣驥撰 ○離騷正義一卷 方苞撰 ○屈原賦六卷、屈原賦通釋二卷、屈原賦音義三卷 戴震撰 ○離騷箋二卷 吳景燾撰 ○屈子箋略六卷 王邦采撰 ○楚辭天問箋一卷 丁晏撰

玉臺新詠十卷

〔作者、題名〕 陳の徐陵撰す、陵の傳は徐孝穆集の條に出づ、劉肅の大唐新語に曰く、「梁簡文爲太子、好作艷詩、境內化之、晚年欲改作、追之不及、乃命徐陵爲玉臺集、以大其體」と、此に據れば、是書は梁の時に作りし者なり、故に書中簡文を皇太子と稱し、元帝を湘東王と稱せり、今本陳尙書左僕射太子少傅東海徐陵撰と題するは、後人の追改せる者なる可し、是恰も劉勰の文心雕龍は、其齊に事へたる時の作なるに、後世梁劉勰著と題するが如し、此書隋志に玉臺新詠と稱し、大唐新語の稱語と異なり、然れども沿習已に久しきを以て、之に従ふ、玉臺とは、婦人の貞に喻ふなり。

篋中集一卷

〔作者、體裁〕 唐の元結撰す、結の傳は次山集の條に出づ、此書は乾元三年の作にして、沈千運、王季友、于濂、孟雲卿、張彪、趙微明、元李川七人の詩、廿四首を録せり。

〔編旨、題名〕 自序に曰く「近世作者、聲病に拘限せられ、喜ひで形似を尙び、且つ流易を以て詞と爲す、雅正を喪ふを知らずして然る哉云々、吳興の沈千運、獨り流俗の中に挺んで、窮老惑はず、五十餘年、凡爲る所の文、皆時と異なり、故に朋友後生に稍、師效せられ、能く侶類たる者五六人あり、嗚呼沈公より二三子に及ぶ、皆剛直を以て祿位なく、皆忠信を以て久しく貧賤に、皆仁讓を以て喪亡するに至る云々、天下兵興り今に六歲、人皆武を務む、斯れ誰れか嗣と爲らん、已に長逝せる者は遺文散失し、方に阻絶せる者は近作を見ず、篋中有所を盡して、總べて之を編次し、命じて篋中集といふ」と、以て其編旨と、題に命する意とを知る可し。

〔體裁、編旨、傳來〕 此書は、漢より梁に至る迄の詩を集めたる者にして、

五言詩八卷、歌行一卷、五言二韻詩一卷。

を録せり、皆綺羅脂粉の詞を取ると雖、古を去ること未だ遠からざるを以て、猶溫柔敦厚の存するあり、未だ概して淫艶を以て之を斥く可からざるなり、其中曹植の棄婦篇、庾信の七夕詩、本集には皆失載すれども此には載せ居れり、又明の馮惟訥の詩紀には、蘇伯玉妻盤中詩を漢人に作れども、此に據れば晋代の作たるを知り、梅鼎祚の詩乘には、蘇武妻答外詩を載するも、此に據れば魏文帝の作たるを知り、古詩十九首中、西北有高樓等九首を、文選には無名氏とあれども、此には枚乘の作とし、飲馬長城窟行の詩を文選には亦無名氏とあれども此には蔡邕の作と爲すが如き、其考證に資ある者一ならず、以て有益の書たるを知る可きなり、(我國) には佐世の書目に著録すれば、其傳來の早きを知るに足るも、其之を刊行せしは、文化三年の官版を始とす。

〔註解、参考〕

○玉臺新詠箋注十卷 清吳兆宜撰 ○玉臺新詠考異十卷 客紀撰

●河岳英靈集 三卷

〔作者、題名〕 唐の殷璠編す、璠は丹陽の人、嘗て進士に第せり、事蹟詳ならず、此書録する所の詩、皆河岳の英靈の鍾まる所といふ意より名づく、河は黃河、岳は五岳なり。

〔體裁、編旨、傳來〕 此書は、唐の常建以下、閩防に至る二十四人の詩、二百三十四首を録し、姓名の下各品評を加ふること、鍾磔詩品の體に仿へる者の如し、際の如く顯に次第を分たすと雖、其上中下三卷に分ち、其人を時代順に列せざるを見れば、隱に際が三品の意を寓したる者なる可し、而して序に「爰因退迹、得遂宿心」と謂へば、志を得ずして、此書を著したるや明なり、故に録する所、皆優塞の士にして、論する所感慨の言多し、且つ序に「名不副實、才不合道、雖權權梁梁資、終無取取焉」といへる、亦其撰意を知る可きなり、文獻通考に二卷に作るは、蓋し傳寫の誤ならん、清初毛晋之を刊行せり、之を元刊本に視るに集論一篇を少くといふ、(我國)には平安朝既に渡來せること佐世の書目にて知る可し。

●國秀集 三卷

〔作者、題名〕 唐の芮挺章編す、挺章鄉貫を詳にせず、諸書稱して國子博士と爲せば、蓋し太學士なる可し、此書國秀といふは、國中秀才の詠といふ意ならん。

〔體裁、傳來〕 序によれば、天寶三年に編せしものにして、九十人の詩、二百二十首を録せり、然るに今本は僅に作者八十五人、詩二百二十一首なれば、佚脱せし者なる可し、中に自作の詩二首、及び序を作れる樓穎の詩を録するより、清の紀昀の如きは、詩社標榜の濫觴なりといひて之を謗れり、然れども録する所、率ね皆精美にして、到底後來詩社の及ぶ所に非ざるなり。

●御覽詩 一卷

〔作者、題名〕 唐の令狐楚撰す、楚字は穀士、宜州華原の人、貞元七年の進士、桂管觀察使王拱の幕下に屬し、後太原節度判官と爲り、召されて右拾遺を授けられ、官吏部尙書檢校尙書左僕射に至り、出で

會て何焯の校定本を視るに毛本と異同極めて多し。
〔附記〕 篋中集以下中興間氣集に至る都て五種は我國文政七年昌平校の刊行本あり。

●極玄集 二卷

〔作者、題名〕 唐の姚合編す、合の傳は姚少監詩集の條に出づ、極玄とは詞の玄妙を極むるといふ義より名づけしならん。

〔編旨、體裁、傳來〕 合の詩頗る刻畫細碎なるも、是集取る所は高作多し、王維より戴叔倫に至る二十一人、凡て一百首、今存する者は九十九首なり、作者の下必小傳を添ふ、蓋し總集にして兼ねて小傳を具ふる者は、之を以て始と爲すといふ、宋の計敏夫の唐詩紀事に、凡そ録する所、詩を載せ、皆注して右姚合取爲「極玄集」といふを見れば、宋人は甚だ此書を重んぜし者なるべし、清初の毛晋之を刊行せるも問、誤認有り(我國)文政八年に刊行せるものは元刊本に本づきたるを以て毛本に優れり。

●中興間氣集 二卷

〔作者、體裁〕 唐の高仲武編す、仲武の傳詳ならず、録する所、至徳の初より起り、大曆の末に至る、凡そ詩百四十首、作者二十六人、今は鄭當一人詩八首を佚せり、姓名の下各品題あること、河岳英靈集と同じ。

〔題名、編旨〕 安祿山の亂、玄宗蒙塵し、肅宗立ち、遂に國家を中興す、即ち即位元年(即ち至徳元年)よりの詩を輯録するを以て、中興間氣集と名づく、氣は氣運なり、詩以て氣運を知るべく、氣運によりて此詩ありといふ意なるべし、清初毛晋之を刊行せり、予

●松陵集十卷

〔作者、題名、體裁〕 唐の陸龜蒙編す、其名は則ち皮日休の題する所にして地名に取れるなり、龜蒙の傳は笠澤叢書を、日休の傳は文叢の部を見よ、初め崔璞、諫議大夫を以て蘇州刺史たる時、皮日休を辟して從事と爲す、たましく龜蒙璞に謁し、因て日休と相倡和し、遂に録して此集を爲せり、其中龜蒙日休の作三百四十二首、璞及び顔萱、張實、鄭璧、司馬都、李穀、崔璠、魏朴、羊昭業等の詩、亦數首を附載せり。

●才調集十卷

〔作者〕 蜀(五代)の韋穀編す、穀の郷貫事蹟詳ならず、たゞ王建に仕へて、觀察御史たりしことを知るのみ。

〔編旨、題名、體裁、傳來〕 四庫提要に曰く、穀五代文敝の際に生ず、故に録する所、多く晚唐に取り、濃麗秀發を以て宗と爲す、(才調の名亦蓋し此より來れり)當時粗俚の習を救ふ益無しと爲さず、(明)の馮舒、馮班の徒、其書を引きて西崑體に合し、以て詩家の

軌式と爲すは、則ち一隅の見にして信するに足らず」と、凡て古律雜歌詩、一千首、一卷を一百首とす、清初の毛晋之を刊行せり、(我國)にては文政八年昌平校にて刊行したり、蓋し舊抄本に據れるものにして之を四庫提要本に較ふるに殊に優れり。

〔注解〕

○才調集補注十卷 清殷元勳撰 宋邦綏補

●搜玉小集一卷

〔題名、作者〕 其書名は玉の如き佳篇を搜取するの意なる可し、作者詳ならず、宋の鄭樵の通志已に之を載すれば、其傳來の舊きを知る可し。

〔體裁、編旨〕 凡て唐人の詩を録す、舊目三十七人、六十三首と題し、今本は三十四人、六十一首にして作者三人、詩二首を缺けり、以て三人に分配するに足らず、必ず一人の詩、他人の名の下に混せるものなる可し、凡て人を以て叙とせず、又體を以て分たず、編次參差、重出疊見し、其編旨を詳にする能はず、(我國)にては文政七年官版一附せり。

●西崑酬唱集二卷

〔作者、題名〕 宋の楊億編す、億の傳は武夷新集の條に出づ、億の序に玉山策府の名を取りて題して西崑酬唱集といふとあり。

〔體裁、編旨〕 此書は 楊億、劉筠、錢惟演、李宗諤、陳越、李維、劉鵬、刁衍、任隨、張詠、錢惟濟、丁謂、舒雅、晁迥、崔遵度、薛映、劉秉。

十七人の酬唱の詩を録せる者にして、皆近體なり、上卷百二十三首、下卷百二十五首、合して二百四十八首なり、而して億の序に和する者十五人とあるは、錢惟演、劉筠の二人酬唱の主たるより、除きて數へざりし者ならん、又凡て二百五十首とありて、今本より二首多し、蓋し散佚せる者ならん、其詩大抵音節鏗鏘、詞采精麗なり。

●唐百家詩選二十卷

〔作來、編旨、傳來〕 舊本は宋の王安石編すと題す、安石の傳は、臨川集の條に出づ、此書去取絶えて解す

可からざるを以て、宋より以來之を疑ふ者一ならず、曲げて解をなす者も亦一ならず、然れども大抵指して安石と爲せり、たゞ晁公武の讀書志に曰く、「唐百家詩選二十卷、皇朝宋敏求次道編す、次道三司判官たりし時、嘗て其家藏する所の唐人一百八家詩選を取り、其佳なる者、凡そ一千二百四十六首を擇び一編となす、王介甫之を觀、因りて再び去取する所あり、且つ題して曰く、唐詩を觀んと欲する者は此を觀ば足れりと、世遂に以て介甫の纂する所と爲す」と、其說特に諸家と異なり、按ずるに讀書志は南宋の初に作られ、安石を去る未だ遠からず、又晁氏は元祐以來の舊家にして、文獻緒論、相承くるを以て、其言必ずや虛構には非ざる可し、たゞ周輝の清波雜志、邵博の聞見後錄に、安石が宋敏求と同じく、群牧司判官たりし時、敏求の藏本につきて選擇し、屬吏をして之を寫さしめしに、屬吏寫字を厭ひ、選べる長詩を捨て、小詩を取りしも、安石は忽略の人たるを以て復た更に視て校正せざりき、今世に所謂唐百家詩選は即ち是にして、實は安石の手定に非ずといへるが如きは、妄說にして取るに足らざるものなり、此書久しく世に傳はらざりしが(清)の康熙中、

宋學全本を得て之を刻し、漸く世に出づるに及べり、(我國)にては享和二年、之を官版に附せり。
 [體裁] 録する所、帝王は明皇二首、德宗一首のみにして、卷一の首に在り、次に薛稷より韓偓に至る百七人の詩を、一人に付き少きは一首、多きは六十首以上を撰べり、凡て一千二百六十二首あり、讀書志いふ所より十六首多し、蓋し讀書志を傳寫する者、誤りて六十二を以て四十六と爲せしならんといふ。

●樂府詩集 一百卷

[題名、作者] 樂府は詩を音樂に合せて歌ふ者にして漢代より盛に起れり、此書は樂府詩を録するを以て名づく、宋の郭茂倩撰す、茂倩は渾州須城の人、題して太原といふは郡望を署せるなり、侍讀學士郭褒の孫、源中の子なりといふ、事蹟詳ならず。
 [體裁、傳來] 此書は陶唐より五代に至る迄の樂府を輯めたるものにして、凡て左の十二類に分てり。
 郊廟歌詞、燕射歌詞、鼓吹曲詞、橫吹曲詞、相和歌詞、清商曲詞、舞曲歌詞、琴曲歌詞、雜曲歌詞、近代曲詞、雜謠歌詞、新樂府詞。

凡て時代順に収録せり、而して其解題は徵引浩博にして援據精密なり、每題古詞を以て前に居き擬作を後に居く、此書出てより樂府をいふ者、皆準據せざるなし、(明)の梅鼎祚が古樂苑に其缺點を指摘し云々せるは、全きを求むるに過ぎ、毫も茂倩を病ましむるに足らず。

●萬首唐人絕句詩 四十卷 目錄 四卷

[作者、題名] 宋の洪邁撰す、邁の傳は容齋隨筆の條に出づ、此書は唐人の絕句一萬首を輯録せる者、故に名づく。
 [傳來、體裁] 邁、淳熙七年の秋、唐人の五七言絕句五千四百首を録し、翌年之を進御す、後復編輯して萬首に滿つるを得、百卷と爲し、紹熙三年之を上る、帝覽て選擇甚精、備見博洽の褒論あり、然れども數に盈たさんことを期し、諸集より傳記に至るまで搜索し、得るに従ひて録したるものなれば、時代先後一定せず、且つ異代の人の詩を録し、又は一人にして數回重出する者ありて甚だ蕪雜なり、故に陳振孫の書録解題、劉克莊の後村詩話等皆之を譏れり、原板一百

一卷(内目)半は會稽にて刻し、半は郡陽にて刻せしが、嘉定四年、汪綱、郡陽の刻を會稽に合して修補を加へたり、後、殘闕する所あり、四庫全書に著録する者は即ち此刻なり、(明)の嘉靖十九年陳某重校して之を梓にせしが、未だ其譌を正す者あらず、萬曆三十二年春、黃習遠、趙宦光と、其謬り且つ重複する者二百十九首を芟去し、百一人六百五十九首を補入し、總て一萬四百七十七首を得たり、詩は人を以て彙め、人は代を以て次し、釐めて五言十卷(附六言)七言三十卷、合して四十卷と爲し、制闕に附す、即ち現行本なり、而して補入せる者は皆補字を加へて之を分てり、目錄の首には宦光、習遠の序引、邁の序、謝表、發凡、唐風四始あり、(清)の王士禛は其蕪雜を病み、之を刪正精選して、唐人萬首絕句選七卷を著せり、(我國)にては文政六年黃趙二氏の補刪本を官版に附せり。

[參考] ○唐人萬首絕句選七卷 清王士禛撰

●聲畫集 八卷

[題名、作者] 唐宋人の畫に題する詩を集めたる者に

して、聲畫の名は、揚子法言に「言心聲也、書心畫也、聲畫形、君子小人見矣」といへるより來れり、宋の孫紹遠撰す、或は劉摯の著とするは誤なり、紹遠字は稽仲、自ら署して谷橋といへど、其何地なるかは詳ならず、従ひて事蹟も亦明ならず。
 [體裁、傳來] 此書凡て古賢、故事、佛像、神仙、仙女、鬼神、人物、美人、蠻夷、贈寫眞者、風雲雪月、州郡山川、四時、山水、林木、竹、梅、窠石、花卉、屋舍器用、屏扇、畜獸、翎毛、蟲魚、觀畫題畫、畫壁雜畫の二十六門に分てり、宋代の諸作にして、今多く其集の傳はらざる者、且つ其姓名を知らざる者等、幸に是書に其一二を存するを以て、たゞに畫に資けるのみならず、詩學上にも有益なる資料を與へたり、(我國)文化十三年之を刊行せり。

●衆妙集 一卷

[題名、作者] 衆妙は老子に出づ、此書衆くの絶妙なる詩を集むる義ならん、宋の趙師秀撰す、師秀字は紫芝、靈秀と號す、永嘉の人、紹熙元年進士に登第し、州

縣に歷仕し、高安の推官に卒す。(萬姓統譜參考)
 [體裁、編目、傳來] 此書録する所、皆唐人の近體にして、沈佺期に始まり、王貞白に訖る、凡て七十六人、五言十の九に居り、七言は僅に十の一なり、蓋し師秀近體に長し、古體に短に、近體は五言に長じ、七言に短なり、故に撰擇亦此の如きを致せり、而して取る所の詩は、風調流麗を以て宗と爲す、(我國)享和元年之を刊行せり。

◎江湖小集百十二卷

[作者、題名、傳來] 舊本は宋の陳起撰すと題す、起字は宗之、錢塘の人、書肆なり、詩を能くし又陳道人と號せり、(江湖後集四庫提要參考)方回の瀛奎律髓によれば、寶慶の初、起、書肆を以て詩を能くするより、江湖の詩人俱に之と善し、因て江湖集を刊して世に售るとあり、其題に命する亦此に取りしを知る可し、又同書及び周密の齊東野語によれば、江湖作家中詩を作りて、時の宰相史彌遠を刺りしより、起等を始め囚獄に投せられ、江湖集の版木を毀たれ、且つ士大夫の詩を作るを禁せられたりしが、紹定六年彌遠の死

と共に禁解かれたり、今此集を見るに、端平、淳祐、寶祐の諸作家の作多く、皆紹定六年後に係る、又洪邁、姜夔の如き孝宗の時に生榮せる人の詩を載せ、又劉克莊、曾極、等皆収録せられたること、回及び密の書に見ゆれど、今本に脱せるを見れば、原本殘闕して、今本は後人の掇拾、補綴したる者にして、起の舊本に非ざるを知るべし。
 [體裁] 此書録する所、凡て六十六家と高僧詩選とあり左の如し。

- 野處類稿二卷 洪邁 巽齋小集一卷 危稹
- 雪坡小稿二卷 羅與之 菊圃小集一卷 高九萬
- 梅屋吟一卷 鄒登龍 北牕詩稿一卷 余觀復
- 鷗渚微吟一卷 趙崇錦 學吟一卷 朱南杰
- 雅林小窠一卷 王琮 采芝集、續集各一卷 釋斯植
- 芸居乙稿一卷 陳起 菊潭詩集一卷 吳仲孚
- 庸齋小集一卷 沈說 雲泉詩集一卷 釋永頤
- 學詩初稿一卷 王同祖 西麓詩稿一卷 陳允平
- 橘潭詩稿一卷 何應龍 吾竹小稿一卷 毛珣
- 皇琴曲一卷 鄧林
- 梅屋詩稿、融春小綴各一卷 許棊
- 竹莊小稿一卷 胡仲參

- 梅屋三稿、梅屋四稿各一卷 許棊
- 東齋小集一卷 陳監之
- 芸隱勸游稿、芸隱橫州稿各一卷 施樞
- 竹所吟稿一卷 徐集孫 雲臥詩集一卷 吳汝式
- 適安藏拙餘稿、同乙稿各一卷 武衍
- 疎寮小集一卷 高似孫 靖逸小集一卷 葉紹翁
- 秋江煙草一卷 張弋 雪林刪餘一卷 張至龍
- 癖齋小集一卷 杜旂 招山小集一卷 劉仙倫
- 華谷集一卷 嚴粲 看雲小集一卷 黃文雷
- 抱拙小稿一卷 趙希楫 檜庭吟稿一卷 葛起耕
- 敝稿一卷 利登 雲泉詩一卷 薛嘯
- 葛無懷小集一卷 葛天民
- 漁隱詩稿二卷同乙稿一卷 俞桂
- 小山集一卷 劉翰 雪隱小集一卷 張真臣
- 斗野稿支卷一卷 張翥 露香拾稿一卷 黃大受
- 竹溪十一稿詩選一卷 林希逸
- 雁翁詩集二卷 敖陶孫
- 靜住龍尋稿、同乙稿各一卷 朱繼芳
- 山居存稿一卷 陳必復 端隱吟稿一卷 林尚仁
- 雪深稿一卷 姚鑑 心游摘稿一卷 劉翼
- 雪磯叢稿五卷 樂雷發 雪巖吟草一卷 宋伯仁

不屏續集四卷 戴復古 順適堂吟稿五卷 葉茵
 龍洲道人詩集一卷 劉過 林同孝詩一卷 林同
 梅花初一卷 剪綃詩集二卷 李昉
 白石道人詩集一卷 姜夔 蒙泉詩稿一卷 李潛
 方泉先生詩集三卷 周文瑛
 亞愚江浙紀行詩七卷 釋紹嵩
 高僧詩選前集一卷後集三卷 續集一卷
 退菴遺集二卷 吳淵 瓜廡詩一卷 薛師石
 端平詩稿四卷 周彌 野谷詩稿六卷 趙汝錕
 就中△印を附する者には、別に自序又は諸家の序あり、○印を附する者には題あり、◎印には跋あり、●印には文、又は賦を混せり、余が見たる者は内閣文庫本及び自藏本にして、共に清乾隆嘉慶中臨安書房宋本覆刻の寫本なり、文庫本は亞愚江浙紀行詩以下を闕き、自藏本は以上を闕けり、裝釘、字樣一手に出るを見れば、桑滄の變分離したる者ならん、而して數部を合して一卷となし、凡て十六卷と爲せり、一卷を分ちて數卷と爲すは、條理に於て不明を來たすのみならず、索引に不便なるを以て今は之に従はず、每集其卷數を著録す、而して此書刻一時に非ず、故に諸家の藏一定せず、四庫著録本は凡て六

十二家九十五卷にして此より、釋永頤、林希逸、周
炳、趙汝鎡の四家と、高僧詩選とを闕き、朱記榮の
彙刻書日本は、此より高翥の菊圃小集、翁卷の葦碧
軒集、趙師秀の清苑齋集、徐照の芳蘭軒集、徐璣の
二薇亭集各一卷、中興群公吟稿戊集八卷と、陳起編
する所の前賢小集拾遺五卷、顔修輯むる所の群賢小
集補遺とを増せり。

◎江湖後集二十四卷

〔作者、題名〕 宋の陳起撰す、起の傳は江湖小集の條
に出づ、此書は其次編なり、故に後集を以て名づく。

〔傳來、體裁〕 此書は不幸にして散佚せしが、永樂大
典中に散在せるを以て、清の乾隆帝の時、四庫館員
に命じて拾掇し、武英殿に刻せしむ、即ち現行本な
り前集は一人一集なれども、此書は然らず、一卷數
人を收む、鞏豐に始まり陳起に終る、凡て六十七人、
人毎に小傳あり、就中小集にある者廿餘人あり。

◎三體唐詩六卷

す、豈空疎輕薄の爲に勝らずや、稍々探討を加ふれ
ば何ぞ古人の我に同しからざるを患へん云々、と能
く此書編纂の得失を論じて當れり、蓋し弼が是書を
撰するは、當時江湖詩家の末派が油腔滑調の弊を救
ふに在り、故に其取る所此の如きを致せるなり。

〔傳來〕 此書撰する所盡く精粹ならざれども、其詩た
る辭は幽麗を重んじ、調は流暢を貴び、且つ其建つる
所の矩則、亦大に學者を批補せるを以て、(元、明)
より(清)朝に至るまで、藝苑に列せられて亡びず、
注を作る者亦從て多し、(我國)に傳はれるは、三體詩
絶句鈔に、「此集を始めて講するは、妙喜菴の祖中巖
和尚入唐してよりの事なり」といへば、中巖の傳へ
たるものなるべし、爾來講述甚だ盛に、其授受の系
圖をみるに、中巖より義堂に、義堂より江西に、江
西より瑞巖、九淵、村菴に、村菴より正宗、月舟に
傳はれり、これ其傳承なり、又これが注を作る者多
く、桂林、萬里最も著る、徳川時代に及び、荻生徂
徠の徒は之を排斥したれども、猶世上の尊崇を絶つ
能はず、講解の書續々として出でぬ、延いて明治の
世に及び、初學の士は、必ず之を繙くを常とす、以
て其盛に行はれたることを知るべきなり。

〔作者、題名、體裁〕 宋の周弼撰す、弼字は伯明、汝
陽の人、端平中に生榮す、少より吟咏を好み、長し
て吳楚江漢の間に官游すること四十年、詩名江湖に
聞ゆ、著す所端平詩集四卷あり、(汝陽端平)此書は唐
詩を擇選する者にして、俗に三體詩と稱す、三體詩
とは、七言絶句、七言律詩、五言律詩をいふ、首に
選例を載せ、七言絶句を實接、虚接、用事、前對、
後對、拗對、側體の七格に分ち、七言律詩を四實、
四虚、前虚後實、前實後虚、結句、咏物の六格に分
ち、五言律詩を四實、四虚、前虚後實、前實後虚、
意、起句、結句の七格に分てり。

〔編旨〕 范希文の對牀夜話に曰く、「周伯明唐人の家法
を撰す、四實を以て第一格となし、四虚之に次ぎ、
虚實相半又之に次ぐ、其四實を説きて謂ふ、中四句
は皆景物にして實なり、華麗典重の中に於て雍容寬
厚の態あり、此其妙なり、味者之を爲れば、則堆積
窒塞して意味に寡し、是編一たび出でて後學に補
なしと爲さず、有識高見卓として時習に薰染せられ
ざる者、往々此に於て解悟せん、間々實に過ぎて句
未だ飛健ならざる者は、以て或者の窒塞の譏を起
すを得ん、然れども鶴を刻みて成らざるも尙驚に類

〔注解〕 ○箋注唐詩絶句三體詩法二十卷元釋 ○増注
唐實絶句三體詩法三卷慶 ○三體詩備考大成二十卷
日本熊谷此書原本なれども
立附撰(初學の徒に便なり)

◎月泉吟社詩二卷

〔作者、題名〕 宋の吳渭撰す、渭字は清翁、潜齋と號
す、浦江の人、嘗て義烏の令と爲れり、元に入りて
後吳溪に退居し、月泉吟社を立て、四方の吟客を
集め、詩盟を司れり。(田汝耕)

〔體裁〕 此書は豫め至元二十三年小春望日に、春日田
園雜興を以て題と爲し、體は五七律に限りて諸氏の
作を求め、翌年正月望日を切と爲し、凡て二千七
百三十五人を得たり、是に於て方鳳、謝翺、吳思齊
三人を延いて、其甲乙を評せしむ、選に入る者凡て
二百八十八人あり、三月三日を以て之を揭示し、後劄
副に附せし者即ち此なり、後散佚し、現本は其抄録
本なり、(四庫提要による、田汝)凡て六十人、羅公福(第
一等)に始まり青山白雲人(第六十等)に終る、録
する所の詩凡て六十四首なり、卷上は卷首に別に社
約、題意、誓詩壇文、詩評あり、後、入選者の詩を

等順に列せり、每人皆寓名を用ひて、別に本名字號を注し、每詩評點を附す、次は摘句三十二聯あり、卷下は入選者に詩賞を送る小節あり、其首に賞格を出せり、次に受賞者の返簡あり、此書四庫には一卷とあり、余が見たる者は享和二年應見爽鳩の覆刻にして、田汝籽及び毛晋の序跋ありて二卷なり、今は之に従ふ。

◎兩宋名賢小集二百八十卷(未見)

〔作者、體裁、傳來〕 舊本宋の陳思編、元陳世隆補と題す、思は臨安の人、理宗の時に生榮せり、傳記詳ならず、著す所寶刻叢編あり、世隆字は彥威、錢塘の人傳記明ならず、著す所北軒筆記あり、此書録する所、楊億に始まり潘音に終る、凡そ一百五十七家、紹定三年、魏了翁の序及び清の朱彝尊の跋あり、了翁の序は即ち思の著寶刻叢編の序にして、數字を改作せるに過ぎず、彝尊の跋は思と江湖集の撰者の陳起とを以て同一人となし、江湖集と此書とを以て合して一書となし、曝書亭集中宋高菊圃遺稿序にいふ所と全く異なれば、總べて皆僞托に出づるや明なり、此

の如く、名は僞と雖、百五十七家の詩は、則ち皆僞ならざれば、參考に資するに足る者多しといふ。

◎瀛洛風雅 六卷

〔題名、作者〕 瀛溪は周茂叔の住せし所、洛は程明道の住せし所、故に後世この學派を瀛洛といふ、其學者の詩を輯めて、國風及び雅に擬す、故に風雅といふ、元の金履祥の撰する所なり、履祥字は吉父、蘭谿の人、幼より孝行を以て稱せらる、王柏に従ひ父何基に學び、瀛洛の學を奉ず、宋の末、策を獻せしも用ひられず、徳祐の初、召されしも辭して就かず、金華山中に隠る、後仁山の下に遷り、講説す、學者因て仁山先生と稱す、大徳中卒す、著す所論語孟子集注考證十七卷、尙書表注四卷、大學章句疏義二卷等あり。(元史儒學傳參考)

風雅正變大小の殊あり、頌も亦周魯の體を異にするあり、されば此書も亦類を以て分たざる可からず、と乃ち詩、銘、箴、賦、誡、贊、四言なる者を以て風雅之正となし、楚辭、歌騷、樂府、韻語を風雅之變となし、五七言古風を風雅之再變となし、絶句律詩を風雅之三變となし、排比條次して之を世に行ふ、即ち今本なり、詩人の詩、道學の詩と分れて兩端となるは此書より始まるといふ、我國にては寛文十年翻刻せり。

〔附記〕 清の張伯行は周子、二程子、邵子、張子、游酢、尹焞、楊時、羅仲素、李侗、朱子、張栻、眞德秀、許衡、薛瑄、胡居仁、羅洪先十七家の詩を選して瀛洛風雅九卷を編し、履祥の舊名を襲ひて、一言もこれに及ばざるは、其故を解する能はず、然れども我國にては二書共に翻刻あれば、世人の疑を恐かんことを恐れ、此に一言す。

◎唐詩鼓吹十卷

〔作者、題名〕 編輯者の名氏を著さざるも、趙孟頫の序文によれば、金の元好問の編する所なり、好問の

(集) 總集

傳は遺山集の條に出づ、此書は唐詩を鼓吹すといふ意にして、題に命じたるなり。

〔體裁、編目、傳來〕 録する所は、唐人の七言律詩にして、柳子厚に始まり徐鉉に終る、凡て九十六家、共に五百九十六首なり、中に就き第八卷に宋人胡宿の詩二十三首を載せたるは、蓋し誤謬に出づるならむ、方回の瀛奎律髓と、同じく元初に出づと雖、其去取謹嚴にして收むる所、大抵適健宏傲の作多く、宋末の江湖、四靈、瑣碎寒儉の習無きは、迥に回の書の上に出づ、(元)代に在りては郝天挺先づ之に注し、(明)の廖文炳また之れが補解を作る、(清)の錢牧齋は甚だ此書を重んじ、王安石の唐百家詩選と併稱して、唐詩撰本の最も具はれる者と爲し、錢朝齋は之を校註したり、(我國)にては元祿二年此校注本を刊行せり。

〔註解〕 ○唐詩鼓吹箋注十卷 元郝天挺注 明廖文炳解

◎中州集十卷附中州樂府一卷

〔作者、題名〕 金の元好問編す、好問の傳は遺山集の條に出づ、中州とは、猶中原といふが如し。

四七九

〔體裁、編目、傳來〕 此書は金一代の詩を集録せる者にして顯宗二首、章宗一首は、卷數に入らず、其餘分ちて十集となし、十干を以て之を紀せり、凡て二百四十四人、每人小傳あり、又詩中旁注あり、其中辛集より目錄旁注等體裁を異にすれば、前七卷は正集にして、後三卷は續集なるべし、壬集は馬舜之より、以下別に諸相一門を設けて、劉豫等十六人を列し、狀元一門は、鄭子聃等八人を列し、異人一門は、王中_二等四人を列し、隱德一門は、薛繼先、宋可、張潛、曹珏四人の詩を列し、癸集には知己三人、(辛愿、李汾、李献甫)南冠五人(司馬朴、滕茂實、何宏中、姚孝錫、朱辨)を列し、末に宋の遺民趙滋及び好問父兄の詩を附せり、好問の自序によれば、初め魏道明、百家詩略を作り、商衡爲に之に附益し、好問又増すに、己の録する所を以てし、以て是編を成せるなり、大旨蓋し詩を以て史を存するに在れば傳後列する所の佚事の如きは考證に資するに足る者多し、四庫提要に曰く、錄する所の諸詩、格力適健の者多く、實に宋末江湖諸派の上に在りとす、清の王士禛が池北偶談に、これを駁する者ありと雖、士禛詩を論ずる、たゞ神韻を主として、好問と門徑

を同くせず、故に然るのみ、公論といふ可からざるなりと、妥當の論なり、樂府はもと集中に在り、後分れて附録となりしものなり、(我國)にては永正年間の刻本あり、所謂五山板なるものなり、首に元好問の自序、張德輝の序、目錄あり、德輝の序に據れば其初刊本たり、(明)の毛晋の刊行本は德輝の序を脱せり。

●河汾諸老詩集 八卷

〔作者、體裁、題名〕 元の房祺撰す、祺は平陽の人、大同路の儒學教授たりし事あり、事蹟詳ならず、此書は
麻革(三十二首)、張宇(十九首)、陳廢(十八首)、陳颺(十首)、房暉(二十八首)、段克己(八首)、段成己(十六首)、曹之謙(四十五首)。
八人の詩を録せるものにして、一人一卷とす、八人は皆金の遺老にして、元好問の門弟なり、之謙も大同の人、河汾に流寓し、遂に邱墓を營む、故に總べて河汾諸老を以て名に題するなり、河汾は好問の金亡ぶるの後講説し、八人の從游せる地なり。

●皇元風雅 六卷 後集 六卷

〔作者、題名〕 前集は元の傳習采集し、孫存吾編類し、後集は孫存吾、采集編類し、虞集共に之を校選す、習字は說卿、清江の人、存吾字は如山、廬陵の人、嘗て儒學正たり、虞集の傳は道園集の條に出づ、此書録する所皆元代風雅の音といふ意なるを以て名づく。
〔體裁、傳來〕 前集は劉因に始まり應居仁に終る百十二人、後集は鄧善之に始まり劉南金に終る凡て百六十五人あり、間々作者の爵里字號を載せたる者あり、又前集は目錄は伯顔を首に置き、詩は劉因より始まる等、體例の尋ぬべきなし、而して前集は虞集、後集は謝升孫の序あり(我國)にては足利氏の時渡來し五山僧侶は之を翻刻せり。
〔附記〕 此書吾見たる者は我五山板にして、元稟本の覆刻なり、然るに四庫提要には、元風雅前集十二卷後集十二卷と題し、前集は劉因以下凡百十四家、後集は鄧文原以下凡百六十六家を録すとありて稍々異なり、提要本は、或は後人の竄入あるか、姑く記して考を俟つ。

●瀛奎律髓 四十九卷

〔作者、題名〕 元の方回撰す、回の傳は續古今考の條に出づ、此書唐宋二代の詩を兼選し、錄する所、皆五七言の近體なり、故に律髓といふ、自序にいふ、十八學士瀛州に登り、五星奎に聚るの義を取る、故に瀛奎といふと。
〔編目、傳來〕 大旨西崑體を排して、江西派を主とし一祖三宗の説を唱ふ、一祖とは杜甫にして、三宗とは黃庭堅、陳師道、陳與義なり、其說生硬を以て健筆と爲し、粗豪を以て老境と爲し、鍊字を以て句眼と爲し、頗る中聲に諧はず、又其去取を見るに、杜甫の秋興の如き、惟だ第四首を選する類、解す可からざる者多し、(清)に至りて馮班は之が評論を試む其說稍觀る可きあり、紀昀は又これが刊誤を著し頗る駁撃する所あり、然れども宋代の諸集盡く今に傳はらざる者、頼に此書に因りて、其一端を窺ふ可く又當時の遺聞舊事、往々其注に見ゆれば、歷史上參考とす可し、故に佚せずして世に行はるゝなり、其(我國)に傳はれるは足利氏の中葉頃なるべし、戰國の初頃より五山僧徒に喜ばれ、徳川氏に及びても藤原

惺窩の如きは、初學必讀書として大に之を推重せり、乙骨寛は書を著して、紀昀の説を駁せり。

〔體裁〕 凡て四十九類に分つ、左の如し。

登覽、朝省、懷古、風土、昇平、官情、風懷、宴集、老壽、春日、夏日、秋日、冬日、晨朝、暮夜、節序、晴雨、茶、酒、梅花、賦雪、月、閑適、送別、拗字、變體、着題、陵廟、旅況、邊塞、宮闈、忠憤、山巖、川泉、庭宇、論詩、技藝、遠外、消遣、兄弟、子息、寄贈、遷謫、疾病、感舊、俠少、釋梵、優逸、傷悼。

每詩評語を加へ、また遺聞逸事を注せり。

〔參考〕 ○瀛奎律髓刊誤四十九卷清紀昀撰

古賦辨體十卷

〔作者〕 元の祝堯撰す、江西通志に、堯は上饒の人、延祐五年の進士、江山の尹と爲り、後無錫州の知事に遷るといひ、廣州府志には字を君澤といふと有り。

〔體裁、編目、題名〕 此書は

楚辭體、兩漢體、三國六朝體、唐體、宋體。

聯珠詩格二十卷

〔作者、題名〕 元の干濟撰し、蔡正孫補足す、濟字は德夫、默齋と號す、番禺の人、正孫字は粹然、蒙齋と號す、(本書序) 聯珠の名は正孫の命する所にして此書録する所の詩、珠を連ねたるが如く、隨て取れば隨て足ること、猶龍の珠を獲て玩弄して釋てざるが如しといふ意より名づけしなり、格に分ちて詩を録す、故に詩格と稱す、按ずるに此書また古文眞寶と同じく、俗本にして、射利の爲に作りしものなる可し。

〔體裁、傳來〕 此書録する所、唐宋人の七言絶句にし

和する所を存して子振の原偈は則ち亡佚せり。

大雅集八卷

〔作者、題名、體裁〕 元の賴良撰す、良字は善卿、天台の人、事蹟詳ならず、大雅の字は黄山谷の句に取れり、是書は元末の詩を録せる者にして前に楊維禎の序あり、謂ふ「採る所皆吳越の隠れて傳はらざる者なり」と、後、良の自跋あり、曰く「詩二千餘首を選す、鐵崖(維禎の號)先生留る所の者僅に三百首と、然らば則ち是書良輯めて維禎の刪定せるものなり、故に每卷首に維禎評點の字を題せり、然れども今本評點寥寥たり、或は傳寫の際佚せるものなる可しと云ふ、四庫提要によれば古體近體各四卷とあり、我見たる所は(我國)の五山版にして卷四に近體多く提要言ふ所と符せず、暫く記して疑を存す、其去取は頗る精密にして、鑿別また苟くもせず、每人の下、皆字號郷貫を略注せり、元末の詩人にして、集の世に行はるゝ無き者は、幸に此書に頼りて、其一端を知ることを得、固より善本たるを失はずといふ可し。

梅花百詠一卷

〔作者、題名、體裁〕 元の馮子振と釋明本と偕和の詩なり、子振字は海粟、攸州の人、官水事郎集賢待制に至る、(元史陳季) 明本姓は孫氏、中峰と號す、錢塘の人、吳山の聖水寺に居り、吟咏に工なり、趙孟頫と友とし善し、子振時に文章を以て一世に名あり、意頗る之を輕んず、偶々孟頫、明本と偕に子振を訪ふ、子振出して梅花百韻の詩を示す、明本一覽筆を走らして和を成し、復た作る所の九字梅花歌を出して以て子振に示し、遂に與に交を定む、是書載する所七言絶句一百首、即ち當時立るに和する所の者はなり、後又春字韻の七律一百首を附せり、惟だ明本

〔注解、參考〕 ○精選唐宋千家聯珠詩格二十卷朝鮮徐居仁注安琛及成倪蔡壽樞中從漢等奉勅補削

●風雅翼十四卷

〔題名、作者〕 風は國風なり、雅は大小雅なり、此書選ぶ所風雅の羽翼とす可しといふ意より名づく、元の劉履の撰する所なり、履字は坦之、上虞の人、明に入りて仕へず、自ら草澤間民と稱す、洪武十六年、詔して天下博學の士を求む、浙江布政使強ひて之を起たしめ京師に至り授くるに官を以てせしが、老疾を以て固辭す因て金を賜ひて還さる、未だ行くに及ばず、途にて卒せり。(浙江通志參考)

〔體裁、編旨、傳來〕 是書、首を選詩補注八卷となす、文選中の詩を撰擇して訓釋せり、釋は五臣の舊注に本づきて之を敷衍し、斷するに己の意を以てせり、次を選詩補遺二卷とす、古歌謠詞の傳記諸子及び樂府詩集に散見する者四十二首を選録し、以て文選の闕を補へり、次を續編四卷と爲す、唐宋以來諸家詩詞の古に近き者一百五十九首を取り、以て文選の嗣音と爲せり、其去取の主旨は、眞德秀の文章正宗に本づき、其詮釋體例は、則ち朱子の詩集傳を以て準と爲せり、文章正宗の理を主としこれに偏するが如く、此書評撰また簡遠の度に乏しと稱せらる、然

れども箋釋は頗る詳贍なるを以て、參考に供すべし、(我國)にては文政三年官版に付せり。

●唐詩品彙九十卷拾遺十卷

〔作者、題名〕 明の高棟撰す、棟字は彦恢、長樂の人、永樂の初、布衣より召されて翰林に入り、待詔と爲り、名を延禮と更め、別に漫士と號す、書畫に工に、尤も力を詩に專にせり、(明史文苑傳參考) 此書は唐詩を品別彙集せる者なるを以て名づく。

〔體裁、編旨〕 卷首に歷代名公叙論、凡例、引用諸書、總目、五言古詩、七言古詩、五言絕句、七言絕句、五言律詩、五言排律、七言律詩の各叙目、詩人爵里、詳節あり、凡て六百二十家、五千七百六十九首なり、分ちて、
五言古詩二十四卷、七言古詩附長短句十三卷、五言絕句附六言八卷、七言絕句十卷、五言律詩十五卷、五言排律十一卷、七言律詩附排律九卷。
と爲す、洪武十七年に起稿し、二十六年に成る、三十一年に至り、又作者六十一人、詩九百五十四首を搜補し、拾遺十卷と爲せり、諸體の中、各々正始、

正宗、大家、名家、羽翼、接武、正變、餘響、旁流の九格に分てり、其凡例によれば、大略初唐を以て正始と爲し、盛唐を正宗と爲し、大家と爲し、名家と爲し、羽翼と爲し、中唐を接武と爲し、晚唐を正變と爲し、餘響と爲し、方外異人等の詩を旁流と爲せり。

〔傳來〕 明の世を終るまで、館閣此書を以て宗と爲せり、其後、李夢陽、何景明等の、盛唐に摸擬する、名は崛起すといひて、其實此に胚胎せり、(清)の紀昀曰く「唐音の流れて膚廓と爲る者、此書實に其弊を啓き、唐音の後世に絶えざる者、亦此書實に其傳を衍にす、功過並有して互に掩ふ能はず、後來の過毀過譽は皆門戶の見にして公論に非ず、或は舊文を點竄し、或は誤りて宋人を採る、小々の瑕疵は尤も未だ免れざる所、卷帙既に富み、核檢すること難しと爲す、たゞ其大體を觀ば可なり」と、蓋し篤論なり、(我國)徳川氏の頃、此書の一部を刊行せり。

●唐詩正聲二十二卷

〔作者、題名〕 明の高棟撰す、棟の傳は唐詩品彙の條

に出づ、此書は品彙の編目浩繁にして、初學者の其津梁に迷はんことを恐れ、其中より聲律純正なる者を抜きたる者にして正聲の義は蓋し此に取れり。

〔體裁、傳來〕 此書の目左の如し。
五言古詩六卷、七言古詩三卷、五言律詩三卷、五言排律三卷、七言律詩二卷、五言絕句二卷、七言絕句三卷。

(我國)にては享保十二年刊行せり。

〔注解〕 ○増定評註唐詩正聲十二卷明郭滄増定

●元詩體要十四卷

〔題名、作者〕 元一代の詩を輯めたる者にして、體に分ち要を録すといふ意より名づく、明の宋緒撰す、緒字は公傳、餘姚の人、成祖の時、永樂大典の編修に預りしが、書成りて後、同官の者大抵皆官を授けられしも、緒は辭して獨り郷に歸れり。(四庫提要參考)

〔體裁、編旨〕 此書は

四言、騷選、樂府、柏梁、五言、七言、古體長短句、雜古、言、詞、歌、行、操、曲、吟、嘆、怨、引、謠、詠、篇、禽言、香奩、陰何、聯句、集句、無

類、詠物、五言近體、七言近體、五言排律、七言排律、五言絕、六言絕、七言絕、七言絕拗體側體。に分載す、每類各小序あり其中或は體に分ち、或は題を以て分ち、體例頗る畫一ならず、然れども其去取に至りては、頗る鑒裁あり。

●古詩紀一百五十六卷

〔作者、題名〕 明の馮惟訥撰す、諱字は汝言、臨朐の人、嘉靖十七年の進士、官江西左布政使に至り、光祿寺卿を加へられて致仕す、(明史馮琦傳參考) 此書は上古より隋までの詩を、時代を追ひて輯めたるものなり、故に古詩紀といふ。

〔體裁、傳來〕 此書前集十卷は、皆古逸の詩、正集一百三十卷は、漢魏以下陳隋以前の詩、外集四卷は、仙、鬼の詩を録せり、別集十二卷は前人の詩話を彙集せり、時代綿長にして、採摭繁富なれば、其中眞僞錯雜し、低昂舛漏あるを免れず、故に(清)の馮舒は詩紀匡繆を作りて、其失を糾せり、然れども上は太古の初より、下は六朝の終に至るまで、有韻の作、兼收せざるなく、詩家の淵源に溯る者、此書を

外にして別に求むること能はず、固に缺く可からざる良書といはざる可からず、其後臧懋循の古詩所、張之象の古詩類苑、梅鼎祚の八代詩乘、王闈運の八代詩選等相繼ぎて出づるも、總べて是書を以て藍本と爲し、而して其右に出づる能はざるなり、唯此書は明板の外清に至りて刻する者無し、故に其流傳廣からず。

〔參考〕 ○詩紀匡繆一卷清馮琦撰

●古今詩刪三十四卷

〔作者、題名〕 明の李攀龍撰し、王世貞續輯す、(唐詩來部參考) 攀龍の傳は滄溟集の條に世貞の傳は兗州山人四部稿の條に出づ、此書は古今の詩の不正なる者を刪り正なる者のみを存すといふ意より詩刪といふ。

〔體裁、編旨〕 凡て古逸一卷、漢樂府一卷、魏樂府一卷、晉樂府一卷、宋樂府、齊樂府、梁樂府、陳樂府、北朝樂府共一卷、漢魏詩一卷、晉詩一卷、宋齊詩一卷、梁陳隋北朝詩一卷、唐五言古詩二卷、唐七言古詩二卷、唐五言律詩二卷、唐七言律詩二卷、唐五言排

律二卷、唐五言絕句一卷、唐七言絕句二卷、明五言古詩一卷、附明樂府、明七言古詩一卷、明五言律詩三卷、明七言律詩三卷、明五言排律一卷、明七言排律、明五言絕句共一卷、明七言絕句二卷、附六言。に分ち、明は多く同時の人を録し、宋元には及ばず、蓋し李夢陽が唐以後の書を讀まざる説を倡へてより前後七子、率ね此論を以て相尙ぶ、攀龍の是書は猶是志の如き者なり、故に七子詩を論ずるの宗旨、此書に具はる、(我國)にては寛保三年之を刊行せり。

●唐詩選七卷

〔作者、傳來〕 此書明の李攀龍編と題す、攀龍の傳は滄溟集の條に出づ、然れども、其偽書たることは明なり、初め攀龍古今詩刪を撰せんとして唐詩刪先づ成る、是に於て選唐詩序を作り、漢魏及び明代は選序共に成るに及ばずして卒す、王世貞之を續補して刊行す、古今詩刪是なり、而して唐詩にのみ序ありて他代の詩に序を缺く時は體例畫一ならざるを以

て之を載せざりき、故に其序は滄溟集中にのみ存するに至れり、實に選唐詩の序にして唐詩選の序に非ず、然るに狡賈攀龍の盛名を奇貨とし、詩刪中の選唐詩を鈔録し文集中なる選唐詩の序を取りて、卷首に冠し、以て世人を僞瞞せり、是より狡賈是に多少の増損を爲し相刊行して利を射る者多く異本頗る多し、其尤も甚しきものに至りては詩學上大に見解を異にせる李攀龍、袁宏道、鍾惺、錢謙益等の名を冠する者有るに至れり、我國山本北山は明の洪文科が語窺今古に、選唐詩の原本より其所好の詩を節録せる中に、王勃の別辭華の詩、李嶠の明皇登華萼樓聽歌の詩あり、而るに今の唐詩選には、この二詩なし、蓋狡賈利に急なるを以て、たまたま語窺今古を見ることを忘れ、終に此破綻をあらはしたるなり云々といへるも此亦決して攀龍の原本に非ず、然れども明末以來盛に世に行はれ四庫提要に「至、今盛行、鄉塾間、亦可異也」といへるより見れば、清の乾隆年間に至りても亦村夫子間には尊ばれたるを知る可し、唯識見ある學者のみは之を顧みざるなり、(我國)に渡來せるは蓋し徳川氏の初世なる可し、服部南郭之を刊して、童蒙の教科書に用ひてより大に流行し、

注解講義を作りて利を貪るもの、勝げて數ふ可からず、今に至りて猶盛なり、但山本北山等は其偽を辨じて排撃餘力を殘さざりき。

〔體裁〕 此書は

五言古詩、七言古詩、五言律、五言排律、七言律、五言絕句、七言絕句。

に分ち、初唐二十九人、盛唐四十二人、中唐三十六人、晚唐十七人、無名氏三人の詩を録せり。

〔注解〕 ○吳注唐詩選七卷明吳昊撰 ○箋釋唐詩選七卷蔣一

○唐詩解頤二冊日本釋顯常撰 ○唐詩箋注八卷、唐詩餘言二卷市川世寧撰

◎盛明百家詩三百二十卷

〔作者〕 明の俞憲撰す、憲字は汝成、是堂と號す、無錫の人、嘉靖十七年の進士、官湖廣按察使に至れり。

〔萬世統譜、佩文齋書畫譜、靜志居詩話、題名碑錄等參考〕

〔編旨、體裁〕 是編取る所詩に在りて、人品に係らず、收采の豊約は本集の多寡に隨ふ、蓋し一家に就て盈縮を爲し、百家を統べて軒輊を爲すに非ず、又其撰詩の標準は、凡例に「其予が心に愜ひたる者を存し、

其予が心に愜はざる者を汰すのみ、敢て遂に以て定則と爲すに非ず」といへば、無標準なるを知るに足る、其目左の如し、每集大抵一卷、故に卷數を著さず、一卷以上の者のみ著せり。

○前編

- 高楊張徐集三卷高啓、楊基、張翥撰
- 宋學士集宋濂撰
- 林員外集林鴻撰
- 王學士集王逵撰
- 浦舍人集浦源撰
- 李文正集二卷李東陽撰
- 邵文莊公集邵寶撰
- 石閣老集石瑄撰
- 秦修敬集秦旭撰
- 沈石田集沈周撰
- 史山人集史鑑撰
- 張伎陵集張鳳撰
- 熊侍御集熊卓撰
- 王陽明集王守仁撰
- 孫山人集孫一元撰
- 王浚川集王廷相撰
- 劉誠意伯集劉基撰
- 袁海叟集袁凱撰
- 王舍人集王綬撰
- 錢翰撰集錢仲益撰
- 陳白沙集陳獻章撰
- 莊定山集莊泉撰
- 夏赤城集夏銀撰
- 李空同集二卷李夢陽撰
- 桑思立集桑悅撰
- 二杭詩集杭濟撰
- 顧司寇集顧璘撰
- 王溪陂集王九思撰
- 二朱詩集朱應登撰
- 何大復集二卷何景明撰
- 左中川集左國瓚撰

- 邊華泉集邊貢撰
- 徐尚書集徐允明撰
- 祝枝山集祝允明撰
- 殷石川集殷雲霄撰
- 王太僕集王章撰
- 韓參議集韓邦靖撰
- 方棠陵集方泰撰
- 楊升庵集楊慎撰
- 張禺山集張含撰
- 王夢澤集王廷陳撰
- 陳行卿集陳沂撰
- 許少華集許少魯撰
- 陸應龍集陸果撰
- 高蘇門集高叔嗣撰
- 徐相公集徐階撰
- 傅夢求集傅起撰
- 文翰詔集、同續集文徵明撰
- 傅山人集傅汝舟撰
- 華學士集華察撰
- 屠漸山集屠應峻撰
- 王少泉集王格撰
- 康狀元集康海撰
- 二俞詩集俞泰撰
- 徐迪功集徐順卿撰
- 孟有涯集孟洋撰
- 戴學憲集戴冠撰
- 鄭少谷集鄭善夫撰
- 常評事集常倫撰
- 薛考功集薛憲撰
- 蔣南冷集蔣山卿撰
- 李嵩潛集李濂撰
- 馬西玄集馬汝驥撰
- 許雲村集許相卿撰
- 二周詩集周祚撰
- 黃泰泉集黃佐撰
- 栗太行集栗應宏撰
- 蔡翰目集蔡羽撰
- 唐伯虎集唐寅撰
- 王參政集王慎撰
- 樊南溟集樊鳴鶴撰
- 王履吉集王龍撰
- 陸貞山集陸燾撰

- 袁學憲集袁憲撰
- 二黃集黃省曾、黃姬水撰
- 張崑崙集張詩撰
- 陳鳴野集陳鶴撰
- 羅贊善集羅洪先撰
- 任少海集任翰撰
- 皇甫昆季集二卷皇甫冲、皇甫濂撰
- 續皇甫百泉集皇甫汸、皇甫澂撰
- 蔡白石集、同續集蔡汝南撰
- 王嚴澗集王廷翰撰
- 許茗山集許應元撰
- 薛憲副集薛應旂撰
- 陳參議集羽陳撰
- 馮少洲集馮惟訥撰
- 孟衛源集孟淮撰
- 范中方集范惟一撰
- 謝中丞集謝東山撰
- 洪芳洲集洪朝選撰
- 姚山人集姚杏撰
- 鄧山人集鄧儀撰
- 張王屋集張之象撰
- 陳后岡集陳東撰
- 田豫陽集田汝成撰
- 唐中丞集唐順之撰
- 宗室匡南集拱樞撰
- 沈鳳峰集沈暉撰
- 薛浮休集薛憲章撰
- 孔方伯集孔天胤撰
- 朱鎮山集朱衡撰
- 王祭酒集王維楨撰
- 喬三石集喬世寧撰
- 王僉憲集王問撰
- 侯二谷集侯一元撰
- 吳霽寰集吳維嶽撰
- 華比部集華雲撰
- 何刑侍集何遷撰
- 施武陵集施漸撰
- 萬履庵集萬士和撰
- 宗室武岡王集顯槐撰
- 鄭石南集鄭坤撰

(集) 總集

許長史集	許那才	郭山人集	郭第
羅山人集	羅鹿齡	李學憲集	李樊龍
王副使集	王世貞	李尚寶集	李先芳
徐龍灣集	徐中行	吳川樓集	吳國倫
梁比部集	梁有譽	宗子相集	宗臣
張居來集	張佳胤	蘆次樞集	盧椿
周山人集	周詩	史文學集	史臣紀
王澄源集	王言	謝茂榛集	謝榛
俞仲蔚集	俞允文	王上舍集	王稹登
梁國子生集	梁辰魚	張枚集	張獻翼
俞繡峰集	俞齋	龔內監集	龔登
周真人集	周思得	釋雪江集	釋明秀
釋魯山集	名字共不明	釋半峰集	釋果斌
釋同石集	釋希復	淑秀總集	(七十)
○後編			
廣中四傑集	孫賓、王佐、黃哲、李德、張以寧	汪右丞集	汪廣洋
張翰講集	吳志淳	倪隱居集	倪瓚
吳主一集	王禕	唐丹崖集	唐肅
王忠公文集	郭奎	趙鳴秋集	趙迪
郭子章集	華幼武	許士修集	許君繼
華氏黃楊集		解學士集	解縉

韓中允集	韓守益	二倪詩集	倪倅、倪敬
練榜眼集	練安	姚少師集	姚廣
曾狀元集	曾繁	郭定襄伯集	郭登
王翰檢集	王爵	林登州集	林唐臣
高漫士集	高樛	王皆山集	王恭
劉忠宣公集	劉大夏	聶掌教集	聶大年
張東海集	張公弼	張白齋集	張琦
薛檢討集	薛格	謝文肅公集	謝鐸
羅太守集、續集	羅柔	王古直集	王佐
錢山人集	錢文	湯將軍集	湯胤祚
顧東江集	顧清	周草庭集	周(名欠)
秦端敏公集	秦金	錢太守集	錢琦
王方伯集	王尙綱	朱蕩南集	朱諫
孫鶴沙集	孫偉	楊通府集	楊中
湛甘泉集	湛若水	周尙書集	周金
莫南沙集	莫止	顧同府集	顧彥夫
陸文裕公集	陸深	顧憲副集	顧可久
齊憲副集	齊賢	王僉事集	王繼
鄒九峰集	鄒璧	敖東谷集	敖英
朱福州集	朱豹	錢逸人集	錢百川
二浦詩集	浦瑄、浦瑄	張學士集	張袞

(集) 總集

顧廉訪集	顧夢圭	二謝詩集	謝承舉、謝少南
張通參集	張燮	王止一集	王珂
潘尙書集	潘恩	張司馬集	張時微
續傅夢求集	傅超	蘇督府集	蘇祐
孫漁人集	孫宜	馮三石集	馮世雍
吳少參集	吳子孝	田莘野集	田汝莘
金子有集	金大車	沈少參集	沈謐
續姚山人集	姚咨	唐山人集	唐詩
續沈鳳峰集	沈愷	薛兵憲集	薛甲
張臬副集	張意	姚本修集	姚廉敬
沈石灣集	沈翰卿	續黃五嶽集	黃省曾
陳山人集	陳鳳	岳山人集	岳岱
顧給舍集	顧存仁	高光洲集	高應冕
趙文學集	趙綱	周太僕集	周復俊
包侍郎集	包節	秦封君集	秦翰
秦方伯集	秦梁	強德州集	強仕
王侍郎集	王瑛	黎瑤石集	黎民表
駱翰編集	駱文盛	王禮部集	王炎
王翰林集	王立道	陸文學集	陸九州
陳隱士集	陳東川	許石城集	許毅
舒東岡集	舒經	林介山集	林應麟

尹洞山集	尹壘	溫大谷集	溫新
續王僉憲集	王問	茅副使集	茅坤
二莫詩集	莫如忠、莫是龍	曹子野集	曹大同
呂山人集、續集	呂時臣	續萬履菴集	萬士和
何翰目集	何良俊	萬總戎集	萬表
續皇甫理山集	皇甫濂	龔憲副集	龔秉德
劉魏比玉集	劉鳳、魏學禮	王督撫集	王崇
李青霞集	李時行	續王鳳州集二卷	王世貞
續李滄溟集	李攀龍	王儀郎集	王世懋
胡苑卿集	胡安	方員外集	方攸麟
續吳川樓集	吳國倫	李武選集	李文麟
張周田集	張九一	續徐龍灣集	徐中行
余憲副集	余應麟	李少莊集	李夢
范中吳集	范惟丕	王氏松雲集	王用章
沈青門集	沈仕	方侍御集	方新
沈嘉則集	沈明臣	朱仲開集	朱永年
吳之山集	吳璠	張心父集	張士倫
陸客集	陸弼	歐司訓集	歐大任
丁少鶴集	丁一中	梁中舍集	梁汝
金白嶼集	金鸞	李千戶集	李元昭
馮海浮集	馮惟敬	徐文學集	徐涓

魯藩二宗室集	顧山入集	加聖
林公子集	葉客集	葉方
周東田集	王逸人集	王名欠
李公子集	王僅初集	王懋明
王貢士集	潘象安集	潘偉
康裕卿集	續王上舍集	王和登
朱山人集	莫公遠集	莫叔明
顧伯子集	張文學集	張文柱
童賈集	黃趙客集	黃道
釋全室集	釋夢觀集	釋仁發
釋方澤集	盧羽士集	盧大雅
章羽士集	錢羽士集	錢月齡
楊狀元妻集	升菴夫人	
孫馬氏世居集、夫人集	季泉夫人	
潘氏集、李生集	李英	

◎石倉歷代詩選 八百八十八卷

〔作者、題名〕 明の曹學佺撰す、學佺字は能始、侯官の人、万曆二十三年の進士、戶部主事より、陝西副使に至る、魏忠賢の爲に斥けられ、石倉園中に閉居

すること二十年、唐王立つに及び、復た召されて禮部尚書を授けられ、太子太保を加へらる、清の順治四年(二三〇七)歿す、年七十四、著す所、易經通論、石倉集等あり、(明史文苑傳參考)此書石倉園中に居る時編する所に係る、故に石倉の字を冠す、舊と一に十二代詩選と名づけたり。

〔體裁、傳來〕 録する所の詩、上は古初より、下は明に迄る、凡そ

古詩十三卷、唐詩二百卷、拾遺十卷、宋詩二百七卷、金元詩五十卷、明詩初集八十六卷、次集一百四十卷、三集一百卷、四集一百三十二卷、五集五十卷、六集一百卷。

あり、其編次は先づ漢、魏、晉、宋、南齊、梁、陳、魏、北齊、周、隋、十一代を録し、古逸は八代の末に綴り、五代を唐に併せ、金を元に併せたり、體例名目相合はず、故に其版心題する所に從ひ、歷代詩選と稱するを以て妥當とす、一人一集を以て成る、採摭繁富、卷帙浩博、時に抵牾あるを免れずと雖、由りて以て明人詩集の獲難きもの、梗概を知るを得れば、則其文獻を徵するに於て功績少からず、四庫全書提要に、千頃堂書目を引きて、明詩は次集以下三

集四集五集六集共に散佚して傳はらずといへるも(我國)帝室藏する所の本書完具して、脱遺する所無きを以て之を稽ふれば、黃虞稷、紀昀の徒皆之を覽ざりしを知る、前田氏尊經閣又一本を藏す、吾國に傳ふる所恐らくは此二本に過ぎざる可し。

〔附記〕 嘯亭雜錄に禮邸所藏の此書の鈔本を載せたり、曰く、尙明詩七集一百卷、八集一百一卷、九集十一冊、十集四冊、續集十冊、再續集九冊、三續集五冊、四續集四冊、五續集一冊、又五續集三冊、六續集一冊、南直集八冊、浙集八冊、閩集八冊、社集十冊、楚集四冊、川集一冊、江西集一冊、陝西集一冊、可南集一冊あり、感豐辛酉間其書散出す、曾て都門文貴書肆に於て借閱一過するに、乃ち曹氏の底冊なり、鈔せるは自ら衆手なり、厯雜にして緒なし、今轉じて何所に歸するかを知らずと、然らば此集尙明詩に於て七集以下ありしも、未定稿にして梓に上さざりしものならん。

◎古樂苑五十二卷 卷首一卷 衍錄四卷

〔題名、作者〕 古樂府を輯めたるものにして、凡例に

(集) 總集

左氏克明舊有樂苑、其名近雅、因名之曰古樂苑とあり、明の梅鼎祚の撰する所なり、鼎祚字は禹金、宣城の人、國子監生なり、(列朝詩集、明詩綜參考)此書郭茂倩の樂府詩集に因りて之を増輯せる者なり、郭の本は唐末に止り、其流を窮めんことを務め、此書は陳隋に終り、其源に溯らんことを務む、用意迥に異なり、博收を務めたるを以て、蕪雜を免れざれども、遺佚を摺拾し、郭氏の闕を補ふに足るものあり、其解題また増益する所ありて、考證に資すべし。

〔體裁〕 其體裁、類例大抵樂府詩集に則り、増減あり、即ち左の如し。

郊廟歌辭、燕射歌辭、鼓吹曲辭、橫吹曲辭、相和歌辭、清商曲辭、舞曲歌辭、琴曲歌辭、雜曲歌辭、雜歌謠辭、雜曲謠辭、仙歌曲辭、鬼歌曲辭、卷首一卷は古歌辭類を收む、衍錄は猶餘錄の如し、總論二卷は劉勰以下の樂府に關する論説を收め、歷代名氏一卷は歷代作家を集め其小傳あり、また間評論せり、襍記一卷は樂府辭類の評解駁異なり。

◎古詩鏡三十六卷 唐詩鏡 五十四卷

〔作者、編者〕 明の陸時雍編す、時雍字は仲昭、桐鄉の人、崇禎六年の貢生なり、(楚辭疏、四) 是書撰詩の大旨は神韻を以て宗と爲し、情境を主と爲せり、詩は須らく其自得を觀る可し、古人の佳處は言語の間に在らずといひ、氣太だ重く意太だ深く、聲太だ宏く色太だ厲しきは、佳にして佳ならず、反つて此を以て病むといひ、詩材なきを患へず、材の揚がらんことを患ふ、情なきを患へず、情の肆ならんことを患ふ、言なきを患へず、言の盡きんことを患ふ、景なきを患へず、景の煩ならんことを患ふといふが如き、皆詩理を妙解せり、其間孔雀東南飛一詩の如き、其情詞の紕謬を刺り、儲光義、孟浩然輩に於ては、亦俱に微詞あり、蓋し其時王李の餘波相添ひて、未だ息まず、學者方に吞劍を以て工と爲す、故に蹊逕の尋ね易き者に於ては、往々之に排斥を加へ、此を以て流俗を針砭せんと欲す、故に羹に懲りて齏を吹くを免れず、然れども其採摭精審、評釋詳核にして凡そ運會升降、一々みな其源流を考見すべし、明末評選の中に於て、固より之を善本と謂はざる可からず。

〔體裁〕 古詩鏡は、漢詩三卷、魏詩、晉詩、宋詩各四卷、齊詩一卷、

梁詩八卷、陳詩三卷、北魏詩、隋詩各一卷、歌詠三卷、樂章三卷、諧語一卷。

あり、隋詩以上は每人の詩、類を以て分ち、小傳、詩評を附せり、歌詠以下は凡て時代順に列せり、而して卷首には別に總論ありて、撰詩の大意を述べたり、唐詩鏡も亦體裁同じく、之を

初唐八卷、盛唐、中唐各二十卷、晚唐六卷。に分てり。

◎ 明詩選十三卷

〔題名、作者〕 原名は皇明詩選といふ、今の名は清に至りて改むる所なり、明の陳子龍、李雯、宋徵輿三人の共に撰する所たり、子龍字は臥子、大樽と號す、崇禎十年の進士、紹興推官より兵科給事中と爲り京師陷る後、福王に事へて合はず、去りて魯王の官を受け兵を起さんことを謀り遂に節に死す、詩文に巧なり、(年譜明史本傳、南疆紀、李雯字は舒章、崇禎十五年の舉人、清に降り官中書舍人に至る、(明史、史外、國) 宋徵輿字は轅文、一字は直方、清の順治四年の進士、官副都御史に至る、(史外、尺牘小傳等參考) 三人共に江南

華亭の人にして詩を善くし雲間三子と稱せらる。

〔體裁、傳來〕 此書は古樂府一卷、五言古詩三卷、七言古詩二卷、五言律詩、五言排律共三卷、七言律詩、五言絶句共三卷、七言絶句一卷。

に分ち、明初より萬曆、天啓に至る、作家の詩を録せり、作者毎に其小傳を擧げ、每詩三人、或は二人、或は一人の評あり、以て其撰錄の意を知るに足る、(吾國)にては徳川氏の時之を翻刻せり。

〔編者〕 明末三袁、鍾譚の徒相次ぎて出で正雅の音地を拂ひて空し、陳子龍之を憂ひ詩を言ふ者をして歸嚮する所を知らしめむと欲して此選有り、其の主張する所は格調に在り。

◎ 稽留山人古詩選注三十八卷補遺四卷

〔作者〕 明の陳祚明撰注す、祚明字は嗣情、一の字は允情、別に稽留山人と號す、浙江仁和人、明末清初の間に生榮す、布衣を以て終る、著す所稽留山人集あり。(感舊集) 參考

◎ 列朝詩集八十一卷

〔題名、作者〕 明の列朝の詩を集む、故に名づく清、

〔編者、體裁〕 此書は漢魏より隋に至る詩を選びたる者なり、祚明曰く、予の此選、王(王世貞)李(李夢龍)鍾(鍾惺)譚(譚元春)兩家の説を會して其弊に通じてこれを折衷す、其所謂辭を擇びて雅に歸する者は、大較情を言ふを以て本と爲すと、以て此書編纂の大旨を知る可し、左に其目を示す。

漢蜀漢四卷、魏四卷、晉七卷、宋四卷、齊二卷、梁七卷、陳二卷、北魏北齊共一卷、北周三卷、隋、列代仙詩、鬼詩共二卷、附犬妖歌、臆叫邪孔資、古逸二卷。

卷首には杭世駿、翁嵩年二家の序あり、之を讀めば以て此書の傳來を知るに足る、又凡例二十六則あり、補遺の目は左の如し。

漢、魏、晉共一卷、晉、宋、齊共一卷、梁、陳、北魏、北齊、北周、隋共一卷、仙詩、古逸共一卷。每詩大抵評又は注あり、然も無きものも亦多し、其論問々取る可きもの有り。

の錢謙益撰す、謙益字は受之、牧齋と號す、明の萬曆三十八年進士に及第し、歷官して禮部尙書に至る、醜行を以て官を褫奪されし事あり、清師江南を定むるに及び、出で、降り、禮部侍郎を以て、秘書院學士の事を管し、尋で職を辭し、後黃毓祺と通じて逆を圖り、囚へられしが、嫌疑不充分を以て釋され、家に歸り居ること十年、康熙三年(三三二四)歿す、年八十三、乾隆三年詔して曰く、謙益大節虧るあり、人類に齒するに足らずと、即ち其著書及び版木を燒棄す。(貳臣傳、清名)

〔體裁〕 此書乾集二卷は皇帝の作を録し、甲三十三卷は洪武元年より建文四年までの詩を、乙集八卷は永樂元年より天順八年に至る五朝六十二年間の詩を、丙集十六卷は成化元年より正徳十六年に至る三朝五十七年間の詩を、丁集十六卷は嘉靖元年より崇禎の終に至る六朝百二十四年間の詩を收む、是正集なり、閩集六卷は、猶附録の如きものにして、高僧、異人、金陵法侶、名僧、香奩、宗室、内侍、青衣、傭書、無名氏、神鬼、外夷の詩を收む、共に人に由りて録し、各々小傳あり、專集あるものは其集名を擧げたり、因に云ふ外夷中日本の部には、多く足利を詳にせり。

●御定全唐詩 九百卷 目錄 十二卷

〔作者、體裁〕 清の康熙四十二年、彭定求等勅を奉じて編す、定求字は勤止、一の字は南昉、長洲の人、康熙十五年の進士、官侍講に至る、其學不欺を以て本とし、踐行を以て要とす、周易集注、儒門法語等の著あり、同五十八年(三三七九)歿す、年七十五、(先正事略國朝) 是より先、明の胡震亨、唐音統籤を編し、(香林類徵參考) 是より先、明の胡震亨、唐音統籤を編し、全唐の詩を録す、粗々規模を具ふれども、尙外漏する所多し、是書は震亨の書を以て稿本と爲し、益すに内府藏する所の全唐の詩集を以てし、又旁ら殘碑、斷碣、稗史、雜書に載する所を採り、凡そ詩を得ること四萬八千九百餘首、作者二千二百餘人、先づ帝王后妃の作を、次に樂章、樂府を、次に諸臣の詩を、次に聯句、逸句、名媛、僧、道、外國、仙神、鬼怪諧謔及び諸雜體を録せり、其餘作者の先後を以て次と爲し、補遺六卷、詞十二卷を以て別に末に綴れり、網羅賅備、細大遺さず、且つ義例極めて謹嚴にして字句の異同、篇章の互見するものに至りては、諸本

時代入明の僧の詩を録せり。
〔編旨〕 謙益と同時に陳子龍有り、弘正七子の詩風を尙び皇明詩選の著有り、謙益は七子の詩風を喜ばず、其意之を貶するに在り、故に李何に於ては頗る排斥の意を表し、之に反して獨程嘉穉を推せり、一家の見無きに非ずと雖、要するに正大の論に非ず。

●宋元詩會 一百卷(未見)

〔作者、題名、體裁〕 清の陳焯撰す、焯字は默公、桐城の人、順治九年の進士、官兵部主事に至る、(四庫提要參考) 此書は宋元の諸詩を真輯せる者にして、詩會とは詩の會集の意ならん、吳之振の宋詩鈔、顧嗣立の元詩選は皆其專集ある者を取りたるものなれども此書は焯自ら「散錄零鈔、或は諸を山水園經に得、或は諸を厓碑摩場に得、以て市坊村塾道院禪宮の敝簾殘牖に及ぶまで、窮極蒐求積累すること歳あり、茲巨帙をなす」といへるが如く、殘剩を掇拾せる者なる可ければ、頗る參考に資するに足らん、録する所凡て九百餘家ありといふ、余曾て其零本を見る、每家名氏の後、元好問の中州集の例に倣ひ、其里居出處に根據して、一一校注し、頗る周密なり。

●御定佩文齋詠物詩選 四百八十六卷

〔作者、題名〕 清の康熙四十五年、張玉書等勅を奉じて編す、玉書の傳は康熙字典の條に出づ、此書は漢魏より明に至る詠物の詩を輯めたる者なり、故に詠物詩選といふ、佩文齋は蓋し宮中の齋名ならん、佩文の義は四子講德論に觀道徳履純仁被六藝佩禮文とあるに取る。
〔體裁〕 凡て四百八十六類、附見する者四十九類あり、左の如し。
天、日、月、星、河漢、風、雷電附電、雲、霞、雨、霧、露、霜、雪、冰、虹霓、瑞氣、晴、曉、夜、寒、暑、涼、春、立春、夏、立夏、秋、立秋、冬、立冬、冬至、元旦、人日、上元、花朝、社日、寒食、清明、上巳、佛日、午日、七夕、中元、中秋、九日、臘日、除夕、山總類、泰山、華山、衡山、恒山、嵩山、西山、盤山、鍾山、金山附魚山、茅山、武夷山、廬山、九華山、小孤山、天台山、普陀山、羅浮山、惠山、虎丘山、巫山、太行山、王屋山、

ものにして、正集外集を通じて蒐狩、服飾の二類を
缺く、凡て三百六十九篇の外、逸句五十篇あり。

●御定歴代題畫詩類 一百二十卷

〔作者、題名〕 清の康熙四十六年の御撰にして、歴代
の畫に題する詩を收羅せる者なるを以て名づく。

〔體裁〕 此書録する所の詩、凡八千九百六十二首、分
ちて左の三十門と爲す。

天文、地理、山水、名勝、古蹟、故實、間適、古
像、寫真、行旅、羽獵、仕女、仙佛、神鬼、漁樵、
耕織、牧養、樹石、蘭竹、花卉、禾麥蔬菜、禽、獸、鱗
介、花鳥合景、草蟲、宮室、器用、人事、雜題。
毎類別に細目あり、時代順に諸家の詩を列せり、卷
首には康熙帝の御製序及び凡例目錄あり。

●御定四朝詩 三百十二卷(未見)

〔作者、體裁〕 清の康熙五十年の勅撰なり(我國)未だ
傳本あるを聞かず、四庫提要記する所に據れば、凡て
宋詩七十八卷、作者八百八十二人、金詩二十五卷、

帝王皇族の詩を録し、下卷は、樂歌を收む、卷一より
諸相、狀元、宋耆舊、大家、名家、諸家、異人、
隱德、河汾諸老、道釋、讌會、遺獻。

の十二類に分つ、好問の原本を補ひしものなれば、
補足の分は補字を加へて之を別てり、又金史及び諸
家の文集説部等より雜取したる者は、附字を加へて
之を別ち元鈔の論評は猶之を添ふ。

●全唐詩錄 一百卷

〔作者、題名〕 清の徐倬撰す、倬字は方虎、蘋村と號
す、徳清の人、康熙十二年の進士、官翰林院侍讀に
至る、著す所蘋村類稿三十卷あり、(先正事) 此書
は御定全唐詩を取りて、其精華を採擷し、輯めて一集
としたる者なり、故に全唐詩録といふ、乃ち之を奉
る、帝覽て之を嘉し、品第皆朕が意と合ふといひ、即
親ら鑒定して、序を製し、且つ金を賜ひて刊行せし
めらる、故に刻本には御定の二字を冠せり。

〔體裁〕 卷首に康熙帝の御製の序あり、次に總目錄、
全唐詩人年表各一卷あり、先づ帝王后妃を列し、次
に諸臣の詩、次に方外、神仙の詩を録せり、每人

作者三百二十一人、元詩八十一卷、作者一千百九十
七人、明詩一百二十八卷、作者三千四百人。
あり、毎代の前、各作者の爵里を詳叙し、其詩は則
ち首に帝製を擧げ、次に樂府歌行古體、律詩、絕句、
六言、雜言に分ち掲げたりといふ。

●御定全金詩 七十四卷

〔作者、傳來、體裁〕 清の康熙五十年の勅編なり、初
め元好問中州集を編し、金代の詩を録せるも、もと
詩を借りて史を存するに在り、故に詩に於ては甚だ
求めず、遺漏甚だ多し、(清)に至り郭元鈔、好問の
書に因りて重ねて葺綴をなし、之を奏進す、未だ備
はらざるを以て、詞臣に命じて重ねて補綴せしむ、
詩は舊に三倍し、作者は倍に達せり、是に於て金
一代の歌詠、全く備はれり、然れどもなほ元鈔の
名を署し其功を著せり、元鈔字は千宮、雙村と號す
江都の人、諸生を以て纂修館に入り、佩文韻府の編
修に預れり、功を以て中書舍人に至る。(國朝名人尺牘
考) 小傳者賦類徵

小傳を附し、詩は近古二體に分録し、まゝ詩話詩評
を附し考證に備ふ、就中神仙の詩のみは古近體に分
たす。

●唐賢三昧集 三卷

〔作者、編旨、題名〕 清の王士禛編す、士禛の傳は、
精華錄の條に出づ、清初諸家、明詩の弊に懲り、宋
詩を學び、其弊又起る、故に士禛此書を標舉し、神
韻の説を倡へて之を救ふ、録する所、概唐の作な
り、名けて三昧といふは、佛經自在の義に取る也。
〔體裁〕 上卷は王維以下殷遠に至る八人、中卷は孟浩
然以下閻防に至る八人、下卷は高適以下奚賈に至る
二十四人の詩を録す。

〔注解〕 ○唐賢三昧集箋注三卷 清吳煊、胡
棠共撰

●古詩選 三十二卷

〔作者、體裁〕 清の王士禛編す、士禛の傳は精華錄の
條に出づ、此編凡そ
五言詩十七卷、七言詩十五卷。

なり、五言は漢魏六朝より以下、唐代たゞ陳子昂、張九齡、李白、韋應物、柳宗元五人を取れり、七言は古逸一卷、漢魏六朝一卷、唐は則ち李嶠、宋之間、張說、王翰四人を一卷と爲し、王維、李頎、高適、岑參、李白を一卷と爲し、王昌齡、崔顥二人を附録とす、五卷以下は唐の杜甫、韓愈、宋の歐陽修、王安石、蘇軾、黃庭堅、晁說之、晁補之、陸游、金の元好問、元の虞集、吳萊十三家の詩を録し、李商隱、蘇轍、劉迎、劉因の四人を附録とせり、(我國)にては文政三年之を刊行せり。

〔註解〕 ○古詩箋三十二卷 清雲間山人撰

●明詩綜一百卷

〔作者、題名〕 清の朱彝尊撰す、彝尊の傳は經義考の條に出づ、此書洪武より崇禎に至る詩を合して之を甄綜す、故に詩綜といふ。

〔編旨、體裁〕 自序に曰く「上は帝后より、近くして宮庭宗潢、遠くして蕃服、旁ら婦寺、僧尼、道流、幽索の鬼神に及び、下は諸謠諺を徴し、選に入る者三千四百餘家、或は詩に因りて其人を存し、或は人に

因りて其詩を存す、間々綴るに詩話を以てして、其本事を述べ、作者の旨を失はざらんことを期せり、明命既に訖り、封疆に死する臣、亡國の大夫、黨錮の士、及び遺民の野に在る者と、概して録に著し、析きて百卷と爲し、一代の書と成さんことを庶ひ、竊に國史の義を取り、覽者をして此得失の故を明にす可からしむ」と、以て其編旨と體裁の一端を知るに足る、各人毎に始に小傳を綴り、諸家の詩評を集録し次に靜志居詩話を載せ、後、其詩を載す、就中八十二卷の繆永謀と朱茂曙との間には、白紙數枚あり、目錄によれば、二十四首とのみありて、其作者の名を擧げざれば、其何人なるかを知る能はず、又其理由を解する能はず。

●元詩選百十卷

〔作者〕 清の顧嗣立撰す、嗣立字は俠君、江蘇長洲の人、康熙五十一年の進士、庶吉士に選ばれ、中書に改められしが、疾を以て歸郷せり、博學にして才名あり、尤も詩に工なり、著す所秀野集、閻邱集、温飛卿詩注あり。(先正事略、國朝詩話類徵參考)

〔編旨、體裁〕 從來元詩を網羅せるもの無きを以て嗣立其闕坎を補はむと欲して此選を爲せり、然れども其の太だ繁蕪なるものを刪削し雅正なる者を存す、故に名づけて選といふなり、凡て三集、每集の中又十千を以て分ちて十集と爲す、甲集より壬集に至るまでは集ある人々を録し、癸集は零章斷什、卷帙を成さざる作を收むるを例とす、左に其目を掲ぐ。

●初集六十八卷一百家 文帝、順帝卷首

- | | |
|-----|------------------------|
| ○甲集 | 遺山集 元好問 莊靖先生集 李俊民 |
| | 丁亥集、靜修續集、靜修遺詩、靜修拾遺 劉因 |
| | 桐江集 方向 陵陽集 辛懋 |
| | 剡源集 戴表元 月屋漫稿 黃庚 |
| | 富山嬾集 方壘 勿軒集 熊鉅 |
| | 寧極齋集附陳植 陳深 靜春堂集附袁泰 袁易 |
| | 玉井樵唱 尹廷高 輝山存稿 蕭國賢 |
| ○乙集 | 湛然居士集 耶律楚材 藏春集附劉秉忠 劉秉忠 |
| | 陵川集 郝經 魯齋集 許衡 |
| | 秋湖集 王惲 雪樓集 程鉅夫 |
| | 草廬集附吳當 吳澄 金函吟 元准 |

○丙集

- | | |
|---------------------------|----------------|
| 松雪齋集附趙雍 趙孟頫 清容居士集附袁良 袁桷 | |
| 石田集 馬祖常 雲林集 賈奎 | |
| 雲莊類稿 張養浩 漢泉漫稿 曹伯啓 | |
| 圭塘小稿、圭塘欵乃集 附許有孚、許楨、馬熙 許有壬 | |
| 閑居叢稿 蒲道源 默菴集 安熙 | |
| 定宇集 陳棧 雲峰集 胡炳文 | |
| ○丁集 | 道園學古錄、道園續集 虞集 |
| 仲弘集 楊載 德機集 范淳 | |
| 秋宜集 揭傒斯 日損齋稿 黃潛 | |
| 待制集 柳貫 圭齋集 歐陽玄 | |
| ○戊集 | 雁門集、天錫集 薩都剌 |
| 翠寒集、吟嘯集、鯨背吟 宋元 蛻菴集 張翥 | |
| 安雅堂集 陳旅 鹿皮子集 陳樵 | |
| 玩齋集、玩齋拾遺 貢師泰 | |
| 金臺集 劉賢 | |
| 咏物詩 謝宗可 | |
| ○巳集 | 淵穎集 吳萊 禮部集 吳師道 |

此山集 周權 經濟集 李士麟
 存復齋集、在復齋續集 朱德潤
 所安遺集 陳泰 清江碧嶂集 杜本
 叔淵遺稿 方淵 白雲先生集 許謙
 侯菴集 李存 寶峰集 趙倍
 栲栳山人集 岑安卿 續軒渠集 洪希文
 書林外集 袁士元 潯南存稿 張端
 ○庚集
 顧北集 秦不華 青陽集 余開
 友石山人遺稿 王翰 師山集 鄭玉
 雲陽集 李祁 不繫舟漁稿 陳高
 圭峰集 盛琦 秋聲集 黃鎮成
 傲軒吟稿 胡天游 僑吳集 鄭元祐
 近光集、扈從詩 周伯琦 陳基
 夷白齋稿、夷白齋外稿 楊九孚
 玉筍集 張憲 灤京雜咏
 待清軒遺稿 潘音
 ○辛集
 古樂府、復古詩、鐵崖先生集 楊維禎
 廬陵集 張昱 清閨閣集 倪瓚
 靜思集 郭鈺 石初集 周霆震

梧溪集 王逢 樵雲獨集 葉顯
 江月松風集 錢惟善 黃楊集 華幼武
 海巢集 附吉雅讓丁、愛聖沙、丁鶴辛
 ○壬集
 玉山璞稿 顧瑛 霞外集 馬臻
 句曲外史集 張雨 筠溪牧潛集 圓至
 白雲集 實存 谷響集 善住
 蒲室集 大新 山居詩 清珙
 澹居詩 至仁 師子林別錄 惟則
 綠窓遺稿 孫氏憲開 肅離集 鄭氏允端
 安南集 國王、陳益稷
 ●二集二十六卷一百家
 ○甲集
 二妙集 附段輔 段克己 神川遜士集 劉祁
 山邨遺稿 仇遠 湛淵集 白珉
 存梅齋集 龔璠 石塘稿 胡長瑞
 竹素山房詩 晉丘行 習懶齋稿 錢選
 立雪稿 劉清叟 青山稿 趙文
 水雲邨稿 劉璣 昭忠逸詠 劉麟瑞
 稼邨類稿 王義山 在軒集 黃公紹
 ○乙集

雪齋集 姚樞 淮陽集 附張珪、張弘範
 還山遺稿 楊奐 鹿菴集 王磐
 西菴集 楊果 西脚集 徐世隆
 兩山集 李思衍 野齋集 郭昂
 牧菴集 姚燧 菊潭集 李木魯耕
 秋谷集 李孟
 ○丙集
 困學齋集 鮮于樞
 觀光稿、交州稿、玉堂稿 陳孚
 酸齋集 小雲石海涯 素履齋稿 鄧文原
 房山集 高克恭 清河集 元明善
 養蒙先生集 張伯淳 秋岡先生集 陳思濟
 彥威集 盧亘 鳩巢漫稿 李京
 子方集 文矩 快雪齋集 郭卑
 子構集 李材 知非堂稿 何中
 松鄉集 任士林 紫巖集 千石
 吁里子集 揭祐民 得之集 何失
 ○戊集
 清江集 傅若金 至治集 宋本
 燕石集 宋葵 江亭集 附王士點 王士麟
 正卿集 雅琥 慨之集 李泂

五峰集 李孝光 居竹軒集 成廷珪
 梅花菴稿 吳鎮 大癡道人集 黃公紹
 ○己集
 樵水集 黃清老 桂隱集 劉詵
 檜亭集 丁復 五雲漫稿 韓性
 宗海集 薛漢 江檻集 潘伯脩
 元從集 甘立 雲嶠集 陳柏
 農務集 王禎 梅花十字香 郭璞亨
 ○庚集
 子中集 伯顏 滋溪集 蘇天爵
 竹齋集 王冕 葯房樵唱 吳景奎
 新山集 曹文輝 林外野言 郭翼
 野航亭稿 姚文奐 滄江散人集 徐枋
 ○辛集
 九靈山房集 戴良 貞素齋集 附舒遠 舒頌
 雲臺集 鄒韶 山陰集 劉永之
 南湖集 賈性之 龜巢集 謝應芳
 青邨遺稿 金涓 東山存稿 趙汭
 環谷集 汪克寬 素軒集 鄭洪
 雲松巢集 朱希晦 主一集 吳志淳
 山窓餘稿 甘復 閒過齋集 吳海

佩玉齋類稿	楊嗣	清輝樓集	沈石
○壬集	譚處端	礪石集	丘處機
水雲集	吳全節	上清集	薛玄暉
看雲集	黃可玉	學詩初稿	查居廣
松瀑集	中峰廣錄、梅花百詠	古鼎外集	祖銘
寒拾里人稿	行端	夢觀集	大圭
栢堂山居詩	益	聯芳集	薛蘭英
碧山集	宗衍		薛憲英
●三集十六卷一百家			
○甲集	麻革	石泉集	張宇
貽溪集	陳庚	白雲子集	房岍
子鵬集附陳庚	曹之謙	緜山集	杜瑛
免齋集	杜仲傑	陶然集	楊雲鶴
善夫先生集	劉辰翁	石堂先生遺稿	陳普
須溪集附劉辰翁	甘沐	聊復軒斐集	毛直方
東溪集	劉邊	祥卿集	郭麟孫
自家意思集	湯炳龍	敬仲集附王璋、王虎臣、王圭	
北村集			
○乙集	虞肇		

○丙集	滕斌	海粟集	馮子振
玉霄集	李溥光	如是翁集	周馳
雪菴集	聶古柏	華峰漫稿	張起巖
侍郎集	王士元	仁父集	王懋德
拙菴集	曹元用	弊之集	劉澄
超然集	繆鑑	南山先生集	汪珍
效顰集			
○戊集	柯九思	時中集	劉致
丹丘生集	項炯	網緝集	李序
可立集	李裕		
中行齋集附李			
○己集	鄒王中	仲實集	呂思誠
本齋集附王時	干文傳	止止齋稿	王良
仁里漫稿	林泉生	仲淵集	李源道
覺是集	楊敬慈	兩峰慚稿	陳德永
仲禮集	陳陽盈、陳陽錫		
鳴琴集附陳陽至、陳陽盈、陳陽錫	陳陽錫		
江邨先生集附錢石	倪道原	元亮集	彭炳
太初集			
○庚集	月魯不花		
芝軒集		宛陵遺稿附汪用敬汪澤民	

伯將集	陳肅	万户集	吳訥
君瑞集	黃復圭	子平遺稿	陳謙
廷美集	黃元實	純節先生集	宇文公諒
師魯集	劉汝	容窓集	劉開
純白類稿	胡助	世玉集附傅哲篤	傅玉立
石渠居士集	張天英	松雲道人集	熊夢祥
春詠亭集	宋沂	宜之集	卞思義
彥德集	居性	啓文集	呂吉
寄清集	陳秀民	東軒集附孔徒善	方行
柔克齋集	高明	寅夫集	吳克恭
孤蓬倦客稿	陳方	子素集	潘純
鄭氏聯璧集	鄭東	廷璧集	李元圭
貞期生稿	張溫	弋陽山樵稿	李贊
杞菊軒稿	陸友	仲賢集	顧盟
敬聚齋集	衛仁近	仲愈集	彭采
溪雲集	張遜	學古集	文質
荆南倡和集、履道集	王鑑	鐵牛翁遺稿	何景福
明卿集			
○辛集	陸居仁	希呂集	羅駿正
雲松野褐集	周棐	北郭集	許恕
山長集			

〔作者、編旨、體裁〕 清の吳之振撰す、之振の傳は寧古塔紀略の部に著録す、此書四庫提要には百六卷と署し、曰く、「是編宋詩選本叢雜なるを以て、因て遺集を蒐羅し、共に百家を得、其本專集無く、及び集ありて選する所五百首に満たざるものは皆録せず云々、世に傳ふる所の本、往々多寡同じからず、此本録

●宋詩鈔九十三卷

共に每人の下各、原集の名を存し、前に小傳を列し、兼ねて其詩を品せり、癸集は合刊して別行せり、收むる所三千餘人あり。

雲丘道人集	張簡	容夫集	羅智
乾々居士集	陸仁	公張集	馬磨
來鶴草堂稿、既白軒稿、竹州歸			呂誠
豆亭稿	俞遠		
○壬集			
會稽外史集	干立	蒙泉集	鄭守仁
不繫舟集	祖伯	凝始子稿	本誠
一愚集	子賢	蘭雪集	張玉璣
靜樂稿	梁山則		

ありて書なき者、十六家あり、蓋胡闕未た竣らず、故に竟に完帙なきなり」とあり、予が見たる者は、凡て四集、合して九十三卷あり、其目左の如し。

○初集

小畜集鈔	王禹偁	騎省集鈔	徐鉉
安陽集鈔	韓琦	滄浪集鈔	蘇舜欽
乖崖詩鈔	張詠	清獻詩鈔	趙抃
宛陵詩鈔	梅堯臣	武溪詩鈔	余靖
文忠詩鈔	歐陽修	和靖詩鈔	林逋
徂徠詩鈔	石介	清江集鈔	孔武仲、孔文仲、孔平中
南陽集鈔	韓絳	臨川詩鈔	王安石
東坡詩鈔	蘇軾		
○二集			
西塘詩鈔	鄭俠	廣陵詩鈔	王令
後山詩鈔	陳師道	丹淵集鈔	文同
襄陽詩鈔	米黻	山谷詩鈔	黃庭堅
宛丘詩鈔	張來	具茨集鈔	晁冲之
陵陽詩鈔	韓駒	雞肋集鈔	晁補之
道鄉詩鈔	鄒浩	淮海集鈔	秦觀
江湖長翁集鈔	陳造	雲巢詩鈔	沈道
西谿集鈔	沈遼	龜谿集鈔	陳與求

○三集

節孝詩鈔	徐積	簡齋詩鈔	陳與義
旴江集鈔	李觀	雙溪詩鈔	王炎
眉山詩鈔	唐庚	鴻慶集鈔	孫觀
蘆川歸來集鈔	張元幹		
○四集			
建康集鈔	葉夢得	橫浦詩鈔	張九成
浮溪集鈔	汪藻	香谿集鈔	范浚
屏山集鈔	劉子翬	章齋詩鈔	朱喬年
玉澗集鈔	朱松年	北山小集鈔	程俱
竹洲詩鈔	吳儼		
省齋稿鈔、平園續藁鈔	周必大		
文公集鈔	朱熹	石湖詩鈔	范成大
劔南詩鈔	陸游	止齋詩鈔	陳傅良
江湖集鈔、荆溪集鈔、西歸集鈔、南海集鈔、朝天集鈔、西江道院集鈔、朝天續集鈔、江東集鈔、退休集鈔	楊萬里		
○四集			
浪語集鈔	薛季宣	水心詩鈔	葉適
艾軒詩鈔	林光朝	攻媿集鈔	樓鑰
清苑齋詩鈔	趙師秀	葦碧軒詩鈔	翁卷
芳蘭軒詩鈔	徐照	二微亭詩鈔	徐璣

左に其目を擧ぐ。

知稼翁詩鈔	黃公度	後村詩鈔	劉克莊
澗溪集鈔	王居珪	漫塘詩鈔	劉宰
義豐詩鈔	王玩	石屏集	戴復古
農歌集鈔	戴昺	秋崖詩鈔	方岳
清雋詩集	鄭震		
啼髮集抄、啼髮近稿抄	謝翱		
文山詩鈔	文天祥	先天集鈔	許月卿
白石樵唱鈔	林景熙	山民詩鈔	真山民
水雲詩鈔	汪元量	隆吉詩鈔	梁棟
潛齋詩鈔	何夢桂	參寥詩鈔	釋道潛
石門詩鈔	釋惠洪	花蕊詩鈔	費化

每人小傳あり、又品評考證あり、想ふに四庫提要に所謂録ありて書なき十六家は、五集にして、未だ刊行せられざる者ならん。

慶湖集	賀鑄	東觀集	魏野
參軍集	穆修	景文詩集	宋祁
伐檀集	荀庶	公是集	劉敞
陳副使遺藁	陳洎	傅家集	司馬光
潞公集	文彥博	無爲集	楊傑
鄱陽集	彭汝礪	樂靜居士集	李昭玘
姑溪集	李之儀	青山集	郭祥正
倚松老人集	饒節	龍雲集	劉夔
崇微集	呂本中	竹友集	謝澥
棣華館小集	楊甲	西渡詩集	洪炎
竹溪集	李綱	松隱集	曹勛
雅林小彙	王翥	醉軒集	姚孝錫
傅忠肅集	傅察	華陽集	張綱
茗溪集	劉一止	柟欄集	鄧肅
雪溪集	王銍	網山月漁集	林亦之
太倉梯米集	周少隱	沼水集	程秘
漁溪詩彙	俞桂	樂軒集	陳藻
歸愚集	葛立方	默菴集	陳淵
秋堂遺藁	柴望	干湖集	張孝祥
小山集	劉翰	蠶齋銘刀編	周孚

◎宋百家詩存二十卷

〔作者、體裁〕 清の曹廷棟編す、廷棟字は六圃、慈山と號す、雍正中の人、蘭竹石を善くせり、(國朝書畧)此書は吳之振の宋詩鈔の遺を補ひたるものにして、凡そ一百家の作を録す、體例一に之振の書の如し、

(集) 總集

雪窗小彙	張豆臣	龍翁集	敖陶孫
巽齋小集	危稹	龍洲道人集	劉過
梅屋吟藁	鄒登龍	招山小集	劉仙倫
皇華曲	鄧林	順適堂吟藁	葉茵
玉楮集	岳珂	野谷詩集	趙汝燧
白石道人集	姜夔	靜佳詩集	朱繼芳
鷗渚微吟	趙崇錦	翠微南征錄	華岳
秋江煙草	張弋	檜庭吟藁	葛起耕
沃洲雁山吟	呂聲之	橘潭詩藁	何應龍
杜清獻詩	杜範	芸居乙藁	陳起
山居存藁	陳必復	方泉集	周文瑛
方壺存稿	汪莘	雪林刪餘	張至龍
端平集	周弼	庸齋小集	沈說
露香拾稿	黃大受	雪蓬詩藁	姚鑑
東齋小集	陳鑿之	竹莊小集	胡仲參
敝藁	利登	適安藏拙餘藁	武衍
芸隱詩集	施樞	竹溪詩集	林希逸
無懷小集	葛天民	抱拙小集	趙希樞
華谷集	嚴粲	瓜廬集	薛師石
吾竹小集	毛珣	雪坡小集	羅興之
雲泉詩集	薛嵎	靖逸小集	葉紹翁

南宋雜事詩七卷

斗野支藁	張瀛	端隱吟稿	林尙仁
實齋詠梅集	張道洽	梅屋集	許棨
雪磯叢藁	樂雷發	癖齋小集	杜旂
可齋詩稿	李曾伯	學吟	朱南杰
竹所吟稿	徐集孫	野趣有聲畫	楊公選
佩章齋集	俞德隣	西麓詩藁	陳九平
菊潭詩集	吳惟信	古梅吟藁	吳龍翰
月洞吟	王鉉	滄洲集	羅公升
柳塘外集	釋道傑	采芝集	釋新植

〔作者、題名、體裁〕 清の沈嘉轍、吳焯、陳芝光、符會、趙昱、厲鶚、趙信等同じく撰す、嘉轍字は樂城、焯字は尺庵、會字は幼魯、皆錢塘の人、芝光字は蔚九、昱字は功干、信字は意林、皆仁和人、七人の中、たゞ會薦舉を以て官戸部郎中に至る、餘は皆諸生にて終る、四庫提要 鶚の傳は樊榭山房集の條に出づ、此書は其郷南宋の故都たるを以ての故に、軼聞を摭撫し、每人各々七言絶句詩百首を作りて之を詠じ、自ら諸書を引きて之が注を作れり、巨細兼該、頗る

考證に資あり。

御選唐宋詩醇 四十七卷

〔作者、編旨、體裁〕 乾隆十五年の勅選なり、唐に於ては李白、杜甫、白居易、韓愈の四家を取り、宋に於ては蘇軾、陸游の二家を取れり、大旨李杜を以て正宗と爲し、他の四家を羽翼とせり、蓋し平易にして情に近きは白に如く無く、奇闢にして法あるは韓に如く無く、天才超妙なるは蘇に如く無く、人工精密なるは陸に如く無し、故に以て羽翼と爲すなり、凡て、李白八卷、杜甫十卷、白居易八卷、韓愈五卷、蘇軾十卷、陸游六卷。

なり、每人總評あり、每詩評注あり、悉く乾隆帝の裁する所に出づ、(我國)徳川氏の末期に李、杜、白三家の部を刊行せり。

古詩源 十四卷

〔作者〕 清の沈德潛撰す、徳潛の傳は唐宋八家文の條

に出づ。

〔編旨、題名、體裁〕 此書は太古より隋に至る詩を徴びたる者にして、序に據れば、凡て物は其源を窮めざる可からず、詩は唐に至りて盛大を極めたり、然れども詩の盛なるは詩の源に非ざるなり、明初李猷吉、唐詩を唱へ、天下靡然として風に従ふ、前後七子互に相翼し、彬彬盛なりと稱すれども、其弊や株守に過ぎ、冠裳せる士偶に異ならず、學者の咎むる所と爲れり、これ唐を守りて、上其源を窮むる能はざるに由れり、夫れ古詩は唐人の源なり、(其題に名づくる又こゝに起る)之を學はば、以て其弊を救ふに足るといへり、乃ち此書を選して學者の羅針盤とせり、時代に從ひ、人によりて詩を録し、體類を分たす、まゝ評語を加へたり。

唐詩別裁集 二十卷

〔作者、題名〕 清の沈德潛撰す、徳潛の傳は唐宋八大家文讀本の條に、別裁の義は明詩別裁の條に出づ。

〔編旨、傳來、體裁〕 此書は王士禛の唐賢三昧集の未だ盡くさざる所あるを以て、更に李杜を以て宗とし、

撰録したる者にして、三昧集に取る所亦兼及せり、時に康熙五十六年にして、其年之を版行せしが、乾隆二十八年七月之を増補し、再び刊行せり、即ち現行本なり、凡て、

五言古詩四卷、七言古詩四卷、五言律詩四卷、七言律詩四卷、五言長律二卷、五言絕句、七言絕句共二卷。

の七體に分てり、初刻本は每人小傳なく、又詩話を録せざりしが、此には悉く小傳を立て、詩話を録し、又初刻本は評釋簡略なりしが、此には詳細なり、而して卷首別に原序、刻序、凡例あり。

◎明詩別裁集 十二卷

〔作者〕 清の沈德潛、周準同じく撰す、徳の傳は、唐宋八家文讀本の條に出づ、準字は欽棗、長洲の人。

〔題名、編旨、體裁〕 自序に「合群公選本(陳子龍等の明詩選、錢謙益の列朝詩集、朱彝尊の明詩綜を指す)暨前賢名彙、別而裁之」といへるにて、其書に名くる所以を知る可く、「於洪永(洪武)之詩、刪其輕靡、於弘正嘉隆(弘治、正德、嘉靖、隆慶)之詩、汰其形似、萬曆、天啓

以下遂寥寥焉、而勝國遺老廣爲搜羅、比宋逸民谷音之選」といへるにて其編選の意を知る可し、凡て三百十四人、一千十餘首、人毎に字號鄉貫及び略官歴を載せ、且つ其詩を評せり、(我國) 此書巾箱本の翻刻あり。

◎國朝詩別裁集 三十二卷 補遺 四卷

〔作者、題名〕 清の沈德潛が撰する所にして、清朝諸人の詩鈔なり、これが纂修に與りしは、翁照、顧詒録、周準、蔣重光の四人なり、照字は霽堂、江陰の人、詒祿、字は祿百、長洲の人、重光字は子宣、吳縣の人、周準の傳は明詩別裁集の條に出づ、共に徳潛の弟子なり、徳潛の傳は唐宋八家文讀本の條に、別裁の義は明詩別裁集の條に出づ。

〔編旨、體裁、傳來〕 此書は乾隆二十四年即ち徳潛八十七歳の時の編纂にかゝり、清初より當時に至る、凡て物故せる人の詩のみを録し、而して御製詩はこれを録せず、凡例によれば、詩を以て人を存するにあれば、勳業高く學殖深淵なるものと雖、詩に工ならざるものは之を擧げず、又人の心術を害する詩、

理學の詩も之を擧げず、凡て七百八十九人、大畧進士及第の順序を以て先後とし、進士及第なき者は輩行の先後を以て次となし、明代の臣にして清に仕へし者は皆録せり、每人の下、字號鄉貫、科目官位の有無及詩評を録し、逸事遺聞の如き、亦附載せり、補遺も體裁これに同じく、凡て二百〇七人あり、後乾隆二十六年、帝此書二臣、不孝の人の詩を録するは、徳潛老耄の然らしむる所となし、親ら錢謙益、王鐸、方拱乾、張文光、吳偉業、龔鼎孳、曹溶、陳之遴、周亮工、趙進美、彭而述、孫廷銓、李雯、高珩、宋之繩、梁清標、王崇簡、季振宜、吳兆騫、孫揚、宋實穎、喻指、余思復、侯方域、冒襄、金人瑞、彭孫貽、黃虞稷、許友、戴移孝、趙潛、屈紹隆、胡介、侯開國、周在浚、顧祖禹、吳炎、汪志道、王懋忠、錢芳標、張鵬翮、干棟如、許承家、汪鏗、錢金甫、范必英、傅山、蔣日成、李載、無名氏、楊中訥、錢名世、劉世巖、岳端、博爾都、楊倫、陳學泗、蔣楷、洪昇、毛師柱、王譽昌、冷士嶠、沈會成、康乃心、吳斯治、宮鴻歷、徐駿、楊繩武、邵會訓、郁揚勳、許世孝、姚飛熊、古易、顧彩、邵陵、王天驥、許心辰、戴鑑、王肇、王琛、韓海、沈榮簡、高不騫、

顧易、錢中樞、繆謨、蔣溥、方襲輔、邱廻、喬崇修、喬肅、陸澹、江宏文、龔誠、朱鼎鉉、倪謙、侯銓、葉寄路、王蒼璧、高炳、蔣夢蘭、方扶南、方貞觀、吳詡、孫宏、葉錦、沈榮僂、陳份、陶善圻、陳景鐘、張進、蔡寅斗、喬湜、孫謨、石文、顧嘉譽、康弘勳、程嗣立、費士璟、馬曰瑄、周景琦、朱簡、樓綺、蔣曾華、徐燦、方維儀、方琬、范淑鐘、周志蕙、袁九懋、大健、楚琛、大汕、尤埰、俞桐、の百三十六人を刪り、補遺より百十七人をとり、他は悉く之を刪り、新たに慎祥王、蘊端、弘曠、沈自南、方兆及、趙吉喆、徐振芳、黃埴、卓爾堪、魏希徵、汪顯、藍啓肅、高孝本、沈鍾彥、張廷璐、許廷鏗、蔣恭棗、邵泰、先著、劉青芝、馮嗣景、計元功、徐志巖、周淑履、袁機の二十五人を増し、同じく三十二卷と爲し、諸家の順序を變更し、卷首には徳潛の原序を刪りて御製の序を加へ、刪定の義を陳べり、故に現行本には、徳潛の原本と、御定本との二種ありと知るべし、而して御定本出でより、原本甚だ稀なりしが、近時小本に印刷し漸く普及するに及べり。

● 湖海詩傳四十六卷

〔作者、題名、體裁〕 清の王昶撰す、昶の傳は湖海文傳の條に出づ、此書は嘉慶八年の編述に係る、自序によれば、昶が壯年より四方に遊歴し、又官に就きて諸名流と交る毎に、詩文を以て相質證し其人の作を披讀して、其佳なる者を録し、六百二十餘人を得、晩年に至り亡佚を恐れ、編次して一書と爲す、即ち此なり、即ち廣く湖海に交を結びし人の詩を傳ふといふ意より名づく、湖海とは廣き世の中の義なり、湖海の字は三國志魏志張邈傳に出づ、録する所の人は、康熙五十一年進士及第の人々より列し、嘉慶八年に終る、其間布衣韋帶の士は、年齒の少長を以て之に附し、而して門下の士も亦併せて附見す、程夢星に始まり王莊壽に終る、凡て六百十餘人、合して四十五卷なり、四十六卷は方外の士を録す、明中に始まり劉敏に終る、凡て十三人なり、每人先づ小傳あり、後に詩を列せり、まゝ遺聞軼事を綴りて詩話となし、其間に載せたり。

● 全五代詩九十卷

〔題名、作者、體裁〕 五代及び當時建國せる諸國の詩を纂輯したる者にして總括して全五代詩といふ、清の李調元撰す、調元の傳は函海の條に出づ、此書卷首に五代帝王廟謚年諱譜を舉げ、夫より梁詩八卷、唐詩、晉詩、蜀詩各二卷、周詩三卷、吳詩六卷、南唐詩十六卷、前蜀詩十七卷、後蜀詩四卷、南漢詩一卷、楚詩四卷、吳越詩十卷、閩詩十二卷、荆南詩三卷。之を收め、末に其補遺を附す、五代の詩人にして、後人之を唐末、又は宋初に入るものは、皆取りてこゝに列し、また斷章摘句と雖、採りて之を收録せり、各人の下、必ず小傳を附し、詩中事の史傳に關係あるものは、割注に爲して之を解説せり、間々舛誤なきに非ざれども、採摭繁富網羅殆んど盡くす、五代の詩を概する者當に此書を措きて他に求むべからず、固より善本たるを失はずと謂ふべし。

● 宋詩百一鈔九卷(一名宋詩別裁集)

ばすして卒す、後人其闕を補はんが爲に宋詩百一鈔、元詩百一鈔を改めて別裁集と名づけて合刻せり、是別裁集の名ある所以なるべし。

● 七十家賦鈔六卷

〔作者〕 清の張惠言撰す、惠言字は皋文、江蘇武進の人、嘉慶四年の進士、官編修に至る、同七年(二四六二)卒す、年四十二、著す所周易虞氏義、虞氏消息あり、惠言は經學に於て最も長せり、然れども亦文選の學を治め文を能くし陽湖派中に在りて頗る頭角を露せり。(先正事) (参考)

〔編旨〕 此書は後代の騷賦家が徒らに排比を事とし情と理とに闕くるを以て其適從する所を知らしめんと欲し編纂せるものゝ如し、故に往往短評中に於て作者の微旨を表明せり。

〔體裁〕 先づ楚辭家を録し、次に周、漢、魏、晉、宋、齊、梁、陳、北周と代を逐ひて録せり、七十家は左の如し。

屈原、宋玉、景差、賈誼、淮南小山、東方朔、莊忌、劉向、揚雄、枚乘、曹植、張協、荀況、鄒陽、

〔作者、題名、體裁〕

清の張景星、姚培謙、王永祺の共に編する所なり、景星、培謙の傳は通鑑覽要の條に出づ、永祺字は補堂、雲間の人、孝廉に擧げらる、此書傳王露の序によれば「鈔名百一、蓋謂嘗三鼎一樹、窺豹一斑、亦可見宋詩宗派云爾」といふ、以て題に命ずる意を知るべし、凡て五言古、七言古、五言律、七言律、五言排律、五言絶句、七言絶句。

● 元詩百一鈔九卷(一名元詩別裁集)

〔作者、體裁、傳來〕 清の張景星、姚培謙、王永祺の共に編する所なり、三子の傳は、宋詩別裁集の條に出づ、體裁また同書と同じ、卷九は補遺にして、諸體を併收せり、凡て百六十家、六百二十九首、首に乾隆二十九年沈鈞徳の序あり、(我國) 寛政十年佐藤坦、之が序を製し書肆青藜閣にて刊行せり。

〔附記〕 沈德潛、唐宋元明清五朝詩別裁集を編する志あり、唐、明、清先づ成り、宋、元は成るに及

公孫乘、漢武帝、司馬相如、淮南王安、孔臧、董仲舒、司馬遷、中山王文、王褒、班婕妤、劉歆、班彪、梁鴻、崔篆、馮衍、杜篤、梁竦、班固、傅毅、張衡、王延壽、馬融、蔡邕、邊韶、邊讓、禰衡、王粲、文帝、邯鄲淳、何晏、卞蘭、嵇康、阮籍、向秀、張華、木華、陸機、陸雲、左思、潘岳、摯虞、成公綏、郭璞、孫綽、傅亮、謝惠連、謝莊、顏延之、鮑昭、張融、簡文帝、江淹、沈約、陸倕、江總、庾信。(順序は目錄により) 每文其原本を注し、大抵注解考異評語評點あり、卷首には別に序目あり。

◎十八家詩鈔二十八卷

〔作者〕 清の會國藩撰す、國藩の傳は曾文正公全集の條に出づ。

〔編旨、體裁〕 此書は魏より宋に至る間に於て卓越せる詩家十八人を撰擇し、又其中に就きて長を取り短を捨つ、李白には七律を取らず、杜甫には七絶を捨てず、韓愈には近體を收めず、白居易には唯七古を録し、蘇軾、黃庭堅、陸游、元好問には五言を省きたるが

ふ意を以て名づく。

〔編旨、體裁〕 大旨詩を以て人を存するにあれば思無邪を以て衷とし、棄短取長、頗る意を撰擇に致せり、故に落語織桃にして古味なく、立意媒嬾にして鄭聲あり、遊戯に涉り旁徑に陥る者は録せず、始に諸家の序、自序、例言、引用書目、總目あり、卷に入らず、首一卷は成親王等四王を、夫より九十二卷まで、劉綸等千八百二十六人を録し、九十三卷より閨媛、釋子、羽士、屬國の四門に分ち閨媛四卷百四十人、釋子二卷四十九人、羽士十人屬國二十人合して一卷とす、收むる所乾隆元年鴻博科及第の人々より始まり、咸豐六年に至る、凡て二十年間に於て、已に別裁集に收むる所は復た纂入せず、現存諸家亦之を録せり、體例別裁集と同じく、進士及第の順序を以て先後と爲し、然らざる者は輩行の先後を以て次と爲し、略歴、軼事、評語等詳く之を載せたり。

◎古謠諺 一百卷

〔作者、題名〕 清の杜文瀾撰す、文瀾は秀水の人、咸豐中に生榮す、官觀察に至る。

如き、以て其識見を窺ふに足る、其目左の如し。曹子建(五古)、阮嗣宗(五古)、陶淵明(五古)、謝康樂(五古)、鮑明遠(五古)、謝元暉(五古)、李太白(五古、七古、五律、七絶)、杜工部(五古、七古、五律、七律、七絶)、韓昌黎(五古、七古)、白香山(七古)、蘇東坡(七古、七律、七絶)、黃山谷(七古、七律)、王右丞(五律)、孟襄陽(五律)、李義山(七律)、杜牧之(七律)、陸放翁(七律、七絶)、元遺山(七律)。每詩、考異又は注解あり、必ず評點あり。

◎國朝正雅集 一百卷

〔作者、題名〕 清の符葆森撰す、葆森字は南樵、江都の人、咸豐元年江南の榜に中り、翌年禮部の試に應せんとして、京に至り、尋で浣江に赴き、同六年再び都に赴き、崇實が半畝園に寓して翌年此書を成せり、道光十九年に始て稿を起してより、此に至る十有九年を費せりといふ、(崇實の序及自序参考) 沈德潛の國朝詩別裁集の補續にして、收むる所の詩、正にして詭ならず、雅にして俚ならず、思無邪の旨に合ふとい

〔編旨、體裁〕 此書は太古より明代に至るまでの謠諺を輯めたる者にして、其編輯の大旨は、古本にても訛ある者あれば曲徇回護せず、近刻にても前人引く所の逸文實に足本に係る者は則ち據て以て續増し、原書久しく佚して後人輯むる所稍、舊觀を存する者は則ち據て以て採録し、皆逐條出處を注明して覆檢に備へたり、又諸書並び載せて大同小異なる者は、一書を以て主と爲して注に異文を列し、此に略にして彼に詳なる者は則ち全篇を以て主となして注に増補と明示し、事蹟甚だ異同なくして字句大に詳略ある者は則ち其詞を兩載し、字句甚だ詳略なくして事蹟大に異同ある者も亦並に其語を録し、字句全く同くして事蹟全く異なる者は則ち附注して以て省察に備へ、字句半は同じく半は異にして事蹟亦半は同じく半は異なる者は必ず兼存して以て考に備へ、又兩書本一書に係りて其中稍異同ある者は必ず參互考訂し以て推尋に便せり、謠諺の次序は採る所の書籍を以て定となし、書籍は經史子集四部を以て序となし、同じく一部に在る者は則ち門類の先後を以て序となし、同じく一門に在る者は則ち著録の先後を以て序となし、同じく一書に在る者は則ち卷帙の先後を以

ナ序となせり、凡て
本書八十五卷、附録十四卷、集説一卷。
なり、附録は皆後人の偽作假托の作にして、収録の
順序は本書と相同じ、集説は謠諺に關する諸説又は
諸著述の事を載す。

●八代詩選二十卷

〔題名、作者〕漢魏六朝併せて八代の詩選なり、故に
名づく、清の王闓運編す、闓運字は壬秋、長沙湘潭
の人、今人なり、著す所此書の外數種有り。
〔編旨、體裁〕明の馮惟訥古詩紀の著あり、上古より
隋末に至る迄の詩歌を蒐集して殆ど之を網羅せり、
然れども其書唯明代の刊本のみにして清に至り之を
再刻するもの無きを以て坊間頗る乏し、古詩を攻究
する者之に苦む、闓運之を思ひ因りて古詩紀中より、
其精華を抜き以て此書を著せり、凡て
四言、五言、齊已後新體詩、雜言、郊廟樂章、頌
德樂詞、歌謠雜體。
の七類に分てり。

〔文集〕

●古文關鍵二卷

〔作者〕宋の呂祖謙編す、祖謙の傳は大事紀の條に出
づ。

〔傳來、編旨、題名、體裁〕此書宋志に二十卷に作り、
書録解題には二卷に作り、其言ふ所も亦今本と同じ、
蓋し宋志荒謬誤りて十の字を増せるならん、(四庫提
要參考)
韓愈、柳宗元、(以上唐)歐陽修、蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾
鞏、張耒(以上宋)の文凡そ六十餘篇を取り、各、其命
意布局の處を標舉し、學者に示すに門徑を以てす、故
に之を關鍵といふ、卷首に總論、看文字法、作文之
法を冠し、後文章を列せり、又文中の故事典故には特
に注解を附せり、(我國)文化元年之を刊行せり。

●崇古文訣三十五卷

〔作者〕宋の樓昉撰す、昉字は陽叔、迂齋と號す、
鄞縣の人、紹熙四年の進士、歴官して興化軍に守た
り、卒して龍圖閣學士を贈らる。(万姓統
譜參考)

〔體裁、編旨、傳來〕是書は古文關鍵に倣ひて作りた
る者にして、

先秦文一卷、兩漢文、三國文、六朝文共六卷、唐
文八卷、宋朝文二十卷。
に分つ、蓋し昉は祖謙の門人なれば、其師説を推闡
して、精密を加へたる者なり、陳振孫書録解題に「學
者之を便とす」とあれば、當時に行はれたること知
る可し、(我國)文政三年、昌平學にて之を刊行せり。

●文章軌範七卷

〔作者〕宋の謝枋撰す、枋得字は君直、疊山と號
す、宋の信州弋陽の人、官江西招諭使に至り、信州
に知たり、爲人豪爽にして、書を觀る毎に五行俱に
下り、一覽して終身忘れず、性直言を好み、一たび
人と古今の治亂を論すれば、跳躍自ら奮ひ、忠義を
以て自ら任せり、宋の亡ぶるや、姓名を變じて建陽
市中に賣卜す、至元中(二十三年と)
再び徴されたるも
辭して至らず、遂に執へらる、是より穀を避け、日に
菜果を食ひ、同二十六年(一九四九)を以て歿せり、
宋代に於て朱陸を二大學派とす、而して朱には文天

祥を出し、陸には謝枋得を出だす、一は慷慨激烈を以
て、一は悠然不迫を以て、共に臣節を全くす、奇と
いふ可し。(宋史本
傳參考)

〔題名、體裁、編旨〕此書は枋得が舉業者の爲に軌範
とすべき文章を撰集せる者なり、故に名づく、韓柳歐
蘇を中心とし、唐宋の作家の文を録し、唯陶淵明の
歸去來辭と、諸葛孔明の出師表のみ前代に取れり、
凡て六十九篇なり、一二卷を放膽文と云ふ、曰く、
凡そ文を學ぶには初は膽の大なるを要すと、又曰
く終は心の小なるを要すと、故に三卷より以下皆
小心の文を集めたり、然れども是其大要なり、更
に之を細別せば、一卷は粗大の文を、二卷は辨難攻
撃の文を、三卷は議論變化の文を、四卷は精明正大
の文を、五卷は謹嚴簡潔の文を、六卷は不朽の文を、
七卷は自得の文を掲げたり、人生を回顧すれば如此
秩序を経るを以て常とす、疊山の用意以て見るべし、
或は云ふ七卷侯王將相有種乎に配す、而して其侯王
といひ王侯といはざるは意有り、又云ふ全篇凡て、
圈點評語ありて出師表と歸去來辭とのみ之れ無きは
管に二子を尊重するのみならず、また寓意ありと。
〔傳來〕此書(元)代より(明)に至り大に世に行はれ、

李廷機は評訓を加へ、王陽明は序文を製せり、是に於て狡猾なる書肆は、名を鄒東郭(名は守益、字は謙之、正徳の進士)に假りて、續編七卷を撰し、先秦より明初に至る諸家の文を收めたり、其(我國)に傳はれるは、足利氏の末葉に在るが如し、徳川氏の初世より行はれ、伊東藍田始めて之を注してより、次第に行はれ、文化以後に至りて盛を極む、頼山陽は其遺を補ひ、爲に謝選拾遺六卷を選べり、其後評注する者甚だ多く、諸藩校之を教科書に用ひ今に至りて猶行はる。

〔注解、参考〕官板文章軌範七卷 日本松崎純徳校勘 此書本文往々坊間諸本と異なり、坊得の文章軌範評林七卷 伊東藍田撰 補注文章軌範七卷 海保元隆撰 臨頭増註文章軌範七卷 森立

◎文 編六十四卷

〔作者、體裁〕明の唐順之撰す、順之の傳は、荆川集の條に出づ、此書は周より宋に至る迄の文を編纂したる者にして左の三十三體に分録せり。

制策、對、諫疏、論疏、疏、疏請、疏議、封事、表、奏、上書、說、劄子、狀、論、年表論斷、論斷、

議、雜著、策、辭命、書、啓、狀、序、記、神道碑、碑銘、墓誌銘、墓表、傳、行狀、祭文。中四十卷は、三十九卷目錄の條に三十九至四十と細字にて注しあれど、本文には四十卷なし。

〔編旨〕天啓元年陳元素の序に曰く眞徳秀の文章正宗を以て稿本と爲すと、然れども徳秀の書は理を明にするを主とし、此書は文を論するを主とし、宗旨截然として同じからず、元素の説未だ確かならざるに似たり、順之の文を論するや、法を以て先とす、故に自序に曰く「是編は文の工匠にして法の至なり」と、されば書中標舉する所の者、皆文家の窠要にして、學者唐宋より、以て秦漢に適く、まさに此より入る可し、蓋し順之古文に於て、善く心に其得失を知る、故に言ふ所大抵寫實に中れるを以てなり、ただ彙收太だ廣く、義例太だ多く、往々踏駭を免れざるを憾となすのみ。

◎唐宋八大家文鈔 一百六十四卷

〔作者〕明の茅坤撰す、坤字は順甫、鹿門と號す、歸安の人、嘉靖十七年の進士、青陽丹徒二縣の知事よ

り、吏部稽勳司に移り、後事を以て廣平通判に貶せられ、また廣西近備僉事に遷る、萬曆二十九年(二二六一)歿す。(明史文苑傳參考)

〔編旨、體裁、傳來〕此書編纂の目的は舉業者の爲に古文の門徑を示すに在り、明史文苑傳に、坤古文を善くし、最も唐順之に心折す、順之著す所の文編、唐宋八韓愈、柳宗元、歐陽修、三蘇、(徇、軾、轍)曾鞏、王安石八家の外、取る所無し、故に坤は八大家文鈔を選すとあり、然れども八卷の定めは、明初朱右より起れり、右は韓、柳、歐、曾、王、三蘇の作を採録し、八先生文集と爲せり、然れども其書今傳はらざるを以て、遂に坤より始まるが如く思はるるに至れり、此書

韓愈文十六卷、柳宗元文十二卷、歐陽修文三十二卷、附五代史鈔二十卷、王安石文十六卷、曾鞏文十卷、蘇洵文十卷、蘇軾文二十八卷、蘇轍文二十卷。

あり、毎家各、これが引を爲し、順之及び王慎中の評語を附加せり、或は坤、順之の稿本を撰みて此書と爲すといふ者あれども、是誣妄なり、(四庫提要清の紀昀論じて「自李夢陽空同集出以字句一摸秦漢上而

秦漢爲集曰「自坤白華樓稿出以機調一摸唐宋上而唐宋又爲集曰」といひ、「是集大抵亦爲舉業一而設、其所評語、疏舛尤不可枚舉」といふは當れり、然れども初學の門徑と爲すには、恰好の書なるを以て、爾來家に弦し戸に誦して廢せられず。

◎四六法海十二卷

〔題名、作者〕四六は四六駢麗の文にして、秦漢に萌し、六朝に至りて盛に後遂に上奏文の普通體となれり、此書は古より元に至る迄、其の法とすべき者を撰ぶ、故に法海といふ、明の王志堅の撰する所なり、志堅字は弱生、崑山の人、萬曆三十八年の進士、南京兵部主事より、員外郎中を歴、後僉事を以て湖廣の學政を督す、崇禎六年(二二九三)卒す。(明史本傳參考)

〔編旨、體裁、傳來〕此書は舉業者の爲に、文選、藝文類聚、文苑英華、唐文粹、宋文鑑、文章正宗、元文類、文編、廣文選、續文選を主とし、諸家の集を參考して其門徑となる可き者を撰びたる者にして、凡て

勅、詔、冊文、制、手書、德音、令、敎、策問、表、章、狀、彈事、牋、啓、書、頌、移文、檄、露布、

詩文序、宴集序、贈別序、記、史論、論、碑文、墓誌、行狀、銘、贊、七、連珠、志、弔祭文、誄、判。

の三十七類に分つ、每篇或は其本事を箋注し、或は其異同を考證し、其始末を臚列し、用意極めて周到なり、舉業者の爲に作るといへども、實は四六の源流正變備さに具はりて、(明)代選本中に在りて上乘たるものなり、(清)に至り蔣士銓之を評選して以て八卷と爲し、同治中に方濬師之に序して刊行せり、之を原本に較ふるに亦視る所無しと爲さす。

◎皇朝文紀 十三卷(未見)

〔作者、題名、體裁〕 明の梅鼎祚撰す、鼎祚の傳は古樂苑の條に出づ、鼎祚陳隋以前の文を編して文紀と名づけ、以て馮惟訥の詩紀に配す、此其書の第一集なり、文紀とは紀年を追ひ録するよりいふ、此書は太古より秦に至る迄の文を輯めたり、故に皇朝と名づく、撰擇濫雜にして眞偽相間はれども、博收せるを以て考據に資するに足るといふ。

◎西漢文紀 二十四卷(未見)

〔作者、體裁〕 明の梅鼎祚撰す、此書は即ち文紀の第二集にして、録する所、史記、漢書を以て主と爲し、他書より雜採して之に附益せり、四庫提要に據れば考據する所多く正確にして、皇朝の如く濫雜ならず、張良四皓往返書、李陵蘇武往返書、劉向上關尹子子華子於陵子奏等の諸文の如き、依托顯然たる者は皆能く之を辨じ、其他西京雜記、東方朔別傳、搜神記、博物志、佛藏辨正論載する所の諸篇及び孔安國尚書序、孔衍家語序等の文は、未だ一々釐正せずと雖、要するに其漏るゝ所は百中の一に過ぎず、惟々新書よりは數篇を節録して、新語、春秋繁露の類は然らず、列女傳、及び揚雄の諸賦は竝に其序を節録して、其他の者は然らざる等、標準の尋ぬべきなし、然れども三代より以下、文章西漢より盛なるはなく、西漢の文此篇より備はれるはなし、未だ小瑕を以て没す可からずといふ。

◎東漢文紀 三十二卷(未見)

◎宋文紀 十八卷(未見)

〔作者、體裁〕 明の梅鼎祚撰す、宋の文は上魏晉を承け、清儒の體猶存す、下齊梁を啓き纂組の風漸く盛なり、八代の内に於て文質升降の關に居り、彫華に涉ると雖、未だ全く綺麗ならず、故に此書を見れば以て風氣轉移、日趨日變の故を見る可し、其編纂の體は、略、漢文紀と同じ、たゞ晉人の文を編入する者間、これあり、是其缺陷なり。

◎南齊文紀 十卷(未見)

〔作者、體裁〕 明の梅鼎祚撰す、此編諸文紀の中に於て、體例頗る叢脞にして、錯亂、舛誤、矛盾、甚だしといふ。

◎梁文紀 十四卷(未見)

〔作者、體裁〕 明の梅鼎祚撰す、此書録する所多く、梁書、南史及び諸家文集より取れり、故に甚だ繁碎ならず、考證も亦頗る精核なり、惟、後梁の蕭歸を以

〔作者、體裁〕 明の梅鼎祚撰す、東漢は小説雜書の作多く金石の文も亦多く當代より傳はれり、故に依托附會、西漢に較べて甚だし、此書録する所の文、正史を以て宗とすれども、蒐羅極めて富めるを以て、眞贋相間はり、異同相重れり、而して譌を訂し舛を正す、西漢文紀の詳細なるに及ばず、是實に其惜む可き者なりといふ。

◎西晉文紀 二十卷(未見)

〔作者、體裁〕 明の梅鼎祚撰す、西晉時代は清言流行の極盛期にして、文章も亦皆其風習を受けたり、然るに此書録する所は、典故を討論し、風俗を崇勵する者、猶其半に居れり、蓋し東漢以來、老師宿儒の遺訓三國を越えて猶存する者あり、鼎祚之を哀輯するに非らざれば、建武以還猶能く國を立つる者、禮教未だ殄ざるが爲の故を知らざるなり、其功少からずといふ可し、其中多く詩賦の序を採りて篇帙を足し、牀例特に他代に較べて繁雜に、且つ割裂多き等、其最も惜む可き者なりといふ。

て退けて外國の後に附し、諸王と列を同くせざる、殊に次序に乖れり、又侯景の詔を簡文帝の文内に入る、亦事實に非ず、其他江淹の集、齊代に作れる者は割きて齊に入れしこと、齊文紀に於て既に例を示しながら、何佟之の文は皆此書に收め「以上作於齊朝、以下作於梁世」と分注するが如き、自ら其例を亂る者なり、されど他集と比較しては條理ありといふ。

◎ 陳文紀 八卷(未見)

〔作者、體裁〕 明の梅鼎祚撰す、陳代の詞人は上は梁に仕へたる者あり、下は隋に歸する者ありて、頗る錯雜せり、然るに鼎祚は前後の諸作を皆陳に併せたるを以て、未だ朝代の混淆を免れず、然れども鼎祚既に南北朝の文を取つて、通じて編次をなす、苟も一代を闕かば則ち源流始末未だ詳かならざる所あり、斯亦已むを得ざるの變例なる可しといふ。

◎ 北齊文紀 三卷(未見)

きに拘らず、之を收録したれば、體裁頗る糅雜なり、又唐の高祖、太宗、褚亮、李靖、陳叔達、温大雅、魏徵等の文、隋末に作れる者は皆之を兼收し、李德林の代靜帝之詔は周時に作れる者、顔之推の請考樂之奏は梁代に上りたる者に拘らず、皆之を收むるなど、毫も定見なし、其他同一人の文の諸卷に重出せるが如きは、獨り此集のみならざれば論する迄もなし、八卷の末に梁神游等十二人の文を載せたり、此等は時代履歷共に詳かならざるを以て、こゝに附載せるなり、蓋し此集は文紀の終篇なるを以てなり。

〔附記〕 以上皇朝文紀以下、四庫及び丁氏の八千卷樓皆之を藏すれども、我國には金澤博物館に宋文紀を藏するといふ外、未だ之が渡來あるを聞かず、然れども上は古初より、下は八代を窮め、旁搜博採、蒼合編を成し、唐以前の文章をして、源委相承け、燦然考ふ可からしむるは、此書に如く者なし、故に四庫提要によりて梗概を摘録し、以て其一斑を知らしむ、而して皇朝文紀より西晉文紀まで鼎祚在世中の刊行に屬すれども、宋文紀以下は其歿後應天巡按御史張煊、寧國府知府周維新、始めて次第を爲して開雕せりといふ。

〔作者、體裁〕 明の梅鼎祚撰す、此書採録する所の文、正史より外文苑英華、藝文類聚、通鑑の諸書に過ぎず、零編短札、多く卷帙に備るに取れるのみ、蓋し流傳少なく、蒐輯するに難きが爲にして、其網羅の未だ備はらざるに非らず、體例編次一ならず、頗る疎漏なれども、西晉文紀以下は、鼎祚歿後の刊行にして刊者草稿を其儘版に附せしものあれば、盡く鼎祚の失とは言ふ可らずといふ。

◎ 後周文紀 八卷(未見)

〔作者、體裁〕 明の梅鼎祚撰す、錄する所庾信の文最多く凡て五卷あり、次は王褒にして凡て十八篇ありといふ。

◎ 隋文紀 八卷(未見)

〔作者、體裁〕 明の梅鼎祚撰す、隋は南北を混一したれば、兩朝の遺老故臣相替れり、されど人々舊習に沿習したるを以て、文章も一體をなす能はず、又唐代の小説は多く隋事を談する者眞假相半し、辨別し難

◎ 釋文紀 四十五卷(未見)

〔作者、體裁〕 明の梅鼎祚撰す、東漢より隋までの名僧の文と、諸家の文釋氏の爲に作れる者とを輯めたる者なり、首卷には經典譯する所の西域梵書を、二卷より四十三卷まで東漢より陳隋に至る作を、四十四、四十五兩卷は無名氏の作を録せり、採摭極めて繁富にして、每人名の下各爵里を注し、每篇題の下、各其事實を注せりといふ。

◎ 皇明經世文編 五百四卷目錄十卷

補遺 四卷

〔作者〕 明の陳子龍、宋徵璧、徐孚遠共に撰す、子龍の傳は明詩選の條に出づ、徵璧字は尙木、隆慶、崇禎間の進士なり、(題名碑 錄考) 孚遠字は闇公、崇禎十五年の舉人、詩を善くす、國難に殉せり、(明史、南疆釋史、復社姓氏錄等參考) 此書の編輯に與りしは前後十數人の多き上るも、其終始局にあたりしは三人のみ、故に特に擧ぐ、周立勳の如きは卷端に三人と共に名を列するも中途にし

て歿す、故に之を省く。
 [編旨、體裁] 此書は明一代の經世の文を輯めたる者にして、其言を取り其人を廢せず、凡て人によりて録し、其文多き者は多く取り少き者は少しく取り、本集載せざる所に至りても經國に關する者は旁采し以て完璧を期せり、宋濂に始り陳組綬に終る、總て四百二十五人あり、每人、類に分ちて之を録し、每文評點あり、目錄十卷の中首二卷は諸家の序、鑒定姓氏、凡例なり、補遺は何起鳴に始まり錢樞に終る、五人を收む。

●御選古文淵鑑 六十四卷

[作者] 清の康熙二十四年、徐乾學等勅を奉じて撰す、乾學の傳は資治通鑑後編の條に、淵鑑の義は淵鑑類函の條に出づ。
 [體裁、編旨] 凡そ
 左傳文四卷、國語文二卷、公毅文、戰國策文、秦文各一卷、漢文十一卷、三國文、晉文各二卷、六朝文四卷、唐文十二卷、五代文一卷、宋文二十三卷。

を收む、卷端には聖祖の御評あり、每篇また箋注あり、考證明確にして、詳略宜しきを得たり、大旨主として風教に關し世用に裨益あるものを撰べり。

●皇清文穎 一百二十四卷(未見)

[作者、題名、體裁] 清の康熙中陳廷敬勅を奉じて撰し、乾隆帝の時廷臣に命じて之を續輯す、廷敬の傳は康熙字典の條に出づ、清初より乾隆九年までの文を録したる者にして、冠するに太祖より乾隆帝に至る迄の製作を以てす、凡て二十四卷、夫よりは諸臣の作にして凡て一百卷なりといふ。

●明文在一百卷

[作者、題名] 清の薛熙撰す、熙字は孝穆、半園と號す、常熟の人、此書の編纂を終りたるは康熙二十二年三月にして、三十五年門人之を版行せり、(卷首宋濂の序)明文斯に在りの意を以て名づく。
 [體裁、編旨] 此書は凡て左の七十二類に分つ、賦、朝會郊社樂章、饒歌鼓吹、琴操、古詩、律詩、

乃ち所謂文なり、然らざれば則ち孔子の所謂言之不文也、好學深思の者は當に之を自得すべし、平淡の者は其體を備ふる者をと、塗澤の者は其雜ならざる者をとれり、十の一二に過ぎざるのみ、斯編を閲する者は、必ず參するに景濂先生の全集を以て之を讀まば、熙の苦心を知らん」と以て其編旨を知る可し。

●御選唐宋文醇 五十八卷

[作者、傳來] 清の乾隆三年の勅選なり、初の明の茅坤唐宋八大家文鈔を編す、清の儲欣、唐の李翱、孫樵二人を増し、唐宋十家文を選す、然れども去取未だ盡く協はず、評論また未だ允ならざるを以て、乾隆帝儒臣に命じて補綴せしむ、即ち此書なり、欣字は同人、宜興の人、郷里に講説す、康熙の中頃に生榮せり、著す所陸草堂集あり。(先正事考) (賦類微參考)
 [編旨、體裁] 此書明理載道、經世致用の文を主とし空言に涉らざる者を撰べり、凡て
 韓愈文十卷、柳宗元文八卷、李翱文二卷、孫樵文一卷、歐陽修文十二卷、蘇洵文四卷、蘇軾文十三卷、蘇轍文三卷、曾鞏文四卷、王安石文一卷。

騷、七、演聯珠、詔、制、誥、祝冊諭祭文、策問、檄、露布、頌、表、箋、啓、奏疏、贊、箴、銘、原、議、論、辯、說、書、經史序、應制序、文集序、詩集序、樂府序、志譜序、志孝序、紀遊序、贈賀序、送行序、壽序、節壽序、學宮記、書院記、應制記、德政記、圖像記、寺廟記、書齋記、山水記、工作記、勅建碑、聖廟碑、精忠碑、勳德碑、神道碑、墓碑、墓表、墓誌銘、傳、行狀、錄、書事、雜志、銘、冠詞、字詞、哀詞、誄詞、祭文、公移、題跋。

熙の自序に曰く、明初の文の盛なる、潛溪其始を開き、明季の文の亂る、亦潛溪其終を成す、蓋し潛溪の集一體ならず、俊永の文あり、平淡の文あり、塗澤の文あり、洪永より以て正嘉の朝の諸公に及ぶ、善く潛溪を學ぶ者、其俊永を得て間に平淡を以てす、此明文の盛なる所以なり、隆萬より以て啓禎朝の諸公に及ぶ、善く潛溪を學ばざる者、其塗澤を得て亦間に平淡を以てす、此明文の亂る、所以なり、亂るれば則ち亡ぶ、必然の理なり、明文の選ばざる可からざる所以なり、之を選する維れ何ぞ、其俊永をとる者、十蓋し其八に居る、俊永とは何ぞ、是

なり、每篇首に帝の評を載せ、篇後に前人評跋の發明する所ある者、及び姓名事蹟考證に資ある者を撰びて之を載す。

唐宋八大家文讀本三十卷

〔作者〕 清の沈德潛撰す、德潛字は確士、歸愚と號す、江蘇長洲の人、乾隆四年の進士、庶吉士に選まれ、累遷して中允左庶子侍讀學士より、禮部尙書に至る、同三十四年(二四二九)卒す、年九十七、德潛壯より詩名を負ひ、選する所の古詩源、唐詩別裁、明詩別裁、國朝詩別裁等、學者奉じて圭臬と爲す、著す所全集世に行はる。(先正事畧考 猷類微參考)

〔體裁、編旨、傳來〕 明の茅坤唐宋八大家文を編す、清の儲同人其疎漏を病み、増補して八大家類選を編す、德潛二氏の選本及び八家の全集を綜覽して、抜鈔する者數十篇あり、合して二十四卷とす、雍正十三年増して三十二卷とし、乾隆四年二卷を刪去し、定めて三十卷とし、弟子に授け、初學文を學ぶものゝ規範と爲す、此平願祿百といふ者、陸關亭と計り、賞を投じて之を刊行せり、凡て

韓愈文六卷、柳宗元文三卷、歐陽修文五卷、蘇洵文三卷、蘇軾文七卷、蘇轍文、曾鞏文、王安石文各二卷。

なり、每篇、評點段落を附し、總評を加へ、前人の批評は、議論精當なる者を選びて、之を采入し、又文中記事の他に關係ある者は、之を史傳雜誌に考へ、或は録して總評と爲し、或は旁批に列し、讀者をして兩ながら相證引せしむ、此の如く用意周到にして、選擇亦當を得たるを以て大に世に行はれたり、(我國)に渡來せるは寛政の頃なる可し、文化十一年官にて之を刊行し、忽にして學者の景仰する所と爲り、藩學私塾共に、必ず之を教科書とせり、村瀨誨輔は續編を編し、頼山陽は増評を作り、川西潛は文格を選し、其他學者評解する者勝げて數ふ可からず、以て今日に及ぶ、文を言ふもの必ず準をこゝに取れり。

〔註解、參考〕 ○増評唐宋八大家文讀本三十卷 日本類 ○唐宋八大家文讀本 野本 ○點註唐宋八大家文讀本 成等撰 ○唐宋八大家文讀本摘解八卷附錄一卷 服部富三撰

湖海文傳七十五卷

〔作者〕 清の王昶撰す、昶字は德甫、述菴と號す、學者蘭泉先生と稱す、江蘇青浦の人、乾隆十八年の進士、内閣中書協辦より、雲南江南の布政使に累進し、晩に刑部右侍郎となる、嘉慶十一年(二四六六)卒す、年八十三、著す所春融堂集六十八卷、金石萃編百六十卷、湖海詩傳四十六卷、青浦詩傳三十二卷等あり。(先正事畧國朝 猷類微參考)

〔編旨、體裁〕 此書は昶が平生の師友及び門下の作る所の文を彙集したるものなり。

賦、頌、文、講義、論、釋、解、答問、對、考、證、辯、議、說、原、序、記、書、碑、墓表、墓碣、墓誌、塔銘、行狀、述、傳、書事、祭文、哀詞、誄、贊、銘、書後、跋、雜著。の三十六類に分ち、叙文の次第は、大略經、史、子、集を以て、先後と爲し、録する所の文、重に學問的のものにして、遊記等の娛樂的のものは之を省けり。

全唐文一千卷

〔作者、體裁〕 清の嘉慶十九年、董誥等詔を奉じて撰す、誥字は蔗林、浙江富陽の人、乾隆二十八年の進士、官文華殿大學士兼刑部尙書に至り、太子太師に晋む、嘉慶二十三年(二四七八)卒す。(先正事畧考 猷類微參考) 此書唐代作家の文集を彙集せるものにして、并せて五代の文をも收めたり、體例は全唐詩と同じく、首に諸帝、次に后妃、次に宗室諸王、次に公主、臣工、次に釋道、次に閩秀あり、宦官四裔の文は、卷末に附録せり、而して唐の諸帝終りて、五代の諸帝を擧げ、次に十國を附録として載す、后妃以下も亦皆互に序を以て唐の後に附せり。

古文辭類纂七十五卷

〔作者、題名〕 清の姚鼐撰す、鼐の傳は惜抱軒文集の條に出づ、此書は古文辭の法とす可き者を類別して纂修せる者なり、故に名づく。

〔體裁、編旨〕 此書は左の十三類に分ちて纂録せり。論辯、序跋、奏議、書說、贈序、詔令、傳狀、碑

誌、雜記、箴銘、頌贊、辭賦、哀祭。卷首には序目ありて、類毎に解題あり、録する所の文は、先秦より北宋人の作なり、鼎は桐城派の文章家中に在りて卓越す、故に其古人の文を撰擇するにも亦自ら一家の識見を具ふ、今此書を觀るに大抵皆矩度森嚴以て模範たる可き者を採れり。

●駢體文鈔三十一卷

〔題名、作者〕駢體とは四六文なり、清の李兆洛撰す、兆洛の傳は歷代地理志韻編の條に出づ。

〔編目、體裁〕此書は世人が駢儷の文を以て、古文と路を殊にせる者と思惟せるを以て、其誤を解かんが爲に作れる者にして秦漢以後隋に至るまでの文を録し、其源流の一に出で、體法完美、秩然たる者あるを示せり、凡て三編に分つ、其目左の如し。

○上編、廟堂の製奏進の篇、所謂之を典章に垂れ之を金石に播くものを録す、凡て十八類に分つ。銘刻、頌、雜頌、箴、諷誄哀策、詔書、策命、告祭、教令、策對、奏事、駁議、勸進、賀慶、薦達、陳謝、檄移、彈劾。

○中編、指事述意の作を録す凡て八類に分つ。書、論、序、襍頌贊箴銘、碑記、墓碑、誌狀、誄祭。
○下編、多く縁情託興の文を録す凡て五類に分つ。設辭、七、連珠、牋牘、雜文。
每文評語あり、まゝ注解あり、卷首には別に序目あり。

●唐駢體文鈔十七卷

〔作者、題名〕清の陳均撰す、均初の名は大均、字は受筆、海昌の人、嘉慶十五年の舉人、書畫を善くせり、(藝林今語、唐)駢體文は四六文なり。

〔編目、體裁〕此書録する所小品にして、問、鉅製を存せり、先づ帝王を擧げ、後臣工に及ぶ、時代順に列し、類目を分たず、凡て帝王八人、臣工百三十二人、闕名氏五人、合して百四十五人にして、一人少きは一篇、多きは四十餘篇に及ぶ。

●皇朝經世文編百二十卷

〔題名、作者〕清朝の碩公、大儒、俊士、畸民の經世の文を輯めたる者なり、故に經世を以て書に名づく、賀長齡輯め、魏源に囑して編次せしむ、長齡字は耦庚、嘉慶十三年の進士、(經世文編)源の傳は聖武記の條に出づ。

〔體裁〕此書は

學術(原學、儒行、法語、廣論、文學、師友に分つ)、吏政(銓選、官制、考察、大吏、守令、吏胥、幕友に分つ)、戶政(理財、養民、賦役、屯墾、八旗生計、農政、倉儲、荒政、漕運、鹽課、權詰、錢弊に分つ)、禮政(禮論、大典、學校、宗法、家教、昏禮、喪禮、服制、祭禮、正俗に分つ)、兵政(兵制、屯餉、馬政、保甲、兵法、地利、塞防、山防、海防、邊防、苗防、勦匪に分つ)、刑政(刑論、律例、治獄に分つ)、工政(土木、河防、運河、水利通論、直隸水利、江蘇水利、各省水利、海塘に分つ)。

の七類に分ち、各家の文を録せり、而して卷首には生存作者の姓名と、別に姓名總目あり、作者の字號

郷貫著書を擧ぐ。

●國朝古文所見集十三卷

〔作者、題名〕清の陳兆麒撰す、兆麒字は仰韓、休寧の人、(卷首)此書は清朝名家の古文を已れが耳目の逮ぶ所の者に就て、選録せる者なるを以て、所見集といふ、我國の刻本(天保十五年刊)には清名家古文所見集と題せり、蓋し翻刻者の改むる所に係る。

〔編目、體裁〕兆麒の言に據れば、清朝に於ける古文家は、方苞、劉大猷、姚鼐の三子のみ、侯方域、魏禧、汪琬、顧炎武の諸家は之に次ぐ者なりと、故に此書録す。所右三子を中心とし、其派と、侯、魏、汪、顧及び其他の人々の文に限り、まゝ自作をも録せり、兆麒の文に於ける蓋し桐城派に心折する所有るなり、凡て論著、說、序、題跋、書、贈序、壽序、傳、碑、墓誌銘、哀辭、記。の十二類に分ち、百六十餘篇あり。

◎國朝文錄八十二卷續錄六十六卷

〔作者〕 清の李祖陶撰す、祖陶字は欽之、上高の人。

〔編旨、體裁〕

此書は清朝諸家の文集より鈔録せるものにして前録は凡て唐宋八家を以て宗とせり、續録は之と異なり、文として見る可き者は必ず之を録せり、左に其目を擧ぐ。

- 順治朝
 - 熊學士文集錄一卷 熊伯龍
 - 石莊先生文集錄三卷 陳宏緒
 - 顧炎武
 - 侯方域
 - 壯悔堂文集二卷
 - 王獻定
 - 四照堂文集二卷
 - 賀貽孫
 - 水田居文集二卷
 - 湯斌
 - 康熙朝
 - 潛菴先生遺稿文集二卷
 - 陳廷敬
 - 午亭文錄三卷
 - 張文貞公文錄二卷 張玉書
 - 裕村全集文選二卷 李光地
 - 雍正乾隆朝
 - 朱文端公文集二卷 朱軾
 - 孫文定公文錄二卷 孫嘉金
 - 二希堂文集二卷 蔡世遠

- 綺綺亭集文集四卷 全祖望
 - 紫竹山房文集三卷 陳兆禧
 - 鹿洲文錄三卷 戴鼎元
 - 白鶴堂文集一卷 彭端淑
 - 南庄類稿文集二卷 黃永年
 - 海峰先生文集二卷 劉大猷
 - 潛研堂文集二卷 錢大昕
 - 惜抱軒先生文選二卷 姚鼐
 - 紀文達公文錄二卷 紀昀
 - 清獻堂文集二卷 趙佑
 - 忠雅堂文集二卷 蔣士銓
 - 二林居文集二卷 彭紹升
 - 厚岡文集三卷 李榮陞
 - 嘉慶朝
 - 陶士升先生雙江文錄一卷 陶必登
 - 劉寄菴文集二卷 劉大紳
 - 知恥齋文集一卷 謝振定
 - 惕園初稿文二卷 陳庚煥
- 卷首諸家の序自序及び總目あり、每家引あり、每文評點評語あり、而して魏禧、汪琬、朱彝尊、方苞、李紱、惲敬、六家は、其集中の文の採取するも三卷に止まらざるを以て、別に編して六家文錄となし刊行せり、故に此中に在らず、續集の目は次の如し。
- 姚端恪公文錄二卷 姚文然
 - 變雅堂文集一卷 杜濬
 - 白茅堂文集二卷 顧景星
 - 砥齋文集一卷 王宏
 - 聽山文集一卷 申涵
 - 改亭文集三卷 計東
 - 魏伯子文集一卷 魏祥
 - 河東文錄一卷 邱維屏
 - 榆溪文集一卷 徐世溥
 - 庸書文集一卷 張賢山
 - 白石山房文集一卷 李振裕
 - 三魚堂文集一卷 陸隴其

◎國朝文錄八十二卷

〔作者〕 清の姚椿撰す、椿字は春木、松江の人、姚鼎に學び道光中に生榮す、墨竹を善くし、詩文に工なり。

- 蒼岷山人文錄一卷 蔡松齡
- 憺園文錄一卷 徐乾學
- 百尺梧桐閣文錄一卷 汪懋麟
- 飴山文錄一卷 趙秋谷
- 可儀堂文錄一卷 龔雲世
- 趙忠毅公文錄二卷 趙申喬
- 白田草堂文錄一卷 王懋竑
- 梅莊文錄一卷 謝濟世
- 梅崖文錄二卷 朱仕琇
- 四知堂文集二卷 楊錫紱
- 孺廬先生文錄一卷 方承蒼
- 雙桂堂文集二卷 紀大奎
- 松泉文錄一卷 汪由敦
- 集虛齋文集二卷 方際如
- 歸愚文錄一卷 沈德潛
- 果亭文錄一卷 沈彤
- 培遠堂文錄一卷 陳宏謀
- 香國集文集一卷 陳之蘭
- 小倉山房文錄二卷 袁枚
- 尊聞居士集二卷 羅有高
- 叢桂堂文錄一卷 劉東橋
- 切問齋文集二卷 陸耀
- 經韻樓集錄二卷 段玉裁
- 更生齋文集一卷 洪亮吉
- 願綵堂文集一卷 沈叔埏
- 韞山堂文集一卷 管世銘
- 竹香齋文集一卷 茹敦和
- 養一齋文集二卷 李兆洛
- 鑑止水齋文集一卷 許宗彥
- 海厓先生文集一卷 熊琏
- 雀研齋文集一卷 張錫穀
- 雕菴集文集一卷 焦循
- 崇百齋文集一卷 陸繼輅
- 學福齋文集二卷 沈大成
- 左海文錄二卷 陳壽祺
- 存吾文集錄一卷 余廷傑
- 邃雅堂文集一卷 姚文田

每家引あり又每文評語あるも評點なし。

一類の文毎に、作者値ふ所の時代の前後を以て序と爲す、小傳、評語を附せず。

〔詩文合集〕

●文選三十卷

〔題名、編旨〕 文選とは文を選びたるを以て名づく、其所謂文とは文章詩賦を總稱する廣義の文にして、更に之を詳説すれば、道を説く經の如き、事を載する史の如き、意を立つる子の如き苟も其の質の重きをなすものは除きて載せず、單に辭采を綜輯し文華を錯比し、沈思より出で、翰藻に歸するものよみを撰出して採集したるなり。(梁蕭統の文選序。清阮元の書。梁昭明太子文選序後等參考)
〔作者〕 梁の蕭統撰す、統字は德施、武帝の長子、齊の中興元年九月を以て襄陽に生る、天監元年立ちて皇太子と爲る、生れて聰慧、三歳にして孝經論語を受け五歳にして遍く五經を読み、悉く能く諷誦せり、其の書を讀むや數行並下り、目を過ぐれば記憶し、游晏して詩を賦する毎に、十數韻に至り、思を屬して便ち成り、點易する所無かりきといふ、性又至孝、

八歳の時貴嬪の疾有るや、日夜衣帶を解かず、其瘳するや、水漿も口に入らず、葬の後に至りて腰圍過半を減せり、以て其厚きを知る可し、元服を加ふるに及びて、武帝の命を受けて萬幾を省す、百司事を奏するに謬妄あれば立ところに辯析して之を改正せしめたり、然れども性又寛和にして衆を容れ、才學の士を引納し、賞受して倦むこと無し、霖雨積雪毎に、左右の士を遣して、貧困の者及び道路に流離するものを視せしめ、米を賑賜し、又毎年絹帛を出して襦袴各三千領を作り以て寒者に施し、人をして知らしめざりきといふ、中大通三年三月後池に游ひて芙蓉を采りしに、姫人舟を盪かし爲めに溺れて疾を獲、四月乙巳日薨す、年三十一、武帝東宮に幸して臨哭し、謚して昭明といふ、所著文集三十卷、古今典語文言、正序十卷、文章英華二十卷及此書等あり此書の外は今皆傳はらず。(梁書、北史參考)
〔體裁〕 此書は昭明太子の原選は三十卷なりしが、唐の顯慶三年九月、李善之が註を爲くり始めて毎卷を分ちて二と爲したるより、以後六十卷と爲れり、而して三十卷本は遂に傳はらず、胡克家の宋槧本によれば收むる所の目大要左の如し。

賦十九卷、(十九卷には詩を混ぜり)詩十二卷、騷二卷、七、詔、冊共二卷、令、教、文共一卷、表二卷、上、書、啓共一卷、彈事、奏記共一卷、書三卷、檄一卷、對問、設論、辭、序共二卷、頌、贊共一卷、符命一卷、史論、史述贊共二卷、論、連珠共五卷、箴、銘、誄、哀、碑文、墓誌共四卷、行狀、弔文、祭文共一卷。

更に賦を分ちて、
京都、郊祀、耕藉、畋獵、紀行、遊覽、宮殿、江海、物色、鳥獸、志、哀傷、論文、音樂、情、と爲し詩を分ちて、
補亡、述德、勸勵、獻詩、公議、祖餞、詠史、百一、游仙、招隱、反招隱、游覽、詠懷、哀傷、贈答、行旅、軍戎、郊廟、樂府、挽歌、雜詩、雜擬、と爲せり、而して其の收むる所の作者は上周代に始まり下梁朝に至る、作者の名の見はるゝもの都て一百二十七人あり。

〔傳來〕 此書(隋)に至り蕭該は音義を作り、(唐)に至り曹憲は之に精通せるを以て、貞觀中弘文館學士に擢でらる、以て其當時に尊ばれたるを知るべし、高宗の朝に至り李善は之を注して上りたり、善が注は

新唐書李善が傳に據れば事を釋して義を忘れたるに由り、善之を補益したり、故に兩書並び行はるとあれども、時代に於て合はざる所有り、(善が注を上りしは唐が天監五載七十餘にして死したるより、溯りて之を數ふれば凡八十九年なり、然らば顯慶三年には世未生れざるなり、唐の李匡父の資暇錄に據れば、李善の注は初注覆注三注四注ありて、當時皆傳寫せらる、然れども其絕筆の本は音を釋て義を訓し、注解甚多かりしなり、即ち唐代李注に數本ありしも、皆李善の一手に出で、毫も李善に關せざるを知る、是より後玄宗の開元六年に至り、工部侍郎呂延祚といふもの呂延濟、劉良、張銑、呂向、李周翰の五人を集めて、共に之が注を作らしめて上る、世に之を五臣注といひ、李善注に合せて六臣注といふ、(宋)の眞宗大中祥符九年始めて之を校刻す、當時選舉として一種の専門を爲し、之を攻究して尊重せり、然るに陳仁子は文選補遺四十卷を著し、昭明編纂の非を攻め、(元)の劉履は風雅翼十四卷を作りて之を刪補せり、此二家は大旨宋の眞德秀が明理を主とする説に據りたるものなり、(明)に至り湯紹祖は續文選三十二卷を、劉節は廣文八選十二卷(葛洪の校せるもの是非なり、四庫全書載する所は陳憲等の刪補を歷て六十卷と爲れるもの、劉節が原本に非)、周應治は廣廣文選二十四卷を選び、共に文選

の遺を補へり、其の文選を解釋せるものに在りては張鳳翼の文選纂註十二卷行はると雖、陳興郊の文選章句二十八卷を以て優れりと爲す、若夫れ其臆に任せて刪削を加へたるものは、鄒思明の文選尤十四卷有り、觀る可き説少し、(清)に至り之が研究に従事する者愈多きを加ふ、乾隆三十年方廷珪は文選集成六十卷を著し、離騷は詩賦の祖たるを以て宜く之を卷首に置くべしと爲し、其他にも亦年代の序次を失へるものを訂正したり、(此書には原本の外陳孫鶴の増訂本有り、例言に於て三則を刪去し、注に於ては他の註本を剪取して補綴したり、觀るに足る可きもの無し)同四十二年には于光華といふ者、文選集評を著し、約して十五卷と爲し、分類を細別し、策問、棧、移書、難等の目を立てたり、余蕭客、胡克家、汪師韓、孫志祖、朱珔、梁章鉅等各撰述する所有り、此書の(我國)に渡來せるは、續日本紀に袁晋卿唐人也、天平七年從遣唐使來歸、通爾雅文選音、因授大學生博士、と有るを按ずるに、當に此際に在りたるなるべし、續日本後紀に、藤原常嗣誦文選と見え、文德實錄に、仁壽四年帝喚善經誦文選と見え、師輔公記に、天曆二年二月高光依召使御前誦文選三都賦序帝感嘆と見え、御堂關白道長公記に五臣注の事を

記し、(寛弘三年十月)扶桑集に、清滋藤が文選竟宴詩一首を載せ、其他江吏部集、(述國古詞詩)古今著聞集山槐記、台記、信西入遺藏書目錄等皆之を載せざる無し、而して懷風藻、凌雲集、文華秀麗集、經國集、本朝麗藻、扶桑集、本朝文粹の諸書を繕けば、當時の文士詩人が之に倣へて製作せる跡歴然たり、亦以て其重せられたるを證す可し、王朝に在りては此の如く盛なりしと雖、足利時代に至りては次第に攻究するもの少く、特に應仁以後に至りて甚し、慶長十二年に及びて直江兼續六臣注(六臣注には二種有り一は李善注を本とし、之に五臣注を加へたるもの、一は五臣注を本とし、之に李善注を加へたるもの、其江本は後者に屬す)を木活版に附せり、是此書の我國に翻刻せられたる始なり、後慶安五年、寛文二年に木板の六臣注刻本成れり、片山世璠は正文に訓點を施したり、明治に至りても亦刊行あり。

〔註解、參考〕 ○文選六臣注六十卷唐李善、呂延濟、劉良、張鏡、呂向、李周、韓琬撰 ○文選李善注六十卷李善撰 ○文選心訣一卷元虞集撰 ○文選理學權輿八卷清汪師韓撰 ○文選李注補正四卷、文選考異四卷孫志祖撰 ○文選集評六十卷于光華撰 ○文選音義八卷余蕭客撰 ○精訂昭明文選集成四十二卷方廷珪撰 ○文選考異十卷胡克家撰 ○文選集釋二十四卷朱珔撰 ○文選旁證四十六卷梁章鉅撰 ○文選古字

通疏證六卷(未詳傳) ○選舉 膠言二十卷(未詳傳)

●文館詞林

〔題名、作者〕 文館詞林とは文章の館詞藻の林といふ意より名づく、唐の許敬宗勅を奉じて撰す、敬宗字は延族、杭州新城の人、隋の大業中秀才に擧げらる、後、李密の記室となる、唐の太宗の時、召されて文學館學士となり、著作郎に除せらる、高宗の時、禮部尚書に進み、後、則天武后に寵せられ威權を恣にせり、咸亨の初め卒す年八十一。(唐書敬宗傳參考)

〔傳來、體裁〕 此書は、漢より唐初に至る詩文を彙集したる者にして、凡そ一千卷、文選に次ぎ最古の總集なり、舊新唐書藝文志には之を著録すれども、宋初既に散佚したる事は、我僧齋然宋に入り(太宗の時)、話我國に存せる書に及び、文館詞林あることをいひしに、時人は其目を知らず、館を以て觀に作り、且つ誤りて我國人の作と爲すといひ(宋朝類苑參考)、崇文總目に文館詞林彈事四卷(全書の)の)のみを著録せるにて知る可し、(我國)には平安朝の交、渡來したる者にして、現在書目に之を著録せり、貞觀十七年の火災に

て、秘閣の圖書は皆灰燼に歸せしが、此書は幸に免れ僅に存することを得たり、其後零本卷子諸處に散在せり、高野山、及び大覺寺、東大寺、如意輪寺に藏する所最も多しといふ、林述齋の佚存叢書を編するや、索めて其六百六十二、六百六十四、六百六十八、六百九十五の四卷を刻せり、此刻本支那に傳はり、阮元は四庫未收書目に著録し、伍崇曜は粵雅堂叢書に收めたり、明治十七年黎庶昌我國に駐劄せる時、公務の餘暇を以て古逸叢書を編するや、遍く零水を四方に索め、其四百五十九、六百六十五、六百六十六、六百六十七、六百七十、六百九十一、六百九十九の七卷を刻せり、此外現存する者にして、余が見たる者は、内閣文庫本なり、文庫には二本を藏せり、其一是十六軸あり(一軸一卷)、百五十二、百五十六(缺)、百五十七、百六十、三百四十六、三百四十七(缺)、三百四十八、四百十四、四百五十三、四百五十九(缺)、六百六十九、六百七十、六百九十一、六百九十五、六百九十九と卷數不明の欠本四卷あり、二卷は詩を錄し、二卷は表と頌とを錄せり、其一本は元祿十四年、僧義剛といふ者、如意輪寺の藏本によりて騰寫せる者を、嘉永三年岡本信、木村蔚、新井綽、久貝

書、疏、序、論、議、頌、讚、銘、箴、傳記、謚冊、哀冊、謚議、誄、碑、誌、墓表、行狀、祭文。の三十七類なり。

〔參考〕○文苑英華辨證十卷 宋彭叔夏撰

●唐文粹一百卷

〔題名、作者〕 宋の姚鉉撰す、捫蝨新話に徐鉉に作るは誤なり、此書文苑英華より唐人の詩文を刪綴し、稍之に附益せる者にして、撰擇純粹を得たりとの意より名づく、鉉字は寶臣、廬州の人、太平興國中進士に及第し、官兩浙轉運使に至る、天禧四年(一六一〇)歿す年五十三。 (宋史本傳參考)

〔編旨、體裁〕 此書文賦は、たゞ古體を採りて駢偶を錄せず、詩歌も亦たゞ古體を取りて五七言律を錄せず、蓋し鉉五代末世の文弊を救はんと欲して、此舉に出づ、枉を矯めて直に過ぎ、一を擧げて百を廢するを免れずと雖、而も鑒裁精審、去取謹嚴なるを以て、古來より總集中の善本と稱せらる、凡て古賦、詩、頌、贊、表奏書疏、文、論、議、古文、碑、銘、記、箴、誄、銘、書、序、傳銘紀事。

の十六類に分ち、每類また數多の細目に分たる此書の(我國)に渡來せるは其何朝に在るかを詳にせず、然れども市野光彦藏せる所の宋槧本は僧宗純の舊藏に係れりといへば天正前後には已に其宋板の傳はれるを知るべし。

●宋文鑑一百五十卷

〔題名、作者〕 宋代の文の龜鑑といふ意を以て名づく、宋の呂祖謙勅を奉じて撰す、祖謙の傳は大事紀の條に出づ。此書、初は聖宋文海といひ、周必大が旨を奉じて序を製するに及びて皇朝文鑑といひ、商輅が序に至りて直に宋文鑑といふ。

〔傳來、編旨、體裁〕 李心傳の建炎以來朝野雜記に曰く、臨安の書坊に所謂聖宋文海といふ者あり、近歲江鈿の編する所なり、孝宗之を得て、本府に命じて校正し、版に刻せしむ、周必大其去取差謬ありといひしかば、遂に祖謙に命じて校正せしむ、是に於て盡く祕府及び士大夫藏する所の諸家文集をとり、旁ら傳記他書悉く行はるゝものを取り、編類して凡六十一門と爲すと、又曰く「近臣密に載する所の臣

僚の奏議、祖宗の政事を詆及する者あり、後世に示す可からずとて啓するあり、乃ち直院崔敦詩に命じて更定せしめ、増損去留するもの凡て數十篇あり、然れども遂に刻するを果さず」と而して今傳はるものは、實に祖謙の原稿にして、敦詩の刪定本は佚せり、張栻が朱子に與ふる書に、「祖謙此等の文字を編す、君徳をなす所以に非ず」といへり、然れども祖謙錄する所、學術治法に關する者甚だ多きを以て見れば、栻は未だ其成書を見ざりしなる可し、朱子の如きも、初は意に満たざる所多かりしが如きも、晚年には、「此書編次篇々意あり、其載する所の奏議、亦當時政治の大節に係る、祖宗二百年の規模と、後來中變の意と、盡く其間に在り、選粹の比に非ず」といひて、稱揚するに至れり、以て此書の價值を知る可く、併せて敦詩の刪定の如き、必ずしも當を得たるに非ざるを推察すべし、予が見る所の本は七十七門あり、心傳の言と異なり、其目は左の如し。

賦、律賦、詩、五言古詩、七言古詩、五言律詩、七言律詩、五言絕句詩、六言絕句、七言絕句詩、詩、星名、人名、郡名、藥名、建除、八音、四聲、藏頭、離合、回紋、一字至十字、兩頭織々、五雜俎、了語

不了語、難易言、聯句、集句、騷、詔、勅、教文、冊、御札、批答、制、誥、奏疏、表、牋、箴、銘、頌、贊、碑文、記、序、論、義、策、議、說、戒、制策、說書、經義、書、啓、策問、雜著、對問、移文、連珠、琴操、上梁文、書判、題跋、樂語、哀辭、祭文、謚議、行狀、墓誌、墓表、神道碑、傳、露布。此書は葉氏の影抄宋本あり、又嚴州本、胡公韶の補刊嚴州本、慎獨齋本等ありて一様ならず、其分合異同の辨別は他日の校定を俟つ。

●文章正宗二十四卷目錄一卷

續集二十卷

〔題名、作者〕 宗は本なり、後世文辭の變多きを以て學者其源流の正本を識らんと欲する者の爲に作る、故に正宗を以て名づく、宋の眞德秀撰す、德秀の傳は眞西山文集の部に出づ。

〔體裁、編旨、傳來〕 正編は卷首に綱目あり、次に目錄一卷あり。

辭命、議論、叙事、詩賦、傳の四類に分ち、左傳、國語以下唐末に至る諸作を録し自ら之を注せり、大抵理を言ふを以て主と爲す、故に其去取古來文を論ずるものと迥に異なり、門人劉克莊其編修に與る、贈鄭寧文詩に曰く、「昔侍西山講讀一時、頗於函丈得精微、書如逐客猶遭黜、辭取橫汾亦恐非、箏笛焉能諧雅樂、綺羅原未識深衣、嗟予老矣君方少、好向師門識指歸」と以て其撰擇の嚴正なりしを知るに足れり、然れども理を執るに過ぐるの弊を免れず、(願炎武曰)故に講學家より以外、未だ尊びて之を用ふる者あらず、續集二十卷は皆北宋の文にして、詩賦、辭命の二門を缺けり、而して末一卷は議論の文にして、録のみありて書なければ、未定稿なるべし。

●古文眞寶二十卷

〔題名、作者〕 眞寶とは、字の如く眞の寶といふ意なり、今本元の至正十六年鄭本の序と、明の弘治十五年青藜齋の跋ある者有り、之に據れば此書は宋の永陽の黃堅といふ者の編にして、元の林以正の校刷に係

る者なり、然も黃堅は事蹟明ならず、以正は名は楨、以正は其字なり、福州三山の人にして詩學大成三十卷を編著せり、然れども萬曆十一年板本に據れば明神宗の編する所たり、又別に古文大全と題するものあり、想ふに是校賈、謝疊山の文章軌範に倣ひて、此書を作り名を村夫子に借り或は以て勅選と爲して或は名を異にし實を同くし射利の用に供したる者ならむ、姑く記して疑を存す。

〔體裁、傳來〕 此書は七國より宋に至る諸家の作を録す、前後二集に分ち、前集は詩を、後集は文を録す、前集の目は左の如し。

卷一は勸學文、五言古風短篇、卷二は五言古風短篇、卷三は五言古風長短篇、卷四、五は七言古風短篇、卷六は七言古風長篇、卷七は長短句、卷八は歌類、卷九は行類、卷十は吟類、引類、曲類。

後集の目は左の如し。
卷一は辭類、賦類、卷二は說類、卷三は序類、卷四は記類、卷五は箴類、銘類、文類、卷六は頌類、傳類、卷七は碑類、辯類、卷八は表類、卷九は原類、論類、卷十は書類。
前後集各十卷なり、然れども我内閣所藏の朝鮮刊本

●元文類七十卷目錄三卷

〔作者、題名〕 元の蘇天爵撰す、天爵字は伯修、真定の人、國子監の出身なり、從仕郎大都路蘇州判官より、累進して吏部尚書に至り、晩に大都路都督に至る、至正十二年(二〇一二)卒す、年五十九、天爵博學多才、最も詩を善くす、詩稿七卷、文稿三十卷、國朝名臣事略十五卷等の著あり、(元史本傳參考)元文類とは類を分ちて、元代作家の文を録す、故にいふ。

〔體裁〕 此書元統二年に成る、監察御史王理、國子助教陳旅各々序を製せり、録する所の諸作、元初より延祐に至る正に元文極盛の時なり、凡そ四十三類に分てり、而して理の序は、史記の自序及び漢書叙傳の例に仿ひ、區ちて十五類と爲せり、蓋し目錄は其詳を標し、序は則ち其綱を撮るなり、天爵文章を妙解し、鑒別に工なり、故に去取極めて精審なり、姚鉉の唐文粹、呂祖謙の宋文鑑と鼎立して、三大書と稱せらる、今四十三類の目を擧ぐれば左の如し。

賦、騷、樂章、四言詩、五言古詩、樂府歌行、七言古詩、雜言、雜體、五言律詩、七言律詩、五言絕句、七言絕句、詔赦、冊文、制、奏議、表、牋、

〔宋の伯修音釋し劉〕は後集は卷數之に同じきも前集は十二卷あり、又明の葉向高が註釋せるものは古文大全と題し卷數前後各十卷あり、而して評林註釋古文大全と題するものは後集十一卷あり、又予が藏する所の萬曆刊本の古文大全は前後集合せて八卷に過ぎず、而るに其載する所は則ち二十卷本より増多せり、(予別に異同考あり)此書の初めて(我國)に渡來せるは足利氏の初世なる可し、應永以後、盛に五山禪僧の間に行はれ、文を習ふ者必ず之を模範とすること、猶寛政以後の文章軌範に於けるが如くなりき、徳川氏に至り漸く衰へたれども、猶行はれき、翻刻は蓋し慶長十四年活版、最も古きものならむ、次て寛永元年木刻成り、元祿、延寶にも刊行あり、明治年間に至りても亦諸家の刊本頗る多し。

〔註解、參考〕

○古文眞寶前集十二卷後集十卷舊本題宋伯修音釋劉劉校 ○魁本大字諸儒箋解古文眞寶前集十卷後集十卷不記選名氏人 ○古文大全十卷明葉向高注釋 ○新臺閣校正註釋補遺古文大全八卷張瑞圖 ○龍頭新增古文前集十卷日本字部宮由的撰 ○古文眞寶合解評林十卷不著撰人名氏